

軽い少女

ふーじん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第一陣お子様コンビがそれぞれ別の場所でデンドロを遊ぶ話。

目次

Another Episode

死の少女 前編 | 1

死の少女 後編 | 11

死の少女たち | 23

序章

初ログインじゃんよ | 41

これがあたしのへエンブリオ〜じゃんよ | 49

初めての強敵とパーティープレイじゃんよ | 58

初めてのフレンドじゃんよ | 69

黄河伝説 ” 神童 ” 黒猫、軽業デビュー | 79

第一章

はじめての長期クエストじゃんよ | 88

旅の醍醐味と言えば宿場町じゃんよ | 98

命を奪う神の呪い | 109

早くもお礼参りじゃんよ | 120

交渉決裂じゃんよ | 131

いつか星を震わす一撃 | 142

決着 | 153

エピソード | 163

Episode Superior The Planet Hazard

プロローグA 【雑技王】 | 170

プロローグB 【撃神】 | 176

プロローグC 【超練体士】 | 183

軽い少女の重い想い	189
三雄邂逅（内二名雌）	199
ゴリラ、キャット、そしてゴリラ	209
赤い不審者	219
怪物の名を冠する淑女	233
災い、来たれり	244
〈イレギュラー〉	261
星喰らうモノ	277
反撃の狼煙	290
【ヒダルガミ】	303
星の臨終	317
エピソード	333

Another Episode

死の少女 前編

□ある少女の話

少女にとつてへ Infinite Dendrogram は、未だ短い半生において最高峰のゲームだった。

人々の夢を忠実に叶えた夢の仮想世界は、少女の夢も素晴らしい形で叶えていたから。

◇

少女、有栖川志乃はゲーマーである。

それも恐怖と狂気、暴力と流血が彩るホラーゲームの類をこよなく愛する、世間一般的にはマイノリティに属するゲームファンであった。

それは電子機器が発達・普及された二〇〇〇年代から半世紀近くが過ぎた現代においては比較的ありふれた趣味ではあるが、しかし齢十にも満たない幼子が熱心となるには些か以上に不穏な、ともすれば育ちを邪推されるも致し方のない嗜好であろう。

とはいえ二親は既に無く、唯一の肉親である祖父は今時珍しく電子ゲームの類に疎いがために口出しすることもなく、彼女は誰憚ることなく趣味に没頭していた。

一方で少女は同年代と比べて——否、彼女より一回りも二回りも年嵩の世代と比べても異様な程に聡明であった。

彼女の精神性は己の趣味が世間一般的には歓迎されない根暗なものであると明確に理解し、また死に傾向した己の本性が社会性に欠け、ごくありふれた協同活動から排除される——所謂ぼっち状態を引き起こすに当然のものであるとも、明瞭に把握していた。(それがいじめに繋がらなかつたのは、国内有数の名士である家柄と祖父の影響が多分にあつたが)

己を取り巻く状況と環境の全てを齟齬無く理解し、把握していた少女だったが。

彼女自身はそうした境遇を良しとして受け入れ、俗世にほとんど関わることなく己の趣味に耽溺していた。

例外は同じく闇を抱えた同類である少女、黒沢音子のみ。

彼女を唯一無二の親友とし、己の世話を務める使用人（少女の主観では家具と同義であったが）を周囲に置く数少ない生者とし、早熟というにも早すぎる幼少の時分から人生を達観して生きて——少女に言わせれば死に続けて——いる。

有栖川志乃はゲーマーである。

それも残酷を是とするホラーゲームの愛好者である。

しかしそれは実のところ、少女からすれば一種の代償行為に過ぎず、その真なる本性は更にどうしようもなく、悍ましい領域にあった。

少女の名は有栖川志乃。

彼女の名はアリス・イン・デッドランド。

齡九を数えたとある夏の日。

運命のようにへInfinite Dendrogramと巡り合い、妖精郷にて屍と戯れる一人のへマスターとであった。

◇

管理AI一号を名乗る、奇しくも己の通名と同じ名を持つ女は、極めて親身に、心からの歓迎を以て志乃を案内した。

キャラメイクの段階から既に他タイトルとは一線を画す超技術を思い知らせるへInfinite Dendrogramに戸惑う志乃を、彼女は懇切丁寧に導いていく。

各種設定を決め（途中アバターネームを決める際、志乃がゲーム上の通名「アリス・イン・デッドランド」を己が名にしたとき「私とお揃いねー」と微笑む管理AI一号「アリス」との雑談を挟んだりもしながら）、へエンブリオを移植し、最後に所属国を決定する段になって、ふと志乃あらためへマスターへアリスは「アリス」に問うた。

——このゲームでは何ができるの？

一聴して特別な意味を持たない疑問。

しかしアリスの魂胆を踏まえれば、その問いは意味をこのように変える。

——このゲームでは何をしたいの？

それは己がどこまで自由にしたいのか。

現実ならざる仮想世界だからこそ、本性を解き放つてみたいと考えてしまった少女の、短くも切なる問い。

それに”アリス”は、慈母の如き笑みで答えた。

——なんでも

——なんでも？

——そう。〈マスター〉であるあなた達は何をしてもいい

——生かすも殺すも、救うも救わないも、全て自由よ

それは少女アリスにとって福音だった。

運営側である管理AI一号が述べた一言一句は、己が裁量のうちにおいてあらゆる自由を保障する。

ペナルティとしての”監獄”の存在こそ示唆すれど、それすらもこの世界からの追放を意味しない。

プレイヤーは己の意志ある限り、〈マスター〉として活動し続けられる。

その言質を取ったアリスは、最後に一つだけ問うた。

——わたし、おともだちがほしいの

——それならレジエンダリアがオススメねー

そうしてアリスはレジエンダリアに降り立ち、一直線に【死霊術師】ギルドを目指した。

◇

この〈Infinite Dendrogram〉世界において【死霊術師】は、決して一般的とは言えない職種である。

多くの物語において悪役として登場し、事実悪名を馳せる者も多い【死霊術師】は、排斥こそされないながらも決して歓迎されるようなものではない。

故にこそ残る少ない正道の死霊術師達は自然と一致団結し、狭い内輪で互いを助け合うことが基本姿勢となっていた。

そんな中伝承に語られる〈マスター〉が門戸を叩き、外道として悪行を振る舞うでもなく【死霊術師】を極めんと腐心する姿は、彼らに

とつても光明であった。

ましてやそれが見目麗しい少女ともなれば積極的に助けることを厭うはずもなく、先達の死霊術師達は競うようにしてアリスへ死霊術を教授していく。

アリスもまた、そうして親身になってくれるティアンの先達に敬意を払い、極めて真摯に死霊術のいろはを学んでいく。

〈マスター〉としての万能の適正。

死すれど滅びには至らぬ不滅の存在性。

そして何より、これ以上無く”死”に傾向した〈エンブリオ〉。

持ち得る資質の全てが《死霊術》に傾いたアリスは、瞬く間に彼らの知恵を吸収していった。

その成長はまさしく劇的と言って過言ではなく、地球時間で一週間もする頃には【死霊術師】を極め、更なる高みへの足掛かりを得られた程だ。

【死霊術師】を極める途中で手に入れた【適職診断カタログ】。

その音声案内に従い示された可能性は三つ。

一つは生者として死者を制し、霊魂を導く【高位霊術師】。

一つは自ら死者と成り果て、死を支配する【大死霊】。

一つは生死の境に身を置き、数多の死者を統べる【死霊騎士】。

アリスの才能は、いずれの道でも大成を約束するだろう。

空前絶後の天稟を宿すアリスの可能性にギルドは一丸となり、アリスも交えて議論を重ねる。

内、真つ先に排されたのは【大死霊】の道であった。

過去の伝承、事例の多くで悪名を轟かせたのがこの【大死霊】であり、正道を歩む善なる【死霊術師】達にとっては憎むべき同類である。

転職の条件も鮮血と怨嗟が付き纏うと語り継がれ、間違ってもギルドとして支持できないその道を、アリスもまた己の求めるところとは些か外れると判断し切り捨てた。

そのことに安堵したのは、他ならぬギルドの死霊術師達であろう。一月と経たない短い付き合いの中で類稀な才を大いに見せつけたアリスがその道を極めたら——それはきつと、空前絶後の大災厄の誕生

でもあつただろうから。

次に【高位霊術師】の道は、アリスが切り捨てた。

この【高位霊術師】の歩む道は、慈悲と慈愛を以て靈魂を慰める聖者の道でもある。

しかしその性質は死に迎合していても決して慈悲深くはないアリスの性根とはかみ合わず、担うべき役目を腐らせてしまふだろうと直観できた。

故にこの道も断念。ギルドの者の多くは彼女がこの道を歩んでくれることを願っていただけに落胆も大きかったが、しかしアリスは斟酌しなかった。彼らもそれを理解していたからこそ、落胆を浮かべれど縋りはしなかったが。

そして最後に残った【死霊騎士】の道。——これにはアリスが大きく関心を示した。

この【死霊騎士】が如何なる職分であるかと言えば、死者を指揮して軍勢と成すジョブである。

《部隊指揮》のスキルを筆頭に大勢の死者を統率することに長け、靈魂を慰めるでもなく、自ら死者となるでもなく、極めて直截的に死者を《兵力》として運用する、俗物的なジョブだった。

ギルドの理念、【死霊術師】の本来あるべき姿から言えば、決して良い顔はできぬジョブである。

世の偏見に反して、正道を歩む【死霊術師】というものは極めて慈悲深い。

穢れに満ちた職分であるからこそ己を律し、生者には理解できない死者の苦しみを解し、その未練を解いて幽世へ誘い、安らかな眠りへ導くことこそが本懐であるが故に。

その理念に誇りを持つからこそ、眠りから呼び覚まし兵士として戦場へ連れ出すなど、彼らにしてみれば本末転倒である。

しかし、だからといってその道を閉ざすには、アリスの才覚はあまりに巨大すぎた。

仮にここで反意を示し、これ以上の支援はできかねると言ったところで……アリスはそれで立ち止まることなく、独力で大成してしまえ

るだろう。

そうなつてしまえば彼らとアリスの縁はそこで途絶え、最早彼らの手が届かぬ領域へと去つてしまふだろうから。

【死霊術師】の先達として彼女の成長を見守り、多くの知恵を授けてきた彼らだからこそ、そうして野放しになつたアリスが万が一にも世に仇成す巨悪と化してしまう可能性を容認できず、その極みまでを見届ける義務と責任があると考えていた。

故に彼らは、【死霊騎士】の道に歩まんとするアリスへ、たった一つの約束を願つた。

——アリス。才あるキミは我らの歩んだ道など一跨ぎで越えてしまえる

——我らはキミの道行きを阻めず、後ろから追えもしないだろう

——最早キミは我らの手を離れ、自由に飛び立てる。巢立ちの時だ

——だけどね、アリス。最後にひとつだけ約束しておくれ

——決してその力で哀しみを生まない、と

それはあるかもわからない彼女の良心への訴えだった。

いつか必ず力量で上回り、死による終着すらも望めないへマスターであるアリス。

もし彼女が悪意に染まつてしまえば、最早自分たちでは正道に引き戻せないだろうから。

この枷約束を壊してしまわないよう覚えていてほしい——人の心を。果たしてその願いが届いたか否か。

その日を境にアリスはギルドを離れ、本格的な冒険を開始した。

◇ 【死霊騎士】アリス・イン・デッドランドの冒険は常に死と隣合わせにあつた。

それは死線を潜り続けるという意味のみならず、彼女の活動スタイルにも起因する。

アリスは生者を仲間としなかった。

あらゆるテイアンもへマスターも友とせず、唯一配下のアンデッドのみを同胞としてモンスターを狩り続けるアリスの姿は、人々の目

にこの上なく恐ろしげに映った。

毎日のように魔物を狩り、日に日に引き連れる死者の数を増していく不気味な少女。ごく普通の日常を生きる人々が恐れるのも当然と言えよう。

そんな周囲の視線も顧みず、【死霊騎士】としてもアリスは瞬く間に頭角を現していった。

《部隊指揮》で拡大化されたパーティ枠で多くの強力なアンデッドを統率し、尚も死者の軍勢をかき集める。

いつしかレジェンダリアでも有数のトッププレイヤーとして名を馳せていたアリスは、その兵力に物を言わせて【死霊騎士】も早々に極め、更なる戦力拡大を図っていった。

そうして己を取り巻く死者の数と質が増すことに、アリスはこの上ない至福を感じていた。

アリスは交流を広げない。このへ Infinite Dendrogramにおいてその本性を曝け出したアリスは、生者への一切の興味を失っていた。

アリスは死体愛好家。性の情動すらも死者に向ける破綻者である。現実においては明晰な頭脳が自他の齟齬を理解させ、理性で本能を押し留めているに過ぎず——時代が異なれば、少女は稀代の英雄か大罪人として名を馳せていたことだろう。

生きとし生ける命を尊重できないデストルドーこそが少女の本質であった。

例外は唯一無二の親友のみ。彼女がいるからこそ、少女はかろうじてまともを取り繕えている。

そのアリス最大の誤算は、一緒にこの世界を楽しむはずだった彼女と些細なすれ違いによって遠く離れ離れになってしまったことだろう。

もしあの猫のように自由奔放な少女がアリスの傍にいれば、アリスの冒険はもう少しまでもであったかもしれない。

しかし唯一友誼を結ぶ対象が不在の今、彼女の興味は完全に死者へと傾けられ、結果としてそれが【死霊術師】の道に導き、その果てを

示そうとしていた。

死者を率いる騎士の位から、死者を統率する将軍の位へと。

◇

死者の兵力を拡充し続け、へ Infinite Dendrogram
am) 開始から地球時間で三ヶ月近くが経とうとする頃。

突如としてアリスのもとへアノウンスが届いた。

【保有アンデッド数が五〇〇〇〇体を達成しました】

【条件解放により、【死将軍】への転職クエストが解放されました】

【詳細は死霊術師系統への転職可能なクリスタルでご確認ください】

死霊術師系統死霊騎士派生超級職、【死将軍】。

伝承に語られながらも詳細な条件は失伝していた一つの頂点に至る方法に、アリスは得心した。

既に達成していた「己と指揮下のアンデッドのみで構成されたパーティによるボスモンスターの複数体討伐」はともかく、たった今通知された条件は余程状況と機会に恵まれない限りは到底達成できないだろうから。

この条件の難しいところは「過去に支配したアンデッドの累計」ではなく、「現在保有するアンデッドの合計」を参照する点で、戦時中ならばともかく国家間戦争の起きていないここ数百年においてこれを達成しようとするものなら、恐るべき労力と時間が掛かってしまうことだろう。

そして短期間で大量の死者を生まない現在において最も手早くアンデッドの数を揃える方法は、無力なティアンをアンデッドに変えてしまうことだ。紛れもない重犯罪であり、露見すれば死は免れない大罪である。

現在までロストジョブと化していたのも、間違いなくこの条件が原因であろう。おそらくかつてはアンデッドの軍勢の移譲と共にこのジョブを代々継承する系譜があったのだろうが、何らかの理由により失伝してしまえば改めてその条件を達成することなど、偶然に期待するには難易度が高すぎる。

通常ならば到底日の目を見ることのないそのジョブがこうしてア

リスの前に提示されたのは、偏に「エンブリオ」の影響が大きい。

領域内の生者を死者に変え、それを魅了し配下に置く【ネビロス】の力は「死霊騎士」の特性と極めて相性が良く、その戦力は恐るべき勢いで拡充されていった。

生物のアンデッド化とアンデッドの魅了に特化したアリスの「エンブリオ」は、ことアンデッドの数を揃えることに関しては他の追従を許さず、本来生涯を賭して目指すべき条件をいとも容易く達成せしめた。

《部隊指揮》によるパーティ枠拡大の上限こそあれど、その補充戦力となるアンデッドの数が多いに越したことはない。その思惑からの一見無駄の多い拡大路線だったが、それが功を奏した結果である。

振り返って言えば、アリスは運が良かった。

資質、環境、偶然、必然。全てが【死將軍】への道に通じ、運命のようにアリスを頂へ導いていく。

アナウンスを得てアリスは、この「Infinite Dendrogram」に運命を感じ取った己の直感に改めて全幅の信頼を自覚し、粛々と準備を整えた。

すぐにも転職クエストに臨みたいところだが、焦りは禁物だ。

どうせ自分以外に条件を満たす者もない。ここは万全の態勢を以て掛かるが一番の近道、と。

アリスは今まで以上に戦力拡大へ注力し、レジエンダリアの国土を彷徨った。

活動範囲を更に広げ、時には国境を危ぶませながらも只管に没頭し、条件達成に必要な数を遥かに越えて死者をかき集め続ける。

そうするうちに物騒な異名の数々が付きもしたが、アリスはまるで頓着しない。

周囲の生者がどう宣おうが知ったことではなく、アリスはただただ死に耽溺した。

その努力が実を結び花となって咲き誇るのは古き聖者の生誕日、雪降る夜のクリスマス。

かつてアナウンスを得たときのように、多くの「マスター」がクリ

スマスイベントに沸く中で、アリスは人知れず決戦の地へと赴いた。

T o b e c o n t i n u e d

死の少女 後編

□ 霊都

二〇四三年一月二五日。

言わずと知れたクリスマスに、へ Infinite Dendrogram もそれに合わせたイベントに沸いていた。

既存の生態系から外れた特別仕様のイベントモンスターが出没し、クリスマスプレゼントと称したドロップアイテムを数多のへマスターに狩り漁る連日のイベントは、ユーザーに「なあんか運営クリスマス勘違いしてねえか？」と言わしめながらも非常に良い実入りで一応の成功を収めている。

一方で多くのへマスターが赤白の礼装に身を包み、並木を奇妙に飾り付けしていく様は、無数の見た目人外生物が集うレジエンダリアでも奇異の視線で受け止められた。

今や既に奇人・変人の巣窟の名をほしいままにしているレジエンダリア。無論ただのクリスマスで終わるはずもない。

他国と比べて一つ二つもネジの外れた突飛なへマスター達の仕業により、あどけない幼児アバターに変えられて狼狽するへマスターや、クリスマスデートを楽しむへマスターカップルの片割れが無残にも性別を反転させられたりするなどして、有り体に言って地獄絵図であった。

そんな阿鼻叫喚が渦巻く霊都の一画で、独り身の侘しさをそれら珍騒動を傍から見守ることで慰めていたへマスターが一人。

特に際立った要素の無い、レジエンダリアにおいて数少ない常人枠のへマスターだ。

馴染みのカフェのオープンテラスで茶を喫する彼の片手にはへDIN 発行の新聞。その一面には『新たなる怪人現る!? 夜な夜な寝顔を盗み撮る【怪盗】ハイドアンド・シーシー』、『被害者は大商店の幼い令嬢——』の記事。

彼は死んだ魚のような眼で一服した。

(平和だなあ……)

実に平和である。異論を挟む余地などまったく無い。

性癖異常者の欲望蠢く霊都の有様を日常茶飯事と飲み込めてしま
う彼もまた、歪んだ日常に毒された被害者なのかもしれない。

ともあれ、そうした一部の「マスター」達の奇行に目を瞑れば、連
日のイベント騒ぎは平穩に分類された。

なにせ前回のシーズンイベントだったハロウィンでは、なにをどう
勘違いしたのか『お前をおばけの国につれていく百鬼夜行』として無
数のアンデッド系イベントモンスターが出没し、数多の「マスター」が
混沌の坩堝に叩き落されたのだから。

見た目ポップなガチ性能アンデッドの大発生と比べれば、直截的な
実害の無い分、今回のクリスマスイベントは有情である。

(アンデッドと言えは……)

ふと思いついて彼は、新聞を捲った。

そこには有名どころの「マスター」の活動報告が寄せられていたが、
視線を落としたのは一際大きく取り上げられた速報。

レジェンダリアでもトップクラスの知名度を誇るとある「マス
ター」の近況が描かれていた。

(『「死爵靈嬢」の討伐ランキングまた上がる』『コープスパーティー死亡遊戯』の躍進
止まらず。戦力拡大の裏には政府との密約が!?』……誰だよこの記事
書いたの。今回はハズレだな)

取り上げられていたのは、「とある狩場にて”ワイルドハント”と遭
遇した「マスター」へのインタビュー。

そこには大多数を巻き込む盛大な狩りを行った加害者への憤りと
恨み節が被害者視点で綴られ、そこからさまざまに邪推された憶測が
無秩序に書きなぐられていたが、話題となっている人物の実像を知る
彼からすれば見当違い、虚飾虚構も甚だしい。

声高に載せられる政府との癒着……そのような意図など、彼女に
限ってはあはざるがないのだから。

〈Infinite Dendrogram〉がサービス開始して
から、地球時間で早くも半年が経とうとしている現在。

時間三倍速によってデンドロ内では一年以上が経過した今、既に

〈ヘマスター〉の中では他の追隨を許さぬトッププレイヤーが頭角を現しつつある。

その中でも件の彼女、先に挙げた三つ以外にも数々の大仰な二つ名を冠する「死霊騎士」アリス・イン・デッドランドの名は、とびきりの偏屈者にして狂人と有名だった。

なにせテイアン、〈ヘマスター〉を問わず生きている人間とは口を利かない人嫌いにして厭世家。

配下のアンデッドとしかパーティを組まず、夜な夜な狩場に赴いては集めた素材でアンデッドを作り続ける悪い死霊術師のお手本のような人物である。

かつて彼女とパーティを組もうとした〈ヘマスター〉が、「じゃあ死んでくれる？」の一言と共に白昼堂々とアンデッド化させられたのは今でも語り草だ。

その後の取り調べによれば彼女にはなんの悪気も無く、単にアンデッドならパーティを組めるからという理由での凶行である。《真偽判定》にも引つかからなかったというのだから極め付きだ。(ちなみに一連の出来事は往年のゲームの琴線に触れるものであったらしく、意外にも彼女の人気は高まった。若い彼にはその理由がよくわからなかったが)

彼もまた当時現場で一部始終を目撃し、盛大にドン引きした一人である。

その後も新世界への不慣れが続いた最初期において件の彼女は数々の騒動を引き起こし、テイアン・〈ヘマスター〉を問わず要注意人物として周知されていた。

一方で周囲へ何ら関心が無いことも大いに知られ、手出しさえしなければ少なくとも積極的に害を成すわけではないことも知られている。

そうした事情を知る人間からすれば、この記事はあまりに的外れだ。

一貫してアンデッドと共にあることが第一義の彼女が態々国政に関わるなど、天地がひっくり返ろうとありえない。討伐ランキングす

ら眼中に無いだろう。

よく文面を見れば編集者の言葉の端々には私怨のようなものが見受けられ、さては彼女の巻き添えを食らったなど彼は察した。

レジェンダリアの夜の森で喇叭の音が鳴り響いたとき、それが彼女の狩りが始まる合図。

配下のアンデッドを増やすためにモンスターの群生地を彷徨う彼女の狩りは、とかく規模が大きく煽りを食う者が少なくない。

かといって排除しようにも単純戦力としても強大なために返り討ちに遭う者もまた多く、結果としてアリスの存在は一種のアンタツチャブルとして君臨していた。

そんなアリスの評判は、一部の熱狂的なファンと、大多数の恨み骨髄な被害者達とで大きく二分されている。

故に彼女もまた、レジェンダリアを代表する奇人の一人であった。

(この記事はクソだけど、実際最近の動きが派手なのは気になるよな。暇さえあれば狩場を回ってるし……ログイン時間も相当だろ。まさかマジでアバターと中身が一緒なわけないし……、ニートか?)

そのアリス某であるが、ここ数ヶ月はとみに活動的だとして注目を集めていた。

以前は周囲を顧みないようなこともなく、さながら墓荒らしのように細々とした狩りを続けていた彼女が、最近になって狩場を占拠するように強引な形で一切合切を狩り尽くしていく様子に、他の「ヘマスター」の反応は剣呑である。

元々頻繁に目撃され、その継続ログイン時間の長さからリアル事情を様々に邪推されてきたアリスだが、昨今の動きにはこれまでにはなかった明確な目標意識が見受けられ、剣呑を増しながらも彼女を追う周囲の視線は鋭い。

そうした中の一部の過激派が彼女の前に立ちはだかり蹴散らされるのもまた最近の名物であった。

それ故に悪評も以前にも増して稼いでいるのだが、その被害が「ヘマスター」間に留まっている現在は合法である。限りなく黒に近いグレーではあるが。

そうして物思いに耽りながら茶を嗜んでいたそのときである。突如として周囲がざわめき立ち、口々に噂しあう声が届いた。

「ネクロリ様だ」

「ネクロマンチスト?」 まだ夜も更けてないのに珍しいな……」

「街中で堂々とアンデッドを引率かよ。」 屍遊び” ってそのまんまなんだな」

「うお、可愛い。アバター気合入ってんなあ」

「さすがにリアルとは別物だろ。中身はオタクだつて絶対、痛いわー」
視線を向けた先には、周囲の陰口を気にも留めず静々と大通りを歩く一団の姿があった。

それは数多の巫人集うレジエンダリアにおいてもなお奇妙な、異様の集団である。

先頭を歩くのは黒い喪服のようなドレスに身を包み、顔すらも薄い黒のヴェールで覆った、陰気にして妖艶な風体の少女。

しかしよくよく見れば少女と呼ぶことすらまだ早い、二桁にすら達していないだろう幼さだった。

それが肩に双頭の烏を止まらせ、怨霊馬の牽く馬車に乗り、豪華な装いの「レイス」の貴婦人を侍らせ、背後に数多の武装した「ゾンビ」、
「スケルトン」を引き連れているともなれば、それは異様と言う他にない。

道行く通行人が足を止め、口々にその二つ名を語られる彼女こそ、
レジエンダリア有数の死霊使い。

【死霊騎士】アリス・イン・デッドランドであった。

「……………」

『皆々様、どうか道をお譲りください。我が主アリス様がお通りになられます！ 我々は決して霊都の皆々様に害を成すものではありません！ 何卒道をお譲りくださるようお願い申し上げます！』

少女が肩の烏、その片方の頭に何事かを呟くと、もう片方の鳥頭がけたたましい声を上げてその意を伝える。

生者とは口を利かないアリスの通訳が双頭の烏であった。言うまでもなく彼もまたアンデッドであり、双頭の境には生々しい縫合痕が

覗えた。

鳥が主の意を伝え、「レイス」がやんわりと睥睨すれば、周囲は堪らず道を開ける。

そうして拓かれた人波を、少女は一瞥もくれることなく当然のように通り抜けた。

一見すれば傲岸不遜も極まりない光景を、しかし周囲が異論を挟むことはない。

かつて傍若無人を見咎めた「マスター」が彼女に挑み、その場で腐乱死体へ変えられた挙句、衆人環視のもとデスペナルティとなったことを知る彼らは、そのような無謀を冒しはしなかった。

『ありがとうございます、ありがとうございます！ 皆々様をお騒がせしましたこと大変申し訳ありません！ 何分火急の用件ですので、何卒ご寛恕賜りますようお願い申し上げます！』

「……………」

『ははっ、ギルドには間もなく到着いたします！ 今しばらくご辛抱くださいませ！』

通訳の鳥の声だけが甲高く響く一方で、陰気な意匠の馬車が霊都の大通りを進んでいく。

唯一口を利く双頭の鳥の慇懃な物言いだけが道行く人々に警告を促し、周囲の注目を集めていった。

少女が率いる死者の一団を見送り、その陰が見えなくなって人々はようやく呼吸を取り戻した。

一部の「マスター」が《看破》で見通したステータスは、雑兵たる「ゾンビ」「スケルトン」ですら亜竜級上位、「レイス」に至っては純竜級上位に匹敵した。

そうして目に見える戦力ですらも総戦力の一部に過ぎず、その実態は到底計り知れるものではない。

紛うことなきトッププレイヤー。巷で噂される悪名高き「死霊騎士」の一団を直に目撃し、恐れを為して意気消沈したようだった。

つまり率直に言って、場は冷え切っていた。

クリスマスシーズンが台無しである。最早聖者の生誕日にかこつ

けてお祭り騒ぎに興じるような空気ではない。

(前言撤回。やっぱ平和じゃねーわ)

一部始終を傍から見守っていた彼は、すっかり冷めきった茶を不味そうに飲み干した。

◇

そんな周囲の反応も露知らず、アリス一行は目的地へと到着していた。

中に死霊術師系統のジョブクリスタルを擁する死霊術師ギルド。

古巣を久方振りに訪ねたアリスを、かつて彼女に知識を教授した先達がこぞって取り囲んだ。

「ひさしぶり。今クリスタル空いてる？」

「まったく、相変わらずだなキミは。せめて久闊を叙するくらいはさせてもらえないものかね」

かつてと全く変わらぬ様子のアリスにギルド長が苦笑する。

彼ら死霊術師ギルドの所属員だけは例外的に、アリスが直に口を利く数少ない生者たちであった。

それは偏に右も左も分らない初心者だったアリスを、純然たる善意だけで導いた彼らへの最大限の敬意の表れであったが、今更そのことを知らぬ間柄でもない。

率直な物言いのアリスに気を害した様子もなく、ギルド長は首肯した。

「こちらも相も変わらぬ閑古鳥さ。クリスタルは空いているが……、どのような用件かな？」

「【死将軍】の転職クエストを受けにきた」

アリスが目的を告げると、周囲は俄に色めき立った。

「よもやこうも早くに……」そう吐露する彼らの心中は興奮に満ちている。

アリスが告げたジョブの名は、死霊術師である彼らにとっては最たる頂の一つ。

長らく失伝していたかつての伝説が今蘇らんとする事実には騒然とするのも無理からぬことであろう。

そうした弟子たちをギルド長は杖を突いて一喝し、アリスに向き直った。

「まずはおめでとう……、と言っておこう。キミは我らが見込んだ以上、才ある者であった」

「気が早くない?」

「今更《死霊術》についてキミの手腕を疑うものかね。……まったく、実に見事なアンデッドだ。これ程のものを使役するのに、我々は幾つもの月日を重ねねばならないか……」

「……………」

黙して語らぬアリスの従者たちに、ギルド長は憧憬すら浮かべていた。

この道を行って数十年以上もの年月を重ねる彼でさえ、今のアリスが率いる高位アンデッドを使役するのには多大な努力を要する。

自分たちとは比べるべくもない、僅か一年弱の研鑽で早くも頂点に達しようという彼女へ、しかし嫉妬すらも抱けないのは、果たしていかなる心境によるものか。

「ああ、すまない……、どうにも歳を取ると考え事が多くなっていけない」

「別に気にしない」

「ははは……、ともあれ我らがキミの道を阻むことはない。どうぞクリスタルに触れ給え。そしてキミが至尊の座に就くことを祈っているよ」

「わかった。すぐ戻るね」

そう言っただけでギルド長が杖を突けば、他の皆が恭しく道を開けた。

誰もが頭を垂れる人波を、アリスは表情一つ変えず進み……その先に佇むクリスタルに触れる。

表示された一覧には数々のジョブが名を連ね、その中に目当ての

【死将軍】の名もあった。

【転職の試練に挑みますか?】

他の項目と比べて色の薄いそれへと指を触れると、新たなアナウンズが表示される。

アリスは迷うことなくそれを肯定すると、次の瞬間には奇妙な空間へと飛ばされていた。

「通常空間じゃない……、ね」

見渡すかぎりの風景には、暗雲が立ち込め果てなき平野が広がっている。

そしてそれを埋め尽くすように武装した死者の軍団が整列し、その最奥には指揮官と思しき装いのアンデッドが佇んでいた。

【これなるは歴代の【死將軍】の残影】

【敵軍を突破し、指揮官を討伐せよ】

【成功すれば、次代の【死將軍】の座を与える】

【失敗すれば、次に試練を受けられるのは一ヶ月後である】

敵軍と相対する位置に飛ばされたアリス一行。

その前に屹立したモノリスにはそのような文面が描かれ、クエストの主旨を示していた。

それこそが【死將軍】の転職クエスト。

【死靈騎士】としてアンデッド達を率い、戦術を駆使して大軍勢を突破し首魁を討つ一大会戦。

寡兵を以て大軍を打ち破るには、なによりも配下との連携と、これまでに培った力量と経験の全てを賭して臨む他にない。

死の將軍位として死者の軍団を率いる【死將軍】に相応しい、難関クエストであった。

「思ってた通りの内容だね」

元より【死靈騎士】としての特性から、転職クエストにも当たりをつけていたアリスである。

そしてその想定から外れない内容に余裕すら浮かべて、うつそりと笑んでアリスは歩を進めた。

配下のアンデッドと足並みを揃えず、突出して敵軍に歩み寄るアリス。

そんな主の蛮勇を、しかし配下達は止めもせず静観した。

全てはアリスの御意のままに。

元よりこの程度の軍勢でアリスを阻めるはずもないと、彼らは誰より承知していたから。

単身優雅に歩み寄るアリスに、指揮官は意志無き思考で僅かに困惑を見せた。

しかし次の瞬間にはそうした無謀を晒うが如く元帥杖を振り翳し、それに呼応した軍勢が各々の武装を掲げる。

そして無防備にも剣の届く距離に達したアリスへと、朽ちた大剣を振り下ろして――

《ネクロ・テンプテーション》

――傍らに立つ同胞を、そのまま斬り碎いた。

アリスを中心に展開される異常領域。

甘い香りの瘴気漂う【死生禁域 ネビロス】の死者魅了結界に吞まれ、アリスに【心酔】するまま至上の法悦のままに、歓喜の中同胞と殺し合う。

これぞ死に耽溺したアリス・イン・デッドランドのヘエンブリオ。遍く生者を死者へ変え、剩えそれらを悉く【魅了】――否、それを超越した【心酔】せしめる、【死生禁域 ネビロス】の第二固有スキル、《ネクロ・テンプテーション》。

死者のみに特化した彼女の魅了に抗うなど、死者である限り望むべくもない。

「やっぱり。この子たちは本物じゃないね。本物だったらみんなおともだちに出来たのに……残念」

クリスタルに蓄積された記憶を媒体に喚び出された死者であるがゆえ、ドロップアイテムも落とさず、【心酔】の果ての服従すらも望めないことにアリスが唇を尖らせる。

その代わりと言うように、互いに殺し合う敵軍の真つ只中を鼻歌交じりに単身進み、誰に阻まれることもないまま指揮官たるアンデッドの目前へと到達した。

「やっぱりあなたは効かないのね。ほんとにほんとに無粋だわ。見てくれだけのアンデッドなんて何の魅力も無いもの。恨み言一つ言っ

てくれないなんて、つまんない」

本来の最大戦力であろう近衛兵に拘束され、無様に跪く指揮官へ語り聞かせるアリスの口は饒舌だ。

その本質は単なる人形に過ぎずとも、見てくれだけは好みの腐乱死体である指揮官の頬を撫で、その手を取り……剩れ口づけすら落としてみせたアリスの戯れを、遙か後方から見守る配下達はやや呆れたような気配を見せた。

そうして一頻り愛でたあと、アリスは一転して冷え切った視線を向け、一切の興味を失ったように踵を返す。

振り返った先には、同士討ちの果てに生き残った死兵達が一斉に跪いて頭を垂れ、真なる主たるアリスの沙汰を待つ。

それら忠臣そのものな彼らにも、アリスは一切の興味を示さず、一瞥すら向けずに宣告した。

「それじゃあ——死んでくれる？」

一斉に応じた声は歓喜の雄叫び。

彼らはアリスに【心酔】するままに自らの首を刎ね、あるいは五体を砕き、かつての指揮官すらも無遠慮に八つ裂きにした。

アリスは最後まで自らの手を汚すことなく、言の葉一つで敵軍を駆逐した。

そうして帰還した先に待ち受けるは、真なる忠臣たる配下達。誰も
が跪いて頭を垂れ、主の戴冠を祝福した。

『おめでとうございます、まことにおめでとうございます！ 我ら一同、主アリス様の戴冠を心よりお慶び申し上げます！』

「ん、がんばった」

甲高く祝辞を述べた双頭の烏を皮切りに、物言わぬ死者も、黙さぬ死者も、口々にアリスを讃える。

そうした忠臣達の心よりの賛辞に、アリスはあどけない少女そのものの笑みを浮かべて応えた。

『ギルドの皆さまも歓喜に満ち溢れましょう！ アリス様こそ今代の

【死將軍】！ いやさ歴代最強の將軍閣下にあらせられますが故に！』

「相変わらずよく舌が回るね、フギンムニン」

『この囀りこそがアリス様より賜った我が使命でありますゆえ!』

そうして【死霊騎士】アリス・イン・デッドランドは【死将軍】アリス・イン・デッドランドとなった。

〈Infinite Dendrogram〉サービス開始から半年も経たない異例の昇格である。

この一大ニュースは瞬く間にレジエンダリアを駆け抜け、多くの〈マスター〉を震撼させることになる。

(ねこちゃん、びっくりするかな? お迎えの準備をしなきゃ)

そしてアリスは、遠く離れた大親友を想い、更なる戦力拡大を決意するのだった。

To be continued

死の少女たち

□■レジェンダリア北部・アルター王国国境地帯

草木も寝静まる暗い夜更けの森を、独り悠々と歩く影がいた。

得体の知れないエレメンタルやアンデッド、その他無数の脅威のモンスター達が活発に動き出す時間帯を出歩く者は、このレジェンダリアにおいて大きく二つに分類される。

即ち、途方もない愚か者か、それら脅威を歯牙にもかけない圧倒的強者か。

「~~~~♪」

上機嫌に鼻歌を口ずさみながら無防備を晒して歩く彼女は後者であつた。

僅かに漏れ出る月明かりに照らされる青白い肌。その全身は一見華奢で、胸元を扇情に彩る黒のビキニと、過剰なまでに際どいラインを描くホットパンツ。

その上から奇妙な質感の艶を放つフードパーカーを被った装いはあまりにも無防備で、とても夜のレジェンダリアを出歩けるようなものではない。

にもかかわらず彼女の足取りは軽やかで、自分の庭を歩くが如く、迷いすらなく一直線に目的地へと向かつていた。

「さてさて、お嬢はもう知ってるつすかねえ。世間様にとっては取るに足らない出来事、けれどお嬢にとってはビッグニュース。大人気なくも目の敵にした悪党が、まさかまさかひよっこ以下の下級ヘマスタ〜に仕留められるなんて、ねえ？ あの時以上に荒れそうなモンだけど、それはそれでレアなお嬢の姿が見られるから良し、と」

独り言にしては饒舌に、連れもないのに楽しげな調子を崩さない女。

秘境の夜に響く弾んだ声は却って不気味さを増し、返す言葉も無く静寂に溶ける。

否、一つだけ反応があつた。

それは小規模の群れを為して徘徊する夜行性の魔蟲種だった。喰らいつき、侵入し、神経系に寄生して獲物を生きたまま苗床にする一等悪質な類のモンスター。

危険種にも指定されるそれが女の声に反応して飛翔し、その柔肌に向かい――

「おっと、おやつ発見」

――呆気なく右手に捕らわれ、そのまま口へと放り込まれた。

バリボリと下品にこだまする咀嚼音。力ない悲鳴は薄い唇に遮られ、そのまま女の腹の中へと嚥下される。

「ふうむ……硬い殻の内に潜むほのかなクリーミー。例えるならそう、栗に似てるっすねー」

言つてぺろりと舌を伸ばして唇を舐める女。

懐からメモとペンを取り出し、その所感を書き加える。

それは女に取つてのグルメレポートで、そのラインナップは常識的な料理から始まり、美食で知られる高級素材、有毒食材、果てには到底食用に適さないゲテモノ以下の劇物が無秩序に並ぶ。

その末尾に今しがた捕食した危険種指定の魔蟲を載せ、「美味かった」とコメントを併記する。なお大半のラインナップに同様のコメントが見られ、更に言うところ今食べた魔蟲はれっきとした有毒生物であった。

小腹を満たして上機嫌を増した女がおもむろに顔を上げる。

そして何気ない素振り、右手に捕まえた魔蟲の残りを差し出して言った。

「あ、そちらもお一ついかがですか？」

「拒否。断固として拒否します」

差し出された右手の向こうから、虚空を破つて包帯姿が現れた。



現れた包帯姿の声には強い抵抗の意思と警戒があった。

悍ましい見た目の魔蟲を忌避すことなく食った女への嫌悪。

そして当たり前のように己の隠蔽を見破った女の諸能力への警戒。その上でどこの集落からも離れた狩り場ですらない外地で、おそらくは目的地を同じくしているという奇遇。

どれ一つ取っても包帯姿にとつて最大限の警戒に値する状況。

当然のことながら、包帯姿はいつでも女を始末できるよう臨戦態勢を維持していた。

一方で女は、そんな相手の不審を知つてか知らずか、けらけらと軽薄な笑みを湛えながらぷらぷらと手を振る。

「そおんな露骨にドン引きしないでほしいつすよ、【盗賊王】。言つてみただけつすー」

「誰何。私の名を知るあなたは何者ですか？」

「容姿不明の【魂売】と違つて、アンタは有名人つすからねー。アタシも【咎追】の端くれ、場末だろうと【手配書】見れば一発つす」

「警告。返答をはぐらかすのであれば、あなたを始末します」

包帯姿——【盗賊王】ゼタは、女の振る舞いに不快感を抱く、敵意と共に警告を発した。

ゼタの勘気を被つたと気づいた女は大げさな身振りで肩を竦める。

「おお、こわ。名うての〈超級〉様に睨まれたんじゃ、これ以上のおふざけもできないつすね。アタシのことはグラたんつて呼んでほしいつすよ」

「成程。——グラたん？」

多分に曖昧なニュアンスを含んだ名乗りが、ゼタにはどのようなに伝わったのかは判然としない。

しかしゼタは、聞いた名を心中で何度か反芻し……やがて思い当たる節があつた。

「確認。あなたは【屍鬼姫】グール・プリンセスグラタンですか？」

「んー、親しみが足りてないつすねえ。まあでも正解つすよ、お見事！」

女——【屍鬼姫】グラタンは、ニイと笑つて答えた。

口の端に指を引っ掛け、乱杭歯を覗かせて笑みを形作る。その牙は奇妙な輝きを放ち、寧猛に研ぎ澄まされていた。

その返答に、ゼタは包帯で隠した表情で小さく驚愕した。

次いで首肯し、この場で遭遇した理由に納得する。

「納得。あの『死将軍』の盟友であれば納得できます」

「そういうアンタは多分お嬢の勧誘っすね？ 〈I F〉が指名手配された〈超級〉を正規メンバーとしてスカウトしてるつてのは界限じゃあ有名っす」

「肯定。否定する理由も無いので肯定します」

「でも目的はさーっぱりなんすよねえ……こつそり教えてくれたりは？」

「拒否。その質問への回答は拒否します」

「ま、そうっすよね。——ああ、別にスカウトを邪魔するつもりは無いつすよ？ だからその殺る気満々な気配はやめるっす。何なら道案内も請け負うっすからあ」

言葉とは裏腹にへらへらと薄ら笑いを貼り付けたままのグラタンに、ゼタは暫し黙考する。

そして、取り立てて敵対する理由も無ければ、ここで始末して得られる利も無いと結論し戦意を解いた。

勿論、警戒姿勢に変わりは無いが。

「受諾。彼女の居場所を熟知するあなたが道案内してくれるのであれば、否やはありません」

「おーけーおーけー、んじゃ互いに不戦協定つてことでもいいっすね？

着いた途端用済みとばかりにアンブッシュはNGっすよ？」

「同意。あなたの方から反故にしない限りは、同意します」

「あはは、まっさかあ。アタシだって勝ち目のない相手は嫌っす、命が惜しいっすからねー」

(欺瞞。その言葉のどこまでが本心やら……)

ゼタは据わった目を先導するグラタンの背に向けながら、彼女の異名の一つ、”悪食”を思い浮かべながら歩みを再開した。



「マジでここまでボコオってなって、アンデッドじゃなきやマジで死んでたつすね！ 人馬種族のアレときたら別格で、巨人種でもなきや

——」
（早計。彼女の案内に従ったのは早まったかもしれない……）

【屍鬼姫】 グラタンに同行して早くもゼタは後悔し始めていた。

グラタンは軽薄な印象そのままにとかく喋り好きで——その内容は、聞くに堪えない下ネタが大半を占めていた。

やれ人馬種族の逸物は見た目通り馬並みだの、レジエンダリアの種族の具合はどうだのと、品性の欠片も無い下事情のオンパレード。

聞けば彼女は完全なる個人的趣味で【娼妓】の真似事——所謂立ちんぼというやつだ——に耽っており、赤裸々な実体験を交えたトークはゼタの精神を着実に削っていった。

四半刻もする頃にはゼタもすっかり辟易し、「ひよつとして”悪食”の異名はそういう意味なのだろうか」と邪推すらする始末。

当然ながらゼタの反応もおざなりで、半ばどころか九割方無視を決め込んでいたのだが、グラタンの方はそんな様子もお構いなしに、一方的なマシンガントークをぶちかましていた。

（風聞。レジエンダリアの〈マスター〉は変人揃いと聞きますが、彼女のような人格が基準であるなら困ります。……【死將軍】もそうではない、と言い切れないのも、また困りもの）

【死將軍】アリス・イン・デッドランド。へ Infinite De
ndrogramでも屈指の死霊術の使い手。

曰く方を超える亡者を支配し、保有する戦力の数は世界中を見てもトップクラス。

しかし一方で酷く偏屈な人物としても知られており、彼女の実態を知る人間は片手で足りる程とも聞く。

その彼女が指名手配されたのはデンドロ時間においておよそ一年前。

レジエンダリア南部から海路に乗り出して東進し、その航海の途中でグランバロアの海賊船団と遭遇。

一悶着を経て海戦に発展し船団を返り討ちにするもそれ以上の東

進を阻まれレジエンダリアに帰還。

その時に船団側に強い損害が巨額に及んだことでグランバロアにおいて指名手配されたが、諸事情によって本拠地であるレジエンダリアでの指名手配を免れ、今も「監獄」送りにならずにいる――

（疑問。何故彼女は、突如海路からの東進を企てたのでしょうか）

勢いを増していくグラタンの下ネタトークから逃れるように、ゼタは思考を深めていく。

発端となった東進の動機については今尚明らかとなっていない。目的すらも定かではなく、アリス側も少なくない戦力を失う羽目になったことから、その出来事は各種方面で今も様々な憶測が交わされている。

元より風聞のよろしくなかった彼女の悪名は一連の出来事を以て尚のこと高まり、今では「IF」の耳にも入り、こうしてゼタが勧誘に赴ききっかけにもなっていた。

「質問。【死將軍】についてあなたへ質問があります」

「んを？」

「動機。彼女が指名手配されるきっかけとなった、東進の動機です」

対象の情報を知っておいて損はないだろうと考え、都合良くも同道している、事情に通じている可能性が高いグラタンへと、ゼタは素直に質問を投げかけることにした。

するとグラタンはきよとんと目を丸くしてから、さっきまでの薄ら笑いとは違う、堪えるような笑みを浮かべてから心底おかしそうに答えた。

「あー、あれっすか！ あれね、あちこちいろんな風に言われてるっすけど、実際はしょーもない理由っすよ」

「……………」

「黄河のお友達に会いに行こうとしたんっすよ、無理矢理ね。相手は

キング・オブ・アクロバット
「雑技王」って言うんすけど」

「……………何故？」

何故、そこでその名が出るのか。

思いもよらない人物の名が出てきたことに、ゼタは隠した表情の裏

で驚愕を大きくした。

キング・オブ・アクロバット
【雑技王】。

黄河が誇る〈超級〉三人衆の一角。

今でこそ黄河を代表する名は〈黄河四霊〉に置き換わっているが、それまでは彼ら三人が〈黄河三奇拳〉として名を馳せていた。

ヒューマンノイドタイプⅡ
”人間台風”、”星碎”——”星拳”の異名を持つ【撃神】ス
テラ・ザ・デストラクト。

レコードホルダー
”最高記録”、”武仙”——”超拳”の異名を持つ【超練体士】
GA・LVER。ヴァー

スクリーミング・シヨウ
”殺戮雑技”、”黒竜”——”妖拳”の異名を持つ
キング・オブ・アクロバット
【雑技王】黒猫。

かつて黄河を襲った〈ヘイレギュラー〉と対峙し、これを降した三人の名は、黄河の顔を〈黄河四霊〉に譲った今でも広く知れ渡っている。

内【撃神】と【超練体士】の二人は世界中を飛び回っているため各地での目撃情報もあるが、【雑技王】についてはゼタの知る限り過去に黄河を出た記録は無い。

少なくとも〈Infinite Dendrogram〉内において、【死将軍】と【雑技王】に接点はありえない……はずだった。

「所謂リアフレっすね。なんでもすれ違っつて開始地点別になっつたらしくて、今の今まで会えないまま。その鬱憤が募り募って無茶な東進に乗り出したってのが実情っす。まあ陸路よりは多少マシっっちゃマシっすけど、ぶっちゃけ無謀っすよねー。虎の子のお手製【ゴーストシップ】すら轟沈して踏んだり蹴ったりって荒れてたっすから。いやーこわいこわい」

「友人。現実側での知人同士なら、納得もできます。得心しました」
あの【死将軍】に友人がいたのか、という感想は呑み込んだ。

なにせアンデッドとしか口を利かないと噂される人物だ。漏れ聞く人物評もお世辞にも真っ当とは言えず、悪の死霊術師そのもののような相手である。

レジエンダリア有数の戦力として期待されながらも交友は絶無な【死将軍】。その裏事情に予想以上に通じていたことにも驚いたが、成

程彼女の盟友であるという情報に偽りは無かつたらしい。

【屍鬼姫】——己の種族をアンデッドに変える複合系超級職であることが、事情に明るい理由の大半であることが察せた。

「お嬢はオトモダチにご執心つすからねー。勧誘もまあ、あんま期待しないほうがいいつすよ？ アタシとしてもお嬢がへIFへ入りしたら、まー寂しいつすからねー」

「確認。あなたは〈超級〉ではありませんね？」

「残念ながら違うつすー。あー、アタシのほうは結構キョーミあるんすけどねー」

これを勧誘せずに済んだ、とゼタは心底安堵した。

気質的にはへIFへ向きと思え、もし彼女が入団のための条件を満たしていたなら、クランとしての利から見て勧誘しない理由は無かつただろう。

「ま、話は好きにするといいつす。アタシは所詮お嬢の金魚のフン、おこぼれ狙いの”腐肉喰らい”^{スカベンジャー}つすからね。お偉方のオハナシは雲の上でどうぞつすー」

「……………」

”頂点捕食者”の異名も同時に持つ彼女は、そう自嘲気に言った。彼女の素性を知る者にとって、その言葉はあまりに欺瞞に満ちていた。



「つと、見えたつすねー。あれがお嬢の今の根城つす。ここ一年はずーつとあそこで穴熊決め込んでるつすよ」

そうグラタンが指し示した先には、深夜の森に浮かび上がるように聳える白亜の砦があった。

意匠は然程凝つてもいない簡素な外観だったが、その周囲は昏く淀み、毒々しい煙を吐き出している。まさしくそれは腐り、溶け切った森の土壤だったものが放つ毒煙であり、砦を遠景に望むここからでも悪臭が鼻を衝いた。

ゼタは堪らず包帯の内顔で顔を顰め、そつとへエンブリオを起動して周囲の風向きを変えた。

グラタンのほうは慣れているのか、はたまた「屍鬼姫」の特性によるアンデッド化で無効化されているのか、なんら変わった様子を見せていない。

むしろゼタの気配を敏感に察して、グラタンはますますからかうような笑みを深めてみせた。

「くひひ、ご器用なことつすねー。ウチらは長いことアンデッドやつてつから、そのへん生身はデリケートだつてことすつかり忘れてたつす。いやあ失敬失敬」

「……無用。無用な心配です」

終始張り付いた薄っぺらな笑みにゼタは内心不快を露わにしながら、遮るように言葉を重ねる。

どうにも好きになれない手合だ——そもそも好悪の別に然程の興味も無いゼタではあるが、それでも不愉快に思う感情はある。

もしこれが目的としている人物に近いほぼ唯一の人物であり、案内役でさえなかったなら、最初に絡まれた時点で始末していただろう。

目的の成否はどうあれ、用件を済ませたなら早々に離れようど決心しながら、ゼタは気持ち歩調を早めながら砦へ向かって——

「！」

「——流石に反応が速エつすねえ！」

——首筋を食い千切ろうとしていたグラタンの牙を躲した。

ガキン、と鋼と鋼が打ち合うような音を響かせ、グラタンの口が閉じられる。

初撃が躲されるや否や四足で跳ね、蜥蜴のように手近な大木に貼り付いたグラタンが、その唇から不釣り合いな程に長い舌を垂れ流しながら、獐猛な笑みでゼタを睨めつけていた。

（敵対……理由はわかりませんが、そうであるなら容赦の必要はありませんね。目的地も見えています、用済みでしょう）

何故、と問うまでもなくゼタは迎撃を開始した。

元より犯罪者として各国から追われる身。命を狙われる理由など枚挙に暇がなく、常に身を危険に晒されているような立場だ。

当然不意打ちなど常に警戒しているし、仲間でもないへマスターを傍に置いて、ゼタが油断しているはずもなかった。

そもそもゼタが把握しているグラタンのプロフィールでは、彼女は生粋のP.K.K.

P.K.や犯罪者のテイアンを積極的に狩るへマスターとしてかつては名を馳せており、「死將軍」の走狗に甘んじているのも、グランバロアに指名手配された彼女をグラタンが狙い、返り討ちに遭った結果である。

とはいえ、善良なプレイヤーというわけでもない。

寧ろ人物評としては限りなくブラックな紙一重の立場である。

なぜなら彼女は獲物を生きのまま嬲り殺し喰らう食人鬼としても有名であり、犯罪者だけを標的にすることで辛うじて手配を免れているような人物だ。

そして彼女が悪人だけを狙うのも、悪人の血肉が特別好物だからでしかなく、故に彼女は「悪食」の異名で知られている。

悪を貪る同じ穴の貉。

レジェンダリアーのゲテモノ喰い。

悪が恐れる”頂点捕食者”にして、その腐れた身魂を余さず喰らい尽くす”死肉漁り”。

グラタンは、フィジカルに特化した「屍鬼姫」の身体能力を以て縦横無尽に跳ねた。

宛ら四足獣の如く、完全に地の利を心得た動きでゼタを翻弄せんと跳ね回る。

その動きは軽々と超音速に達し、A.G.I特化職である【盗賊王】のゼタと同格の領域に身を置いていた。

【屍鬼姫】。屍人系統レフナントと捕食者系統プレデターの複合超級職。東方の僵尸系統と同じく耐久面に優れますが、それよりも攻撃性で勝る。複合職として言えば【尸解仙】の西方版とでも言うべきでしょうか)

ゼタは冷静に分析しながら攻撃に応じる。

圧縮空気による防護膜を展開するゼタに対し、グラタンの戦闘スタイルは直截的な白兵近接型。

生半可な攻撃では破ることすら不可能な空気の壁を、しかしグラタンの手足は強引に突き破ろうと迫る。

防護膜で減衰しているとはいえ、まともに食らえばゼタの耐久力では少ないダメージは必至。故に迎撃の空気砲がグラタンを押し返すが、堪えた様子も無く飛び跳ねると、虚実交えた動きの中から再び強烈な一撃をゼタへ見舞おうとする。

HP、STR、ENDの三種に長けた【屍鬼姫】のステータス補正ならば、たとえ徒手であろうとそれくらいの手当は可能だ。

類似職である西方の【尸解仙】と違って魔法職を複合していない分、より純粹にフィジカルに特化した【屍鬼姫】のHPは優に八〇万に達し、STRは一万を大きく超え、ENDに至ってはへエンブリオによる補正も相俟って二万強にまで上る。

代わりにその他のステータスは低水準で、特にMPなどは【尸解仙】と比べれば無いに等しい。

また【尸解仙】と違ってアンデッド特有の弱点も残ったままなため、知識さえあればその耐久を乗り越える手段は幾らでもある。

結果として【屍鬼姫】は戦闘職の中でも特に相性に左右されやすいジョブであり、一方ゼタにはその弱みを突く手段が幾らでも———それこそ無数にあった。

(ジョブらしからぬAGIの高さはへエンブリオによる補正でしよう。比較的鈍足なことが弱みでもあるその特徴を補うステータス補正は優秀ですが、しかし私の敵ではない)

ゼタは一通りの分析を終えると、最早脅威ではないと判断して早々に終わらせようと動いた。

幾度目かのグラタンの肉薄。それを防護膜で防ぎ、空気砲で押し返し、再びグラタンが動こうとしたタイミングでその進路へ圧縮空気の壁を置いて牽制すると、方向転換しようとした力みを隙として捉え固有スキルを発動する。

「《コードI：フォーミング》、《コードIV：アーティラリィ》」

「おっほお、強烈ウ！」

それまでの牽制とは違い、固有スキルによる砲弾は桁違いの攻撃性能を誇る。

全周囲から放たれた空気弾は【屍鬼姫】のENDをしてその肉を穿ち、まずは四肢に風穴を空けて動きを殺した。

ほとんど部位欠損に近い状態ながら余裕を崩さないのは、偏に種族がアンデッドと化しているからだろう。

肉体的なダメージや欠損の影響が少ないアンデッドには、生者ならば有効であろう症状も軽傷に過ぎない。

当然それはゼタも心得ており、続けざまにスキルを行使した。

「弱点」

「んあ？」

「アンデッドの弱点は火属性に聖属性と相場が決まっています——発火」

極限まで酸素濃度の高まった空間。

それを外界と隔絶させる真空断層結界。

見えざる密室空間にグラタンを閉じ込め、ゼタがパチリと指を鳴らした。

「ッ、ゴア——!？」

「火葬。アンデッド相手ならば、この手に限ります」

瞬間、炎上。

大気操作で作りに出した火種が空間内を一瞬にして燃え上がらせ、グラタンを火刑に処した。

常人ならばそれだけで致死量に至る超濃度酸素空間。それを燃料とし、また狭い空間で燃え盛る炎は超高温に達し、ただでさえ火属性に弱いグラタンを舐め尽くしていく。

たとえ【救命のブローチ】を装備していたとしても、持続する高温による継続ダメージで早々に砕け散るだろう。

必殺スキルを用いた切り札と比べれば相当に温い火力ではあるが、〈超級〉でもない火属性弱点持ち相手ならば十分に過ぎる。

【死将軍】の手駒を処理してしまいましたが、やむを得ませんね。こ

れで交渉が不利となるならば、それも良いでしょう。元より期待を強くしていたわけでもない。本格的な敵対は、現状では避けたいところですが……)

そう黙考に入り、グラタンから僅かに意識を逸らした瞬間。

再び無自覚の危険を悟り、ゼタは全力でその場を飛び退いた。

「——ほんつとくに、反応が速えこと！」

初撃と同じように、牙を打ち鳴らしたグラタンがいた。

「あー、あんだけの大ダメージを食らったのは久々つすねえ！ いやあさすが〈超級〉サマはお強い！ 間違いなくトップ3の難敵つすよお」

「……驚愕。間違いなく、焼き尽くしたと思ったのですが」

ゼタは、初めて驚愕を露わにした。

耐久型とはいえ絶対の弱点を突き、間違いなく仕留めたと思っていた相手が無傷で再び相対している。

焼却の前段階として潰した手足も元通りに、一切のダメージを負った素振りも無く、グラタンは目を爛々と輝かせたまま笑みを深める。

唯一装備品だけは熱量に耐え切れず尽く焼却され、今のグラタンは一糸纏わぬ無防備を晒していたが、それを気にする様子も見せていない。

(まるでエミリーのような……いえ、アレほどの理不尽とは思えませんが。彼女の蘇生とは違って、おそらくは高速再生の類。推察できるステータス補正から考えて、間違いなくリソースを必要とするはず。とはいえそのためのリソースはどこから……)

無論ゼタのほうもたかだか全裸如きで動揺するはずもなく、思考が目まぐるしく駆け巡る。

油断は一切無かったが、より脅威度を引き上げ己を睨めつけるゼタへ、グラタンは何の痛痒も見せず、これ見よがしに五体を晒してみせる。

「へえへえ、間違いなく手足はほとんどもがれたつすし、全身焼き尽くされたつすねえ……だからなんだってだけなんすけど、またまたグラタンのドツキリ大成功!!」

「……………」

「みんな同じ表情かおをするんっすよねえ。「やったか!?!」みたいなフリっで今どき生存フラグもいいところっす。……ああ、でも」

グラタンは、自ら指先で口の端を引き裂き、文字通り口が裂けるような笑顔を浮かべて牙を剥き出して言った。

「——そろそろ、オナカが空いてきたっすねえ」

「……上等。であるならば、今度こそ確実に仕留めるまで」

血の滴る口から舌を垂れ流しながら笑みを深めたグラタンに、ゼタは今度こそ必殺を決意した。

「あっははは、アンタもなかなか強いっすけど、ウチのお嬢ほど理不尽じゃないっすねえ! お嬢相手と違って手も足も出るんだからすげえ楽っす! 楽しいっすよ!!」

いい加減耳障りなグラタンの口を全身諸共焼き尽くすべく、ゼタは《ウ天空絶対統制圏ス》を発動しようとして——

「——ッ!」

「ゲエツ、これは——!?!」

己の右腕が腐り果てていくのを察して全力で距離を取った。

一方グラタンは全身を硬直させ身動きが取れないでいる。

【腐敗】? いえ、これは単なる状態異常ではない……【亡者化進行】状態! 既存には無い状態異常——まさか!)

ステータスを確認したゼタは顔を跳ね上げ、彼方にあつた砦を探した。

しかしあれほど異彩を放っていた巨大建造物は今や影も形も無く、毒沼だけが爪痕のように残っている。

そして代わりに上空から、二人の間へ遮るように影が飛び降り声が響いた。

『——双方、矛を収めよ。これ以上の狼藉は敵対と看做す——と我が君は仰せである』

「……………」

全身黒の喪服めいた戦装束。

表情を隠すベールハット。

右手の長剣をゼタへ、左手の短杖をグラタンへ。巨大な棺を背負って矛先を向ける小さな影。

左肩に双頭の鳥を止まらせ、右の首が背後を向いて名を告げたその〈超級〉の名こそは――

『控えよ。【死將軍】アリス・イン・デッドランド様の御前である』
「……………」

レジェンダリアが誇る最強戦力が一柱。

”死亡遊戯”アリス・イン・デッドランド、その人であった。



『【盗賊王】ゼタ。貴様の目的は把握している。大方我が君の〈IF〉への勧誘であろう』

「……………」

一瞬にして場を制した少女の言葉を、肩に止まって異形の鳥が代弁する。

ゼタは戦闘継続の不利益を理解しつつ、しかし戦闘態勢だけは解かずにいつでも応戦できる姿勢を維持したまま聞きに徹した。

『〈IF〉の活動目的はともかく、行動理念は我らも理解している。貴様らが指名手配された〈超級〉を集め、何らかの目標を為そうとしていることは我が君も推察していた。条件を満たす者の希少性、世間に認識されている我が君の風評、保有戦力の大きくなることが〈IF〉の利益に成り得ることも自覚し、あるいは勧誘もあり得るのではないかと想定していた』

「……………」

朗々と語る鳥の言は、自意識過剰でもなんでもない。

それだけの価値を〈IF〉はアリスに認め、叶うならば仲間を引き入れたいと考えていたからだ。

彼女の有する力の全てが有益そのもの。世界屈指の死霊使いにしてアンデッドクリエイター。

スキルの熟達が最難関であることでも知られる《軍団》系スキルを

も極め、かの【魔將軍】にすら匹敵する常駐戦力を誇る彼女の力は、へIF」としても大いに認めるところだ。

また、伝え聞く彼女の気質も素晴らしい。

所謂「世界派」、”遊戯派”といった思想の違いに頓着が無く、ティアンの命にも斟酌する様子を見せない彼女のあり方は、へIFに引き入れても全く損なわれることなく実力を発揮できるだろうとの見込みもあり、特にラスカルが熱心に考えていた。

ゼタとしてもその考えに異論は無く、皇国へ向かう道程でわざわざ寄る価値があると認めていた。

故に、過不足無く自己の価値を把握していた鳥の代弁に、ゼタはやや期待を大きくしたが……

『その上で結論を述べよう。貴様らの期待には応えられない——と我が君は仰せである』

「……理由。何故、とお伺いしても？」

『それよりも優先すべき事情がある。恩師の仇を討つまでは此処を離れるつもりはない——と我が君は仰せである』

恩師。よもや【死將軍】の口から（といっても代弁だが）そのような言葉を聞けるとは。

ゼタは予想だにしなかった理由に思わず思考を硬直させた。

『態々遠方より我が君を訪ねた客人へ断りを入れる以上、説明しておくが道理であろう。——我が君は現在、一年前に古巣であったへ死靈術師ギルドを襲撃し、師を弑した上、秘蔵の古文書を奪ったメイズなる【大死靈】を警戒中である』

またも思いがけない、ゼタの価値観で言えばあまりに取るに足りない理由が紡がれた。

そして語られた人物の名は、ごく最近話題になってゼタの耳にも届いており、その内容を彼女は把握してないらしいことを意外に思っていた。

またそう思う以上に、随分と迂遠な真似をするものだ。とゼタは考えた。

それほどに件の人物が轟かせた悪名は現地では広く、また悍まし

い。

一方でたかがその程度の小物を討伐に向かうでもなく〈超級〉が警戒し、こんな場所に一年も拠点を築いていた理由を、ゼタは理解できなかった。

『貴様の疑念は理解できる。……が、より相応しい末路を迎えさせるため——と我が君は仰せである』

「……納得」

が、続く言葉で理解できた。成程、そういうことか。

件の「大死霊」も、知らなかったことだろうとはいえ、随分な相手を敵に回したものだ。

沈黙を貫いて、従者に代弁させてはいるが——余程腹に据えかねているらしいとゼタは察し、これ以上の勧誘交渉は無駄だと判断した。

——死霊術を極めた者にとって、単なる死は何ら逃避になり得ない。

「決裂。現時点でこれ以上の交渉は無為であると判断します。また敵対する意義も理由も見出だせない以上、私はこのままこの場を去りましょう」

『御理解いただき感謝する。双方にとって賢明な判断である——と我が君は御喜びである』

「保留。しかし完全に芽が無いわけでもないようなので、勧誘を一旦保留とします。……そしてひとつだけ忠告させていただきます。あなたが執心のメイズ某ですが、彼は——」

そしてゼタは再び会ったときにアリスの印象を良くしておこうと考え、少しだけ恩を売っておくことにした。

彼女が勘違いしたままの事の詳細、件の人物の末路について説明しようと言葉を続け……

「ちよちよちよ、それはアタシの役目です！　そうそう、それを伝えたくてここまで来たんっすよ！」

それまでアリスの命令で口を閉ざされていたグラタンが、どうにか自由を取り戻してゼタの言葉を遮って叫ぶようにして言った。

「やつこさん、王国のルーキーに返り討ちに遭ってくださったらしい

んすよお！ お嬢つてば完全に出遅れちまつてるっす！」
その暴露にアリスは、初めて動きを見せ。

「へえ」

従者に代弁させるでもなく、底冷えするような声音で呟いた。



やがて夜が明ける頃。

一台の馬車が北へと進路を向け、一つの影が更に北へ向かって翔んだ。

国境地帯に築かれていた砦は一夜にして消え、ただ毒沼だけが爪痕として残される。

少女の形をした死を二つ乗せた馬車は、北へ北へと真っ直ぐに――
動乱の火消えやらぬ”決闘都市”へ。

死の少女たちは、巨悪を倒したという聖なる騎士の少年のもとへと向かった。

――その邂逅の是非は、今はまだわからない。

T o b e c o n t i n u e d

序章

初ログインじゃんよ

□???

さてさて買ってきたぜへ Infinite Dendrogram。なげーからデンドロでいいか。

あっちゃんに誘われて購入したはいいものの、御歳九歳のお子様に一万円の急な出費はなかなか痛かったんよ。あっちはセレブでもこっちは一般家庭だぜ？ お年玉の貯金を残してなかったらどうすんだってね。

あっちゃんならこともなげに軍資金を寄越して（貸して、じゃないあたりセレブ）くれそうなもんだけど、んなマネしたらママにぶっ飛ばされるじゃんよ。

わざわざ第一報の時点で買いに走ったあたり、あいつの謎の嗅覚が働いたんだろうけど、これでクソゲーだったらマジゆるせん。これまで幾つのVRゲーが期待を裏切ってきたことか。

ともあれ帰宅するなりマイルームに滑り込んで即ログイン。とりあえずチュートリアルだけでも済ませておくかね。

んでまあそのチュートリアルだけど、こりやすげーわ。

NPCの受け答えとかは既存タイトルでも割りと優秀だったけど、感覚の再現がすごすぎて現実と区別つかねー。

たまに見るリアルな夢よりもリアルな感覚に戸惑ってると、管理AIだとかいうさんくせー帽子野郎がガイドを名乗り出た。

見た目もうさんくせーけど口調もうさんくせー、ザ・不審者って感丸出しのロールはキャラ付けなんかね。NPCのキャラ付けにどうこう言うのも野暮だけど。

マッドハッターとかいう管理AIの説明を右から左に、進められるままほいほいと設定していく。

見え方はアニメにCG、あと現実そのものなのもある？ 感覚だけリアルなのに見え方がアニメやCGなのも気持ち悪いから現実視で

いいや。

アバターのキャラメイクもリアル準拠でいいやね、別に見られて恥ずかしいだらしねーカラダしてねーし。完全同じは避けとけってダメ出しくらったから適当にちよいちよい変えてほしい決定。

初期装備も貰って、あとへエンブリオ〜とかいうやつも移植された。なんでもこれが個人個人に合わせた独自進化を果たして、自分だけのへエンブリオ〜に育つんだってさ。まるで一昔前のVRMMO小説みたいじゃんね、まさか空想に現実が追いつくなんてびっくりだわ。

ちなみにこのゲーム、リセマラできないみたい。目当てのへエンブリオ〜を引き当てるまでやり直すことはできねーんだってさ。脳波登録とやらでどのハード使っても同じアカウントになるらしいね。脳波って、なんかちよつとこえー感じじゃんね。

んでへエンブリオ〜の移植も終わったらいよいよ最後、一番最初に所属する国家の選択ってか。

これもいろいろあるけど、んー……：そういやあつちゃんはどこにすんだろ？ この手のゲームであつちゃんのやることって毎回同じだから、ダメ元でマッドハッター……帽子屋でいつか、帽子屋に訊いてみた。

そしたらたぶん黄河かレジエンダリアのどっちかだろうねだってさ。あー、なるほどね。見るからに西洋系と東洋系だもんね、天地とかいう戦国日本みたいなところはお国柄的に除外っばいし……：どうすっかなー。

そういやこないだ一緒に見たのはキョンシーだっけ？ なら黄河かねたぶん、とりまそっちに決定。

そしたらかしこまって勿体つけた言葉を贈られた。なにをするにも自由だつてさ、めっちゃうさんくせーこと言われたぜ。

自由自由つて、その手の文句言いだすゲームつて大抵ハズレなジंकスあつからやめてほしいじゃんね。

ま、いいや。とりま黄河帝国とやらにレッツゴーよ。まさか空中に放り出されるとは思わなかったケド。

◇

デンドロすげーよデンドロ、ちよつとナメてたわマジヤバイ。

龍都とかいう黄河の首都の真ん前に放り出されたところを親切なおっちゃんに拾ってもらってあれこれ説明してもらったんだけどね、うちらプレイヤーのことをへマスター〜とか呼んで、その辺のことをいろいろ詳しく教えてもらったんよ。

んでまあそれがヤバイっていうか、深い。たかがMMOじゃんって高を括ってたら豆鉄砲くらった気分だわ。単なる世界観設定と思いきや誰がそこまで細かく考えんだよってツツコミ入るくらい真に迫ったっつーか、ゲームどころかまるで異世界そのものみたいってーの？ わざわざログインやログアウトだのにそれらしい理由を設定付けてるあたり、ロール派大歓喜って感じじゃんね。

つかおっちゃんらみたいなのNPC……こっちの言葉ではティアンっつーんだっけ？ それとうちらプレイヤーつかへマスター〜って区別されてんのね。こっちの常識やらなんやらを懇切丁寧に教えてもらったわ。

とりあえず言えることは、オフゲームみたいに気分任せにNPC殺すのはNGってことかね。うっかり殺しちゃったら有罪確定で隔離不可避らしいし、あたしもうっかりヤツちゃわないうようにしねーと危ねーじゃんね。

とりあえず親切なおっちゃんに礼を言ってお別れて、あちこちぶらぶら歩き回ってみた。

いろんなジョブのギルドがあつて、勧誘やらなんやらで説明を受けてみたけど、やっぱ【戦士】とか【魔術師】とか、その辺のメジャーどころはどの国にも共通してあるらしいね。あたしはとりあえず保留しといたけど。

なんつーかね、自由が売りのゲームらしいじゃん？ せっかくだからそういうフツーのはやめて、もつと別のおもしろそーなのをやってみたいじゃんね。ぶっちゃけ戦闘系じゃなくてもいいっつーか。

そう思って歩いてたら、なんか見えてきたじゃんおもしろそーなの。広場に天幕張って芸を見せてるティアンがさ。

中華っぽい黄河だと雑技団っつーんかね？ 骨が無いみたいにく

ねんぐねん柔らかい身体を折り曲げたり、一見キシヨい動きで芸をしたり、そうそうこういうのがいいんだよこういうのが。

そのままじーっと見てたら芸を見せてたおっちゃんの一人がこっちに気付いて寄ってきた。

ここは関係者以外立ち入り禁止だつて怒られちった。道理で一人で芸をしてたわけだ。あれつて客に見せてるんじゃないやなくて練習してたんね。よく見りやあたし以外に観客いねーじゃんよ。

こんなとこで何してんだつて聞かれたから、おもしろそーだから見てたんじゃんよつっつたら、おっちゃんはおあたしの左手を見て「ひよつとしてへマスター」か？」つて聞かれた。

そだよーつっつたら驚かれた。そういやへマスター」つて最初のおっちゃんの口振りからするとお伽噺の存在っぽいもんね、こつから先プレイヤーも増えるだろうからへマスター」も増えていくんだろけど。

そつからなんやかんやあつて、あたしは【軽業師】に就くことになった。

あ、【軽業師】つてのはおっちゃんがやってたような大道芸をメインにしてるジヨブね。おっちゃんに言われた通りに身体動かしてみたら是非やってみないかって言われたし、なんとなく流れに乗つかつてみたよ。

ジヨブの傾向としてはAGIとDEXが突出してて、HPやENDなんかはかなり低めつてとこかな。身のこなしを主に強化していく非戦闘系ジヨブっぽいじゃんね。

おっちゃん曰くあたしは逸材らしいし？ まあね、素でマンションよじ登るとかよゆーだし、これくらいはね？

とりまおっちゃんの勧めに従つて中でいろいろ練習することにした。みたじゃんよ。ちなみにこのおっちゃん、まさかの団長さんだった。だんちよー。

◇

結論から言うかね？ 【軽業師】つてばちよー楽勝じゃんね。

なんてーのかな、別に初期ステでもリアルでできる動きばつつかだ

し、もつとむずかしー演目はレベルとステ上げてからじゃないと危ないってんで、初級の合格はくれてやつからとりあえずレベル上げてけって言われたわ。

レベル上げるにはどーすんのつつたら、やっぱ戦うしかないっしょってことで外出しようとしたんだけど、よく考えたらあたし今【軽業師】で戦う用のジョブじゃないじゃんね。

一応投擲武器の補正はあるけど、初期装備の金で消耗品なんてそんな買えねーし、ひよつとして素手でやるつきやないって考えて、ちよつとダルいなーって思ってきたとこ。

そしたらおっちゃんにアホの子を見る目で言われたじゃんよ、普通は【軽業師】のしゅぎよーしてレベル上げんだよって。

あー、なるほどね？ 非戦闘系なら別に戦う以外にもレベリングできるっぽいわ。少なくとも最初のうちは地道な軽業の練習で上げてくっぽいじゃんよ。

マジかー、地道な練習まじかー。ま、いいけどね、どうせ暇だし。身体動かすのは別に嫌いじゃないし、ご飯と寝床あるならやぶさかじゃないじゃんよ。

あるよね？ 寝床。……しょうがねーなーって用意してくれたわ、このおっちゃんめつちや良い人じゃんね。

あ、おっちゃんじゃなくて団長かだんちよー。

……やっべ、ママが呼びびじゃんよ。そういやそろそろ晩御飯の時間だったわ。一旦ログアウトしなきゃ。

◇

ほいめしもどりー。

たった三十分くらいだけどこっちはもう九十分経ってた。三倍時間ってやっぱマジだったんね、マジやべー。

だんちよーは戻ってきたあたしを見て「なるほど、これがへマスターか」とか言ってた。まあね、ほいほいログアウトしていなくなるプレイヤーなんて、現地人からすれば神出鬼没じゃんね。この辺の時間間隔の磨り合わせてけっこー重要な気がするじゃんよ。

とりま戻ってきてこっち時間で十八時間は大丈夫つつたら、じゃ

あ早速練習だつって裏の練習用天幕に連れて行かれた。

つつても基礎的な身体能力はもうあるからつてんで、レベル上げるためだけの反復練習だけだね。ふっーはここで柔軟やらバランス感覚やらを鍛えて地力を上げるらしいけどね、でもあたしつてば天才だし？ 自分のさいのーが怖いじゃんね。

とりあえず言われたとおりにジャグリングやら玉乗りやらしてつたら、けっこーなスピードでもりもりレベル上がるじゃんよ。

関連スキルのレベルもちよいちよい上がつて、そのたびに補正掛かつてAGIやDEXが上がつていくから、どんどん難易度高い技もよゆーでこなせる。さすがあたしじゃんね。

一緒に練習してた見習いさんもほかーんてしてこっち見てるし、さすがあたし（二度目）。へエンブリオも孵化してない今なら条件はティアンと変わんないし、これなら別にチートでもなんでもないじゃんね。あたしの純粋なさいのーつてやつじゃんよ。

あ、へエンブリオつて孵化すると大なり小なりステ補正掛かるらしいよ。これの有る無しがティアンとへマスターを大きく分ける差つてやつらしいじゃんね。ログイン前にちらつと覗いた掲示場で誰かが書き込んでたわ。

早い人は今日の朝イチにログインしてとつくにへエンブリオを孵化させてるらしいしね。掲示板の情報網はさすがですわ、半信半疑だけだね。

四時間もするころには駆け足で上げれる分はもう上がりきったかな。そこで一旦休憩入つて、飯食つてから再開らしい。さつきリアルで晩御飯食べたところんだけどこっちでも食えるのかな？ 別腹かなー。

なんやかんやで結構楽しいじゃんね【軽業師】。つつてもまー趣味の延長線上だけど、これで軽業向けのへエンブリオが出てきても困るじゃんね、あたし。別に軽業一本でおまんま食つてく気は無いし。ま、なるようになるじゃんね。

飯休憩終わったあともしばらく練習して、夜も更けてきたところで今日の修行はお開きだつてさ。家のある子は家に帰つて、住み込みの

子はそのまま寝起き用の天幕に入ってしまった。

あたしも相部屋だけど場所もらって、そこで一旦ログアウトした。目の前で消えてくあたしにびっくりしてた見習いの子の顔がちよっとおもしろかったじゃんね。

◇◇◇

「あっちゃんおつすおつす。そっちどない？ こっちはそこそこイイ感じじゃんね、今回はあっちゃんの鼻大正義だったじゃん」

「……ねこちゃん、こっちいなかった。いっしょに遊ぶっていったのに……」

「あつれー？ あっちゃんもしかして別ん国？ うちの黄河にしたんだけど、こないだ一緒にアレ観てたからてつきりこっちなって」

「わたし、オクシデンタル派だし。受付の人にきいたら「それならレジェンダリアがおすすめ」って言ってたから、そっち」

「あっちゃん、マジかー。レジェンダリアと黄河ってけっこー離れてるじゃんね。これる？」

『むり。だからしばらくこっちでなんとかする……お金溜まつてなんとかできそうになったら、そっちいくか、ねこちゃんこっち来て』

「無茶いうねーチミィ。ところで初ジョブ何にしたん？ あたし【軽業師】じゃんね」

『【死霊術師】……【軽業師】？ へんなの』

「あっちゃんこそ相変わらずじゃんね、おたがいさまー」

『あ、わたしへエンブリオへ孵化したよ』

「マジで？ どんなん？」

』

「まあじでえ？ うっわーマジモロじゃんね、そんなんありかー」

『おかげで第一号できた。みる？』

「ちなみに見え方どれにしたん？」

『リアルなやつ』

「まじかー、とりま見してちよ」

『はい』

「……うっわグロ、耐性無かったらリバーズ不可避じゃんよ」

『かわいい』

「ほいほいおつおつ。んじや今日はもう寝るわ、おやすみー」

『おやすみ……』

ケータイぽーい。

ベッドずさー。

「……あっちゃんちよーいキキキしてたじゃんね。よきかなよきかな」

これがあたしのへエンブリオ〈じやんよ

□???

ほいほい次の日じやんよ。三倍速のせいで学校いつてる間にもどんどん向こうは日数過ぎていくから気になって仕方なかったじやんね。

いつもはあちこち寄り道して帰るのも、今ばかりは一直線じやんよ。あつちゃんもお迎えの車に乗って……ってなになに、あたしも行くの？ ならちよつと家寄ってほしいじやんよ、ハード持つてかないとだし、ママにも晩飯いらないつて伝えとかなきゃ。でるんでしょ？ おゆはん。

んひひ、ラツキーじやんね。あつちゃんのご飯ちよーおいしいもんね、おかわりしまくり確定じやん。

じいやさんもお世話になるじやんよ。あ、ちゃんと宿題終わらせてからでしょ？ わかつてるわかつてる。

ほいじやま車出してちよーよ。

◇

てわけでログイーン。

たった一日足らずなのに寝てた時間と合わせてもう何日か経つてるじやんね。

三倍速つて遊んでる間は便利だけど、ログアウトするときには気がなくてちよーつと不便じやん。

てゆかあたし無断で数日一座を欠勤？ これつて社会人ならそつこークビじやんね、ごめんなさいして許してもらえっかな？

……あ、オツケーだったみたい。てかこうなることは織り込み済みだつてだんちよーは分かってたみたいじやんよ。

そんだけへマスターの神出鬼没はティアンの間で有名らしいね。ていうか常識つてやつ？ まああたしが怒られないで済むなら万事オツケーじやんね。

そんなかわり遅れた分を取り戻すように練習はキツイぞつてね、まあゆーよゆー。あたしにかかればお茶の子さいさいじやんよ。

……ところでお茶の子さいさいの「子」と「さいさい」ってどういう意味なんかね。まあどうでもいっかー。

◇ 玉乗って、ジャグリングして、傘回して、踊って、柔軟して、あれこれっこー忙しい練習内容。

怪我はそうそうしないけどだんちよーは厳しいから、不慣れな子はかなーり怒鳴られてんね。つっても理不尽なおしかりじゃなくて、きちんとした指導に則った怒鳴り声だから、泣きべそかいてリタイアするようなやつはいないケド。

どうもこの一座、最近は新しい風つてのに乏しくて、指導に熱が入らざるを得ないみたいじゃんね。少しでも多くの子に覚えてもらいたいっていうだんちよーの焦りが垣間見えるじゃんよ。

……なんでわかるのかって？ あたしの目はごまかせねーつてことさ。

そんなドラマが裏で展開されてる一方であたしのレベルは上がる上がる。

《平衡感覚強化》やら《柔軟》やら《アクロバット》やらのスキルがガンガン上がるせいで、他の皆と同じ練習内容じゃ物足りなくなってきたじゃんよ。

つってもあたしは空気の読めるいい子だから、文句は言わずに黙々とジャグジャグしていきますよ。ジャグジャグってジャグリングのことね、byあたし語。

まあ飽きるまでは従うじゃんよ。つってもただジャグジャグするだけなのはつままないから、適当に身体曲げたり踊ったりしながらやってみる。片足でつま先立ちも余裕じゃんね、足の裏が背中にくっつく柔らかさはあたしの自慢だぜ。

この調子ならもう二、三日もすれば【軽業師】はカンスト見えそうじゃんよ。確か下級職の上限って五〇だし、今でもう三六だからっこーちよろいじゃんね。

あーでもスキルレベルは対応する動きしなきゃ上がんないんだっけ？ なら一週間は掛かるかなー。スキルレベルってジヨブレベル

よりも若干上がりにくい感じするし、こればかりは反復練習あるのみじゃんね。

ていうかあたし以外だーれもへマスター〜いないじゃんよ。まあ普通は【戦士】やら【魔術師】やら、オーソドックスなジョブになりたがるらしいし、【軽業師】なんてマイナージョブを最初に選ぶなんてやつそうしないじゃんかね。そうなるにあたしって異端？ 異端異端ってそれ言いたいだけじゃんねって言ってるやつ見るたびにあたし思うわー。

ていうかこれマジであたしのへエンブリオ〜が軽業向けにならないよね？ さすがのあたしもそれはノーサンキューじゃんよ。大多数と同じように戦闘職に就くつもりはないけど、戦うつもりは無いなんて一言も言ってるわーし。せめてなにかしら戦う手段はほしいじゃんね、あっちゃんのへエンブリオ〜はあんなんだったし。

せめてあれなー、当面【軽業師】のままでも敵倒せるようなへエンブリオ〜がいいじゃんね。それもどんなスタイルでも腐らないような。とりあえずそんな感じになるよう心の中で祈るところ。便利なやつ便利なやつ――。

つとやべ、もうリアルじゃ何時間か経ってたみたい。

アナウンスが来てるじゃんね。ちようどこつちも休憩時間だしちよつくらログアウトしてくるじゃんよ。

あっちゃんとこの晩飯に突撃隣の晩御飯ーって、晩飯と晩御飯て被ってるじゃんね。

◇ まさかセレブなお家のおゆはんでギョーザ出てくるとは思わなかったじゃんよ。

まあすんげー美味いからいいけど。いい肉使ってるじゃんよ。いい肉ってどういう肉なのかあたし知んねーケド。

◇ ほいもどり。練習再開じゃんよ。

って思ってたらだんちよーに呼び出された。前座をやってみないかって提案じゃんね。

なんでもあたしの軽業は見習い卒業には十分らしいから、ここは一発本番やってみつかつていうだんちよーの憎い心遣いつてワケ。

つってもメインキャストが出張するような大舞台じゃなくて、席料も安い中堅以下の小規模舞台の前座らしいけど。それでも入門一週間も経つてないあたしにすれば大抜擢じゃんね。

もちろん即OKよ。やることは今までの練習でやった内容ばっかだし、万が一にも失敗するなんてあり得ないじゃんね。

そんなこんなで了承したらそれがクエスト開始の合図になったみたいで、この一座を含む【芸能】ギルドのクエストとして正式に受理された。

成程、これを達成すれば経験値とお金が報酬として手に入るわけか。こりやますます受けるつきやないじゃんね。

本番は三日後。それまでに出来るだけジョブとスキルのレベルを上げるために、より一層の猛練習を課されることになった。

でも三日かー。そこまで練習漬けてのはさすがに腐りそうじゃんよ。ぼちぼちあたしもバトルしたいー！

そうごねたら「……こいつなら大丈夫か」って感じにOK貰えたぜ、いいい。まー投げナイフがいくつかあれば戦えないことはないじゃんね、ステもAGIとDEXは伸びてるから当たらなきゃどうってことあないっしょ。

だんちよーの厚意で戦闘用投げナイフを何セットか貰えた。あと初期装備よりはマシって程度の軽装防具一式も。

マジで至れり尽くせりじゃんね。いいの？って訊いたら「お前には期待してる」なんて言われて、「これは先行投資だからな、しっかり鍛えてじゃんじゃん稼いでくれよ」とまで言われた。

とんだツンデレじゃんね、こうも貸しを作られたらあたしとしても返さざるを得ないじゃんよ。こうなったらだんちよーが満足いくまで付き合っただげるから、こつから先もどんどんあたしに貢ぐじゃんよっついたら、調子に乗なってゲンコツ食らっちゃった。

こつちのだんちよーはなかなか容赦無いじゃんよ、嫌いじゃないけどね。

そんなわけでデンドロ時間数日目にしようやく初戦闘じゃんよ。
長かったなーマジで。

◇
だんちよーに教えてもらった初心者向け狩場に到着じゃんよ。
つつても龍都のすぐ外だけど。あちことで他のへマスターがザコ
敵相手に戦ってるのが見えんね？

いろんな武器を使って戦ったり、オトモつぽいモンスターに任せて
戦ったり、見た目よくわかんないナニかで戦ったり、あれがへエンブ
リオってやつなんかね？ 見ててけっこー飽きないじゃんよ。

個人的におもしろいなーって思ったのは、マジックハンドつぽいの
と竹馬つぽいのを使って戦ってたあたしと同じくらいのチビっ子
じゃんね。見てて危なっかしいくらいふらふらしてたけど、あれでも
一応武器なのかみよいーんって伸びてモンスター倒してた。

あんなんもへエンブリオなんだねーとか思いながら、狩場の外れ
に移動。あんま人集まってる所で戦っても、投げナイフが誤射した
らトラブルの素じゃんね。そんなくらいあたしだって気い使うっての
さ。

◇
そういうわけで獲物はっけーん、そのまま戦闘開始じゃんよ。

◇
で、終了。所感はというと、まあザコ敵だよなって感じ。

練習で事前にAGIとDEXは上げてきたし、いきなり戦闘突入し
てったプレイヤーとは違ってかなり余裕を持って対処できたってと
こかなー。

投げナイフも割りと百発百中だったしね。いや百発も無いし全部
急所狙いとかは無理だったけどさ、とりあえず当たればセーフの判定
だけ。

まーでも投擲武器ってちよい不便ね。遠距離攻撃できるのはいい
けど投げたら拾いにいかないといけないし。連戦になると手持ちが
無くなってちよこつと危なかったりしたしね。

それに投げたのを見失ったりして必ずしも拾えるわけじゃないし、
やっぱ消耗品使うのはめんどいなーって思ってたら、ついに来ました

よ孵化の時が。

あたしの左手に埋まった卵型の宝石が消えて、代わりに”枯れた亡者”っぽい紋章が現れて——それだけ？

武器とかモンスターがぶわーって出るんじゃないかと、紋章が刻まれて終わりじゃんよ。こういうときはステータスだあね。

えーと、なにに？ ……あー、なーるーほーどーねー。こりや確かに腐らないけど、ある意味腐ってるっていうか、我ながら変なヘンブリオ〜じゃんね。

あたしの物臭っぽい性格がちよこつと出てる感じがするじゃんよ。まあでも確かにこりや便利だわ、これなら武器も要らないし戦闘用ジョブにわざわざ切り替える必要も無いじゃんね。

つつてもあれか、MPは食うからペース配分はちよいちよい考えないとか。特性的にそうそう息切れはしないだろうけど、あとはどれくらいの効果なのかを見てみないといけないじゃんね。

とりあえず今は消耗無いし、もうちよい雑魚狩り続けてみつかー。

◇

結論。まーそこそこ時間掛ければいけんじゃね？ つつてもこれ性質的にタイムマンじゃ効率悪いじゃんね、もつと湧きが多いとこじゃないと勿体無い気がする。

んー……いけつかない？ 当たらないやどうってことないし、この辺の敵見た感じ、相当油断してなきや当たらないっしょ。

つーわけでもうちよい離れたとこまで移動だ移動ー。

◇

結論二度目。ま、あたしならいけんね。包囲されたときはちよい焦ったけど、避けまくってたらどーでもなったわ。

一回だけ格段に強い中ボスっぽいのが出てきたけど、運良くそいつは鈍足だったからダツシユで逃げきれたわ。

何十匹か倒したおかげでレベルも一気に上がったし、これならジョブレベルのカンストはすぐじゃんね。スキルレベルは上がんなかったから練習しなきゃだけど。

んー……スキルレベルとジョブレベルは同じタイミングでカンス

トさせるほうが効率良いじゃんね。

練習と狩りを上手いことペース配分して、本番までに仕上げときたいところかなー。本番終わったら転職して他のジョブ上げられたらいいじゃんね。

◇ どういうジョブがあんのか掲示板覗いてみつかー。

◇ 一座に戻ってだんちよーに報告したらすんげー驚かれた。

んで狩場から外れんなってまたゲンコツもらっちゃった。どうやら心配かけちゃったみたいじゃんね、ここは素直に謝るが吉ってことでごめんねつつつといたよ。

「これだから不死身のへマスターは……」って呆れてたけど、いやー悪いね。命が一つしかないティアンと違って何度でもリトライできるへマスターって、やっぱめっちゃ理不尽じゃんね。チートだチート。公式仕様だから違うケド。

なんだかんだ言いながらまだ面倒見てくれてるだんちよーって、実は相当お人好しじゃんね。ぶっちゃけ都合良すぎて逆に心配なるわ、詐欺られとかしないですよ？

とりま今日のところはログアウトログアウト、風呂入ってもう寝なきや。

◇◇◇

「ふいーお風呂ごちそーさん。やっぱあっちゃんとこちよー広くてきもちーね」

「ひとりだと広すぎてさみしいから、よかった」

「ベッドもふかふかでさいこーじゃんね。で、どうだった？」

「ん、順調……ともだちも増えた。けど、パーティ枠がもういっぱい」

「あー、六人までなんだっけ？ どーすんの？」

「もーまんたい。【カタログ】ゲットしたから……」

「モーマンタイとかあっちゃんネタ古すぎんじゃんね。【カタログ】って?。」

「【適職診断カタログ】……音声質問で上級職までなら就職条件がわかる」

「うっわめっちゃアドバンテージじゃん。けっこーレアなんじゃね？
それ」

「たぶん。周りで持つてる人いなかったし。……ちよっと難しめのクエストの報酬」

「どうやってクリアしたんだかねー。で、何にすんの？」

「【死霊騎士】。【大死霊】と迷ったけど、こっち。《部隊指揮》あるし。でも他の下級職就いて穴埋めもしとくべきかな……」

「もうスタイル決まってるのね、やるねーあっちゃん。あたしはどうしよっかなー……あ、あたしも【カタログ】でなにかわかんないかな？」

「音声案内だから……実際に使わないと難しい、かも？　ねこちゃん、言うところどころ変わるから代わりに訊くのむずかしい……」

「まーじかー。しゃーね、おとなしく【軽業師】上げとくかにやー」
「でも派生職でもなければ、大体のジョブはストレートに上級になれるみたいだから。そのまま上げてけばなれるかも？　ていうか、ねこちゃんとのこの一座に上級職のいないの？」

「……あ、そっか。メインの人とかふつーに考えてもつと上手いじゃんね。そっかそっか、つーかだんちよーが絶対知ってるじゃんよ。とーだいでもくらしーだわー」

「灯台下暗し……」

「どっちでもいいじゃんね。ところで明日創立記念日だけど、どうするの？」

「もち、デンドロ漬け……今日は泊まってく？　一緒にやろ」

「お風呂もご飯もいただいてこちとら寝泊まりしていく気満々じゃんね。今更家返されても困るっつーの。まま、おっけおっけ。宿題もバッチ終わらせたし、向こうで遊びまくるじゃんよ」

「んふ、たのしみ」

「つつても向こうじゃ国別だし、リアルだと並んで寝てるだけどきー。よく考えれば国決める前に聞いときゃよかったね」

「ねこちゃんそっかしいから」

「あっちゃんはのんびりしすぎじゃんね。とりまおやすみー」

「おやすみ……」

やっぱりこのベッドは最高じゃんね。

うちのせんべーぶとんとは段違いじゃんよ。

初めての強敵とパーティープレイじゃんよ

□【軽業師】???

今日は創立記念日で金曜日。明日明後日は土日つまり三連休だから、絶好のデンドロ日和じゃんね。これがあるからあたしもだんちよーのクエストを受けれたんだし。

ふかふかのベッドで寝起きして、朝からちよー美味しいご飯も食べれて、最高のコンディションでログインログイン。

向こうで遊んでる間リアルの身体に負担をかけないよう、すんげー寝心地のいい安楽椅子も用意してもらって、マジであっちゃん超セレブだわ。

これじゃあウチ戻ったあとが辛いじゃんね。贅沢覚えちゃったらあたしってば我慢できつかなー。

今日明日とお泊り許可ももらったし、日曜家帰ったらあたしもセレブの仲間入りかもね。……ムリカナー。

◇◇◇

つーわけで団員用天幕の中にログイン。もうとつくに他の皆は練習なり準備なりに出払ってて、なんか遠足に遅れたみたいでちよつと寂しいじゃんね。

だんちよーも今は舞台で音頭を取ってるみたいだから、絶賛やることなくて宙ぶらりんだわ。遅れて練習んところに顔出すのもなんだかなーって感じだし、ここは外で狩りして時間潰すかねー。

本番は明日だから下手にログアウトしとかないとダメだし、結構難儀じゃんね。

事務方に確認したら夜には終わるらしいから、それまで外で頑張るじゃんよ。

◇

そゆわけでこないだの狩場に到着ー。

龍都周辺は相変わらず初心者へマスターでござった返していたけど、前にあたしがいたところは脱初心者級なので人の数はぐつと減ってんねやつぱ。

あたしとしては好都合じゃんよ。だってあたしのへエンブリオ、けっこー範囲広くて巻き込みやすいし。他のプレイヤー巻き込みやってPKって思われたら面倒じゃんね。

そんなこんなで本日の狩りを開始しましよーかいね。

……んー、いいね。あたしのへエンブリオ、ってば超便利、武器要らずってのがやっぱデカいね。

非戦闘系の【軽業師】だけど、AGIのおかげで回避はしやすいから、案外シナジーしてるのかも。

ただまー敵から付かず離れずの位置を維持しないとイケないのと、単体でつえー奴相手だとちよい厳しいところは難点じゃんね。ここは今後の成長次第ってところかな。

あっちゃんはどういうビルドにすんのか決めてるみたいだけど、あたしはその辺全然だかんー。【軽業師】は思ったより楽しいから続けてるけど、これをメインにするかってのはちよつと悩ましいところじゃんね。

つつても今更武器持って殴るのもめんどいし必要も無いし、魔法ぶっぱするのも戦闘距離が噛み合わないからこれも微妙。遠隔武器も前後の準備がめんどいからやっぱ避けたいよね。

狙い所としては【拳士】系統かなー。あっちゃんこつちや調べてみた感じ、この辺がいろいろ噛み合うかもだけど。でも【軽業師】の修行とそつちの修行で二足のわらじ履けっかなー。

と、そんなことを考えながら身体動かしてたらモンスターが死んだ。うん上出来上出来。

HPもSPも消耗無し、MPはプラマイして一割減ったつてところかな。つつてもSPは攻撃系スキルが無いから使われねーんだけど。

散らばったドロップアイテムを拾いながら、ステータス画面を開いてリザルトを確認する。

つとお……どうやら進化も果たしてたっぽいね、これで第二形態か。あたしのはTYPE：テリトリーだから見た目変わんないけど、新しいスキルが追加されてんじゃんね。

……わーお、お誂え向きなスキルじゃんよ。これなら単体相手でも

良さげかなー。つっても消費激しいから乱用厳禁だけど、使い所間違えなきやちよー便利じゃんね。

夜まではまだまだ時間あるし、これの検証も終わらしとくかな。

◇

あれから小一時間程雑魚を狩り続けてたら、都合良くこないだ逃げ帰った中ボスっぽいのが出てきた。

クマっぽい大型肉食獣の頭上には「デミドラグベアー【亜竜狂熊】」のネーム。この亜竜ってのはなんじやろね？ 見た目はまんまクマっぽいけど、亜竜ってことはドラゴンの亜種か、下位種ってこと？ でもどう見てもドラゴンの分類じゃねーよねこれ。

つかでけーなコイツやっぱ。リアルクマなんて動物園でしか見たことねーけど、これがゲームじゃなきやチビって腰抜かすこと請け合いいじゃんね。

とりまいけないことはないっしょ、昨日見た動きのままなら今のステじゃ十分っぽいし。

もしダメだったらそんなときはそんなときじゃんね。別にデスペナくらいゲームじゃ普通よふつー。一座にメーワクかけちゃうのは仕方ないけど、向こうの理解に甘えさせてもらおうじゃん。

とにかくはあれだね、敵の攻撃には当たらずに削りきるまで生き延びるのが目標だね。乱入もありえるから周囲にも気を配っておかないとなのがちよつとめんどくさいけど、まあいけんじゃんね。

つーわけでスキル起動。手元がぼやーって光って力が集中するの分かる。これを敵にぶつけるつーか、タツチさえすれば効果は出んだけど……やっぱ猛獣相手だとちよつとビビるじゃんね。まあやるけど。

クマつーのはこの図体で案外素早くて、単純な身体能力なら頭以外全部が全部人間以上なんだけど、お生憎様こゝはゲームだかんね。AGIに特化したあたしのステなら余裕で捉えられるし対処できんよ。

つーかりアルと比べてもはつきりくつきり見えるあたり、何かしら補正掛かってんのかね？ 単純に素早く動けるってよりは、処理のギ

アが何段階か上がってく感じじゃんね。

クマの両腕から繰り出される殴打やなぎ払いを掻い潜って、殴りつけると共にスキル発動。……うん、やっぱあたしの素手じゃ物理ダメージは通んないわな。クマはリアルクマ以上に筋肉の塊っぽいし、あたしのSTRじゃクマのENDを突破できんわ。クリってもカスダメかノーダメってとこかな。

でもスキルの方はバツチリ効果出てんね。敵のHPとSPが削れてるんが分かるわ。でも一瞬触れるだけじゃそんな大したダメージでもないやね、てことは最低数秒触り続けるのがベストか。

……クマ相手にタツチ継続かー、難易度たけーじゃんねそれ。まあでもやるっきゃないか。

今のスキルとは別に第一のスキルも同時展開。さすがに併用するとMPの消費激しいじゃんね。これが枯渴したらあたしの負けだし、かなり綱渡りなチキンレースだこと。

目算では……んー、マジで殺るか殺られるかっぽいじゃんね。でもこれで勝つたらあつちゃんに自慢できるし、はりきろつと。

◇

んー、さすがにしんどかいな。敵の攻撃がじゃなくて、時間掛かりすぎて意味で。

今んとこクマの攻撃は全身使った肉体技オンリー。ときどき地面抉り飛ばして土塊ぶち込んでくることあるけど、狙いも甘いし数もバラバラ。身軽なあたしにとっては楽な攻撃じゃんね。

これが重装備なら話は変わって、馬鹿高いSTRで防御力とかぶち抜いてきてジリ貧になるんだろーけど、あたしの身軽さなら万一掠つても自分から飛び退けば浅い擦り傷で済むってとこだし。

【軽業師】の代表的な固有スキル《軽業》は、スキルレベルに応じた分だけあたしの自重を軽減するから、【軽業師】で伸ばせる最大の五レベルの今だと軽減率は三〇%。抵抗のない水中を泳いでるような感じだ。

そこへ更に《アクロバット》と《重心操作》の効果。前者はいろんな姿勢・体勢から正確に身体を動かすスキルで、後者は文字通りあた

じやんよ。これで五感の一つが封じられたせいで、アドバンテージがいくつか持つてかれたか。

んで【恐怖】は……こつちも中々わかりやすいじゃんね。つまりはブルって動けなくなるってことか。ランダムに動きが止まるせいでこつちのパフォーマンスが崩れるし、回避行動が安定しないじやんよ。

ステ差でギリギリ躲すことができたけど、これじゃあさつきまでみたいに連撃食らわせ続けるワケにもいかねーか。やつべーなあ、こりやマジでピンチじやんよ。

逃げっかな……耳聞こえなくなったのは痛手だけど、まだ五体満足だし。所持金で【ポーション】買えば治せるだろうし、ここは……ッ、しくった！

『GUOOOOOO……』

「いっ——たくなえけどガツンと来たじやんよ……!」

ちらりと退路に目を向けた瞬間、全身を強く打つ衝撃に己の失態を悟る。

耳が聞こえなくなったせいで抉り飛ばされた土塊の音が聞こえず、幾らかモロに貰っちゃったじやんよ。

幸い距離は取ってあったし、散弾みたいな軌道のおかげで全弾食らわずにはいられたけど、それでもあたしのHPはレッドゾーンと真ん中。もう一度同じのを食らえば即デスペナ。それでもうクマから目を離すわけにはいかなかったってわけだ。

「あーマジジーなあこれ……ここで死んだらだんちよーに顔向けできねーじやんよ」

別にあたしが死ぬのはいいけど、わざわざあたしを舞台に抜擢してくれただんちよーとの約束を裏切ってしまうのは勘弁じやんね。

デンドロのデスペナは現実時間で二四時間のログイン制限。つまりこつちで三日間は存在できなくなるってやつだし。そうなる tomorrow 日に控えてる本番には完全に間に合わなくなる。

そうなったらさすがのあたしもだんちよーや他の一座の皆に顔向けできねーし。あたしってばデンドロ世界的に超特別待遇なヘマス

ターだから、普段の練習は好き放題しても成果だけは確実にしないと示しがつかねーじゃんね。

あたしにだって恥って概念はあるじゃんよ。この場合の恥はだんちよーとの約束を裏切ってしまうことだ。つまりあたしは五体満足でこの場を凌ぎ、明日に備えて英気を養う必要がある。

だったらやるしかないじゃんね。

正直すっげーしんどいけど、ものごつつ集中すれば——お？

『IGYAAAAAAAAAAAAAAAA!!?』

「誰だかしんねーけど助かるじゃんね!!」

柄にもなく覚悟を決めようとした瞬間、遠くから伸びてきた手がクマの額に【符】を貼り付け、それがボンツと爆発した。

思いがけない爆風と熱風にクマは堪らず悲鳴を上げ、焼け焦げた眉間と熱に灼かれた両眼を庇って暴れ回る。

その隙に手に纏わせた力で連撃を叩き込み出来る限りのHPを削ると、そのまま飛び退いて謎の助っ人に振り向いた。

「……?」

「わっり、今耳潰されて音聞こえねーんだわ。とりま助っ人ってことでOK?」

そいつはいつぞやにも見た竹馬少女だった。

部分部分を初期装備から卒業した装いの上になげー手足を装着したそいつは、何枚かの【符】を握って戦闘態勢に入っている。

この【符】は確か、【道士】とかいうジョブの特徴だっけね? 初日で歩き回ってるのときに見た覚えがあるじゃんよ。

「——!」

「おっけおっけ、じゃあ助けてもらおうじゃんよ。これ借りってことにならせてもらおうわ」

表情や雰囲気から了承を得られたと判断して、臨時パーティーを組んで対クマ戦に臨む。

クマも不意打ちの爆破から立ち直って、怒りに満ちた眼をこっちに向けていた。まさに怒り心頭ってやつじゃんよ。

つってもそれはこつちも同じことだけど？ あたしから喧嘩売つ
といて逆恨みだろーけどそんな関係ねーし。やられた分はしつか
りやり返すのがあたしの信条じゃんよ。つーわけで今からお前ぶつ
ころ確定な。

合図は要らない。どうせこの場限りの即席パーティーだし、互いの
ステータスを知りもしないのに連携なんて組めるわけないじゃんね。
しかもあたしは口頭でのやり取りも今はできないし。つまりはス
タンドプレーから生じるチームワークに期待ってことで！

先手を切ったのは竹馬少女の伸びる手だった。両腕とも伸び縮み
するそれは、片方に【符】を、片方を指を広げるように展開してクマ
に迫る。

その速さは中々のもんで、しかもその指先はそこらの初期装備より
ずっと斬れ味の良さそうな刃物だ。それが高速でクマを撫でれば、た
ちまちその部位はスパツといく。

片方の【符】も大したもので、さっきの不意打ちの威力を覚えてい
るクマはそれが貼り付けられるのを避けようと大げさに動いて、いま
で以上に隙をさらけ出している。なにせ万が一爆破に巻き込まれれ
ば大ダメージは不可避、文字通り見せ札としても切り札としても効果
覲面なイヤラシー牽制じゃんね。

あたしもその隙を突いて駆け出す。

一言勝手に断って、伸びる手に便乗して一気に肉薄。軽減されたあ
たしの体重なら大した負担にもならないのは把握済み、竹馬少女は一
瞬びつくりしてたけどこつちの意図を察してそのまま相乗りを許し
てくれた。

それどころか足場を作ってくれるように上手いこと両腕を配置ま
でしてくれて、クマを取り囲む天地無用の両腕はそのままあたしの足
場になる。

つか竹馬少女相当やるじゃんね、これならあたしも安心して後ろを
任せられるってもんじゃないよ。

『GUDU?！』

「おーっすさつきぶり。今からお前ぶつちめるんでそこんどこヨロシ

クじゃんよ」

既に結界は解いている。竹馬少女との共闘を決めた瞬間にはね。じゃないとあつちまで巻き込んだじゃうし、その辺無差別なのがあたしのへエンブリオの難点だよな」。

でも第二のスキルは違う。あたしの両手に凝縮されて展開されるこれは、あたしが触れた相手だけを蝕み、圧縮された分より強力に敵の命を奪う。

そんなかわり広範囲から奪う結界と比べて、対象数の違いから燃費は悪くなつてんだけどね。第一と第二を併用すれば減りも早い分回復も早いんだけど、今はそれができないから収支はやや支出寄り。だけどそれも、やりようはあるじゃんね。

このスキルの燃費が悪いのは、第一のと違って当てなきゃ効果が出ないからだ。つまり攻撃の間が空いた分だけ無駄な消費が出るわけだから、要はその改善してやればいいじゃんね。

つまりどうするのかって？　んなの簡単じゃんよ、当てた瞬間だけ発動してやればいいのさ。

竹馬少女の腕から飛び降り肉薄、そのまま滑るようにしてクマの股座を潜り抜け、その途中内腿を撫でる間だけスキルを瞬時展開。

クマが気付いてこちらに攻撃を加えようとした瞬間手を離すと同時にスキル終了。地面スレスレを駆け抜けるあたしを追撃しようとする身を屈めたクマを竹馬少女の片腕が引き裂き、もう一方で死角に【符】を貼り付ける。

一方であたしはクマと竹馬少女を繋ぐ片腕を駆け上つて一時退避、効果範囲から逃れた瞬間【符】が発動してクマを呑み込んだ。

「ヒューッ、やるじゃんねえあんだ。すっげークールでクレバーじゃねーの」

唸る腕の上でそう言えば、竹馬少女はニヒルな笑みを浮かべて晒つた。こいつ、エンターテイナーの素質あるじゃんね。

というのも貼り付けた【符】はクマだけじゃなく、爆破にたたらを踏んだクマの通る道筋にも同様の【符】がばら撒かれていた。

ちよつとした地雷原じゃんね。それかもしくはボン・オーマン。上

手いことクマの動きを読み切って、爆破にたじろぐと更なる爆破がクマを襲う。

文字通り地雷の上でタップダンスを踊るようなクマの姿は、なかなかどうして胸が空くような爽快感じゃんね。

そして爆破と土煙の嵐が収まり、クマは――

「つってもさすがのタフネスじゃんね。やっぱ格上だわ」

「GU、GUOOOOOO……」

クマは、あろうことか未だ健在。あちこち焼け焦げ切り傷をこさえていても、頑強極まる肉体は未だ五体を満足に残していた。

HPは残り二割未満。だけど手負いの獣は恐ろしいという格言の通りに、クマはまだまだやる気つてとこで。

「――けどもう詰みじゃんよ。腹、減ってきたろ？」

立ち上がろうとして、できずにその場へ倒れ込んだ。

倒れ伏すクマの簡易ステータスに表示されたのは【飢餓】の状態異常。極限まで深刻化した空腹は全身の活力を奪い、万全のパフォーマンスを許さない。

これがあたしのへエンブリオ、【奪命神咒 ヒダルガミ】の真骨頂。エネルギードレインを特性とするあたしのへエンブリオは形が無いだけに一切の物理防護を無視し、あたしの領域に留まるだけでその生命を奪われる。

つってもまだ第二形態だから減りはすっぱー遅いんだけどね！

敵が強けりや余計に遅いし。だけど上手く決まる限りはほとんど消耗無しに敵を倒せるのはさすがあたしのへエンブリオじゃんね。

んふふ、なんか今のあたし強キャラっぽくね？ かなりOSR値が高まつてるのがわかるじゃんよ。

個人的には竹馬少女のOSR値もなかなかのもんだと思うけどね。特に何も言わず助太刀してクレバーな立ち回りを演じてくれたところがサイコーじゃんね。って何も言わないってか聞こえないのはあたしの耳が潰れてるせいだったわ。

「んじゃ竹馬少女ちゃん、トドメよろしくじゃんよ」

「■■■■」

今度は何言ってるのかわかった。「あいよ」ってなんか歴戦の相棒っぽいじゃんね。まあお互いこれが初対面なんだケド。

竹馬少女は、今度は両手に複数枚の【符】を持つと、腕を伸ばしてクマの全身にそれを貼り付けた。

極度の【飢餓】で全身の力を奪われたクマは、それを避けるだけの体力が残されておらず——そのまま一斉起動した【符】に吞まれ爆葬された。

初めてのフレンドじゃんよ

□【軽業師】???

「うーっし撃破完了！ ドロップも落ちてるし死んでんじゃんね。竹馬ちゃんおっおっ」

「あ、ドロップはそっちでOKじゃんよ。助けてもらった礼だしね、こんくらいじゃ返しきれってないけど手持ちに良いの無いから今は勘弁してほしいじゃんよ」

「あ、それとも龍都戻って飯食う？ もう夜だし晩飯奢るじゃんね、遠慮はなしなさい」

「つかあんた名前は？ ってあたし今耳聞こえねーじゃんよ。ええとパーティー組んでりや簡易ステータスで見れんだっけ？」

いきなりおでこに【符】を貼られたじゃんよ。さすがにこのまま爆殺は勘弁じゃんね。

「うるせーよ。んな大声出さなくても聞こえてるっつーの」

「あれ、聞こえてる？ なんで？」

「回復用の【符】だけ、ありがたく受け取れ。大した状態異常でもねーし、これで治んだろ」

「うっわまた借りが一つできちゃったんじゃんね。こんなにあたしに貸し作って、さてはあたしの身体が目的!？」

「自意識過剰ウゼエ。単にこのままハイサヨナラじゃ失礼ってだけだぜ」

「わお、意外にも良い子じゃんよ。とりま助かったわ、改めてサンキューね」

「別にいいぜ、ばっちり飯奢ってもらおうしな」

「おっけおっけ、んじやあ戻る？」

「だな、今日のところは狩りは仕舞いだ」

クマのドロップアイテムを拾って帰路へつく。

竹馬少女の脚は長いからコンパス違って歩幅が合わねーじゃんね。あたしも小走りになりながら横に並ぶ。

「んであんたは？ 命の恩人の名前も知らないなんてあたしの名が廃

るじゃんよ」

「命つつつてもこつちで三日ログインできなくなるだけじゃん、大袈裟だろ」

「明日クエの本番あるじゃんよ、デスペナつてたら失敗だし」

「だったらボスモンスターなんて相手にしてんじゃねーよ、責任持てよ」

「まさかのマジレス、これにはあたしも苦笑いじゃんよ」

ぐだぐだ言い合いながら歩を進める。

こいつ、けっこー話してて面白いじゃんね。容赦無いところが最高。

「んで名前は？ あ、あたしは黒猫つての」

「黒猫？ ハイマオ チャイニーズか？ ちなみにオレは迅羽だ」

「迅羽？ しんう そつちはジャパニーズ？ あたしはこれでも日本人じゃんよ」

「まじか、オレはチャイニーズだな。読みは設定すんの忘れてたんだよ、気にすんな」

「おつけー気にしない。あ、フレ登録いい？ 同年代は珍しいし、せつかくだしね」

「いいぜ別に。袖触れ合うも他生の縁つてそつちの諺だっけか」

「むずかしー言葉知ってんね、さすが優等生」

「これでもヒール志望だつての」
「ビジュアル的に似合いそうじゃんね。怪人テナガアシナガって感じで」

「ドンピシャだな、オレの〈エンブリオ〉がテナガアシナガだし」

「まじか、あたし冴えてんね。正答報酬は？」

「ねーよんなもん」

ゲラゲラ笑いながらの帰り道。うん、あたしこいつのことかなり好きじゃんね。

同年代つてのものもあるけど、互いに遠慮しないのが最高にウマが合うじゃんよ。

「言い当てちゃったからあたしも言うけど、うちの〈エンブリオ〉はヒダルガミつてんだ。迅羽の〈エンブリオ〉と同じ妖怪モチーフじゃん

ね」

「ほー、日本のヨーカイなんてマイナー繋がりはおもしろいな」

「ちなみにどっちも人を取って食う悪い妖怪じゃんね、さすがヒール」
「ゲアハハハハ、そりゃいいいな！ そんなくらいインパクトあるほうが箔が付くつてもんだぜー！」

「いい趣味してんねおたく。だけどあたしもそういうのキライじゃないぜ」

あーだこーだ言いながら、互いのジョブについても話してみる。

向こうはさっきのバトルで見た通り、黄河じゃメジャーな【道士】だった。「無言で【符】を貼り付けて始末するのはスマートだろ？」ってことだけど、超わかるじゃんよ。実際あのバトルでもすげーかっこよかつたし、特に終盤の地雷原なんて最高にクールだったじゃんね。

一方であたしが【軽業師】だったことを伝えると、「お前頭おかしいんじゃない？」って言われたけど、それこそあたしだってクールじゃんね？ 戦闘向きじゃないジョブで強敵相手に立ち回るって、一昔前のラノベでめっちゃ流行ってたってパパが言ってたし。まあピンチくらったのは片手落ちだから、ここは甘んじて迅羽の言葉を受け止めるケド。

そんなこんなで龍都に到着、そのまま適当な料理屋に流れ込む。

迅羽のリクエストは特に無い（子供じゃないから好き嫌いなんてしないらしい）から、とりあえず手持ちで腹一杯食えそうなどこ選んだけど、こういうとき役立つのが鼻じゃんね。

ここらで一番いい匂い漂わせてた店に入ると、中華料理のいい匂いがあたしのお腹を刺激する。もう匂いだけで白米食えんじゃんね、あたしの期待がMAXボルテージってわけよ。

「ところで迅羽ってばいつの間にかちっちゃくなってるけどなんで？」

「どこの世界に竹馬乗って飯食うやつがいるんだよ。竹馬じゃねーけど。あと普通に邪魔だろ、常識で考えろよ」

「うちならやりそうだわー。ていうかあたし竹馬乗ってご飯食ったことあるわ」

【軽業師】の芸人と一緒にすんじゃねーよ、こちとら【道士】だつての」

「打てば響くようなツツコミのキレ。あたしと組んで漫才やってみる？」

「ヒール志望だつってんだろ、なんでそっちの舞台立つんだよ」

「だよねー。あ、そっちのメニュー取って」

「あいよ」

ちなみにお店に人だけど、子供だけのお客と最初は訝しがられたけど、あたしらの左手の紋章を見て「マスター」だつて察すると、そのまま笑顔で通してくれた。

「マスター」が見た目や年齢で判別できないイレギュラーな存在だつてのは周知されてるから、こういうところで年齢認証パスできるのはありがたいことじゃね。

まあえっちはいのは国籍で許可される年齢にならないと弾かれるらしいけど。さすがのあたしもえっちははまだ早いじゃね。

「とりあえずこのページのやつ一人前お願いね。ドリンクはオレンジジュースで」

「うわ、初めて見たそんな頼み方するやつ」

「実はちよっぴり憧れてたじゃね。まあお金はあるしへーきへーき」

「いや、オレがそんな食えねえんだけど」

「あたしが食えるからへーきへーき。こう見えて大食いじゃね。身体動かす方だからいっぱい食わないと保たねえじゃんよ」

「一応言っとくけど残すなよ、好き嫌いすんじゃねーぞ」

「うちのママと同じこと言ってるね」

「そりやお前のマママンが正しいだろ、人としての常識だぜ」

「またもマジレス。さすが優等生」

「ヒール志望だつってんだろ、いい加減裂くぞおめー」

「そりや勘弁じゃね。っと、きたきた」

あーだこーだ言つてたら先にドリンクが届いた。

リアルとは違う果汁一〇〇%の天然ジュースじゃね。つつても

あれ別に一〇〇%だからって必ずしも美味しいってわけじゃないらしいけど。いくら水で割ると美味しいって鉄〇のジャンで大谷せんせーが言ってた。

「んじやま初のボス戦勝利を祝ってかんぱーい」

「あいよ、おつかれ」

なみなみ注がれたジュースを一息に飲み干す。この一杯のために生きてんじやんね。

そして飲み干して駄弁ってるうちに出来上がりの早い前菜がテーブルに並べられ、各々取り分けて箸でつつく。

んー、ンまい！ 味が濃くて労働者向けじゃんね。前菜からこのボリュームならメインはどんだけって感じで期待が高まるじゃんよ。

そして意外にも迅羽の箸使いってばめつちや綺麗じゃんね。こいつヒールヒール言ってるクセに育ちいいよな。

「そいやさ、なんで迅羽ってばあんなトコにいたわけ？ まさかあたしの後を尾けてたわけじゃないっしょ？」

「ンなわけねーだろ、単純に狩場が重なっただけだよ。こないだへエンブリオの段階も上がって、【道士】のレベルもカンスト近かったしな。

試しに寄ってみたのさ」

「ふーん、なかなかペース早いじゃんね。大体あたしと同じくらいかー、戦闘職な分そっちのほうがそら適正だわな」

「むしろなんで【軽業師】がいたんだよ、おとなしく芸やってろよ。馬鹿かよ、死ねよ」

「助けてくれたのそっちなくせに言うじゃんね。あと死んでもゲームだから治らないしどうしようもねーな！」

「違えねえな、ゲエハハハハハ」

「ところでその笑い声もヒールっぽく？」

「それっぽいだろ？」

「んー……笑い方はいいけど声がミスマッチじゃんね。なんつーか悪役に憧れてる感丸出し？」

「まじか。どうにかして声変えらんねーかな……」

「そこまでやるってよっぽどかよ、こだわんねーチミイ」

「やるからにはトコトンだろ」

言つてたらメインが来た。肉やら魚やら野菜やら、ホカホカあつたけー中華料理の数々がテーブルに並ぶ。

北京料理に広東料理、四川料理に江南料理、リアルでいう中国各地の料理っぽいのがズラリと並ぶ光景は圧巻の一言。

やっぱ黄河つて中華イメージじゃんね。一つの店でそれぞれ趣の違う料理が楽しめるつてところは流石だけどサ。

「おい、肉と野菜ばつか取つてねーで魚も食えよ」

「魚だけは勘弁してほしいじゃんよ。他のはちゃんと食うからさ」

「なら考えなしに頼んでんじゃねーよ。つたくしゃーねーな……それ寄越せ」

「あいよ。あ、おねーさんジュースおかわり二つ追加でー！」

迅羽が長箸で取り分けるのを他所に飲み干したジュースのおかわりを頼む。

待つてる間に料理を突けば、たちまち広がる味わいに頬が緩んで思わず舌鼓を打った。

「お、こりや美味しいな。リアルの外食よりよっぽど美味え」

「それな。こつちの料理つて基本めちやくちや美味しいじゃんね」

「自炊できねえ連中には毒だな。こつちで食つてもリアルは腹膨れねーし」

「ちなみに迅羽はご飯作れる？」

「ケーキも作れるぜ。てか普通に手伝いしてたら覚えんだろ」

「良い子か！ なら迅羽作る人であたし食べる人な」

「なにオレがお前に飯作るみたいになつてんだよ、作らねーよ」

「ちえー」

誰かとお喋りしながら外食なんて、パパママやあつちゃん以外とは久しぶりだけど、こいつ相手だとなんか楽しいね。

なんてーかちよつとお姉ちゃんっぽいじゃんね。いたことないからよくわかんねーけど。

「迅羽おねーちゃん、そつちの取つて♪」

「うわキメエ、さぶいぼ立った」

「ひつでーの、こんな美少女相手に辛辣じゃんね」

「自分で美少女とか言うやつは心が醜いだろ、常識的に考えて」

「まじか……自他共に認めててもダメかー」

「自意識過剰か。てかはや食べ、量多すぎて冷めちまうだろうが」

「ほいほい。魚は掃けた？」

「食った食った。これ以上はキツイからお前頑張れ」

「まじか。おデブちゃんになっちゃうじゃんよ」

ともあれ食べる食べる。んー、やっぱ最高じゃんね料理。

個人的にデンドロやって一番の収穫は料理の美味さじゃんね。五感再現のあるべき姿って感じで、ぶっちゃけ美味しい料理食えるだけでゲームとしての価値あるわ。

おまけにあたしの胃袋は無量大。……まあそれはウソだけど、美味しいものならいくらでも入るじゃんね。

あんまりにも美味すぎるものだから、三十分もする頃には頼んだやつ全部平らげた。

「ふいー食った食った、ごちそーさまじゃんね。この店は当たりだなー」

「よく食うなあお前、見ててこっちが腹膨れるわ」

「よく言われるじゃんね」

食事も終わったけど、すぐ出るのもなんか味気ないしお喋り再開。

つつても話すことと言えばデンドロ関連の話題ばかりで、無名のダークホースの圧倒的実力への賞賛が飛び交う飛び交う。

「こっちで何日か遊んでみてさ、やっぱ半端ねーじゃんねデンドロ」

「だなあ、事前情報も無かったから完全に不意打ちだな。今すっげー売れてるらしいぜ」

「まじか。となると転売とかめっちゃ出そうじゃんね。元手安いし入れ食いじゃんよ」

「みつともねえ話だぜまったく。他人の禪で商売なんて大の大人がやることじゃねーな」

「わお辛辣。でも完全同意じゃんよ。あたしは友達に誘われて買ったクチだけど、こればかりは感謝じゃんね」

「ん？ お前ダチいるのか？ なのにソロか」

「すれ違いで別の国所属になっちゃったんじゃんよ。あつちはレジエ
ンダリアで会おうにも会えねーし」

「うは、そりゃ遠いな。少なくとも下級のうちは無理だろ。砂漠越え
なんて金掛かるだろうし」

「向こうが来るか、こつちが行くかどつちが早いかって感じたねー」

ジュースを飲む。やっぱちゃんと事前に確認しときやよかった
なあとは思うけど、今はこつちで就いた【軽業師】も面白いし、結果
オーライだけど場合によりけりじゃんね。

んでやっぱ、第一陣プレイヤーは有利だわ。時間三倍速で一日の口
グインの有無がこつちでは三日の差になって、それだけで稼げる経験
値やこなせるクエストの数が大分変わるし。

運良く第一陣のハードを買えたあたしらはともかく、転売屋が出
回った今は入手経路も難しくなってるだろうし、現実時間で一週間か
一ヶ月か、あるいはそれ以上の差が出るじゃんね。

そうなるとこつち時間で一ヶ月単位の差が出るから、MMOでこの
プレイ時間の差はかなり絶望的だ。まあガチでやるつもりならだけ
ど。

「迅羽はどうすんの？ このゲーム続ける？」

「どうした、藪から棒に」

「いやさ、このゲームいろいろ完全再現なのはいいけどさ、その分ハ
ドじゃんよ。今回戦ったモンスターなんてクマだけ、クマ。リアル
じゃ幾つ命あっても足んねえじゃんよ」

「あー、確かに気になるやつは気になるだろうな。リアルすぎて怖
いって層は出てくるだろうし」

「じゃんね。リアルすぎるってこれ、ある意味ゲームとして破綻して
るしさ。矛盾してっけど」

「それは言ってるな。つまりアレか、ビビってやめちまわねーかって
言いてえのかお前は」

「極論を言えばそうかな？ で、どう？」

「舐めんな。少なくともオレは降りる気はねーよ。せつかくへエンブ

リオ♡なんておもしろえギミックもあるんだしな、やりたいことは何でもやるつもりさ」

「んー、かつこいいこと言うじゃんね。ま、あたしも同感だケド。少なくとも美味しい飯がある時点で何にも勝るって感じだし」

「食い意地張ってんな、筋金入りじゃねーの」

そりゃあね、食い意地は張ってるさ。じゃなきゃこんなへエンブリオ♡なんて出ねーだろうし。

なんつーか、へエンブリオ♡って不思議だし不気味だけど妙に納得できるのが謎じゃんね。

こんなへエンブリオ♡、あたしを知りでもしなきゃあ生まれるわけ無いし。

「ま、いいぜ。そういうことならオレとお前はライバルってことだな。今日はたまたま共闘したし一緒に飯食ったけど、仲良しこよしでやるつもりは毛頭ねえ」

「それ、後々味方になるパターンのセリフっぽくね？」

「言ってる。少なくともオレはやれるとこまでやるつもりだぜ。そうだな……とりあえず決闘にでも参加してみつかね」

「その心は？」

「闘技場こそヒールの本領だろ」

「そつちこそ筋金入りじゃんね」

言って、ゲラゲラ笑い合う。

でも決闘かー、あたしは多分やらないかな。なんとなくだけど。

でも迅羽ならビジュアルも映えるしうってつけじゃんね。怪人テナガアシナガのシルエットはイイ感じにロツクでパンクでヒールだし、派手だしな。

「んじや今日はお開きってことで、改めてありがとじゃんよ。達者でなー」

「おう、そつちこそ頑張れよ。精々有名になったらお前の舞台見てやんよ」

「えー、なにそれあたしに【軽業師】続けろってこと？」

「さあな、んじやあばよ」

席を立って会計を払って、店の前で別れの挨拶を交わす。

そして互いに言い合うと、迅羽は竹馬を伸ばして去っていった。うーん、やっぱ怪人だわ。

……思ったよりもお金減っちゃったじゃんね。さすがにメニューの全部はやりすぎたわ。

でも長年の夢を一つ叶えられて、ちよつぴり達成感。反省はあつても後悔は無いぜ。

さてと……それじゃあ一座に戻りましょうかね。

ボス倒して歩いて帰って、飯も食つてお喋りしてたらすっかり日も落ちて真っ暗じゃんよ。

明日は本番だし、今日はこっちで寝起きしないとなー。

◇◇◇

だんちよーに今日の戦果を報告したら、今までで一番でかいゲンコツもらった。

「死んだらどうするー」だって。あたしはへマスターだから心配ご無用じゃんよつつつたら、「そういうことじゃねえー」って同じところもひとつデカいの食らった。

だんちよーマジで容赦ねーじゃんね。着々とあたしへのゲンコツ記録更新中じゃんよ。

……今回はあたしが悪かったかな。

黄河伝説 ” 神童” 黒猫、軽業デビュー

□龍都宮前広場 〈黄龍雑技団〉天幕

龍都の朝は早く、朝霧も晴れぬ早朝から各種市場は陣幕を張り、商材を並べる。

黄河帝国首都の広場は数多くの露店でごった返し、古くから土地に根を張る大店もまたその活気に応じるようにして門戸を開いていく。

軒先を飾る数々の看板は魔法を伴って風を吹かせ、匂いを撒き、あるいは耳目を集めて誘い込む。

ここは龍都宮前の大広場。遠景に皇帝の座す王宮を臨む帝国の一つの顔。

その一角、一際異彩を放つ巨大な天幕に人々が代るがわる出入りし賑わいを見せていた。

その天幕は〈黄龍雑技団〉なる軽業師集団の本拠地。

号に”龍”の一字を関するそれは、この黄河において極めて重大な意義を伴う。

此処こそは黄河に起源を発する〔軽業師〕の一大名門。皇室も行幸する老舗雑技団の天幕であった。

団員達が忙しく舞台の用意に走り回るのを監督するのは一座の長、黄刃華。

その横に並んで同じく団員達を見守る、刃華とは打って変わって丸々とした体躯の老爺、大店の隠居王大人。

厳しい眼差しで一座を見張る刃華とは対照的に、王大人の眼差しは孫を見るが如き好々爺のそれである。

彼は物忙しさに駆け回る彼らの一挙手一投足がさも面白げとばかりに眼尻を垂れ下げ、鯰のような髭を扱いた。

「ほほほ、わかいもん動く姿はええのう。わしの枯れた肌が潤うようぢゃ」

「本音を言えば、王大人。このような舞台裏など客人方にはお見せしたくないのですがね」

「固いことを言うない、刃華や。未熟も練達も、併せて愉しむからこそ

の醍醐味ぢやて。あれらひよつこどもの中からいつ鷹が生まれるかと思えば、老い先短い余生の足しになるぢやろうての」

「お戯れを……」

この老爺、王大人。黄刃華とは彼が乳飲み子であった頃からの旧知であつた。

それというのも黄の祖父、先代【雑技王】黄刃鳥こそ王大人と苦楽を共にした竹馬の友であり、彼が起した〈黄龍雑技団〉は王大人にしてみれば親しい友の子も同然である。

ひいては彼の後を継ぎ、今代団長を担う刃華は王大人にとって孫も同じく、主客の垣根を越えて親しい間柄であつた。

最も、一座を預かる団長として一線を引く刃華にとり、彼のそうした優しき、あるいは馴れ馴れしきは、些か素直に受け取り難いものであつたが。

「ところでひよつこと言えば、最近になって新しい顔が加わつたという専らの噂ぢやの」

「耳の早いことで。まだ七日と経つてもおりませんが」

「伝承に曰しめる〈マスター〉ともなれば、誰もが平然とはおられぬのぢやて。突如として数多姿を現した〈マスター〉の存在。天下はまさに一大事ぢや」

「……ですな」

刃華は眉間に寄せる皺を深め、王大人は好々爺然とした——しかし変わらぬ眼力の目付きで一拍の間を置いた。

〈マスター〉——かつての三強時代、今なお”神”と崇拜される先々代龍帝と鎬を削つた【猫神】と同類の、この世ならざる超越者たちの出現に彼らテイアンの思うところは多い。

「酔狂にも【軽業師】の門戸を叩く者が現れたと聞いて、高官は興味を示しておつたよ。何故だか知らんが、彼らの多くは妙に戦いたがるからかう」

「あれがたまたま迷い込んできたとき、誘いをかけたのはこの私です。なぜだか妙に、勘が騒ぎましてね」

「ほう……御主の目に適つたのかの？」

「試しに動きを見ましたが……あれは逸材です。些か性格に難はありますがね、あれを本当の天稟と言うのでしよう」

そう称賛を口にする刃華の顔は、言葉とは裏腹にやや苦いものだった。

「しかしながら如何にもへマスターへらしいというのか、雲を掴むような女子おなじでしてな。常識が通用せず、難儀ばかりさせられます」

「ほう、ほう！　そうか、御主に手を焼かせるやんちゃぶりか！　ほほほ、それは愉しみぢやの。ええ、刃華や？」

「今日の前座を飾るのがそいつです。あとでご紹介いたし——」

「あつれー？　だんちよーさんがサボってお喋りしてんじやんね」

呟く刃華の言葉を遮って、頭上から降りかかる間の抜けた声が響いた。

見上げれば、巨大な天幕の遙か上の梁に脚を引つ掛け、髪を垂らして見下ろす少女の姿があった。

「——黒猫ヘイラネコ！　そんなところで何をしている!?　とつと降りてこい！」

「ちよつとした肩慣らしじやんね。よいしょ、つと」

目を剥いて怒鳴りつける刃華の檄を、柳に風と受け流して少女、黒猫は。

驚くほど軽い身のこなしで天井の梁を伝つてすると降りてくると、壁を蹴って宙返りを放ち、重さを感じさせぬ足取りで二人の前に立った。

「——どーよ？　これって百点じやんね！」

「本番でも無いのに命綱無しに危ないマネするんじやあない!!」

「いっつってええええええじゃんよ!」

得意げに胸を張る黒猫の脳天に、刃華の強烈な拳が突き立った。

名の通りまさしく猫の如き身のこなしで降り立った少女。その左手にはへマスターの証たる紋章が淡く光る。

王大人は、「これが噂のへマスターか」と理解し、そして一連の仕事で垣間見えた表情に、「成程、刃華が手を焼くわけだ」と得心した。その名の如く、猫の如き奔放さであった。真面目な人間ほど手を焼

かされる生物として、猫ほどに自由な命もあるまい。

しかしだからこそ、逸材であることがよく分かる少女であった。

「ほほほ、大した跳ねっ返りぢやの。こりや有望だわい、しつかり手綱を握っておくんぢやぞ？ え、刃華や」

「まったく見苦しいところを……申し訳ありません、これが先に言っていた新人、黒猫と申します」

「ん？ 誰じゃんねこのじーさん」

「お前は頭を下げんか馬鹿者!!」

「ぐええ」

いっそ無礼な程に物怖じしないこの態度。しかし老練した熟達たる王大人の勘気に触れるほどではない。

齢は、おそらくは十にも届いていないだろう。その幼さを思えば、小生意気も却って可愛げがあるというものだった。

「この御方は一座の後援者である王氏だ。我が一座にとっても賓客にあたる、くれぐれも失礼の無いようにするんだぞ」

「黒猫じゃんよ。ちよつと前からここで世話になってんだ。今日の前座はあたしが務めるから楽しみにしとくといいぜ!」

「その物言いが失礼だと言うのだ馬鹿者!!」

「ぐええっ!」

再びゲンコツ。痺れるような衝撃が脳天から爪先まで響き渡る。

頭を抱えて蹲る黒猫に、弟子の非礼を平身低頭詫びる刃華。

まるで親子のような二人のやりとりに、王大人は堪らず呵々大笑するのだった。

「まことに、まことに申し訳ありません王大人！ 甚だ無礼であるとは承知の上ですが、どうか物知らぬ童子のやること。何卒ご寛恕いただきたいたく……」

「ほほほ、よいよい。元より芸人は常道を敢えて踏み外してこそ、モノを言うは人格より技よ」

「はっ……」

「黒猫とやら、元気なのはよいが……」

大笑して、頬肉に細められていた両目の片方をぎよろりと剥いて

言った。

「——技あつてこそその芸の道じゃ。ゆめ忘れるでないぞ」
言い放った一言は、先までの好々爺然とした丸さとは無縁の、冷たく棘のあるものだった。

年季を積み重ねたがゆえの老獺が言の葉に乗せられて黒猫を射抜く。その一瞥だけで肝の冷える、氣迫の乗った一言だった。

刃華は直接向けられたのでもないのに顔を青くして低頭する。彼の人となりをしり、これが優しい忠告であることを察していても震え上がる思いだ。

彼にとつて王大人は、既に亡い肉親に代わり、まさしく父と言える存在である。その父に諭されるバツの悪さを噛み締めながら、無礼を働いた黒猫の頭を抑えて下げさせようとした。

しかし黒猫はその手をするりと逃れ、厳しい目を向ける王大人にきよとんとした目を返し、数瞬の後に悪戯っぽく笑った。

「あたしを見縊ってもらっちゃ困るじゃんね。精々驚かせてやろうじゃん」

三度、刃華の渾身の拳骨が脳天に直撃した。



結局その後は刃華の平謝りと懲りない黒猫の自由奔放に終わって、日が頂点に昇る頃には準備も整い、演劇の幕は上げられた。

舞台袖から壇上へと一座の長たる刃華が登り、この場へ参じた観客の皆々への謝辞を述べ、小気味よい口調で演目の名を並べ立てていく。

といつても集った客数はまばらであり、満員御礼には程遠い。年に数度の大舞台ならともかく、此度は次代を担う新星達のお披露目会とも言うべき中規模以下の取り組みだ。自然観客は余程に熱心なファンか、あるいは暇を持て余して何の気無しに暖簾を潜った浮遊客に限られる。

「御旧友の誼といえ、なにもこのような場までもご観覧なさらずとも

よかつたのでは？」

団長の口上を冷めた目で見やりながら、そう不満を口にしたのは王大人の付き人であった。

今や隠居となつて日々を悠々と過ごす王大人の身边を世話する身分であり、長年を共にしてきた壮年の男である。

齢は刃華と同じ頃であろう。そうであるが故に〈黄龍雑技団〉を数ある芸人集団の一つとしか見ておらず、その視線には隠しもしない侮りがあつた。

それも無理からぬことではある。

〈黄龍雑技団〉が真なる名門であつたのは今よりも遙か数十年の昔。先々代団長が現役であつた頃の話である。

あらゆる【軽業師】の頂点に立つ【雑技王】であり、その技の冴えを以て時の皇帝に”龍”の一字を冠することさえ許された黄刃烏氏が没した後、その跡目を継ぐ次なる【雑技王】は未だ現れず、今や〈黄龍雑技団〉の名は有象無象の中に埋没しつゝあつた。

口さがない者は”龍”の名を返上すべきではないか」とも嘯き、一座に、ひいては団長たる黄刃華を取り巻く状況は暗い。

かつての栄光を知らぬ彼としては、如何な友誼のためとはいえ落ち目の一座を後援し、あまつさえ直々に観覧にまで足を運ぶ主人の酔狂に思うところがあつた。

「他に有名どころはありませんよう。ましてや主役でもない新人どものお遊戯会など……」

「ほほほ、酔狂……気まぐれ……大いに結構！ 御主はまだ若いから分からぬだろうが、若き新芽に直接触れる瑞々しさはなかなかどうして、得も言えぬものぢやぞ？」

そう飄々と嘯く王大人の真意は、彼には悟れない。それがまた悔しくもあり、彼の関心を買う一座への敵愾心にもなつていた。

普段は忠犬さながらの誠実を見せる彼は、そうであるがゆえに偏見が拭えない。それを自覚できるのがまた殊更に憎らしかつた。

そんな不平不満をこれ以上は溢さず呑み込んで、いよいよ舞台の幕が上がる。

鳴り響く囃子の音と共に刃華は舞台袖へと引つ込み、前座の開始を高らかに告げた。

告げて、しゃんと鈴を鳴らして舞い降りたのは、頭上に腕を寄せた少女であった。

派手な彩色の道服を着こなし、長々と垂らした袖に裾を引き摺って跳ね回る少女は、多くの聴衆の色眼鏡を裏切つてしなやかに、水の流れるが如く流麗に淀みなく五体を舞わす。

雑技に舞は付き物であるが、それは【踊子】の演じるそれとは違い、単に目を楽しませるための振り付けの延長に過ぎない。熟達した【踊子】が漂わす惹き付けるような魅了は存在し得ないが、しかしその女兒の魅せる”舞”は、早くも眠たげだった観客が目を見張つて食い入る程に美しく、蠱惑的であった。

「ほう……」

王大人の嘆息が付き人に届いた。同じく感嘆のため息が小さくあちこちから漏れ聞こえる。

始まつて僅か十分にも満たない短い舞で、早くも虜となつたかのようを目を細める者もいる。

しゃん、しゃんと鈴の音に併せて足を弾ませ、不意打つように舞台袖から飛び出した珠を一瞥もせず受け取つて、一つ、二つ、三つ——十もの珠を軽々と手の上で遊ばせた。

それらがなぞる複雑な軌道にも一瞥をくれず、女兒の表情は終始楽しげでにこやかに、自らに注視する観客の顔ひとつひとつを覗き込み、猫のような目を細めて笑う。

「……これが前座か？」

堪らず唾然と驚愕を口にしたのは付き人であった。

隣に座る王大人もまた、常の余裕に満ちた笑みを崩し、身を乗り出して観ていた。

舞い遊び、跳ね回り、張り巡らせた綱を二の足で軽やかに駆け上がった、遙か高みに横たえられた梁に脚を引っ掛けて揺れ動く。

それら全ての動きの頭上には、乗せたままの腕が傾きもせず鎮座し、まるで糊で貼り付けているのではないかと誰もが疑う程に微動だ

にしない。

その疑惑を察したのか、女兒は片手で腕を取り外すと、それを珠と同じように手繰らせた。

それが示すのは、一連の動作は全て女兒の身ごなし一つで為された超技術の数々であつたという事実である。

ここに至り、観客の誰もが女兒の軽業を認めた。所詮新顔と侮つていた彼らの予想を裏切り、拍手喝采を早くも呼び起こしたのだ。

「ほほう！ ほほう！ なんと素晴らしい、いや愉快痛快！ あれは本当に【軽業師】か？ とてもそうは思えんぞい！」

「いや、これは……なんともはや……」

王大人の身辺警護をも務める彼は、迫る脅威を識別するための《看破》を当然心得ている。

レベルにして二〇〇を超える上級でもある彼の目には、女兒の能力の全てが詳らかとなり、それ故に愕然とした思いを抑えきれないでいた。

【軽業師】黒猫——そのレベル、四一。

下級職の一つも極めていない未熟も未熟なそのステータス。

その他《軽業》や《重心移動》、《アクロバット》など主要スキルのレベルも四が並び、《軽業》を除いていずれも【軽業師】の上限に達しておらず、とてもではないがあれほどの動きを可能とするものではない。

否、所詮ステータスなど大まかな指標に過ぎず、熟練の本質は本人の経験と資質による以上、直接自重に作用する《軽業》以外のスキルは本人のセンスに左右され——

「成程、これは天稟じゃ！ 刃華め、このような秘蔵つ子を隠しておつたとは！」

（天稟……まさしくその通りだ。いつそ惨くすらある……）

つまるところ、女兒——黒猫の軽業は。

ジョブとしての【軽業師】が後押しする以上に、本人の才覚によって成り立っていた。

まさしく天が与えたもう才覚。これを前座に据えては、後に控える

若輩達には酷であろう。

おそらくは当の刃華でさえ彼女の才覚がこれ程のものとは見抜けていなかったのだろうが、今や舞台は黒猫の独壇場と化していた。

前座にして舞台を呑み、聴衆を釘付けにした黒猫の演目は、やがて蝙蝠のように吊り下がり、上体を反らせて観客席を見渡した黒猫の笑顔で瞬時静まり返る。

「———♪」

「っ、これか……!?!」

黒猫が見渡し、盃で酒を呷りながら眺めていた観客に目を留めて、手に持つそれを指先で招いた。

己が持つ盃を要求しているのだと遅れて察した観客が戸惑いと共にそれを投げ、不恰好な軌道を描くそれを軽やかに掴み取り。

——頭上に乗せていた椀を傾け、その中から液体をなみなみと盃に注いで呷った。

「なんと……!?! 今の今まで、水を満たした椀を乗せて演じておったのか!?!」

悲鳴のような歓声が上がる。拍手喝采は万雷となりて響き渡る。

実のところ満たされていたのは黒猫の好む柑橘類を絞ったジュースであったが、それを今の今までそうと悟らせず一滴足りとて溢さず大躍動を演じきった黒猫の絶技、聴衆は皆一様に席を立てて手を鳴らした。

最早場は、完全に黒猫に吞まれ熱狂していた。

誰もが期待せぬまま迎えたお披露目会。

それは一転して”神童”黒猫の伝説を飾る一幕となり、万雷の喝采を以て聴衆の間に知れ渡ったのである。

尤も、その後に控えていた他の演者からすれば、場の熱狂は地獄の呻きに等しかっただろうが。

綺羅星の如く現れた神童の名は、多くの者にとってその道を閉ざす凶星であった。

第一章

はじめての長期クエストじゃんよ

□地球・有栖川邸

「ふいー終わったー！ 宿題しゅーりよー！」

「おつかれ。これで気兼ねなくデンドロ口できるね」

シャーペンを放り投げて背を伸ばす。

夏休みに入ってから真っ先に宿題を終わらせるべく、あっちゃんの屋敷に泊まり込んで片付けてたけど、よーやく今終わって解放感パないね。

丸三日で日記と自由研究以外の宿題を終わらせられたのも、ひとえにあっちゃんの助けあつてのことじゃんね。あっちゃんつてば頭いーし、こういうときはほんと助かる。

「たった三日でも向こうは九日だもんねー。ほんとリアルに優しくないゲームだわ」

「先行逃げ切りの傾向強いしね」

ガチ勢のあっちゃん曰く、デンドロ口には先着一名しか就くことのできない”超級職”とかいうジョブがあるらしいじゃんね。

一部の有名なNPCが就いていることが多いらしくて、下級職や上級職と違ってレベル上限の無い所謂エンドコンテンツ的な要素みたい。

なんであっちゃんがそんなこと知ってたのかって？ 仲良くなったNPCから聞いたらしいよ。あっちゃんつてばレジエンダリアの死霊術師ギルドではちよつとしたお姫様扱いで可愛がられてるらしくて、耳寄りな情報を良く聞くんだったさ。

ちなみにあっちゃんはまだもう目当ての超級職があるらしいじゃんね。詳細はお楽しみつつ教えてくんなかったけど、早けりや夏休みが終わる頃には就けるかもつつてたっけか。

なんで知ってたのかって聞いたら、死霊術師界限では有名らしいじゃんね。つっても転職条件は虫食いらしくて、名前だけが伝わって

るらしいけど。

その転職条件も大体当たりつけてるあつちゃんマジ半端ねー。

「そーいやあつちゃん、今へエンブリオへいくつだっけ?」

「第四形態。かなり成長早い方だと思う」

「まじか。あたしはまだ第三形態じゃんよ。なんか違いあるんかねー?」

「……んー、すごく抽象的な憶測になるけど」

「なるけど?」

「ブレずに一貫してると成長が早いような気がする。なんとなくだけど」

「あー……わかるようなわかんないような? でもそれならあつちゃんが早いのも頷けるかもじゃんね」

「ねこちゃんは気まぐれなどこあるから……」

「まあそれはそれ、これはこれって感じだし。でもまーやっぱ凄いな、へエンブリオ」

「正直、不気味。へエンブリオはほとんどオカルトの領域……っぽい」

「こわい?」

「ううん、楽しい。すごく素敵。もう他のゲームできないね」

筋金入りだねー。

クソゲーから神ゲーまで、国の内外問わずにホラーゲーム漁りまくってるあつちゃんだけど、こうもキラッキラしてるのは初めてじゃんよ。

いろいろ訳わからん仕様とか、小難しい理屈とかあるけど、まあ楽しいならそれでいいし。細かいところはどうでもいいじゃんね。

あたしの場合はほら、ジョブとへエンブリオは完全に切り離してるから。ジョブの方は完全に趣味の領域だしね。

あつちゃんの場合はジョブとへエンブリオの両方が趣味のど真ん中だから、逆に極まってガチ勢と化してる感じだし。そう思うと変に一緒に遊んで遊ぶよりは互いに離れてた方が良かったのかもね。つまりは結果オーライってこと。

「ねこちゃんもいつか絶対こっち来てね。わたしの方からはそっちい

けないから」

「やっぱ砂漠越え無理っすか」

「無理。夜はともかく昼は天敵。海も無理」

「アンデッド抱えまくってたらそりやそうなるじゃんね。まー気長に待っててちょよ」

「なるべく早く来てね」

気長に待ってって言うてるのにせっかちだねー。

まあこつちもこつちでやることあるし、どうなるかな。

◇◇◇

そんなこんながあつて夏休み突入からのデンドロ三昧なわけだけど。

あたしの方はと言えば、あつちゃんにやや遅れる形で上級職に就いていたりする。

その名も【名軽業師】。【軽業師】の直截上位職じゃんね。

転職の条件に各種主要スキルの上限到達や指定された演目のマスタ―、あと【軽業師】のレベルカンストがあつたけど、ぶつちやけどれも楽勝だつたじゃんね。

普通は演目の方で躓くらしいけど、あたしは全部一発オーケーだつたし。いやあ悪いね才能有り余つてて！

だんちよーや王じーちゃんは異例の早さだつって驚いてたけど。

これは新たな【雑技王】誕生か否かつて。

ふふん、気分は昔懐かしのなろう主人公？ よいしよされる側としては悪い気分じゃないじゃんね。

で、だ。

【軽業師】としては順風満帆。上からの覚えも良く、レベリングも〈エンブリオ〉のおかげで順調なんだけど、一つ困った？ うん、困ったこともあるじゃんね。

ぶつちやけるとね、同僚以下からの反発がパネーの。

まああたしってば見た目小娘だし？ 何から何までリアル志向な

とこあるデンドロだから、人間関係もそりやまー複雑怪奇のリアリテイってなわけだから、嫉妬の視線が多いのなんのって。

ちよつとした超時空シンデレラばりにスターへの階段を駆け上ってるあたしだから、周囲のやつかみが激しいんだわ。

上はね、雑技の世界は実力がモノを言う世界だからってわかってるから何も言わないんだけどね。

見習い——具体的に言うとなんか【軽業師】止まりの連中からはまったく良く思われてない。

ちなみにプロとして活動できるのが【名軽業師】からで、【軽業師】の間は舞台上上がることができない見習いの下っ端扱いだ。

あたしが以前舞台上がれたのは、例外的なお披露目会だったからじゃんね。ここトリビアね。

「つーわけでだんちよー、今日もクエストほしいじゃんよ」

「まるで脈絡が無いが……まあいい。しかしなあへい、お前もう少し気に留めはせんのか」

「んー？ つつてもあたしにやどうしようもねーじゃんね。別に足引つ張られてるわけじゃないし、どーでもいいカナー」

だんちよーことへ黄龍雑技団代表、黄刃華の天幕でクエストをねだる。

【名軽業師】としての活動は軽業ギルドからクエストという形で提示され、ギルドの重鎮でもあるだんちよーはクエストに関する権限をもち合わせている。

ちなみに軽業ギルドってのは黄河帝国に根を伸ばす芸能ギルドの一派閥で、その重鎮は雑技団の長達であるというのは王じーちゃんのみだ。

NPC——ティアンと違って存在が不安定なへマスターへはティアンの団員とは別枠として扱われていて、言ってみると助っ人役みたいな扱いに近い。

雑技団の垣根を問わずあらゆる団から依頼を受けて舞台上がり、その成果が依頼元の団の評判に繋がり、依頼受注者は報酬を得るという流れじゃんね。

もちろん個人的な友誼やしがらみで特定の団からのみクエストを受けるへマスターもいるけれど、如何せんそもそも【軽業師】になりたがるへマスターが少数なこともあって、この辺のシステムはあまり周知されていなかったりする。

ちなみにあたしは大体へ黄龍雑技団ってーか、だんちよーのクエストをメインに受けてるじゃんね。

別に恩義がどうこうってつもりはなくて、単にだんちよーが知り合いで話を通じやすいってだけで他意は無いケド。

【軽業師】としての短い期間、天幕で修行をつけてもらったりもしたから、まあ別にわざわざ他の団で受けることもないしってだけでね？
まあその辺はどうでもいいじゃんね。

「つかさーあたしのことよりも、だんちよートコの見習いちゃんの底上げ頑張るべきじゃね？ 実力主義が聞いて呆れるじゃんよ」

「お前な、間違っても他の団員の前でそれ言うなよ。ただでさえ煽ってるんだ、油を注いで炎上してはかなわん」

「理屈と人情の間で揺れ動く心ってやつかー。だんちよーも大変じゃんね」

「誰もがお前みたいに才能に恵まれてるわけじゃないんだ。持たざる者には持たざる者にしか分からないものがある。あまりつついてくれるな」

才能、才能ね……まあ確かにそうかもネ。

なに？ 世の中才能だけじゃないって？ 努力こそ素晴らしい？

それもそうかもネー。

努力も才能もそれはそれ、これはこれ。どっちも認めて自分に都合の良いほうだけ利用するのがあたしのスタイルじゃんよ。

へマスターとティアンはへエンブリオの有無で決定的に格が違うって言われるけどさー。

別にあたし、へエンブリオの力で有利なってるわけじゃないし。ていうかあたしのへエンブリオってば【軽業師】とは全くシナジーしてねーし能力関係ねーし。

なんならステータス補正切っても構わんしね。へエンブリオが無

くても今の立場余裕で取れてるし、てことはやっぱあたしってば天才じゃんね？

って誰に対して言い訳してんだってね！ 別に誰も今文句なんて言ってきてねーしね、我ながら被害妄想乙！

「まあそんな哲学はいいじゃんよ。それよりはよ、クエストはよ」

「哲学、哲学か？ んでクエストなあ……ちよつと待ってろ」

ガサゴソと奥の棚から書類を漁るだんちよー。

雑技団の長として興行にも精を出す傍ら、ギルドの重鎮として雑務にも追われるだんちよーは実のところすんげー忙しい人なのね。

かつての名門の跡取りとしての矜持か、なるべく興行に顔を出せるよう頑張ってるらしいけど、そのせいかここ最近は疲労が溜まり気味っぽいじゃんね。

そういや【雑技王】も超級職なのか。今まで適当に聞き流してたけど、狙えるようなら狙ってみるのもアリかな？

「ふむ……少し離れた場所での興行になるが、どうだ？」

「んあ？ 龍都じゃねーの？」

「龍都にはギルド本部があるからな。それに合わせて団の本拠地も置いてあるが……興行自体は帝国の各地で行われている。というか、各地を巡って興行するのが本来の形だ」

「ほーん」

そんなことをつらつら考えてたら、だんちよーがそんなことを言い出した。

思えば今までのクエストは龍都近隣ばっかだったけど、そういうものとはばかり思ってたわ。

確かにサーカスってあちこち回って芸を披露するものだし、雑技団も似たようなもんか。

「ウチでは【名軽業師】を極めた高弟が副団長となって各地での興行を務めている。言い換えれば支部長だな、それぞれが一座を率いて東西南北の四方を拠点に巡っている」

「今更な組織形態の説明はともかく、どこの支部からのクエストなわけ？」

帰ってきた答えは北。

〈巖冬山脈〉の真東に位置する寒冷地に今はある支部からの要請らしい。

支部つつつても此処と同じく天幕らしいけど。だからちよくちよく移動して定まった本拠を持たないらしい。

ていうかさあ、それって……

「遠くね？ 〈巖冬山脈〉つつたらアレっしょ、禁域指定の最北端。龍都からどんだけ離れてんだって話じゃんよ」

「だから長らく塩漬けになってたんだがな。……ああ、お前が心配してるような懸念は無いぞ。別に北地での興行が苦しいわけじゃあない。クエストとして発令するのは有力なゲストを招いて興行に華を添えるのが目的だ」

てつきり僻地で興行が苦しいから助っ人をく、的な事情かなと思つてたら否定された。

ま、それもそっか。〈マスター〉が関わる案件でそんな重要度の高いものは早々回ってこないっしょ。

芸能ギルドの雑技団一派に限らず、既に地盤を築いている組織での〈マスター〉の扱いは、良くも悪くも外様でしかない。

その不安定な存在から要職に就けることもできず、機密に関わらせることもできず、多くの場合ティアンよりも力量や技量に優れる手腕を買って一時的に利用し合うのがあるべき姿。

言ってみれば超敏腕なアルバイトが派遣社員？ 言い換えると途端にダサくなんね。

ともあれ、特段重い事情も無く、単に遠く行ってお仕事すればいいだけなら気は楽じゃんね。

大体あたし、まだお子様よ？ 九歳よ？ いくらあたしが才気煥発だからってマジな組織運営に関わらされても困るじゃんね。

あたしとしてはクエストの受注に否はないけど、最後にひとつ問題があるわ。

「足はどーすんのよ？ 最北なんて一日二日で行ける距離じゃねーっしょ？ 交通費どんだけ掛かるかって話よ。第一あたし土地勘ねー」

し絶対迷うじやんよ」

「そこは問題ない。お前が受けたならば是非とも同行したいという御仁がいる」

誰よその物好き通り越して酔狂なヤツ——と言おうとしたら、背後から聞き慣れた笑い声が聞こえた。

勝手知ったるとばかりに団長用の個人天幕に入ってきたのは、丸々太った鯨髭の爺ちゃん。

「ほほほ、話は聞かせてもらったぞい」

「王大人。まだ話はまとまっていますませんが……」

よくこつちに遊びに来る王じーちゃんじゃね。

勝手に入るなどは言わないあたり、もう半分諦めてるっぽいだんちよーがいと哀れ？

王じーちゃんはあたしのデビュー以来何かと面倒見てくれていて、じーちゃん曰くあたしのファンらしいね。

あたしにとってはよくお菓子とかくれる優しいじーちゃんだけど、黄河有数の名士にして黄河の芸能ギルドの存続に直結する最大手パトロン^{パトロン}の一人。加えて本人も極め付きの芸能ファンってこともあって、芸能に関わる人間にとってはまったく頭が上がらない相手だとか。

そのじーちゃんと個人的に仲良くしてるのも、あたしがよく思われない原因の一つらしいね。どうでもいいケド。

「なになに、じーちゃんが依頼主なワケ？ それならあたしとしても受けるに吝かじゃねーじやんよ」

「口を慎めとあれほど……申し訳ありません、王大人。こやつにはよく言って聞かせますので」

「よいよい、ほんの戯れぢやて。ほれ黒^クや、飴玉^{アメ}はいるかね？」

「いるいる！ 毎度ちよーありがとじやんね！」

流れるように突き立つ拳骨。

だんちよーといるときにじーちゃんが来ると毎回こうなるのはマジ勘弁じゃね。

「はあ……話が脱線したが、王氏が目的地まで同行する。道中の警護

を務める代わりに氏の竜車に便乗してよいとの申し出だ」

「御主ならいずれ龍都を離れ各地で興行することになろうと思つていたので。その際に足が無くば不便であろうと、わしが横から口出しさせてもらったのぢや。どうかの？ この爺と一緒に行ってみんかね？」

爺馬鹿かよじーちゃん。

あたしとしては渡りに船だけどさー、それって超過保護じゃね？

いや嬉しいよ？ 使えるものは何でも使うし、貰えるものは何でも貰うあたしとしては願つたり叶つたりだけどさ。

じーちゃんの方こそいいのかよって感じじゃんね。ちよつと強権行使しすぎじゃね？

「まーいいいけどさ。そゆことならあたしはオツケーじゃんよ。だけどじーちゃんも好きだねー、わざわざあたしをご指名なんかしてくれちゃってさ」

「長く芸能に関わってきたが、いつになく愉しませてもらったからう。ほほほ……ま、この爺の話し相手をするでも思つて付き合つておくれ」

ほんとに至れり尽くせりじゃんね。

さすがのあたしもここまで優遇してもらつちや悪い気がしてくるわ。

ちらつと横目でだんちよーを見るも、重い溜息と共に。

「お前の芸が勝ち取った成果だ。氏もこう言つてくれている、ここは甘えておくといい」

「ん……おっけ。なら正式にそのクエスト受注するじゃんよ」

そうまで言われれば是非もない、クエストを正式に受注する。

なんのかんの言つて、中央以外の場所も気になつてたしね。じーちゃんが足出してくれるつてんなら否は無いじゃんね。

道中の護衛もまあ、余裕かな。他にも警護役はいるだろうし、あたしのへエンブリオももあるしね。

「んじやじーちゃんよろしくじゃんよ。いつ出るとかは決まつてんの？」

「そうぢやな……明後日の朝で良いかの？ それまでにこちらの用意を整えておくぞい。御主にとつても初の遠出ぢやろう？ 準備はしかと整えておくんぢやぞ」

「おっけおっけ」

「…………お前の荷造りは俺が見てやる。あとになってなにそれを忘れたなどと言われては適わんからな」

これまた溜息混じりにそう言われた。

毎度メーワクかけてすまないじゃんよ。だんちよーつてば根っからの苦勞人じゃんね。

そんなこんなであたしのクエストは始まった。

旅の醍醐味と言えば宿場町じゃんよ

□【名軽業師】黒猫

あたしがだんちよーのクエストを受注してからは、なにくれと準備に追われててんでこ舞いだった。

つつーのもこれまでであたしつてば日帰りで行ける距離しか活動しなかつたもんで、長旅の備えなんてあるはずもなし。それらを全て一から揃えなきゃいけないとなると、それだけで一日仕事になっちゃったからね。

道中の食糧はじーちゃんが負担してくれるってんで保存食の類は持たなくてよかつたけども、着替えやらなにやら雑多な日用品やらで、初期配布のアイテムボックスはすぐ満パンになっちゃった。おかげでもっと容量の大きいやつを買わなきゃいけなくなって、その出費がけっこー痛かったじゃんね。

あと向こうで芸を披露するという目的上、演目のための衣装やら小道具やらの用意もしなきゃいけなくて、これはだんちよーが全部揃えてくれた。

今までは団所有のを借りてやってきたけれど、これを機に自分用の揃えとけてんで、だんちよーのアドバイスを元にあれこれ揃えてみた。

つつても西方の【曲芸師】みたいに小道具メインのパフォーマンスをやるわけじゃないから、そっちと比べて数自体は少なかったけどね。

一番大変だったのは衣装カナー。こっちはそれこそ用途・演目に合わせて無数にあるから、あたしの体格に合うものという条件もあつてかなり難儀しちった。

これに関してはだんちよーのコネが心強かつたじゃんね。馴染みの【服飾職人】だつっーおばちゃんにサイズ測ってもらつて、要望出したらその日の夜にはもう数着届いてすげービビったわ。一日かからずオーダーメイド仕上げるって、このゲームの生産職すつこいじゃんね。

「おー……すっげーイカすじゃんね。道服つっーの？　なんかそれっぽいじゃんよ」

「お前の年齢で舞台衣装を特注するなぞ前例に無かったから苦労したそうだが……いい出来じゃないか」

天幕の姿見の前で着付けた衣装を広げて眺める。

雑技の動きをダイナミックに演出し、かつ舞台映えするよう普段着には用いない極彩色で染め上げられた衣装は、しいて例えるなら中華風ピエロっぽいデザインじゃんね。

袖や裾がこんもりラッパみたいに膨らんで、手首と足首の部分でキュツと窄んでるあたりがかなりピエロっぽい。

それで帽子は半月型の大帽子で、両端には鈴飾りがくつついて揺らす度にしゃんしゃん鳴って存在感をアピール。

靴も爪先が大きく反り上がった革製で、その先端にも大きな鈴が一つずつ。おかげで歩く度にもしゃんしゃんしゃんしゃんってうるせーわコレ。あたしは飼猫猫かっつての。

「だんちよーこれ鈴多すぎね？　クツソうるせーんだけど」

「居場所がわかっていいんじゃないか？　……すまんすまん、膝は蹴るな膝は」

いくらアバターのネームが黒猫だからって、扱いまで猫みたいにされたら堪ったもんじゃないじゃんね。

ともあれ、鈴を除けばかーなりあたし好みの超イカす衣装じゃんね。特にデザインがいいわ、最高じゃんねこういう奇抜なの。ゲームなんだしド派手上等、没個性は悪じゃんね。

「ハイちゃんつたら若いだけあつて化粧のノリもいいわねえ。思わず気合入っちゃうワー！」

「すべすべのモチモチだもんねえ。あーいいわあ若い子の肌つて。あたしももう二十年若ければねえ……」

化粧担当のおばちゃんコンビ（片方はオネエ）がファンデーションのドーランぱたぱた、顔にメイクを描きながらなんかやるせないこと言い出した。

そりゃあたしみたいなピッチピチのお子様とおばちゃんらみたい

な臺の立つた年増の肌年齢を一緒にしてもらったら——イテテテテテ!
テ!?

「へいちゃあん? なんだかよからぬことを考えてたわねえ……?」

「肌と年齢の話題は禁止よん。これオネエさんとのや・く・そ・く・♪」

「はい、わかりましたはひ、わはりはひは」

ほつぺたふにふにから強烈につねられて(なのに痕は残さない無駄高等技術) お仕置きされた。

このおばちゃんコンビは団にとつても無くてはならない、ヒエラルキー最上位存在である。

そんなこんなで化粧も終えて仕上がったのは、薄い白面の上に紅を差し墨を差し、目元口元をくつきりと浮き上がらせた、間近で見ると微妙じやねって感じの厚化粧。

フィギュアスケートとかが特にそうだけどさあ、舞台用の化粧つてやっぱ近くで見るとぶっっちゃけダサイよね。顔じゃなくて面つて感じどさ。

でも今着てる衣装にはぴったりな感じかもネ。片方の目元に涙のシンボル入れてさ、アシンメトリーに仕上げたら完全にピエロじゃねこれ。

「……少しばかり外れすぎてやせんか? これでは西方の【道化師】だろうに」

「小柄な分目立つようにはしてみたんだけど、ご不満かしら?」

「ちよつとインスピレーションに任せすぎちゃったかしらん」

「てゆうかこんな難しい化粧向こうでできるの? あたしにも無理じゃんよ」

あたしの顔をキャンバスにあれこれ好き勝手してくれたのはいいけどさ、これ他の人が化粧するときのこと考えてないじゃんね?

二人は本拠付きの腕利きだからいいにしても、他所で同じメイクしろつてなるとちよつと無理あるんじゃないかなー。

「あらやだ、うっかりしちゃってたわ」

「そうよねエ、あたしたちが付いていくわけにもいかないし……仕方ない、ナチュラルに留めましょ」

「そうしてくれ」

つーわけで化粧は今まで通り。

まあ幸い衣装に着られるってほどあたしも程度が低いわけでもなし、それにそもそもあたしってば美少女ちゃんだからメイクは最低限で十分すぎんじやんね。んひひ、自画自賛。

そんな感じで旅支度は進んでいって、ようやく終わったのはもう日付が変わろうかという頃だった。

結局だんちよーには付きっ切りになってもらっちゃって悪いじやんね。

なんだかんだ言っただだ甘なんだから好きじやんよ、だんちよーサン。

…：顔はちよつと強面だケド。

◇◇◇

そうして二日目過ぎて出発日。

龍都北面の大門前で、じーちゃんが乗る竜車を待ち合わせていた。早朝だというのに辺りは龍都へ出入りする旅人で賑わっていて、そういう連中を運ぶ竜車なんかも多数犇めき合ってる。

なんつーか、さすが大国の首都だけあって、リアルでも早々お目にかかれないような人の数じやんね。これらひとつひとつがNPCなんて、とてもじゃないけど信じらんねーわ。どんなサーバー使ったらこんな逐一描写できんだってね。マジでオーパーツじみてて怖いわーデンドロ。面白いからいいけど。

龍都は無数の人々が行き交う首都だけあって、特に四方の大門付近は昼も夜も無く忙しい。

日が暮れてから働き出す人間なんかも多いから、飲食店なんかは代るがわる開け閉めして常にどこかで食事が出来たりする。

適当な店のオープンテラスで朝食に舌鼓を打ちながら眺めると、まるでもなにもまさしく異世界に放り出された気分で、こちらの時間で一ヶ月以上も経つのにまだ新鮮じやんね。

日の昇り始めた時間帯に、おかわり自由のお茶を飲みながら甘い包子をつまむ。飲茶って言うんだっけねこういうの、まさに異国情緒っ

て感じてサイコーじゃんよ。

そんな風に時間を潰してたら、竜車が行き交う待合所にえらく豪華な竜車が一台、これまたドデカイモンスターに牽かれてやってきた。

「待たせたの、ヘイヤ。ほれこっちぢや」

「おはよーじーちゃん！ いいの乗ってんね、さすが金持ち」

客室の窓から手を振ってこちらを呼ぶじーちゃんに手を振り返し、犇めく竜車の隙間を縫って乗り込む。

見た目漆塗りっぽい光沢の黒い竜車の扉を開けば、中は外から見ると以上に異様に広くて、明らかに外観と空間的に釣り合ってなかった。

まあでも魔法のある世界だしこういうこともあるじゃんねとスルーして乗り込み、挨拶ついでの飴玉をじーちゃんから貰って……横から突き刺さる鋭い視線に気付く。

「げっ」

「顔を合わせるなり無礼なヤツだな、黒猫」

「朝からしかめっ面じゃそうもなるじゃんよ。それはそれとして付き人のおっちゃんもおはよーさん」

「おっちゃんではない、楊だ。ともあれおはよう、遅刻せずに来れたようだな。まあ当然のことだが」

あたしの真横に座る黒尽くめのおっちゃんは楊ヤン・ブルー弧藍。

じーちゃんの付き人で、身の世話や護衛を務める、ティアンでも腕利きの使い手らしい。

舞台デビューのときにじーちゃんと一緒に知り合って、優しいじーちゃんとは正反対にちよー堅物のしかめっ面おじさんじゃんね。

お小言が多くてガツコのせんせみたいで、正直苦手なタイプ。キライじゃないけどさ。

「じーちゃんつてば、おっちゃんが一緒だなんて聞いてないじゃんよー」

「当たり前だろう。如何なへマスターといえ貴様のような子供と二人きりで旅をさせられるものか。大人は甘やかしているが、私はそうはいかんど。常々思っていたが、今回の旅こそは然るべき振る舞いを睨けてやろう。覚悟しておくんだな」

「じーちゃん……」

「ほほほ、まあそう嫌な顔をするでないぞい。此奴はこう言っておるが御主の為にもなろう、授業と思つて言うことを聞くんぢやぞ」

頼みの綱のじーちゃんからも、やんわりと諭されちった。

せつかくじーちゃんにたかつて旅先のグルメを味わい尽くすつもりだったのに、おつちゃんがいたんじやそうもいかないじゃんね。

おまけに何日続くともしれない旅の間ずっと家庭教師かよ、完全にハマられたわー。

「心配するな。これでも教導の心得はある、野良猫の如き貴様も旅を終える頃には立派な淑女に仕立ててやるとも」

「心配してんのそこじゃねーしー！」

「さてさて、それでは参ろうかの。遙か北方の地へといざ往かん！」

じーちゃんの号令一下で竜車は動き出し、巨大な北門を抜けて龍都の外へ出る。

遠ざかっていく龍都の街並みを背に、あたしのクエストは開始された。

◇

じーちゃん所有の竜車は、あたしの想像に反してというべきか、それとも見た目相応と言うべきか、びつくりするくらい高性能だった。

広い龍都内をクエストで行き来するときに乗り合い馬車を利用したことがあるけど、庶民が利用するような安い馬車だと結構揺れが激しくて尻を痛めたりしたもんだけど、じーちゃんの竜車はまるでそういったことが無い。

お世辞にも完璧に整地されているとは言い難い都外の街道を揺れもなく進み、そのスピードもリアルという乗用車並み。

ぶつちやけ最初はフィクションで見えるような、トロトロ走る馬車か何かで行くものとはばかり思っていたから、これはいい意味で予想を裏切られたじゃんね。

リアルでは見れない、まさしく深山幽谷といった表現がびたりと似合う景色が流れていくのを、窓から顔を出して眺めるのはとても楽しい。

龍都の喧騒から離れた、ほとんど手付かずの大自然は、龍都だけでも相当に抱いていた感動をより一層震わせるようで、率直に言うところ、小学生並みの感想だけど、実際小学生だからオツケーじゃんね。「すげー！　なーやっぱすげーじゃんねコレ、龍都から離れるところなってるんだねー！」

「ほほほ、お気に召したようぢやな」

「景色もすげーし竜車もすげーし、牽いてる竜もすげーじゃんね！」

正直これだけでクエスト受けたかいあったわ、あたしも乗り物ほしーな」

「今のお前では到底手が届かん代物だぞ？　大人が所有される中でも頗る高性能な逸品だ。牽引する地竜も専属の【高位従魔師】が手塩にかけて育てた名物、本来であれば貴様如きが同乗できるようなものではないのだからな」

おっちゃんが自慢げに言ってるけど無視無視。

これだから大人ってば無粋じゃんねー。最高級とか高性能とか、そういうことを言ってるんじゃないよ。

もっとうあたしのプリミティブな感動を分かち合ってもらいたいものじゃんねー。

「此度の旅は中々長くなりそうだったでな、持久力に長けた地竜を連れてきたのぢやよ。中にはもっと速いものや、空を飛ぶものなんかもおるんぢやぞ？」

「マジで？　これでまだ遅い方なワケ？　——すつつつつつつつげーじゃんね！　これ以上速いのとか、空を飛ぶのとか、あたしもそれに乗りたいたいじゃんよ！」

まじかよファンタジー最高じゃんね！

いやもうじーちゃんすげーわ、さすが大金持ち！　コネだろうと鼻屑だろうと、是非ともそれに乗ってみたくなるじゃんよ。

感動が凄すぎてさっきからすげーすげーしか言ってるけど、そうとしか言いようがないからしゃーないじゃんね。

じーちゃんはあたしがはしゃぐたびに機嫌良く笑ってくれてるけど、対するおっちゃんは事あるごとに「凶々しい」だの「身の程を弁

えてない」だの、予想してた通りお小言がうつせー！

もうお偉いさんの付き人がそういうキャラなのはありふれすぎてテンプレド真ん中だけど、だからって実際にそういうお小言聞かされるとカチンてくるじゃんね。

あつちはそういうのが仕事だからしゃーないけどさ、だからってそれを仲が良いみたいに笑うのは違うじゃんねじーちゃんよ。

「しかしなんだ、最初はどうかと思っていたが……存外戦えるのだな、貴様も。こればかりは見直したぞ」

「ぢやのう、やはりへマスター」とは特異なものよ。いやさ味方になれば頼もしいことこの上ないわい！」

つつてもお小言ばかりじゃない、ちゃんと褒めもしてくれるあたりはあたしも認めるところじゃんね。

道中で雑魚モンスターに遭遇したときお手並み拝見とばかりに対処を任されたから、ソツコでぶっ飛ばして片付けてやったんだけど、そしたら二人の見る目が少し変わった。

〈エンブリオ〉持ちの〈へマスター〉とはいえ、非戦闘職の軽業師系統が本当にモンスターを倒せるとはやっぱりどこかで疑ってたんだろうね。最初にちゃんと戦闘経験あるって言ったのにさ、ちよつと悲しいじゃんね。

こちららこれでも戦闘向きの〈エンブリオ〉持ちだし、有事に備えてちゃんと戦闘手段は確保してるっての。

ちゃんと合間合間で【拳士】のレベルも上げてきたし、補助にエンハンサー【練体士】も伸ばしたじゃんね。

現時点でのあたしのジョブ構成は、【軽業師】【拳士】【練体士】がそれぞれカンスト、【名軽業師】がレベル三二。リアルで半月そこらで下級職を三つもカンストできたのは、ひとえにあたしの〈エンブリオ〉のおかげじゃんね。

やっぱこう、一度に大多数を倒せる手段あるとレベリング効率段違いだわ。周囲のプレイヤーみてもあたしと同じレベル帯は片手で数えるほどしかないし、ほんとあたしってばラツキーガール。

「ほーんと失礼するじゃんね、あたしはやればできる良い子なのに

さー」

「ほほほ、そう拗ねるな拗ねるな。やはりわしの見立てに間違いはなかったのう、のう楊や?」

「業腹ですが……認めざるを得ませんな。まったく、舞台のときから凄まじい成長速度だ」

「にひひ、見直した? 見直した? あたしってばちよーすげーじゃんねー?」

「ええい纏わり付くな鬱陶しい! いくら力量を積んでも振る舞いが伴わねば小童の猿真似よ!」

無理矢理引き剥がされてそんなこと言われちった。おのれー。

まったく、これだからむつつり眉間皺寄せおじさんは困るじゃね。あたしみたいな美少女ちゃんとのスキンシップに泣いて喜ぶべきだつっーのよ。ねえ?

そうじゃれついてる間にも竜車は進む。

街道沿いには一般的な馬車で大体一日おきの距離で宿場町が築かれていて、徒歩でも無い限りは野宿をせずに済むようになってる。まあそれも人の手が届く範囲に限ってだから、主要な街道以外じゃそうもいかないらしいけどね。

それに今回乗ってる竜車は一般的な馬車と比べて騎獣も車も別格だから、時間当たりの移動距離にも結構差がある。だけでもまあ、特に期限の設けられてないクエストだから、じーちゃんの意向もあって無理せずちゃんと着くことに停まるようにしていた。

そういうわけで到着しました第一の宿場町!

北から南へ、あるいは南から北へ。龍都と北方を行き来する旅人たちで賑わう此処はまさしく”道の駅”そのものだ。

これまで寡黙に竜車を駆っていた御者のおっちゃんが、やっぱり寡黙に竜車を停留所へ預け、楊のおっちゃんが宿を取り、あたしとじーちゃんは早めの夕食をとるべく一際目立つ食堂へ向かった。

看板に〈万景酒家〉とあるその店は、早くも酒気に酔う大人達で賑わっていた。

店舗は広く大人数を収容できる大食堂で、奥の厨房からはひっきり

なしに調理の音と匂いが響き漂い、行き交う給仕が忙しそうに料理と酒を運んでいる。

「ほっほ、相変わらずぢやのう此処は。さてさて席は空いておるかう？」

「んー？　じーちゃんってはこの店知ってるの？」

懐かしそうに目を細めて見渡すじーちゃんに問えば、「青春の味の一つじゃよ」と返ってきた。

曰く若かりし頃、まだ身一つの行商人だった時分に、北方を行脚するときに通った店の一つで、安くて多くて何より美味しいという、まさしく労働者の味方そのものだったとのこと。

……じーちゃんの若い頃って、一体何十年前の話だよってね。さすがのあたしも十年単位で昔の思い出話は想像できませんわ。

「いらっしやいませー！　何名様でしようか？」

「三人で頼むぞい。あとで一人連れがやってくるでな」

「かしこまりましたー！　では奥の席へどうぞー」

給仕の案内に従って着席する。周囲は賑やかを通り越して喧しい酔っぱらいばかりだ。

ちなみに三人つつつてたけど、御者のおっちゃんは一人で食事をとる信条らしくて別にハブってるわけじゃないらしい。

変なモットーの大人もいたもんじゃね。コミュ障かな？

「相変わらず騒々しいところぢやのう……だがそれが良いのぢやて、昔とちいとも変わらんわい」

「じーちゃんじーちゃん、完全に昔語りモードに突入してんじやんよ。それより早く頼もうぜ」

「おっとっと、爺の長話は子供には酷じゃったかの。ほれ、好きなものを頼みんさい」

酷ってわけじゃないけどね、もうお腹がペコちゃんだからとりあえず何か食べたい気分じやんよ。

話は食べながらいくらでも聞くかね、だからここは遠慮無く注文させてもらうぜ！

そうして注文してからしばらく。

他のテーブルに料理が運ばれていくのを眺めながら、まだかまだかと調理場を睨んで待ち侘びる。

先に出されたジュースで喉を潤すも、これじゃお腹の足しにはならないじゃんよ。料理まだかー！

と内心で催促してたら、こちらへ向かって歩いてくる給仕のねーちゃんが見えた。

盆の上にはあたしが頼んだものと同じ肉と野菜の料理の数々がどっさり！ 遠慮無く魚以外を頼みまくった料理群がこちらへ向かって――

「ツケンナコラア！ てめツスゾオラア!!」

「ああんイキってんじやねえぞテメツコラー!!」

――弾き飛ばされた男が横から派手にぶつかって、無残に盆から地面へこぼれ落ちた。

あ、？

命を奪う神の呪い

□山茶郷〈万景酒家〉

海上船団国家グランバロア、大陸と切り離された絶海の島国天地を除く五大国の中で最も広大な国土を有する黄河帝国。

単純な国土面積で言えばカルディナに軍配が上がるが、あちらはその大半を不毛の砂漠で覆われているために、人が入植可能な土地で比較すれば、やはり黄河こそが最たる大国と言えるだろう。

積み重ねた歴史の永きも最古を競える黄河であるが、その数ある特色の一つとして旅人が多いことが挙げられる。

なにせカルディナと違い、国土の大半が肥沃にして峻厳なる大自然に覆われた深山幽谷の国である。

無論のこと秘境、魔境——つまりはセーブポイントの影響範囲から外れる地域——の脅威こそあれど、カルディナの大砂漠のようにそもそも生存すら許されぬ荒涼の地ではない。

長い歴史の中で培った魔法技術、または【龍帝】に代表される有力なティアン達。なにより皇帝の治世の下一丸となって協力してきた民草の尽力もあり、黄河の大地は人々の弛まぬ努力によって開拓されてきた。

故に大地に根ざす大河に寄り添うように、人々の安住の地は程度の差こそあれど黄河の全土に点在し、それらを結ぶ街道は整備され、そこを行き交う人々の止まり木となる町々は発展してきた。

龍都北方から馬車で一日の距離にある山茶郷は、そうして形成された宿場町の一つである。

帝の坐す龍都に最も近い北の玄関口として、古来より旅人・行商の類を温かく迎え入れ、送り出し。

彼らへ一時の安寧を提供すると共に代価として様々な産物や金銭を手に入れ、それを元に次なる旅人の仮宿となるべく寝床を整える。

そうした循環によって成り立ってきた山茶郷は、まさしく北方を旅する人々にとって無くてはならない母なる町であった。

その山茶郷において最大の店舗を構える〈万景酒家〉は、人々の食

事を一手に担う台所である。

日夜絶えず人々が訪れ、老若男女を問わない客に賑わうこの店は、それ故に当然のことながら様々な騒動にも遭遇してきた。

その最たる例としては、やはり酔客によるいざこぎであろう。

腹を満たす料理と同じくらいに、心を満たす酒もまた提供してきたこの店では、酒席の常として酔った客同士での諍いが絶えない。

この日もまた、とある客同士が酔った勢いで衝突していた。

店内奥の大座敷でぶつかり合う二人の男。

それぞれの背後では二人の喧嘩を着に酒を飲み、あるいは野次を飛ばして賭け事を始めだす。

こうした光景は人の出入りの激しい宿場町ではしょっちゅうで、殊更酒の入る食堂においては日常茶飯事である。

周囲の客もあるいは迷惑そうに、あるいは呆れ果て、またあるいは一緒になって野次馬観戦に洒落込み、しかしながらいずれも慣れた様子で真面目に取り合うことはない。

度が過ぎれば心得たる者の仲裁が入るだろうが、それまでは単なる見世物として場を賑やかすのが常であった。

普段と違っていたのはぶつかり合う男達の装いであろう。

彼らは慣れた旅人や行商が身に纏う旅装束ではなく、かといってこの町に住まう人の装いでもなく、なんともちぐはぐで統一感の無い奇妙な戦装束であった。

唯一の共通点は、ぶつかり合う二人、またその周囲で野次を飛ばす彼らの随所に巻かれた紅いバンダナのような飾り付け。

食堂の一角を占めるある集団の皆が皆、各々の形で全く同じ紅巾を身に着けていた。

彼らは皆、左手の甲に何らかの刺青——正確には紋章をまた刻んでいる。

彼らの名は〈紅巾党〉。

黄河に属するクランの一つであり、地球史実での〈黄巾党〉を振って紅いバンダナをトレードマークとする戦闘集団であった。

黄河の北方、龍都にほど近い地域を拠点とするクランであり、その

理念は——大して定まった取り決めも無いが——荒くれRPを主とする、一種のなりきりサークルである。

殺し、強奪、山賊紛いの横行が目立つ彼らだが、幸いにして今のところティアンを毒牙にかけることはなく、その矛先はかろうじて彼らと同じ「マスター」に向けられている。

「マスター」同士で完結するあらゆる出来事において、法律は一切関与しない。

ティアンに累が及ばぬ限りはたとえその間で如何なる残虐、殺害等が起ころうと、それを取り締まる司法の手は伸ばされない。

であるからしてティアンも今は対岸の火事として距離を取り、あるいは他人事のように耳を立てるばかりである。その根底にはつまるところ、「マスター」への無知と僅かばかりの無関心があった。

一時の騒がしさを除けば、彼らは実に羽振りの良い客であった。

なにせ「マスター」ときたらその大半が戦闘能力に優れ、戯れのようにモンスターを狩り、頻繁に姿を消す代わりのように盛大に金を落としていく。

酒食のみならず色の類までも、その不死性に起因する享樂故か、湯水の如く恵みを齎してくれるのだ。

「紅巾党」の面々も、「何か恐ろしげな集団だが、こちらに被害は無いし穩当に宍れる間は宍っておこう」というティアンの思惑と打算によって、多少の狼藉は目溢しされていた。

乱痴気騒ぎを起こそうとしている今も、店とその他の客に被害が出ない限りは静観しよう。

物の弾みでたった今給仕の娘が喧嘩に沸く二人の片割れに突き飛ばされ、どこぞの客の料理が散らかったが……それもまあ良いだろう。

注文した客には悪いが、無駄になった分の代金は原因となった集団に請求するし、同じものもすぐに作り直す。

それまではまあ、件の二人に野次を飛ばすなり、あるいは文句を引っ掛けでもして暇を潰しておいてくれ、と。

——そうした人々の暗黙は、事情を知らぬ流れ者に打ち砕かれた。

「なに人のメシ台無しにしてくれてんだ、テメエ……」
「あん？」

その声は張り合う二人の頭上から響いた。
互いに胸ぐらを掴み、至近距離で殴り合う二人の頭上——まさしく頭の上に手を置いて逆立つそれ。

声をかけるその時まで一切感知させぬ身軽さと素早さで、二人の頭を支えに逆立ちするのは、男達の半分程しかない背丈の、極めて小柄な少女だった。

彼女は何が気に障ったのか、尋常ならざる憎悪を二人へ向ける。

二人は勿論、それを取り巻く周囲の人間、同じクランに属するメンバー達はにわかに理解が及ばず、奇妙な格好で凄む少女を呆けて仰ぎ見る。

ややもして近くに散らばった料理を認めて、彼女の怒りの源がそこにあることを察して——

「死ねやクソが」
「わっ」

——悪い、と一言の詫びを口にする間もなく、その命を刈り取られた。

「!?」

「げ、ゲン……！　　デ、デスペナあ!？」

「おいおいおい、マジかよテメエ!？」

少女が触れた二人が光の塵となって消えたのを皮切りに、周囲はこれまでとはまた別の喧嘩騒ぎに満ちた。

いつも通りの喧嘩騒ぎと思いきや、有無を言わさず命を奪った突然の凶行。

ティアンと異なり死しても最短三日後には復活する不死の「ハマスター」といえ、目の前で確かに死んだこと事実には恐慌が奔り、遠巻きに見ていたティアン達がパニックに陥った。

「ひ、人殺しだああああ!!」

「に、逃げる逃げる！　　「ハマスター」の争いに巻き込まれるなんて冗談じゃない!？」

ティアンが一目散に逃げ出し、店員も恐れを為して隠れ潜む。

現場に残されたのは当事者である〈紅巾党〉の面々と少女——黒猫のみ。

誰もが若いと越えていつそ若い少女の蛮行に息を呑み、硬直していた。

「テメエら全員お仲間かよ、なら纏めて死ねクソ共」

黒猫は彼ら全員に共通する紅いバンダナを認め、彼らが仲間であることを察して殺意の矛先を彼らにも向けた。

それは直接喧嘩していた二人をデスペナルティに追い込んだ直後に起きた変化であり、まさしく猫の如く消え逝く二人を踏み台にして跳躍し、やはり音も重さも感じさせず彼らの頭上を跳ね回ってその手で触れると、先に消えた二人の後を追って一人、また一人と消えていく。

事ここに至り彼らやようやく今自分達が屠られようとしている事実を認識し、臨戦態勢を取った。

相手が子供だからといって容赦はできない。否、あれは子供の皮を被った化物だという恐怖が俄に過ぎり、それを振り払うように誰もが全霊で武器を振るった。

彼らは荒くれロールを主体とする集団であるように、皆が何らかの戦闘職をメインとする戦士達である。

〈Infinite Dendrogram〉発売間もない時期ながら既に幾つかの戦闘系下級職をマスターしている者もあり、その戦闘力は現時点においては折り紙付き。

また普段からパーティを組み連携した戦闘に手慣れていることもあって、最初の数人こそ不意打ちじみた一撃で殺られてしまったものの、相手が如何な凶暴な小娘として一人であるなら遠からず返り討ちにできる——はずだった。

「《心魂奪命拳》」

その目論見は黒猫が発動したスキルによって打ち碎かれる。

彼らをデスペナルティに追い込む直接の元凶こそは、「接触対象のHP・MP・SPのうち任意の一種を吸収する」【奪命神咒 ヒダルガ

ミ〕第二の固有スキル、《心魂奪命拳》。

今はHPに限定されたその妖拳が、対象が限定されるが故に《心魂奪命拳》以上の出力を以て敵のHPを瞬時にして根こそぎ奪い尽くす。

しかし彼らがその魔の手を振り払えず、為す術もなく死へ追い込まれてしまうのは、他ならぬ黒猫の体捌きこそにあつた。

単純に——速くて巧いのだ。【名軽業師】黒猫の、その一挙手一投足が。

まるで何もかもが見えているように、剣撃、殴打、魔法攻撃の全てが、紙一重で避けられる。

それは極々単純な生来センススキルの才能によるものであり、彼女の取得した如何なる戦闘職のアシストが働いた結果ではない。

真つ当な、システムの戦闘技能で言えば、現状取得しているジョブの全てを戦闘職で埋めた《紅巾党》の彼らに軍配が上がるはずが、ただ黒猫の才能のみを理由に覆される。

ある者は《看破》で黒猫のステータスを見破り、直接戦闘に寄与するジョブが【拳士】しか無いことに驚愕を露わにした。

剩え世間一般的には単なる芸人職でしかない【高位軽業師】、如何なる上級職とはいえ戦闘職と比べるべくもない非戦闘職をメインにしている遙か年下の小娘に圧倒されているという事実を疑った。

しかし如何に目の前の現実を疑おうとも、起こる事実は変わららない。

一人、また一人とその小さな手で触れられる度死へ誘われ、二〇はいたメンバーが今や五名にまで数を減らした。

本来であれば【ヒダルガミ】の第一の固有スキル——広域無差別襲奪結界の《心魂奪命拳》によって、こうして悠長に一人ずつ殺す手間も掛けず、一度に纏めて屠れているのだが……この場でそれを使つてはティアンまでも巻き添えにしてしまうという理性が、今の黒猫にもかろうじて残っていた。

《心魂奪命拳》を用いて一人ずつ殺すのはそうした理屈によるものだったが——同時に必ず殺すという感情の発露でもある。

なぜ黒猫がここまで怒り狂うのか。

彼女ならぬ彼らの身では理解が及ぶまい。傍から見れば報復にしても過剰にすぎる殺戮である。

しかし黒猫にとって己の食事を——命を奪われることは、その元凶の命を奪うに足る当然の論理であった。

何故ならば己が〈エンブリオ〉の特性こそ黒猫にとって最大の——

「そこまでじゃ黒猫！ 拳を収めよ!!」

そしていよいよ最後の一人を屠ろうという瞬間になって、場を一喝する大音声が響き渡った。

その発生源はティアンで唯一この場に残った老爺、福々とした体格の王大人である。

黒猫と共に店を訪れ、一連の凶行の始終を目撃していた老人が、恐れ知らずにも殺意の狂猫を叱責した。

「……………」

「そこまでじゃよ、ヘイヤ。如何な〈マスター〉同士の殺し合いとて、これ以上は見過ぎせぬ。もうヘイヤ、わしは獄に繋がれた御主を見とらないぞ?」

制止に立ち止まり、振り返った黒猫の瞳は暗く昏く濁っていた。

相対すれば意を吞まれること必至なその鬼気こそは、発端が彼女にとってこの上ない引鉄であったことの証左。

対峙していた〈紅巾党〉唯一の生き残りも、一転して隙だらけの彼女をしかし追撃しようとも思えず、今はただかろうじて命を拾った幸運を噛み締めるが如く震えていた。

「……………」

「ひ、ひっ!!」

その彼も、黒猫の一瞥で脇目も振らずに逃げ出したが。

その背を今度は追うこともせず、黒猫は沈黙を保ったままトボトボと王に歩み寄る。

俯かせた頭の上には酷く追い詰められたような余裕の無さを漂わせ、王と視線を合わせられないまま所在なさげに口を閉ざす。

その頭に、王は静かに掌を乗せ……。

「ほれ、悪さをしたあとに言うことがあるじやろう?」

「……………」

ゆっくりと撫でるうちに、ぼそりと黒猫が言葉を漏らした。

そこには普段の軽々しい様子は無く、バツが悪そうに言葉に詰まった少女だけがある。

「……完全に、やりすぎた。……じーちゃんにメーワクかけちゃった」

「迷惑したのはわしだけか?」

「……………」他の客にもメーワクかけた。あたしがみんなの食いモン台無しにしちゃった……」

「うむ、何が悪いかきちんとかわかっておるの。ならばこの後やることもわかるな?」

「……………」メーワクかけたみんなに、あやまる」

黒猫がぼつりとそう言うと、王はそこでようやく笑みを浮かべた。

頭を撫でる手の力を強め、すっかりしよげてしまった黒猫を慰める。

黒猫はされるがままに身を任せて、暫くしてから顔を上げた。

「ほれ、散らかした分は片付けんどの。わしは店の者に事情を話して、ちよいと説得してくるわい」

「……………」ごめんなじーちゃん、仕事なのにメーワクかけて」

「よいよい、この店主とは知らぬ仲でもないでな。ちよいと喧嘩騒ぎが大きくなりすぎただけのことよ。……他の人間に累が及んでおつたらさすがのわしも為す術が無かったがの、物で収まったなら余程でない限りはこれで丸く収まるもんぢや」

そう言つて親指と人差指で輪を作つて見せた王に、黒猫がニヤリと笑つて。

「それ、金持ちの理屈じゃんね」

「だつてわし、金持ちぢやもん」

おどけた風に笑つてみせた王は、すっかり元の好々爺だった。



■
???

一連の騒動が終わった後、唯一生き残った〈紅巾党〉の男は、息急
き切つて平野を駆けた。

たまたま酔いの回りが過ぎてくだらない喧嘩に至っただけの宴席。
それを散々にぶち壊した悪魔のような子供の凶行。

その恐怖を振り切るように店を出、町を出て——平野を駆け抜け、
山中に分け入り、一目散にアジトを目指す。

街道脇の小山、その中腹に打ち棄てられた廃墟を乱暴に片付けただ
けの根城に踏み入って、そこでようやく彼は平静を取り戻した。

「はっ、はっ、はっ……な、なんなんだよ、ほんとに……！　いくらな
んでも、ありえねえだろあんなの……。なんで、あそこまで……」

そして思い返すのは自分以外のメンバーを皆殺しにした悪魔の子
供。

状況的に、自分達が彼女の料理を台無しにしまったことがそも
そも原因であつたことは認識しているものの、だからといつてこう
も無残に報復される謂れもない理不尽を噛み締め身震いする。

必死に逃げて距離を置いた今でこそいくらかマシにはなつてきて
いるが……それでもなお、振り返ればあの魔の手が伸びてきているよ
うな気がして、己を掻き抱く腕を振り払えない。

徒党を組んでからこれまで、様々なモンスターや〈マスター〉と交
戦してきたが、そのいずれとも異なる剥き出しの殺意と敵意に、会敵
した時間は僅かながらも心は既に折れかけていた。

二〇を超えるメンバーがああも一方的に……幼い見た目の女兒に
いのように屠られるなど、誰が想像し得よう。

あれが本当に見た目通りの人物であるという確証は無いし、あまり
に隔絶した力量から中身はアバターとは別物だろうという憶測が
あつたが、そんな些事がどうでもいいほどに恐ろしい。（無論、真実は
アバターの見た目通り齡十にも満たないお子様であつたが）

「おうおう、どうしたんだんな湿気たツラしやがって。なあにがあつ
たあ？」

「お、おやぶうん……！」

恐怖のあまり蹲って嗚咽も漏らし出した彼だが、その背中に別の男の気遣う声が届いた。

如何にも男らしい、しわがれ、酒焼けした胴間声に振り返れば、そこにはその声音に似つかわしい筋骨隆々とした偉丈夫が立っていた。

逃げ帰った男に”親分”と呼ばれたその男は、可愛い子分がズタボロになってしがみついてくるのを受け止め（ついで鼻を噛みだした彼をぶん殴っていたが）、何があったのかを問うた。

彼は、事の次第をつぶさに報告し、自分達を襲った悪魔の子供の恐ろしさを青褪める顔で必死に語る。

対する親分——〈紅巾党〉オーナー【大 軍 師】アツシマンは、グレイト・ウオーリーダー

照的に笑みを深めて興味を持ったようだった。

「へえへえ、芸人の小娘一人にお前以外がなあ……？ そりやまたなんとも、とんでもねえ話じゃねえかあ」

「すいやせん親分……オレにはどうにもできませんでした……。まるですばしっこくて、一方的にやられて……」

「なに、なあに、気にすんなあ……。相手は俺達と同じへマスターさま、そういうこともあるだろう。ガキも大人も関係無え、ゲームの強い弱いなんざありふれたことさ……。お前が気に病むことじゃあない」

詫びる男の心中には、むぎむぎ仲間を喪わせてしまった後ろめたさがあった。

しかしアツシマンはそうした彼の弱みを見透かし、だが決るような真似はせず心底気遣わしげに、優しく囁く。

「だが、だがああ……ケジメはつけにやあなんねえ。やられたらやり返す、自分の納得行くまでなあ。そうだろう？」

「う、うつつ……！ 相手が子供でも、容赦はできません……。ただその、オレ一人だけではとてもじゃないですが……」

アツシマンに諭され、僅かながらにいつもの調子を取り戻す男だが、しかし直接報復することを考えると途端に及び腰になる。

アツシマンはそれも当然と鷹揚に頷いて許すと、彼の意図するところを察して言葉を繋げた。

「俺達は同じクラン、徒党を組んでやってるんだ。つまりは兄弟……俺達は家族だ。家族がやられたんだ、家族皆でやり返すのが筋さあ。え、そうだろう?」

「うっす! だから親分、お願いします!!」

兄弟、家族と沁み入るように囁き諭し、男の目に光が戻る。

アツシマンは、立ち直った愛すべき子分に目を細めて、ゆっくり頷いたあとに宣言した。

「よし、ようっし……ならやることあ決まったなあ。やられた連中のデスペナが明け次第乗り込むぞ。件のガキはしつかり見張つとけえ? トンズラこかれちゃあ興醒めだからなあ……おうセンセ、話は聞いてたなあ?」

「よくわかりませんが、仕返しですね? 良いでしょう。あなた方を蹴散らしてみせた悪魔の子供、興味があります」

アツシマンの言葉に、更に奥から応答が届く。

それはしわがれ粘着くようなアツシマンの声とは異なり、涼やかな色気に満ちた女の声だった。

暗がりから現れ出たのは、息絶えた熊を担いだ金髪碧眼の女。

熊——かつて黒猫が迅羽と共に仕留めた「デミドラクヘアー亜竜狂熊」の巨体を軽々と持ち上げ、事も無げに投げ捨てる。

その亡骸は生前の隆々たる筋骨が跡形もなく、投げ出された地面にへばりつくように形を崩した。

——まるで皮の内側が爆発四散したように。

「わたくしと打ち合える猛者であることを期待したいですね。とても楽しみです」

女は鋼の両腕を打ち鳴らし、報復に沸く彼らとは別の笑みを浮かべた。

早くもお礼参りじゃんよ

□【名軽業師】黒猫

「この……………バツカモオン!!」

「みぎやあつ?」

プツツンしてやらかした直後、騒ぎを聞きつけたヤンのおっちゃんに拳骨を食らった。

痛みは無いけど信じらんねーほどの衝撃が全身を駆け抜ける。

顔を真赤にして鼻息荒くしたおっちゃんは、今まで見たことがない程に怒っていた。

「本当に……………少し目を離れた隙になんということ……………まがりなりにも大人の護衛として就いているのに、自ら騒動を招くような真似をするなど……………! 如何に貴様が子供といえ恥を知れ! 現状を弁えろ!!」

「悪かったじゃんよ……………」

脳天を擦りながら詫びの言葉を口にする。

膨れ上がった頭がおっちゃんの怒りの強さを表していた。

「大人は貴様に甘いから大して取り沙汰さなかっただろうがな、貴様のやったことは人道を外れた獣のそれだ! たかだか料理の一つや二つを台無しにされたところで、手を上げるだけならまだしも殺しにかかる奴があるかっ!!」

「た、たかだかじゃねーもん!!」

聞き捨てならない文言に口答えするが、おっちゃんの拳骨が再び落とされる。

同じところを二度もぶたれて、腫れがますます酷くなった。

「だとしてもだ! 貴様の行いを聞くにお前にとつて看過できぬ事情があつたのだろう……………しかし、だからといってあまりにもやりすぎだ!」

「わ、わかってるよ……………」

「いいや分かってない! 分かっているれば大勢の人がいる中であのよ
うな真似をするものか……………理解しているのか? 一歩間違えれば

テイアンをも死なせてしまっていたのかもしれないのだぞ!？」
「っ……」

その言葉にさすがのあたしも言葉に詰まった。

あの時、半分我を忘れながらも拳を使うだけに留めたのは、あいつらだけを確実に仕留めるためだった。

だから店にいた他の人間には一切影響を及ぼしてないし、直接巻き込むことはなかったけれど……騒動から逃げる途中で、少なからず怪我をしたやつも中にはいる。

そうでなくともあの喧嘩騒ぎでみんな飯食う時間を台無しにされたわけだから……台無しにされてキレたあたしがそれだと、本末転倒だ。

それはかなり、かつこつかねー。

完全にブーメランじゃんよ。それにあたしの攻撃に巻き込まないとは言ったけど、ひよっとしたらあいつらが応戦する中で流れ弾が当たってたかもしれないかった。

そう考えると、間違っても樂觀視なんて出来っこない。発端となつたのはあいつらだけど、そこに火を付けて油を注いだのは、完全にあたしだ。

「ごめんなさい……」

「……………はああああ、まったく。〈マスター〉には常識知らずが多いと聞くが、お前は極めつけだな。いや、そもそも発端となった〈マスター〉の一人もだが……まあいい。幸いにして、他の人命に害は無かった。大人の取り成しもあって、かろうじて指名手配には至るまい」

指名手配。

その言葉の持つ意味は〈マスター〉にとって——この〈Infinite Dendrogram〉を遊ぶプレイヤーにとって、これ以上無く重い。

詳細は知らないけれど、指名手配によって国に居場所がなくなった〈マスター〉は、何処とも知れない〈監獄〉へと隔離されてしまうのだという。

数は少ないながらも既に何件かそうした例は起きていて、〈監獄〉送りにされるようなへマスターの罪状はテイアンに対する殺人や強盗といった重いものばかりだ。

刑期も数年どころか数十年に至ることがほとんどで、それは実質七大国への復帰が絶たれることと同義。

それはつまり、今後この世界で起こり得る様々なイベント、シナリオへの干渉が閉ざされたことを意味し、およそゲーマーにとって最悪の刑罰だろう。

今更ながら事の危うさを思い知らされて、さすがのあたしも肩身が狭い心地だった。

「大人は寛大な御方ゆえ面と向かって口にはすまいが、此度の騒ぎで大人が被った損害は貴様が考えている以上に重いものだ。損壊した店舗の修繕費、店員と客への賠償、信頼回復のための根回し……ざつと挙げるだけでもこれだけの手間が掛かっている。時間も金も、労力までも大きく関わるものだ。本来であればクエストを遂行している場合ではない。大人でなければ果たしてどうなっていたことか……」

おっちゃんが例を挙げるたびに体の中がキリキリ痛むような感覚を覚える。

だけどそれは、実際に後処理に回るじーちゃんやおっちゃん達はもつと感じていることだろう。

しでかした事に対する責任を持ってないあたしの未熟が、完全にあたしから反論の余地を奪っていた。

あたしらしくもなく、借りてきた猫みたいにだんまりを決め込む羽目になっていた。

「……流石のお前も存分に堪えたようだな。二度と同じ失態はするんじゃないぞ、わかったな？」

「……………うん」

「ならばよし。説教は終わりだ。店主にも謝っておけ。殺しなどと物騒なことが起こりはしたが……へマスター相手に留まっていたから最悪は免れている。誠心誠意頭を下げて、手伝いでもするのだな」

「うん、わかった」

そう言うとおっちゃんは、じーちゃんがしてくれたようにあたしの頭を撫で回して背中を押した。

初めは堅物でいけ好かない大人だと思ってたけど、こんな時でも切り捨てずあたしを叱ってくれたおっちゃんは、やっぱり良い人なんだと心の底から思えた。

◇

結果として店主のおっちゃんはあたしの謝罪を受け入れてくれた。あたしが子供だからというのもあるだろうが、喧嘩の相手があたしよりも一回り以上上の男ばかりということもあって、へマスター同士の間諍いという前提の上でややあたしに同情的だったのが救いだっただ。あのときあいつらの内の二人の喧嘩に突き飛ばされたねーちゃんが、あたしの料理が台無しになったことが原因ということの説明してくれたのも大きい。

今度あいつらがやってきたらぼったくってやると冗談交じりに笑い飛ばした店主のおっちゃんの顔は、言葉とは裏腹に獰猛だった。

そして何か手伝いをと申し出たところ、じーちゃんから話を聞いていたおっちゃんが、「なら芸をやって客引きをやってくれ」と言ってきた。

あたしが【名軽業師】であることを見込んで、大きな町以外ではそうそう見れない雑技を大道芸として演じてくれ、と。

「勿論タダ働きになるがな」と豪快に笑ったおっちゃんにあたしは快諾し、衣装を変えて小道具を持ち出し、店先で大道芸を披露することと相成った。

その結果は上々といったところだろう。

あの騒ぎを覚えている客への配慮として、あの時着ていた平服から派手な舞台装束に変えたのと、顔を隠すための覆面を着けたのが上手いことカムフラージュになってくれた。

この覆面は龍都で別の雑技団でクエストを受けたときに教えてもらった”変面”に使うもので、向こうとしては「やれるものならやってみろ」という魂胆から一度見せてもらった芸なんだけど、生憎あたしは一目で覚えちゃったもんだから一種の隠し札にしていた。

人前で披露するのがこれが初めてだ。BGMを流す魔道具に合わせ舞い、リズムに乗せて次々と覆面を一瞬で変えれば、道行く人々も思わず足を止めて釘付けになる。

その合間合間に〈万景酒家〉の宣伝も挟めば、芸が一段落したタイミングで小腹を空かせた客が店へなだれ込むという寸法だ。

果たしてその目論見は的中し、つい先日の騒動など忘れたように客が殺到し、あたしが初めて店へ入ったとき以上の喧騒を取り戻した〈万景酒家〉があった。

お客さんからの評判は言うまでもないが、じーちゃんとおつちゃんがあたしの芸に目ン玉ひん剥いてたのが驚きだった。

曰く”変面”はあの一座にとつては秘奥中の秘奥ということで、門外不出の演目だとのことだが、真似できてしまったものは仕方ないじゃんね。

あたしがそう言うとしーちゃんは大笑して「盗み盗まれこそ芸の道、切磋琢磨の本懐よ」と言ったので、きつと問題は無いのだろう。

こつそりタネを教えてくれとも言われたが、それは丁重にお断りした。あたしだって芸人の端くれ、飯の種をむぎむぎくれてやるつもりはないじゃんね。そう言うとしーちゃんは一段とまた笑っていたけど。

そうして三日間店先で芸を披露していると、店の名とあたしの存在は瞬く間に評判となった。

三日というのは、最初は一日だけのつもりだったが、思わぬ反響を呼んで引き止める声が強くなり、店側の要望と、それを面白がったじーちゃんの意向もあつて更に一日、そしてまた引き止められて更に一日、と引き伸ばしにされてきた結果だ。

当初想定していた以上の客数と賑わいに、タダ働きだと言っていた店主のおつちゃんが意見を翻して、芸を披露している間の食事は全部タダで食わせてくれるとの申し出があった。

しかもおかわり自由、なんでも好きなのを食えと言ってくれたから、あたしも言葉に甘えてこの三日間で粗方制覇してやった。おかげで胃袋が空く暇が無い。

中にはサインをくれという意見もあって、それは店からも同様だった。あたしは初めてのサインに慣れない手付きで色紙に名前を書くと、それは店で一番目立つカウンターの梁へと飾られた。

正直、すげー嬉しい。あたしの失態を芸で挽回して、それが認められたというなによりの証だから。

この三日間、あたしはリアルの都合も忘れて芸の披露に夢中になり、〈万景酒家〉の招き猫を演じていた。ただどいつまでもそうしてはいられない。

三日目の夜が更け、そろそろ此処を発たねばという楊のおっちゃん
の提言もあって、この日を最後に芸納めとし、四日目を丸一日休息にあてたあと、五日目に此処を発つことが決められた。

その予定を店に告げると、店主のおっちゃんのみならず店員のみならずそれが惜しんでくれて、一段と豪華な飯を用意してくれた。

特にあの騒ぎで恐れられていたあたしがこうも受け入れられると、ようやく許されたような気がして、かき込む飯の量も増えるというものだった。

此処の人達は優しくて豪快だ。あたしに好きなかだけ飯を食わせてくれるし、なにより褒めてくれるし叱ってくれる。

すっかりこの町が好きになってしまったあたしは、いつかまた必ず此処へ訪れて芸を披露することを約束すると、店のおっちゃん達はそれを待っていると言ってくれた。

あたしの、このゲームでの目的の一つに此処を再び訪ねること——
黄河中を旅することが加わった瞬間だった。

◇
そうして三日が過ぎ、四日目の朝。

既に芸納めの看板が立ち、告知が渡ったにも関わらず店は相変わらずの繁盛を見せていた。

あたしの芸がもう見れないことを惜しむ声があるのが誇らしくて、隠れてその様子を眺めるのがなんとも楽しい。

芸人としてのあたしは覆面をつけっぱなしで素顔を隠していたから、騒ぎの当事者があたしだってことは知られてないけど、でも素顔

隠して芸を披露したあたしが今更ノコノコ出ていくのも無粋に思えたから、こうして陰から様子を見守るに留めている。

……なんつーか、あたし。

あの騒ぎを機に親しい大人からガチで叱られたせいで、ここ数日すげーおとなしかったじゃんね。

自分で言うのもなんだけど、この優等生誰よって感じで。あつちやんに知られたら爆笑必至だわ。

こんな野良猫みたいにこそ様子を探うなんて、ちょっと前までのあたしならぜってーありえないことじゃんよ。

なんつーのかな、初めて人の役に立った実感があるっていうか。

柄にもなくセンチメンタルな感傷に耽るあたしがいる。

つかさあ、振り返るとガチの説教がすげー心に刺さってたんだけど。マジでゲームの範疇越えてんじゃんね。

ゲーム……ゲームかあ。間違いなくゲームだけどき、その実情を深く考え出すと頭ン中グルグルしだすわ。

そんなことを考えながら店先を眺めていると、見慣れない人間が現れたのに気付いた。

気に留めてしまったのは黄河のティアンに珍しい、正統派西洋人っぽい白人の、金髪碧眼のねーちゃんだったからだけど、それ以上に風体が異様すぎた。

というのもお嬢様っぽい顔立ちや髪型（ギブソンタックって言うんだっけな）もだけど、その両腕が問題だった。

袖から剥き出しになった両腕が、余すことなく鋼に覆われている。

いや、鋼そのものが腕になったというべきか。つまるところ細っこい見た目に反して仰々しい鋼の義肢が、明らかに堅気ではないことを示していた。

よくよく見ればその義肢の左腕部分、その甲には紋章らしきものが刻まれている。その特徴を持つものはこのデンドロにおいて一つきり。すなわち「マスタール」だ。

「あら？、ここに芸が見られると聞いていたのですが……いませんね？ 今日はまだ店仕舞いかしら」

店先をうろちよろしているそのねーちゃんは、どうも芸を目当てにやってきたようだった。

置かれた看板にも気づかず、あちこち見回ったり、見当違いの場所を覗き込んだり、かなりズレた印象の天然さんだ。

あたしが芸を披露したのは三日だけ。だけどそれだけあれば近隣に噂が届くのもおかしくはないだろう。それを聞きつけた物好きな〈マスター〉がわざわざ足を運んできたということなのだろうけど、こればかりはご愁傷様じゃんね。

「芸は昨日で終わりじゃんよ、ねーちゃん。一足遅かったね」

「あら、そうなんですか？ 評判だったからせめて一目でも見ておきたかったのですけれど……」

見かねて声をかければ、ねーちゃんはとぼけた表情であたしを見下ろした。

ねーちゃんの背丈は小柄なあたしと比べて頭二つ分程高い。だけど間近で見上げた顔は抱いた印象通りのお嬢様で、ゴツイ腕が無ければお忍びの御令嬢と言ってもおかしくなさそうな雰囲気だった。

ねーちゃんは困ったようにうんうんと唸って、次いであたしの顔を見てパツと表情を変えた。

そして探しものを見つけたと言わんばかりの明るい顔で、両手を組んで笑う。

「だけどご本人がいらっしやるのなら問題無しですね♪ 機を窺う手間が省けました！」

「あん？」

そう言い放った言葉の指すところは、あたしが件の芸人であることを見抜いたという前提のもので。

思わぬ反応に呆気にとられたあたしを、想像以上の機敏さでその腕が掴み上げるのを気付くのに遅れた。

「突然の訪問申し訳ありません。わたくし、貴女に用があつて訪ねさせていただきましたの」

「用って……なにさ？」

鋼の右腕であたしの襟首を掴み、猫をそうするように持ち上げる

ねーちゃん。

今は《軽業》もオフにしたまま、本来の体重が掛かっているのを……まるで紙人形でも摘むように軽々と。

無理矢理視線を合わせられあたしに用があると云ったねーちゃんの顔には、あたしをどうこうしてやろうという害意は一切見えなかった。

「ええと、確か……親分さんが言うには「四日前の借りを返す」とのことですが、ご存知でしょうか？」

「……………ああ、そういうことかよ」

成程ね……あ那时的連中の手先ってことか。

あたしの飯を台無しにしてくれたクソ野郎共——つと、あたしはちゃんと反省したんだつた——もとい、《マスター》集団のお仲間か。

確かに、向こうからすればたかだか料理一つで命を奪われたんだ。理不尽に思っただけ報復を考えてもおかしくはねえわな。こっちの時間で三日以上経ってるから、あるとき《デスペナ》った連中も復帰してるだろうし。

「アンタの顔は見てねえんだけど？」

「わたくしも人伝に聞いただけです……ああ、申し遅れました。わたくし、今は克蘭《紅巾党》の食客を務めさせていただいているステラ・ザ・デストラクトと申します」

おつかねえネームしてんね、おたく。

それに《紅巾党》か……名前からして三国志の捩りだろうけど、そんな名前を付けるってことは、そういう克蘭だつてことなんだろうけど……。

思ってた以上にめんどくせえ連中に絡まれたじゃんね。いや自業自得つちやそうなんだけどさ。

「親分さんからは「是非お礼がしたい」とのことで、貴女をお連れするよう言われていますの。まことに勝手に恐縮ですが、御同行願えますでしょうか？」

「……………なーねーちゃん、お礼がしたいってどういう意味だと思っ？」

「？ 御持て成しをするのではないのですか？」

あ、ダメだこのねーちゃん。ド天然だ。

言ってる言葉に裏も表も無くて、根っこのところでなんか勘違いしてる顔だコレ。

「御持て成しした後には、わたくしと試合っていただけると聞いているので、大変申し訳ありませんがご遠慮はなさらぬようお願い申し上げますね」

「ひよつとしてねーちゃん、河原で殴り合ったら友達になれるとか思っているタイプ？」

「まあ♪ ジャパンの少年漫画ですね！ わたくし、そういうのとっても素敵だと思います！」

どういう思考回路してんだコイツ。世間知らずというか、浮世離れしてるにも程があんじゃんよ。

とはいえこの手を振り解けそうにないし、このねーちゃんはともかく親分さんとやらはガチであたしを狙ってるっぽいし、こりや否とは言えないじゃんね。

にしても食客か……。てことはつまり、このねーちゃんは〈紅巾党〉の正式メンバーってわけじゃないんだろけど、さにあらん。こんな天然を抱えるなんて、クランとしちやちよつと難しいだろうし仕方ないじゃんね。

なんつーか……。お嬢様のツラして中身は猛獣みたいな、そんな第六感がビンビンしてるじゃんよ。

「では参りましょうか。少々飛ばしますのでご注意くださいいな」

「その前にこの持ち方はやめてほしいんだけど」

「……まあ！ これは気付かず申し訳ありません。それでは失礼しますね」

襟首を掴み上げるのに抗議したら、なぜか今度は横抱きにされた。所謂お姫様抱っこってやつだ。別にそれに特別なイメージ抱いてるわけじゃないけど、だからってこういう持ち方を選ぶあたりこのねーちゃんどっかおかしい。

普通おんぶとかでいいだろ。なんで無駄に男前なんだこいつ。

そうしてあたしを横抱きにしたねーちゃんは膝を曲げると——そのまま天高く跳んだ。

ただのジャンプで高空へ躍り出て、ひとつ飛びで町を越え、平野を越え、丘を越えて小山へ踏み入る。

一歩一歩が凄まじい跳躍力を発揮して、じーちゃんの竜車なんて目じゃない速さで駆けた。

その様子からこのねーちゃんが、少なくともあたしと同格以上の使い手であることを察する。

一目であたしが件の芸人だつてことに気付いたのも、おそらくは《看破》のスキルによるものだろう。

それはつまり、このねーちゃんが根っからの戦闘屋であることを意味していた。

そうしてあたしは、クラン〈紅巾党〉の根城へ招かれた。

交渉決裂じゃんよ

□【名軽業師】黒猫

ねーちゃんもといステラに連れられてやってきた場所は、山茶郷から幾らか離れた山中に打ち棄てられた砦だった。

半ば廃墟と化したかろうじて雨風が凌げるだけの内装に、無秩序に持ち寄られた家具の類が調和も無く並べられている。

スペースが広いだけの物置のような広間に、あたしを抱きかかえたステラは天井から着陸して降りた。

「スーパーマンっつーよりはハルクじゃんね。マジで乱暴だなテメー」

「申し訳ありません。これが一番手っ取り早いものでして」

着陸の衝撃で舞う塵埃を振り払いながら悪態をつく。

あたしの皮肉が通じた様子も無く、ステラはあつけらかんと答えた。

素直過ぎるその態度はあたしよりもずっと子供じみっていて、まるで年上を相手にしている気がしない。

ついでに言うと、同じ人間を相手してる気にもなれない。まるで人語を解せるゴリラと話してるみたいだ。つまりメスゴリラじゃんね。

「で、だ……お望み通り来てやったけどさ。いつまで隠れてるつもりじゃんよ」

周囲をゆっくり見回し言葉を放つ。

向こうは隠れてるつもりだろうけど、生憎あたしには筒抜けだ。

別に《気配感知》のせいじゃなくて、単純にあたしの感覚が存在を捉えているだけだけど。

僅かに身動きした際の衣擦れや、殺し切れていない小さな息遣い。なによりあたしに向けた意識の鋭さがビシビシと突き刺さって、それで隠れているつもりならとんだお笑い種じゃんね。

「ビビってねーで顔出せよ。別に取って喰いやしねーよ」

「……はっ！ 冗談かよ」

だね、我ながらナイスジョークじゃんよ。

あんときは文字通り取って喰ってやったけど、今日のあたしは淑女的だ。

とりあえず問答無用でブツ殺すことだけはしねーでやる。

あたしの挑発に顔を出したのは、あるときに見た紅いバンダナを巻いたへマスタァ〜だった。

つつてもあるときは頭に血が昇ってたせいで顔なんざ覚えてねーし、そもそも覚える気もなかったけど、その紅いバンダナだけは唯一最大の目印として印象に残っていた。

そうした連中がぞろぞろと、物陰から次々に顔を出す。

ざっと見て二〇人くらいか。大体はあるときあの店にいた連中だろう、あたしを見る目に隠し切れない恐怖が混じっている。

例外は……すぐ後ろのステラに、真正面の暗がりから出てきた男か。

連中であって頭一つ抜けた気配を漂わせる、首に紅いスカーフを巻いた筋肉もりもりのマツチヨマン。

見るからに野性的な、盛り上がる筋肉をさらけ出し剛毛を揃えたそいつが連中の頭で間違いない。

そいつはあたしを見るなり驚いたように表情を変えると、ついでおかしそうに腹を抱えて笑った。

傍に立つ子分の肩をバシバシ叩いて抱腹絶倒すらしている。

「おいおい……マジかよお前らあ……！　こんなガキにやられたってのなあ!?　冗談キツイぜまったく……ここ最近で一番笑えるぜ……」

「じよ、冗談じゃないですよ親分！　マジでこのガキがやりやがったんスー！」

見た目に反してねちっこいイントネーションのそいつは、どうやらあたしの見てくれに意表を突かれたらしい。

自分の腰ほどまでしかない小娘相手に良いように蹴散らされたのが、よっぽど冗談めいておかしかったのだろう。

笑うしかないといった風に、小さく涙すら浮かべる瞳の色は剣呑だった。

「はあ……笑った、笑った……。まったく笑わせてくれるぜ、お前らはよお……」

「芸も見せてないのに笑われるなんざ心外じゃんね」

「おまけに戦闘職でもないとききた。いや悪いねえお嬢ちゃん……。うちの子分が不甲斐なくてなあ」

ひとしきり笑ったあと、ニタリとした笑みを浮かべたそいつは——そのまま釈明した子分の首を叩き斬った。

「はへっ——？」

そいつは何が起こったのかも理解することなく、首を落として光の塵と化する。

頸椎損傷による即死効果。すなわちデスペナルティだ。

「あとは……おうデンジい、こつちこいやあ」

「ひっ!？」

唐突な凶行を、しかし何事でもないかのように捨て置き、また別の男の名を呼ぶ。

呼ばれて血相を変えたそいつは涙を浮かべて後退るも、他のメンバーに押されて親分の前へと連行される。

差し出されたそいつも、差し出した連中も、皆一様に恐怖の色を浮かべていた。

「お前と……さつき殺ったハルヤンだったな。騒ぎを引き起こしたのはあ……」

「はあっ!?! やっ、な、なんで……!?! 親分、カタキ取ってきてくれるんじや——」

抗弁するデンジとやらを、聞く耳持たず手にした鉈で叩き斬る。

そいつもまた、さつき死んだやつと同じように、身体の部位を欠損して出血多量の後に死んだ。

その光景を誰もが——メスゴリラは他人事のようにのんびりしていたが——青ざめた顔で見送り、恐怖に震えた。

一連の流れから察するに、今しがた死んだ二人があのととき店で喧嘩していたやつらなのだろう。

つまりは直接の原因となった二人。だけどそいつらをわざわざあ

たしの目の前で殺す意図は何か。

「ケジメってワケ？ 随分と潔いじゃねーの」

「悪いことをしたら謝らないとなあ……？ 誰だっておまんま台無しにされたら怒るさ……俺だって怒る……。気持ちはどうくわかるぜえ……」

ニタニタとした笑みを浮かべたまま、そいつは「悪いことをした」と頭を下げた。

随分と軽い頭だ。しかしそれを子分どもが驚く様子もない。変わらない恐怖の表情でそれを見守っている。

粗野な見た目。それに反する陰湿な口調。

最初に見せた子分を気遣う優しい態度。しかし有無を言わさず二人を殺した冷徹。

それが素にしろロールにしろ、酷く不安定で薄気味の悪い男だった。

「あたしは「四日前の借りを返す」って聞いたんだけど？」

「ああ、返させてもらった……ケジメはちゃんとつけないといけないからなあ……。これで許してもらえるかい？ お嬢ちゃん……」

「……まあ、別に。それでいいケド。……あたしもやりすぎたって頭冷やしたあとだし」

「そうかい、それはよかったあ……これで心置きなく話ができるってもんだあ」

話？

それこそ話が見えず疑問を顔に出すと、そいつはニンマリと笑顔を浮かべる。

……つくづく笑顔の胡散臭いやつじゃんね、こいつ。ねちっこいタ
イプって嫌いだわー。

「単刀直入に言おうかあ。——お嬢ちゃん、俺の子分にならないかい？」

「はあ？ 冗談かよ」

思いがけない言葉に思わず白けた声が出る。

茶番のような詫び入れにも呆れたが、言うに事欠いて喧嘩売ってく

れやがったあたしに仲間になれなんざぶざけてんね。

確かに手打ちにするとは言ったけどさあ、だからってこいつらのことを許したつもりは欠片もねーじゃんよ。

ましてや子分とか、こいつを親分呼ばわりするなんて鳥肌が立ちそうだ。

第一あたし、そういうの柄じゃねーし。

「楽和……いや燕青もいいなあ。ちようどそこは枠が空いててねえ、お嬢ちゃんなら中々ハマると思うんだがねえ……？」

「ガクワ？ エンセー？」

「おやあ、水滸伝をご存知でない？ 楽和は歌の名人、燕青は……なんでもござれのイケメン超人さあ、腕も立つぞお。今なら燕青の枠をプレゼントしちゃうよお？」

「ワケわかんねーし。そもそもあたし、アンタの名前すらしらねーしだけ」

生憎あたしは三国志派でね、水滸伝なんてタイトルの名前しか知らねーじゃんよ。

「おっと、これは失礼……俺はアツシマンっていうのさあ。クランへ紅中党のオーナーを務めてる。当面の目的は百八人のメンバーを集めることだねえ……お嬢ちゃんには是非とも仲間に加わってほしいのさあ」

「三国志か水滸伝かはつきりしろよ。つーか名前も思つきり横文字じゃんか」

「そこはほら、成り行きてやつでねえ……正直名前変えられるなら変えたい」

最後の一言は素だった。

しかしねえ、百八人の部下か。

触りしか知らないあたしでも、水滸伝は百八人の好漢達が主人公の物語ってことは知ってる。

それになぞらえてか肖ってかは知らないけど、わざわざ百八人になるまで集めようってのは、なかなか筋金入ったファンってことかね。

「ちなみにその金髪ねーちゃんはどーなのよ？」

「うん、誘ったんだけどねえ……趣味が合わないって断られちゃったのさあ。目的は今のところ一致してたから、協力体制ではあるんだけどねえ」

「ちなみにわたくしも「燕青はどうだい？」と誘われましたの。お揃いです」

「いや知らんし。喜ばれても困るし」

背後から嬉しげなねーちゃんの声が聞こえる。

むさ苦しい男所帯のなかで紅一点というのもあるが、そうでなくともこの浮きつぷりはとてもじゃないけど水滸伝って柄じゃねーじゃんね。

「で、どうだい？ その気になってはくれないかなあ……？」

「分かりきってること聞くんじゃねーよ。あたしも趣味が合わないじゃんよ」

再度放たれたアツシマンの間にNOを突き付ける。

考慮するまでもなくお断りだ。

水滸伝なんてキョーミねーし。そもそも発端からして許す気はねーし、第一こいつら全体が気に食わねえ。

つーかあたしは現在進行形でクエストの真つ最中。

更に言うとな【名軽業師】としてまがりなりにも芸を磨いている最中で、この先もあちこち旅する予定。

じーちゃんとおっちゃんとの三人旅の今でさえこいつらのせいで順風満帆とはいってないのに、何が悲しくてその元凶に付き合わなきゃならんのだ。

拉致同然に連れられて茶番の詫び入れを受け入れるだけでもめんどくせーのに、もう一段とめんどくせー真似を受け入れるワケねーだろバアカ。

そういうわけでも中指をおっ立ててから親指を下に向ける。

これを最後にテメエらとは金輪際関わる気はねえからそこんとこヨロシクじゃんよ。

「ま、つまりは寝言は寝て言えってことじゃんね」

「……………そっか、そうかあ。残念だなあ、本当に残念だあ…………。これ

はもう……ケジメつけてもらうしかないねえ……!」

交渉にもなっていない駄弁り合いは決裂した。

アツシマンから膨らむ殺気に総身を動かし上空へと逃れ出る。

その瞬間にさつきまであたしがいた場所へ、四方八方から攻撃が繰り出された。

◇

□山茶郷近郊・〈紅巾党〉アジト

「総員戦闘開始、——殺せ」

「「ウオオオオオオオオ——!!!」」

先程までの恐怖はどこへやら、アツシマンの号令一下で子分達が威勢を放つ。

以前に店で戦ったときとは比べ物にならない動きのよさに攻撃のキレ。

間違はなく何らかの強化が掛かっていることは明白。

見れば頭であるアツシマンを中心に、形無き力場が濃密に展開しているのが察せた。

「《怒涛の攻陣》展開、一気呵成に攻め立てなあ……出し惜しみは無しだ、こつちもいくぜえ……!?!」

次いでアツシマンが左手を掲げ、そこに描かれた紋章が淡く輝く。

最初に展開された力場に上乘せされるように、別格の重みを孕むそれが展開される。

《看破》を持たぬ黒猫には知る由もないが、最初に展開されたのはアツシマンのメインジョブ「大軍師」が得意とする広範囲バフによるもの。

その効果範囲はスキルレベルに準拠し、《怒涛の攻陣》は攻撃力とA GIに補正を与え、その名の如く怒涛の猛攻を後押しするスキルだ。

そして、次に展開された力場こそは「大軍師」のジョブスキルに依らぬアツシマン個人のオンリーワン。

即ち「好漢演義 リョウザンパク」の固有能力に他ならない。

中国の四大奇書の一つ〈水滸伝〉にルーツを持つそれは、物語中で百八人の好漢が集った通り自らに味方する百八人までに強烈なバフを發揮する、広域強化系に属する〈エンブリオ〉であった。

ジヨブによる範囲内強化と、〈エンブリオ〉による人数限定強化。

二重のバフによつてクランメンバー達のステータスは跳ね上がり、本来は下級でしかないそれが上級に迫るまでに強化されている。

その結果たるや凄まじく、野良犬の集団が統率された狼の群れが如く豹変し、卓越した連携を以て黒猫を四方から取り囲み、その包囲を狭め間断無く攻撃の雨が降り掛かる。

「おいおいおい、ケジメはつけたんじゃねーのかよ?」

「お嬢ちゃんに迷惑かけた二人の分はつけたけどねえ、お嬢ちゃんに殺られた分はまでケジメつけられてないからねえ!」

「ギャハハハ、最初からそうしとけてんじやんよお! 下手な芝居してねえでさあ!」

が、しかし。

黒猫は却つて上機嫌となり、哄笑を上げる余裕すらあつた。

尋常の〈ハマスター〉であれば、たとえ上級であつてもたちまち屠られていたであろう逃げ場無き連撃の嵐。

本来地上でしか戦う術の無い戦闘職の類であれば、如何な攻撃力や耐久力を誇ろうが、打つ手も無く、遠からず削り切られていたであろう渦中。

しかし縦横無尽の身軽さを以て右に出るものはいない【軽業師】、その上位互換にして本人も卓越した身体操作能力を誇る黒猫にとつて、その攻撃は笑えるほどに隙だらけだつた。

戦端を開くや否や、各種スキルを發動した黒猫は上空へと跳躍。

本来死に体となるしかない宙空にあつて神妙極まる重点移動と身体操作によつて泳ぐように位置を変え、するりと包囲を飛び越えて外部へ逃れる。

それに気付いた内周のメンバーが他の仲間へそれを伝えるが、嘲笑うように外周にて遠距離攻撃を放っていたメンバーの背へ黒猫の手が添えられる。

「《心魂奪命拳》」

「ひっ、あ、あの手だ！ ヤツに触れられるな、奪われる!？」

幾重にも掛けられた強化によって、かつてのように即死するまでには至らないが……ほんの数秒触れられただけで増量されたHPの多くが削られ、先の死に際を思い出した獲物が恐怖の声を上げる。

黒猫はそんな彼を心底面白がるように、愉しげに歪めた嗜虐の笑みで見上げ、もう片方の手を添えた。

「ほおら二の手——」

「《再起の命陣》！ ……成程、こりや確かにおつかねえ」

再び奪われんとした命を、アツシマンの発動したスキルが救う。

瞬間回復により一時は持ち直すものの、しかしAGIの差によって魔の手から逃れる能わず、フォローも虚しくデスペナルティとなった。

「あー……マジかあ、強化重ねても向こうがAGI上かあ」

「お、親分……あいつ動きがおかし——うわあこっち来たあ!？」

黒猫がAGIで上回るとはいえ、超音速の領域でもない今は体感としての差はさしたるものではない。

単純な速度で言えば同じ距離を黒猫の方が数秒早く走り切れる程度の話で、競走でもない戦いにおいては幾らでもやりようのある程度の速度差だ。

それでも彼らが捉え切れないのは、以前にも見せた通り黒猫の体捌きが巧妙極まるからであり、加えて周囲の環境が味方しているのも大きい。

つまりは木々の生い茂った山中。

風化し崩れ落ちた砦の歪な形状。

なにより戦場を駆け回るメンバー達の肉体そのものが。

猫のような身軽さと柔軟性、俊敏を併せ持った黒猫にとって、何よりの足場であった。

尋常の戦闘職であれば、如何に縦横無尽に跳ね回れるとはいえ、それが攻め手に繋がりはしない。

剣撃にしろ、拳打にしろ、魔法にしろ。それを攻撃として成立させ、

対象にダメージを与えるためにはその前提となるエネルギーを得るための姿勢、動き、あるいは詠唱や発音が必要となる。

その多くは地に足を着けることが前提の動作であり、特別にそうした経験を積みでもない限りは、踏ん張りの利かない宙空で満足の行く剣撃や拳打を放つ、あるいは魔法を行使することなどではしない。

だが、しかし。

黒猫の〈ヘエンブリオ〉はそうした前提を根底から覆す特性を持っている。

なぜなら「奪命神咒 ヒダルガミ」は範囲内に収めるだけで——あるいは触れるだけでいいのだから。

武器を持つ必要も、拳を握る必要も、魔法を口にする必要も無い。

ただ発動するだけで日常の所作がそのまま致命となる「ヒダルガミ」は、黒猫にとっては攻撃ですらなく単なる生態と言えよう。

あるいは呪い。

黒猫の本質を反映した〈ヘエンブリオ〉の顕す、底無しの衝動である。とはいえ、弱点が無いわけではない。

同格以上の相手にはどうしてもレジストの余地が生まれてしまうし、人間と比べて耐久力に優れるモンスターが相手では、素直に武器を執って戦うよりも必要以上に時間が掛かることも多い。

だがしかし、この場にて鎬を削る敵手は揃いも揃って格下である。現状如何に強化を施されていようとも、元の力量はジョブのレベルも〈ヘエンブリオ〉の位階も、黒猫とは比べるべくもない有象無象。

特に格下に対してこそ最大の効力を発揮する「ヒダルガミ」は、〈紅中党〉の面々にとって最悪の相手と言えた。

唯一対抗し得るは首魁たるアツシマン。

しかしビルドコンセプトを配下の強化に傾けた彼は、力量で下回る子分達を相手取るならばともかく、その戦闘能力において同格以上である黒猫へ対抗するには些か以上に役者が不足している。

これまでは如何に相手が戦闘職であろうと尋常の範疇に収まる手合ばかりであったために、強力なバフを施した配下による物量戦術に

よって勝利を収めてきたが、今このときばかりは過去に例のない未知なる天敵の登場に劣勢から抜け出せないでいた。

故に――

「しかたねえ……頼むぜ、センセ」

「あら、もう良いのですね？ 承りました」

故に、最大戦力をぶつけることにした。

配下による物量ではなく、極めて強力な個人戦力の投入を。

「実は先程から腕が疼いて仕方がありませんでした。どうかお相手願いますね」

「ようやくお出ましかよ、メスゴリラ」

飛び出たのはそれまで傍観に徹していたステラ・ザ・デストラクト。

鋼の義手が異彩を放つ貴族令嬢の如き佳人。

しかし打ち鳴らす両腕の響きは落石の衝突にも似、けたたましい大壊音を以て黒猫を襲った。

「ソリッド・ボクサー鋼拳士」ステラ・ザ・デストラクト、参ります」

「エース・アクロバッター名軽業師」黒猫、受けて立つじゃんよ」

律儀な名乗りを上げたステラに対し、黒猫も気まぐれで名乗りを返す。

本来であれば同じ戦場に立ち、ましてや戦うはずのない異色の両名が並び立った今こそ、初めて闘争が成立した瞬間である。

即ち――争いは同じレベルの者同士でしか発生しない！

後に〈黄河三奇拳〉と謳われる三者。

その内”妖拳”に”星拳”と称される両名が、初めて激突した瞬間であった。

いつか星を震わす一撃

□山茶郷近郊・〈紅巾党〉アジト

名乗った直後、風を切って繰り出されたステラの拳を、黒猫は大袈裟なまでに横へ避けた。

根拠のない直感に従った素人動きのそれ。しかし次いで起きた現象によってその判断が正しかったことを悟る。

突き出された拳の直線上、固唾を呑んで見守る〈紅巾党〉メンバー達の包囲を突き破って、一陣の風が吹き抜けた。

——否。風などという生易しいものでは断じて無い。
まさしく弾丸。

未だ音の壁を越えるには至らないステラの拳が、しかし超音速の飛翔物が放つ激音に勝るとも劣らない爆裂を生み出し、巻き込まれた哀れな外野を纏めて屠った。

半円の形に挟れて伸びる大地の傷痕。

巻き込まれた木々は巨人に蹴破られたが如く砕け、突風の吹き抜けた先へ諸共に吹き飛ばされる。

さながら横向きに放たれた一個の嵐が駆け抜けたが如く、例えようもなく凶猛極まる暴力の名残が一瞬の静寂を生んだ。

「——あら、勘がよろしいですね？　ますます気に入りました」
「いや……【鋼拳士】ってそういうジョブじゃねーだろ」

ほんの小手調べ。

ただの選別にすぎない一打で過去にない火力を察した黒猫が、僅かに畏れを含んだ声音で言う。

対するステラは変わらぬ笑顔で、淑やかな姿勢を崩さぬまま愉しげに、己の初手を避けてみせた黒猫への関心を深くした。

「いいえ？　わたくしが【鋼拳士】なのは間違いありませんよ。お疑いになるのですしたら、是非打ち合ってくださいな」

「ジョーダン。アンタと殴り合ったらあたしなんて木っ端微塵じゃん

——よ!!」

黒猫は今の現象が如何なる能力に起因するものかを探るため、懐に

隠し持った短剣を片手で投じた。

過去に何度か用い、趣味ではないと死蔵していた投擲武器の一つである。

〈エンブリオ〉を用いるまでもない雑魚を遠距離から仕留めるために一応持ち合わせていただけのそれは、同格以下を容易く屠るに足る速さと鋭さを以てステラに迫った。

職分の範疇において少なからず投擲の心得に長ける軽業師系統職の後押しと、抜きん出て高いDEXがなまくらを致死の弾丸へと変える。

HPに与えるダメージは低くとも、急所を抉れば傷痕系状態異常によつて大ダメージを引き起こす短剣を、しかしステラは避ける素振りを見せない。

その鋼の腕を持ち上げ、重厚な見た目からは想像も付かない軽やかな動きを以て迫る刃を迎撃し、見た目通りの硬さを以て悉く打ち落とす。

からからと頼りなく地へ投げ出される短剣の数々。

その一連の光景を黒猫は脳裏に刻み、更なる数を今度は両手を用いて放った。

一つの手に五つの刃。

さながら札を広げるようにして構えたそれを、左手の一射。数瞬間を置いて右手の一射。

全く異なる拍子で放ち、容易には見切れぬ呼吸と軌道を以てステラの急所を射貫かんとするも、やはり振るわれた腕に打ち落とされる。

「僭越ながら、そのような軽いなまくらでは幾ら投じられたところでかすり傷一つ負えませんよ？ 見たところ貴女のSTRは低水準、狙いは良くとも豆鉄砲のようなもの。更に申し上げれば、被弾したところでダメージを負うにも足りません」

「……っばいねー。んじやお望み通り殴り合おうじゃん！」

投擲の無為を察した黒猫が、樹上で姿勢を屈めて跳躍する。

まさしくネコ科の野生動物の如き柔軟性と俊敏さで、本来人が足場とするには向かない樹上からの強襲は、初めてステラに脅威を喚び起

こさせた。

戦闘を開始してから初めてステラが歩を後ろに進める。

地に降り立った黒猫はそのまま這うようにして低い姿勢で、四肢を以て大地を掴み地を駆ける。

かと思いきやステラの数歩目前で姿を消し、それが全身のバネを用いた斜め前方への跳躍であることを察した次の瞬間には、黒猫の小柄はステラの背後にあった。

「——んなわけねーだろ。誰がテメエみたいなメスゴリラと殴り合うもんか」

「まあ、いけずですね」

ステラの背後へ伸ばされた魔の手。

ステラの脚は今まさに身を翻すべく動作を開始したばかりで、その手が触れるのを避ける猶予は無い。

一度触れば問答無用に命を篡奪する《^{HP}心魂奪命拳》、その力が発揮されようとしたその瞬間——

「ならばわたくしも。少々はしたないですがお許しくださいね？」

「あん？ ——チッ！」

——ステラの身体が前方へとズレて、黒猫の右手は空を搔いた。

返す刀の右脚蹴り上げ。

最初の拳と同様に、風の弾丸を伴ったそれは嵐を巻き起こし、小さく軽い黒猫を吹き飛ばす。

黒猫は咄嗟に《^{軽業}》を発動して己の自重を減じ、《^{重心操作}》と身体操作の妙を以て身体の制御を奪還。

敢えて面積を広く取った衣装の余分で風を捉え、ムササビの如く滑空して身近な樹上に着陸した。

その一連の動きにステラは目を見張り、戦いを見守っていたその他の《^{ハムスター}》達が驚愕に顎を開く。

とても人間業とは思えない身のこなしに柔軟性。全身をもみくちゃにする嵐の渦中から風を読んで乗り、そのまま脱出してのけた絶技に理解を手放した。

当の黒猫はというとそんな周囲の驚愕など意に介せず。

嵐の発生源であるステラを細めた眼差しで睨みつけた。

「……脚も鋼とは思わなかったじゃんよ」

「こんなに早くバレてしまったのは初めてですよ。大抵はこの腕だけで片が付いてしまいますので」

歩調を覆い隠す長袴の如きスカート。

それを大きく肌蹴て天に蹴り上げられたその脚は、腕と同じ鋼鉄に覆われていた。

四肢を置換する義手義足のへエンブリオ^{オムリーワン}。それがステラの可能性。

「名を【星震撃 テュポーン】と申します。見ての通りTYPE：アームズのへエンブリオ^{オムリーワン}ですわ」

「迂闊に名前教えちゃっていいのかよ？」

「名前だけでは容易には察せられぬ能力ですのでご心配なく。まあ、知られたところでだからどうしたという代物でもありませんが」

そう言つてのけるステラの言葉の端には、これ以上無い自負が込められていた。

その拳打、蹴撃で引き起こした嵐こそは、台 Typhoon 風の語源となったギリシヤ神話最大最強の怪物の名を冠するに相応しい。

恐らくはその嵐すらも余技であろうが……その原理を黒猫は解明できなかった。

黒猫の疑問を置き去りにして、ステラの猛攻が再開された。

彼我の距離を数歩で詰めて、至近距離からの殴打蹴撃。

黒猫は優越するAGIと生来の動体視力、あるいは超常的とすら言える直感によつて先読みし、その連撃を全て紙一重で避けていく。

紙一重で避けて——しかしダメージを逃し切れない。

先の攻防で無駄が多いと判断したか、あるいは別の理由か。

その一打から風が放たれることはなかったが、しかし決して満足に触れ得ぬはずの拳から殺し切れない衝撃が黒猫の肉体に伝播する。

それは紙一重の回避ではんの僅かに掠るだけの接触から黒猫の肉体へと浸透し、徐々にではあるがダメージを蓄積させていた。

明らかに複雑怪奇。

本来直撃せねば到底伝わるはずのない衝撃が、刹那の接触で打ち込

まれる不思議。

黒猫は敢えてその衝撃に身を任せることでその威力を最低限にまで殺しているが、それでも尚不利は否めない。

ステラが名乗った【鋼拳士】のジョブ。

【拳士】の数ある派生上級職の一つにして、文字通り鋼の如き肉体を特長とするそのジョブは、習得スキルの大半を肉体強化に偏っている。

即ち只管に硬く、鋭く、重いフィジカルの極みを是とし、その特性から耐久型に有利な一方で、そもそも被弾を許さない回避型を極端に苦手とする特徴を持つ。

その点で言えば黒猫のスタイルは天敵中の天敵。

ただでさえAGIに秀でる軽業師系統の上級職でありながら、本人の戦闘センスも抜群に良く、その証拠にこれまでまともな被弾など一つとしてない。

当たらなければどうということはないというシンプルな理屈の通りに、まともに当てて初めて威力を發揮する【鋼拳士】の攻撃は、黒猫のような手合にはどうしても不利を強いられるはずである。

不思議と言えば他にもある。

連撃を繰り出すステラの姿勢が要所所で、攻撃を繰り出すに適さない不自然な形になりながらも手を伸ばそうとするのがそれだ。

黒猫の《心魂奪命拳》でもあるまいに、触れば良しと繰り出されるその一打が決まって不穏な気配を纏っており、黒猫は一見してダメージの大きそうな拳よりもその一撃こそを徹底的に回避していた。

そして最後に、その姿勢制御こそが不自然極まる。

本来何らかの動作を起こす際には、必ずその予兆となる起こりが発生するもの。

一般的に隙と呼ばれる特定動作は、武術に精通する者ならばそれぞれの理合で殺し、あるいは隠すものだが、ステラの動きにはそれがない。

にも関わらずまるでコマ落としのように——でもなく、不自然な姿勢のまま自然な動力を生み出し、それを攻撃に転化しているという気

味の悪さがあった。

「罇が明きませんね。実を言うと、これ程までにやりにくい手合は初めてです」

「そっちこそあたしの動き真似してんじゃねーよ。しかもクツソ下手だし」

「貴女の動きはわたくしとしても大変参考になりますので。しかしいけませんね、戦いの最中でそれを確かめるのは些か調子に乗りすぎていました」

そうした攻防をしばらく続け、先にステラが言葉を口にした。

彼女の言うとおりで、これまでの不気味な動きは戦いの中で黒猫の動きを取り入れようとした結果であった。

スタイルも体格も違う黒猫の動きをステラが模倣しようとするのは、さながら鉄がゴムの動きをするようなもの。

黒猫からすれば不恰好にも程がある猿真似に、その言葉に棘が立つのも無理はない。

詰るような黒猫の言葉にステラは恥じ入るような様子を見せ、それまでの珍妙を通り越した不気味な動きから一転、最初に見せた「鋼拳士」本来の構えに戻る。

「茶番に付き合わせてしまい申し訳ありませんでした。何分これまでにない極上の体捌きでしたから……この機会を逃しては、と。いつそ師事したいほんです」

「……なあ、なんなのそのキャラ？　なんで格闘マンガのキャラみたいなこと言ってるの？　世界観違いすぎて困惑しかねーんだけど」

「あちらではこのように動き回るなどありませんでしたから、その反動かもしれないですね。少々お転婆が過ぎましたでしょうか？」

「素手で砦ぶつ壊すお転婆なんて見たことねーよー」

言葉を交わす間も応酬は続く。

黒猫はとうに《心魂奪命圏》を行使しており、その効果範囲にステラのみならず砦全域を捉えている。

遠巻きに戦いを見守っていた《紅巾党》の面々も、特にレベルの低い《ハマスター》が何人か巻き添えを食らってデスペナルティとなつて

からは、肉眼で捉えられない遠方から望遠アイテムで眺めるに留まっていた。

一方で対峙するステラはといえば、展開された《心魂奪命圏》の術中にありながら、黒猫に伍する力量によって幾分かレジストし、篡奪されるHP等の割合を少量に留めていた。

発動した当初こそ《紅巾党》メンバーの言う魔の手と同質の結界に警戒を示したものの、それが即座の決着をつけるものではなく、また己のパフォーマンスを乱すものではないという判断により効果圏内から逃れずにいる。

緩やかに、しかし確実に己の命を削る黒猫の《エンブリオ》を意にも介さず、それより先に仕留めれば良いのだと言わんばかりに持ち前の豪気を発揮していた。

今や戦場は黒猫の篡奪結界によって命を奪われ尽くした枯れ木の森と、ステラの剛拳によって打ち砕かれた瓦礫の山とが織り成す荒涼の地であった。

互いに方向性は違えど及ぼす影響が甚大であるために大破壊を周囲に撒き散らしながら、しかし互いの攻め手が噛み合わぬせいもあって今尚決着をつけられずにいる。

これに焦燥を表しはじめたのが、他ならぬ黒猫であった。

（マジでタフすぎんじゃないよ……ぜってーあん時のクマよりつえーわコイツ。まるでくたばる様子がねー）

黒猫が内心で舌を巻く。こうも己の手が通用しない相手は初めてであった。

なにせ触れば謎のダメージを負う。かといって《心魂奪命圏》で仕留めようにも、敵の力量のせいがかかりが悪い。

本来であれば一定以上篡奪した時点で《飢餓》の状態異常が発症するところだが、その兆しも見えない。

何より《心魂奪命圏》の効果範囲に対してステラ一人が対象では明らかにコストパフォーマンスが悪く、そのロスも致命的であった。

（相手が前衛系なせいでもそのMPが低いし、周囲から賄おうにももう限界。せめて《紅巾党》の有象無象が居てくれりゃ外付けタン

クにできただけど、とつくに逃げ出してるしなあ……。ぼちぼちあたしのMPも限界が近いじゃんよ。そうなるにあたしには打つ手がなくなるし……)

黒猫の【奪命神咒 ヒダルガミ】は極めて強力かつ凶悪なヘエンブリオ。だ。

効果範囲は広く、問答無用に複数対象からHP・MP・SPをドレインし、一方的な搾取を可能にする。

スキルの行使には少なくないMPが消費されるが、対象数か、あるいは対象の有するMP量が十分であれば収支はプラスに傾き、ドレイン対象がある限り半永久的に展開し続けられる。

およそ大多数を一網打尽にする上で、これほど都合の良い能力もそうはないだろう。

後に分類付けられるスタイルでは、黒猫は典型的な広域殲滅型に属する。

しかし一方で、弱点とする相手も明確であった。

それは己と同格以上の、MPに頼らない戦闘手段を持つ個人戦闘型である。

特にステラのような手合は天敵で、ドレインの効きが悪い上にスキル維持の前提となるMPの篡奪も見込めないという、率直に言えば旨味の無い相手であった。

AGIの高さと持ち前のセンスによって対抗できてはいるが、非戦闘職の【名軽業師】ではどうしたって同じステージには上がれず、遠からず先に力尽きて封殺されてしまう。

そうした手合のための第二のスキル、《心魂奪命拳》であるが。

触れることが前提となる性質上、接触を許さぬステラのヘエンブリオは、僅かな勝ち筋すらも奪い尽くす最悪の相性であった。

迂闊に手を伸ばせば鋼の腕で防がれる——そして不可避の衝撃を食らう。

かといって腕を掻い潜って触れようとすれば——予兆の無い無動作回避で空を切る。

しかして敵の拳をまともに受ければ問答無用に粉碎される——そ

れを咎だつたものが証明している。

過程と結果が釣り合わないインパクト。

その答え。その仕組みがあと少しで形になりそうなのに、それを言葉にするだけの前提知識が黒猫の中に無く、小骨が刺さつたままのようなもどかしさを覚えた。

そうした黒猫の様子を見て、ステラが手向けのように言葉を口にした。

「運動エネルギーですよ、ハイさん」

「うんどうえねるぎー?」

「文字通り物体の運動——動くとか落ちるとか、物理的な動作全般に伴うエネルギーの制御。それがわたくしの「エンブリオ」、【星震撃テュポーン】の特性です」

学習知識に無い概念に疑問符を浮かべる黒猫へ、ステラが指を立てて講釈する。

「たとえば最初、貴女が投擲されたナイフを弾きましたが……あれは厳密には弾いたのではなく、飛翔に伴う運動エネルギーをわたくしの【テュポーン】が奪つた結果、推進力を失って落下したにすぎません」
「???」

「奪つた運動エネルギーは【テュポーン】に蓄積され、わたくしの自由に引き出せます。拳打で嵐を巻き起こしたのも、【テュポーン】に蓄積された運動エネルギーを大気に込めて放つた結果です。——ああ、貴女から奪つた運動エネルギーと釣り合わないのは、貴女以外からも運動エネルギーを奪つていたからです。例えば強風とか……運動量なんてどこにでもありますから。そうでなくとも、奪つたエネルギーを増幅することもできますが」

「勿論、限度はありますけどね」などと笑つて言い放つたその内容は、およそ大半の戦闘職にとって絶望的なものだった。

運動エネルギーを掌握するということとはつまり、物理的な過程を挟む魔法職以外の戦闘職にとって、最悪の相性であるからだ。

たとえば剣で斬ろうにも、物体を断ち切るための運動エネルギーが奪われる。

あるいは拳で打とうにも、物体を打ち砕くための運動エネルギーが奪われる。

果ては弓矢で射ようとも、物体をつらぬくための運動エネルギーが奪われる。

まともにダメージを通すならば、魔法に頼るしかない。

物理で強引に打ち破るならば、「テュポーン」の許容限界を越える過剰火力を繰り出すしかない。

しかしそれは遥かな格上でもなければ到底望めず……少なくとも己と伍する程度の使い手では不可能だ。

そして奪い取った運動エネルギーは、「テュポーン」が強化して自由に引き出せる。

運動エネルギーを引き出して、動作もなく身体を移動させたり。

運動エネルギーを引き出して、触れるだけで衝撃を与えたり。

運動エネルギーを引き出して、質量の低い大気を弾丸に変える。

まさしく”物理無敵”。

ありとあらゆる原始的攻撃手段の否定者。

一方で行使者はどこまでも原始的に、奪ったエネルギーで捻じ伏せる。

ステラにとって黒猫はまさしく天敵であった。

黒猫の「奪命神呪 ヒダルガミ」は、その攻撃手段を物理的作用に依らず、ただスキルの・魔法的に奪うだけなのだから。

言い換えれば——天敵でも無ければ、ステラ・ザ・デストラクトの

【星震撃 テュポーン】の優位が圧倒的に過ぎるのだが。

理系知識に乏しい黒猫には、ステラの説明が意味するところを正確には理解しきれなかったが。

それでもなお、彼女の「エンブリオ」が凶悪極まるものであることは察せられた。

元よりまともに打ち合うつもりなどなかったが、その警戒がより一層強まるという結果に変わりはない。

運動エネルギーという最も身近で原始的なエネルギーを貪る怪物。^{テュポーン}

モチーフとなった神話において、神々も恐れを為して逃げ出すしかなく、星をも震撼させる圧倒的暴力の行使者。

リアルでの反動から大暴れしてみたいとちよつぱり願っただけの少女の、あまりに乱暴に過ぎる可能性。

「貴女があまりにも素晴らしいから、わたくしも隠し事はしたくなくなりましたの。無遠慮に動きを見せてもらった詫びともお思いください。これがわたくしの力の全て。願わくば貴女も全身全霊を賭して、わたくしに立ち向かってくれることを期待します」

そう言い放った彼女の顔は真剣そのもの。

心の底から黒猫への称賛を示し、敬意を抱き、心ゆくまでこの戦いを味わい尽くしたいという感情の発露。

ようやく己と戦える好敵手との邂逅を、そのままの想いで口にした結果だ。

「……………よくわかんねえけどさあ」

対する黒猫は困惑していた。

いつそ情熱的な程に思いの丈をぶつけてきた彼女に、かける言葉が見つからない。

最早戦いの発端となった出来事など心中になく、この片想いすらしているような敵手への態度を、黒猫は凶りかねているようだった。

だが暫しの逡巡の後、一つの答えに行き当たる。

それは至極単純、相手のお望みのままに——

「いいぜ、きつちりかつちりぶつ殺してやんよ」

「！——その言葉を待っていました!!」

——白黒ハッキリつける、それだけだ。

決着

□山茶郷近郊・〈紅巾党〉アジト跡地

第二幕を切つて落としたのは、先的一幕と同じステラの拳。

同様に局地的な嵐を伴う不可視の弾丸、しかし巻き込んだ土埃で浮き彫りになって肉薄するのを、黒猫は余裕を以て横に——同時に前進も果たしつつ躲す。

——その背後を風の弾丸が打つ

蓄積・強化された運動エネルギーによる風圧打撃。

確かに避けたはずのそれが一転して己の後背を突いた仕掛けは、何の事はない運動エネルギーの操作によるもの。

その風圧に込められたエネルギーが一部を方向転換に回され、慣性を振り切つて踵を返したのだ。

完全なる不意打ち。一方向だけに進むものという思い込みを破る一打。

しかし一度放つたエネルギーの遠隔操作はロスが大きいのか、炸裂した衝撃は直接打ち込まれる一打と比べるべくもなく貧弱極まり、完全無防備な背中を打たれて尚も黒猫のHPの減少は微量。

ENDと防御力が共に最低限でしかない黒猫すらも一撃で葬るには足りず、結果として黒猫の疾走を阻むには至らない。

《《心魂奪命圏》》によるHPドレインで即座に回復する。

「《星震脚》!!」

ならばと迎え撃つた二の矢はステラの踏み込み。

脚で大地を打つと同時に激震が奔り、土中を伝播した衝撃が黒猫の足元で炸裂し即席の地雷と化す。

土塊と木の根を木っ端微塵に砕いて噴き上がる地表。まともに食らえば黒猫のENDでは四肢を欠くには至らずとも【骨折】に陥るは必至の地対地爆撃を、しかし炸裂直前の微震を察知した黒猫の機転で跳躍を選択、その効果圏内から逃れる。

(速い！・ヘイさんの動きに応じて仕掛けたのでは無為！)

力強い踏み込みにより生じた衝撃によって周囲一帯の対象を極短

時間【拘束】する《震脚》のスキル。

それが「テュポーン」のエネルギー操作によって強力な対地制圧攻撃と化すも、並外れた直感とAGIを持つ黒猫の前にはあまりにも鈍重。

並の使い手ならばただ一步の踏み込みで大多数を制圧できる一撃が容易く避けられたことにステラは驚愕し、ついで歓喜を露わにした。

こちらが一手を繰り出す間に、敵は一步も二歩も詰め、その問答無用の魔の手を伸ばしてくるが、その脅威すらも心底痛快とステラは更なる一手を繰り出す。

己で繰り出した攻撃の残滓から運動エネルギーを回収し、手近にあった砦の残骸を蹴り砕く。

己の前に投げ出される礫の数々。それらを片端から両拳で殴り付けエネルギーを付与し、方向性を指定されたそれらは外部からの推進力を得て黒猫へと殺到する。

それらは一つ一つが自壊の一步手前までエネルギーを内包した、大気とは比べるべくもない大質量の弾丸だ。

接触すれば解放されたエネルギーが内側から石の礫を砕き、炸裂した破片が対象を切り刻む即席の炸裂手榴弾でもある。

それらがゆうに一〇。

現在のステラが一息に放てる最大数で、それぞれがショットガンの如き撃発で黒猫を真正面から迎え撃つ。

ある程度の耐久力があればダメージそのものは容易に軽減可能な風圧打撃とは違い、確かな重さと硬さを有した運動エネルギーの塊はそれだけで既に必殺の境地。

ましてや職分上ENDなど望むべくも無い黒猫にとって、方が一にも掠りすら許されぬ魔弾であった。

「ん？ 前準備がいる分さっきのよりユージュゃんね！」

「臆しもしませんか……っ！」

元よりそんな方が一など、黒猫にはありえなかったのだが。

どこにでもある大気を放つのは違い、飛翔に適する大きさまで蹴

り砕く一瞬間を要した魔弾の隙は大きい。

当たり前のように魔弾を避け、また一步己に肉薄した黒猫に舌を巻く。

大抵の相手はステラが初手で見せた火力に怯え、真つ先に距離を置こうとしたものだが、黒猫には彼らのように歩を退ける様子は見当たらない。

それどころかいよいよ互いの手が触れ合う距離にまで近づいたのを見て、ステラは最早小技は不要と理解した。

「お望み通り殴り合おうぜ、メスゴリラ」

「そう言つてまた背後を取るのですか？」

嘯く黒猫に、皮肉を返すステラ。

そうは言うものの、この段になつて黒猫がそのような小手先を弄するとも、ステラは思わなかった。

伸ばされる魔の手に集う不穏は色濃い。これを己の〈エンブリオ〉でない生身部分に触れさせるのはダメだ——と、本能が警鐘を鳴らす。

かといって先の攻防のようにエネルギー放出による無動作回避で距離を置くのも、今となつては浪費でしかない。

ならば己が取るべき行動は、なんとしても鋼の四肢——【テュポーン】でそれを防ぎ、一瞬の接触を見極めて蓄積エネルギーを最大放出、インパクトカウンター即応衝撃によつて接触部分からダメージを与える他に無い。

幸いにして黒猫の耐久力は脆弱、最大チャージには程遠い現状でも仕留めるには充分！

ステラは集中を深め、黒猫の一挙手一投足を注視し——全霊を一瞬の攻防に傾けて迎撃態勢を取った。

迫る黒猫。

伸ばされる右手。

その手に宿る力場。

それはいよいよステラに肉薄し、今触れ合わんとして——

「ッ——!?!」

——瞬間、最大の警鐘にステラは咄嗟に後退った。

後退はあり得ないと断じておきながらの、最大出力無動作回避。

コマ落としのように同じ姿勢のまま、十歩も後退ったステラは、己の取った行動を自分で信じられぬとばかりに見開いた目で自他を見遣る。

十歩先で右手を空振った黒猫は、そんなステラに対し。

呆気にとられたような表情を一瞬見せて、次の瞬間には三日月のように大きく口角を歪ませ。

「逃げたな？」

「くっ……！」

凝り固まった闇の如き巨大な右手を開いて嗤った。

悔しげなステラの一息は、大言壮語を吐いておきながら言を翻して後退を選んだ己への無様と恥か。

掌だけで黒猫の身の丈ほどもある巨大な手が別の生き物のように蠢く姿は、さながら大蜘蛛のよう。

だらりと下げた黒猫の腕の先で言うように動く指が、触れた地面を片端から枯らして殺していた。

「もしかしてと思つて、ぶつつけ本番で試してみたけど……成程ね。こういう使い方もきんだね」

（——第三のスキル……？）

黒猫の呟きが意味するところを解せず、ステラは黒猫の隠し札を疑った。

しかし直感がそれは違うと告げている。ステラも考慮に上げはしたが、その通りだろうと判断した。

これまでに幾度となく見せられた篡奪の魔の手。

広域に展開される結界と比較して効力が高い分接触を要されるそれが己との相性が悪いと判断し、その中間——中距離篡奪手段として覚えたのを発動したのかと思つたが、しかし固有とするにはあまりに無駄が多い。

方向性の違いはあれどいずれも強力な固有能力を覚えるへエンブリオのスキルとしては、あまりに中途半端にすぎる。

とはいえ千差万別なへエンブリオのこと。

そういう例もあるのかと肯定した上で、ではこの土壇場でへエンブリオ〈が進化し、新たなスキルを覚えたのかと言えば……そうではない。

この戦闘で彼我のへエンブリオ〈の到達形態は同格であることをステラは既に察しており、もし片方が一足先に進化したのであれば、必ず出力差が出るはずだ。

互いに第三形態の〈下級〉位階にある以上、片方が進化——第四形態、〈上級〉の領域に至ったのであれば、それだけで決着をつけるには充分すぎる。

まがりなりにもこうして回避し、面食らいはしたものの戦闘継続が選択肢にある以上、それだけはあり得ない。

ならば何が……？

そう考えようとしたとき、ステラはふとした違和感に気付いた。

「！ 結界が……」

「ま、バレるじゃんね。さすがに広げたままは無理か」

これまで維持され続け、微弱ながらも少しずつ己のHP等を削り取っていた結界の気配が無いことを察知し——ステラは前後の推移を振り返り、ようやく把握した。

「成程、先の結界が今はその手、と……そういうわけですね」

「名付けて《心魂奪命圏・鬼ノ手》、つてとこカナー。密度が増した分、触れるとヤバイぜ？」

言って黒猫は巨大な異形の手——彼女の言うところの《心魂奪命圏・鬼ノ手》を振るった。

振るわれる腕の先、風を裂く鬼ノ手が伸びて、鞭のように撓って薙ぎ払われる。

非実体の闇が凝縮した鬼ノ手は点在する砦の残骸に引っ掛かることもなく、しかしその軌道上にあつた木々——生物範疇に属する植物の命を奪い、枯死させて。

触れる端から篡奪し尽し、音もなく猛然とステラを襲う。

「くっ……流石にこれに触れては！」

「どうせなら当たってくれよ！ アンタでどんだけ削れるのかキョー

ミあるからさあ!!」

それは言うなれば、闇属性魔法の性質に似ていた。

生物範疇にないオブジェクトには一切の影響を与えず、しかし生命ある生物に対しては致死の猛毒そのものであるそれ。

非実体であるが故に物理的な防護は意味を為さず、物理的作用でないが故に「テュポーン」によるエネルギー奪取も通じない。

一方で半径数百メートルにも渡る広域に展開されていた結果が、巨大といえそれまでとは比べるべくもない小規模体積に集中したそれは——同格のステラをして抵抗を望めない高出力。

例えるなら水を流すホースの口を潰すようなものだ。出力に対して小規模な出口が、結果として高圧を生むように、一点に集中したエネルギーがステラを四方八方から襲う。

そう、四方八方。全周囲から。

左右から伸びる鬼ノ手のみならず、伸ばされた闇の腕から枝分かれするように更なる鬼ノ手が伸びて、枝分かれして。

物理的な作用を持たないが故に理屈の上では無尽蔵に増やせる鬼ノ手が、ステラの退路を塞いでいった。

(ん……流石にこれ以上はキツツいかな。制御も甘いし、無駄な手がけっこーあんねコレ。見た目のインパクトはあるけど効率考えるならもつと少なくないいいじゃんね)

一方で黒猫は表面こそ余裕を見せているものの、その内心は困難を極める制御に処理の殆どを回し煮え立つ思考が止まらない。

とてもではないが満足なフットワークに割く余力も無く、足を止めて鬼ノ手の制御に努める以外になかった。

(《心魂奪命拳》を見て、「範囲狭めて効果高まるなら普段の結界でもできんじゃないやね?」とは思ってたけど、まさかほんとにできるとは思わなかったじゃんね。テリトリー全般が昔読んだパパの漫画のアレっぽいなーって……普段が”円”ならこれは”凝”かな?)

養父の趣味である漫画コレクションの一つ、生命エネルギーをオーラとして操り、固有の能力にして戦う往年の名作を思い出し、黒猫は笑う。

初めてへInfinite Dendrogramを遊んだ際、まるでゲームか漫画のようだと驚いたものだが、こうして本来ゲームとは無関係な漫画の理屈を体现している今、黒猫のテンションは大きく上がっていた。

駆け出し間もない頃の【亜竜狂熊】との戦いは別として、黒猫にとって戦いとは、どれも全力を尽くすには足りない温いものばかりだった。

いかなるモンスターもへマスターも、己の動きについてくることは敵わず、誰もが己の領域に収まるか、あるいは触れるだけで敢え無く死に逝く雑魚ばかり。

直截的な殺傷に長けたへエンブリオの力があるといえ、ビルド的には非戦闘系でしかない自分に専門家である戦闘職達が為す術もなく散つていく様は、いつからか戦いそのものへの意欲を奪っていた。言ってしまうえば黒猫にとって戦いとは食事であった。

へInfinite DendrogramがMMORPGであるからレベルを上げるという前提があり、その目的を果たすための手段として経験値稼ぎがある。

言い換えればそれは現実で生きていく上で当たり前に摂る食事が為がそのまま置き換わっただけであり、【ヒダルガミ】の性質もあってその認識はより強固なものとなっていた。

生きるために喰らうという原初の欲求をそのまま形にしたように、【奪命神咒 ヒダルガミ】は生まれたから。

だから黒猫は戦わない。

弱敵は己の飢えを満たす獲物でしかないし、強敵はそもそも戦う必要が無い。

レベル上げのための戦いはただの趣味で、そこに「戦うことが楽しい」とか「勝利の誉れ」などという意識も実は無い。単純にレベルが上がるゲーム的に有利だから嬉しい、それだけ。

メインに非戦闘職の軽業師系統を置いたのも、そうした戦いへの無関心から来ている部分がほとんどだ。

ところが今宵、己に戦いを挑んできた敵は、戦いが心底楽しくて堪

らないといった表情^{カオ}をしている。

己の一挙手一投足をつぶさに観察し、模倣し。すごい、おもしろい、と真つ向から称賛する。

果てはその礼だと言うように隠すこと無く全力を尽くして、挑んでいる。

数少ない同格が、飾ることなく、まっすぐに。

(うん……こう言ううと癩^カだけど、コイツとの戦いは悪くない)

それは黒猫にとっても楽しいと思えた。

ひねくれた性根がそれを素直に言わせないが、この戦いで初めて黒猫は「頑張ってみよう」と思えたのだ。

だから今出来る限りを尽くした。

ふと疑問に思い、どうでもいいと捨て置いた疑念をこの土壇場で検証し、柄でもない努力を発揮しながら己の可能性を追求していく。

黒猫なりの理屈で己の力に当たりをつけ、直感が導くままに力を絞り、かつて共闘したフレンドの可能性を参考にして。

そうして出来上がったのがこの巨大な手だ。獲物を絶対に掴み取るという漆黒の意志が形となった闇の手だ。

果たしてそれは、黒猫の才気が煥発する程に精彩を放ち、追い継る速さを増して獲物を包囲する。

「最早退路は無し……いえ、元より逃走など有り得ぬ性分ではありませんが！」

「どうする？ レジストに望みをかけて突破してみる？」

「笑止！ 事^コここに至って己の無事は望みません!!」

さながら蜘蛛の巣の如く張り巡らされた鬼ノ手包囲網。

あるいは鳥籠の如き決闘空間の中心で、黒猫とステラが対峙する。触れれば即、死を思わせる鬼ノ手に、しかしステラは望みが絶たれたなどとは毛頭思わず。

却って心を奮い立たせ、どこまでも晴れやかな笑顔を浮かべて黒猫を射貫く。

「たとえ刺し違えようとも——貴女をこの手で仕留めてみせます！」

「——上ッ等!!」

ステラは意を言の葉に乗せて放ち、両腕を打ち鳴らした。その衝撃に髪留めが外れ、纏められていた金髪が元の長さを露わにする。

波打つ麦穂の如き艶やかな黄金は、吹き荒れる嵐の奔流に巻かれ逆上がる。

まさしく怒髪天を衝く。

必ずや目の前の好敵を撃ち倒すという怒涛の意志が、そのまま噴き上がるかのようだった。

「——ッ!」

「ッ——!」

踏み込みは軽やかに。

これまで一打で空を割り、一步で大地を震わしていたものとは思えない、いつそ淑やかな程の踏み出しに、しかし全身全霊が込められる。

ステラもまた過去にない強敵、誰よりも身のこなしに長けた好敵を前に極限状態に達し、更なる階梯を歩み始める。

それはレベルの向上や「エンブリオ」の進化といったシステムではなく、今持ち得る手札への極限理解といった内なる深みに至り、如何にして目の前の敵を倒すか、ただその一点のみに集中する。

無為に力を放つことはない。

吹き荒れる風も、爆ぜる大地も、今このときばかりは不要。

有象無象を蹴散らすならばともかく、ただ一人の強敵を前にそうした飾りは余分でしかない。

ただひたすらに、絶対を期して必殺の意志を叩き込むなら、この鋼の拳一つあればいい。

故にステラの足取りは軽く、しかし極限まで効率化された運動エネルギーの放出によって真なる縮地を得る。

ただの一步で音を超え、吐息を交わし合う距離にまで肉薄し、それ以外の全エネルギーを右拳に秘めて。

それは親しい友と握手を交わすような自然さで、ふんわりと握られた拳が黒猫の胸に置かれる。

銃口は向けられた。
撃鉄は起こされた。
引鉄は引き抜かれ。
弾丸は今放たれる。

「我流・星震拳、絶招——《星拳突き》」
残存する運動エネルギーの全て。
それが可能な限りの強化を得て。
小柄な黒猫ただ一人に炸裂する。

——はずだった。

「ワリ。——見えちゃったわ、それ」

今このとき、初めて着想と名前を得、この世に生まれでたステラの
妙技。

スキルに依らない技巧の結晶は、しかし黒猫を捉えられない。
触れば即死の無二打^{二の打ち要らず}、例え古代伝説級金属であろうとも粉碎せ
しめる筈の、文字通り一撃必殺。

しかしそれは布一枚の差で黒猫に届かず、すり抜けられる。

続いでのはかかる僅かな重み。ステラの伸ばした腕を足場に、その
頭上へ躍り出た黒猫が伸ばすは黒。

更なる集中と凝縮を得て黒猫の細腕と一体となった鬼ノ手が、ステ
ラの視界を遮るように振り下ろされる。

「届か——」

「あたしの勝ちだ」

《心魂奪命拳》と《心魂奪命圈・鬼ノ手》。

共に触れれば即ち死を意味する魔の手、その二重起動が。

ステラのレジストを突破し、噛み砕くように命を奪う。

——届かなかった、か。

そんな末期の無念を言い切る猶予すらも許されず。

代わりに微笑を浮かべたステラが、光の塵と消えた。

エピソード

■〈紅巾党〉アジト跡地より遠方

「あ、こりや駄目だわ。喧嘩売る相手間違えちまった」

ステラと黒猫の激突する元アジトより遠方、丘の上から成り行きを見守っていたアツシマンが素面な調子でそう零した。

子分の一人が持つ監視に長けた遠隔操作型〈エンブリオ〉が映し出す戦闘風景、かつての根城が木つ端微塵に崩され、あるいは周囲の環境ごと荒廃していく様に、いつもの親分ロールも忘れて眩く。

「ありやあ完全に格が違うなあ、同じ〈下級〉でもセンスが違う。センセも大概だったが、あの嬢ちゃんはその輪をかけてヤベエ。」

「えええ……そりやねえつすよ親分……。これじゃあオレら、かませじゃねっすか」

「デンジとハルヤンには悪いことしちまったなあ、こりや戻ってきたらフォローいれねえと……。戻ってくるかな？」

「どうつすかねえ……。あんときの親分ガチで成り切ってたし、二人もガチでビビってたじゃないっすか。トンスラこいてもおかしかねえと思いますよ？」

「あー……そりや困るな、とても困る。ただでさえ人手がまだまだ要るつてのに、こりや俺のミスだなあ」

そう軽口を叩き合う様子は、黒猫と相對していたときとはまるで別物だった。

実のところ、彼らはこちらが素である。あのときは状況が如何にもらしかったせいでアツシマンのロールにも熱が入り、今までに無い悪役振りを披露することとなったのだが……。不幸なのはそうした親分側のノリを知るには付き合いの浅かった、ケジメ（という体のロールプレイ）として処断された新人二人であろう。

身内以外に見ている者もない遠隔地で二人の戦いを見守るうちにすっかり観戦ムードとなってしまう、黒猫を脅しつけようと演じていた悪役ロールも忘れ、決着がついた今になってようやく我に返った次第である。

そして素面に戻ったアツシマンの胸中に過ぎったのは「あ、これ藪蛇だったわ」という、なんとも間の抜けた感想であった。

クランを結成して三週間以上、荒くれロールのもと多くのヘマスターを襲い、物資を奪って派手に過ごしてきた彼らだが、ほとんど罨ですらある一見幼気な少女の思わぬ反撃に去就を決めかねているというのが本音だ。

そもそもの発端となった喧嘩騒ぎの現場にいたメンバーなどは、当時の恐怖を思い出してかすっかり心を折られ、アツシマンもまた最強戦力であるステラが打ち負かされた今、すっかり牙を抜かれつつあった。

さしあたっては今の状況、如何に收拾をつけるか……

アツシマンの思考はその一点に注がれている。

「どうします親分？ 姐御がデスペナっちまった以上オレらじゃ打つ手無しつすよコレ」

「……うーん」

他人事な様子の子の部下に問われ、アツシマンはしばし考え込んだあと、開き直ったように表情を変える。

「よし、素直に謝ろう。もしデスペナったらごめんな、明けたら切り替えていこうぜ」

「マジであいつらのフォローお願いしますよ。本気でビビってたんすから」

「おうおう、レベリングでもなんでも好きなだけ付き合ってやらあ。そうと決まればホレ、伝言用意頼むぜ」

実際開き直りであった。

結局のところ、ヘ紅巾党もまた多くのクランと同様、ロールプレイを主体とはしていてもそのノリは軽かった。

アツシマンの指示を受け、伝達役のヘマスターが己のヘエンブリオを飛ばし、互いに声を交わせるように場を整える

そしていざ降伏宣言と詫びを告げようとした瞬間——頭上から降ってきた鬼ノ手に呑まれ、配下共々敢え無くデスペナルティとなった。

諸行無常。

彼らが対応を決めかねている間に接近した黒猫が、先手必勝とトドメを刺した結果である。



□【名軽業師】黒猫

ふうー……っ か れ た !!

なんであたし、少年漫画的なバトルジャンキーに絡まれてんだよつてね。

完全に世界観があたしと違いすぎて、素面に戻った今脱力感パネエわ。

まったくもう疫病神以外の何物でもねーぜ。店でのことといいへ紅中党はクソだな、クソ！

これ以上因縁つけられても困るから、後始末だけはきっちりしとかねーとな。ちよいと遠くに逃げたみてーだけど、生憎今のあたしには射程範囲内じゃんよ。

少なくともこれで三日間はあいつらがこっちに来ることはねーし、その間にとつとオサラバすつかねー。

メスゴリラがロケットきながらにぶっ飛ばしてくれたせいで町からは随分と離れちゃったし、戻ってる間にこりや夜も更けんじゃね。

これ以上じーちゃんたちにメーワクかけてらんねーし、バレないうちにとつと戻ろつと。

つっても行きがロケット便だったせいで方角もわかんねーんだけど……あの町にはセーブポイントが無かったのがつれーわ。



結局町に戻れたのは、すっかり夜も更けた深夜だった。

月明かりと星明り以外に光源の無い夜道を走り抜けるのは中々の手間で、昼間よりも若干強いモンスターに襲われるは道に迷うわやらで、〈万景酒家〉以外の店は軒並み閉まっちゃまっている。

これでもまだ龍都に近い分賑わっている方で、田舎だと日の入りと共に寝静まるなんてことも普通らしいね。じーちゃんの話だけどき。ともあれそろそろ部屋に戻って寝とかなきや明日に響く。

あーでも向こうからこつち歩きづめで腹も減ったし、店でなにか食べたいところだけど……じーちゃん同伴じゃないから今は無理だな。とりあえず部屋に戻ってから考えようと、取っていた宿に戻ったその店先で。

腕組みして仁王立ちしているおっちゃんが目が合った。

「げっ……」

「なんだその反応は。それより貴様、こんな時間までどこをほつつき歩いていた！」

わかっていたけど開幕説教。

仮にも護衛の名目で同行しているのだから勝手な単独行動は言語道断云々かんぬん、半日も行方を眩ませていたのを叱られる。

一頻り叱られたあと、空気を読まずに大きく鳴ったあたしのお腹におっちゃんが呆れ、長い長い溜息と一緒に首根っこ掴まれて部屋へと連行された。

今日はやたらと扱いがぞんざいな一日じゃんね。

「おお、戻ったかへいや。どこにも見当たらんから心配したぞい。滞在最終日ぢやから穴場巡りでも一緒にしたかったんぢやがのう……」「えっマジで？ うっわそりやもつたいたいなことしたあ……ごめんよじーちゃん、実はさあ」

と、何があつたのか一連の出来事を報告。

思いの外メスゴリラとの戦いに二人が食いついたので、あたしにわかる限りのことを説明したら、じーちゃんは目をキラキラさせて、おっちゃんはまたも重い溜息を吐いてあたしを見た。

「ほほう、ほほう！ そのような猛者がおつたとはのう！ いやこれまでも幾人かのへマスターは見てきたが、それほどの使い手はとんと知らぬのう！ 是非とも観戦したかったところぢやわい」

「まったく無茶なことを……勝って生き延びたから良いものの、もし貴様が敗れていればまた足止めを食うところだったではないか。黒

猫、貴様本当に自分の立場を弁えているのだろうか？」

じーちゃんったら相変わらず子供みたいね、少年の心か！

そしておっちゃんの言葉にはぐうの音もでねえ。つっても逃げようにも難しかったし……少なくともあのメスゴリラがいるうちは無茶だろ。

とはいえそもそもそんな因縁をつけられたのはあたしがやりすぎたせいでもあるし、そこを突かれるとあたしはなんも言えないじゃないね。

大人の言う責任つてむずかしいね。

「まあまあ楊よ、不可抗力ぢやてそう目くじらを立てることもなからう。今は無事に戻ってきたのを労ってやりなさい」

「まったく大人はこいつにお甘い……。しかし、まあ……貴様のレベルを見れば激戦であったのはよくわかる。それを生きて乗り越えたのは評価してやらんでもない」

当たり前のように《看破》され、おっちゃんの頬がちよっぴり緩む。おっちゃんの言うとおりに、あの戦いを経てあたしのレベルはまた一段と上がった。

それはあたしと同格の強敵ステラを倒したことによるものか、単純にモンスターを狩るよりもずっと充実した実感と共にあたしに刻まれている。

更に言うとう上がったのは単純なレベルだけではなくて……へエンブリオもまた同様に成長を果たしていたようだった。

これであたしの【ヒダルガミ】は第四形態、すなわち《上級》に昇格だ。

それはつまり、現時点でのトッププレイヤー層の仲間入りを果たしたことを意味する。

あつちゃんにもこれで追いついたってことじゃんね。あつちゃん曰く第四形態からはそれ以前までとはまるで別物らしいから、この先使うときが楽しみだ。

今回の戦いで気付けた応用も含めて……ね。

「とはいえ今回のことではよくわかった。やはり貴様は目を離してお

くには危うすぎる。この先は勝手な行動は許さぬぞ！」

「はあっ!? なんて!？」

「そこで反論するからだ、馬鹿者。いかに貴様が子供とはいえ、道理の通じぬへマスターでであるからには容赦せんぞ。貴様が心底から反省するまでみつちりと躰けてくれる故、覚悟しておけ！」

一喝するおっちゃんの表情は、これまでにないほどマジだった。

「……じーちゃん」

「ほほほ」

そしてじーちゃんはのほほんと笑うだけ。

前にもあったな、この流れ。

今回ばかりはあたしが何を言っても問答無用っぽいので、観念して項垂れる。

ちつくしよ……それもこれも全部あいつらのせいだ。何がへ紅巾党だ、揃いも揃ってドルオタみたいな格好しやがって！

マジであいつら疫病神だわ。次見かけたらまたぶっ殺して……ああいや、それはよくないな。んなことしたら今度こそおっちゃんに追い出されそうだ。

と、ここでまたもお腹が鳴った。しかもかなり盛大に。

場を遮る腹の音に二人が顔を見合わせ、じーちゃんは吹き出し、おっちゃんは苦笑いして、やがて二人して声を上げて笑い出す。

おかしい……こんなのあたしのキャラじゃない……!!

「ま、御主も大した冒険をしてきたところじゃろうからの。ちと遅いが店に繰り出そうぞ。相当に腹を空かせておるようぢやしのう?」

「この時間では女中に食事を頼むにも遅すぎますからな」

「マジで!? やったーじーちゃん大好き!!」

「ほほほほほっ!」

とはいえ空腹の前には代えられない。

じーちゃんの小粋な提案に飛びつき、袖を引っ張って催促する。

振り返ってみれば今日は過去にない激戦で、あたしのお腹はいつも以上にレッドゾーンだ。

それでも心の磨り減るような飢えに苦しまず、この空腹を最高のス

パイスとして楽しめているのは――

――ひよつとしたら、こInfinitiveのDendrogram世界

で得られた一番大きな変化かもしれない。

そんなことを考えながら。

町一番の食堂で食べる最後の晩餐に心躍らせ、あたしの気分は晴れ上がっていた。

To be continued

Episode Superior The Planet Hazard
プロローグA 【雑技王】

□【雑技王】

舞台の上で少女が踊る。

舞台裏で数人の幻術士たちが織り成す深山幽谷の幻影背景。

音楽家たちが息を揃えて演奏するオリエンタルな旋律に合わせ、数多の黒子を従えて縦横無尽に舞っていた。

黄河の伝統芸能である雑技は極めて高度な技術を要するパフォーマンスである。

常人からかけ離れた身体のしなり。頭頂から爪先に至るまで余すことなく統制するためのセンス。

薄皮を少しずつ重ねるような地道な鍛錬を経て磨き上げた肉体を、衆人環視に臆さず舞台上で観客を魅了することを要求される。

誰が呼んだか「魅せるための武」とはよく言ったもので、武仙の国黄河において雑技とは、連綿と続く武術の歴史とも因縁浅からぬ親密な間柄にあった。

多くの武門がそうするように、雑技を志すものは幼い頃からその修練に明け暮れる。

軽業師系統で習得可能なスキルはそのほとんどがセンススキルであり、単純にレベルを上げるだけでは決してその真価を發揮し得ない。

日常そのものを過酷な訓練とした上で、長い年月を重ねなければ決して大成できないとされる、極少数の限られた才人にもみ栄光が許される狭き門であった。

しかしここにひとつの例外が存在する。

今壇上で黒子と舞う少女こそがその証左である。

およそ二年前から爆発的にその数を増した、伝説に語られるヘマスターという超常存在たち。

その中で幼い童女の姿をしたあるへマスターは、幼い頃からの修練も無く、長い年月に磨かれた経験も無く、ただ純粋な天稟によつてのみ雑技を極め観客の視線を釘付けにしていた。

「♪———」

幻影と旋律に合わせ少女が踊る。

その顔は天真爛漫そのもので、観客の存在など無いかのように自儘に舞う。

深山幽谷に遊ぶ天女を盗み見たかのように、少女は自在に天を泳ぎ、地を走り、天地自在に戯れる。

重力の軛を忘れて舞うその演技は、およそ既存の雑技とはかけ離れた超常の光景。

それを助けるのは天女に侍る黒子——否、目まぐるしく形を変えるそれは決して人ではない。

尋常の軽業師が数多の共演と協力し演目を果たすのに対し、少女は独力で超常の光景を描いていた。

それを可能とするのは、少女が特別だからだ。

少女こそは軽業師の頂点に立つ「雑技王」であり。

この世に一〇〇としない真の超越者——〈超級〉であり。

そしてそれらとは全くの無関係に生来のセンスで雑技を極めた、ただの天才である。

囁かれし異名を”遊ヨウテイエンニヤンニヤン天娘々”。

皇帝陛下の天覧するこの舞台において舞遊ぶ、〈黄龍雑技団〉の秘蔵っ子。

すなわちこの天覧公演こそはかつての伝説を襲名した幼き王の、一世一代の晴れ舞台であった。

「すごい……今まで見た雑技とは全然違います……！ 自由自在に天を舞えるのはどうしてでしょう、それに次々に形を変える影も……あれが彼女の〈エンブリオ〉なのでしょうか？」

演舞の数々に感嘆の声を漏らしたのは、貴賓室から舞台を見下ろす龍人。

被った龍面の下で呟いた言葉は、その厳しい姿からは似つかわしく

ないほど幼い。

「いや、あれは特典武具だな。《鑑定眼》だと【立体影像 シェイドプリンター】って出た。効果は……非実体を物理干渉可能な実像に変えるってところか。大元がアイツのへエンブリオってのは間違いなさそうだが」

興味津々な龍人に答えたのは、その隣に座った怪人だった。

異様に手足の長い道服を着込み、その顔には符。覗く手足は鋭利な刃をした、紛うことなき怪人である。

龍面を被った龍人と、僵尸のような風体の怪人。奇妙な組み合わせだが、二人は親しげに感想を述べていた。

「特典武具、ですか？ 【雑技王】は非戦闘職だったはずですが……」「アイツのへエンブリオ」はジヨブとは関係ネエからナ。もつと言えば、アイツのへエンブリオ」は間違っても見世物に使えるような可愛げのある代物じゃネエ」

「迅羽さまは彼女と親しいのですね」

「ただの知り合いだぜ、ツアン。別に仲良しこよしってわけじゃないサ」

「もつとも、特典武具の効果で随分とナリを潜めているらしいが」と怪人——迅羽は続けた。

その迅羽にツアンと呼ばれた龍人——黄河帝国第三皇子である蒼龍は興味深そうに傍らの迅羽と壇上の少女を見比べる。

成程、毛色は違うがへ超級」と呼ばれる者にもいろいろいるのだなと得心して、ジロリとこちらを睨みつけた皇帝の視線に気付き居住まいを正した。

その様子を見て彼の友人たる迅羽は、やりきれないように小さく嘆息する。

国家機密とはいえこの程度の気の緩みも許されない彼の身上に内心で同情を示すが、それを口には出さなかった。

代わりにおどけるようにツアンの脇腹をつついて舞台を指差す。

「でもまあ、たまにはこういう見物もいいもんだ口。普段のお硬い祭事よりは気が楽つてもんだ」

「……そうですね。こんなにも楽しい催しが決闘以外にもあるなんて、知りませんでした」

それが彼女なりの慰めであることをツアンは察して、消沈していた気分を浮き上がらせる。

そしてその後も演目は続き、幼い【雑技王】は最後まで観客の目を捉えて離さないまま大歓声に終わる。

『——以上を持ちまして此度の公演を終わらせていただきます。偉大なる皇帝陛下及び皇族の方々の天覧、多くのお客様にご高覧賜りまして光栄至極に存じ上げます——』

壇上では一座の長たる黄刃華が堂々と謝辞を述べていた。

貴賓室から見下ろす皇族一同に深々と拝礼し、次いでその他の観客に頭を下げていく。

熱狂冷めやらぬ天幕の中、彼は毅然とした態度でスピーチを続ける。

『我が一座の歴史は六十年前、先代【雑技王】黄刃鳥にまで遡ります。御来賓頂きました方々の中には覚えのある方もいらつしやることかと存じます。彼こそは時の帝に天覧賜り、畏れ多くも”龍”の字を格別の思し召しによって許された天稟でありました。それを以て一座はへ黄龍雑技団」と名を改め、当代【雑技王】のもと偉大なる黄河帝国文化の一つとして努力を重ねて参りました』

『その最たる舞台は当代【雑技王】の最終公演、『大悟悦楽羽化昇天』であります。三日三晩に渡って雑技の全てを演じ果たし、その末に雲間に昇り消えたことは、当時の観客から語り継がれ、知り置かれる方々も多いでしょう。まさしく【雑技王】にのみ演じられた、空前絶後の大雑技でありました』

『しかしながら、その後長きに渡り【雑技王】の座は空位に置かれ、彼の伝説を継承する逸材は不明のままでありました。時には栄えある”龍”の一字を返上すべきかとも思い悩みました。彼の血を継ぐ我々黄一族、ひいては一座に籍を置く【軽業師】の誰もが皆、先代の技巧に辿り着くこと能わず、不甲斐ないばかりの日々を過ごしていたことは、我ら一同汗顔の至りであります』

『しかしここに一人の逸材が現れました。長らく不在だった【雑技王】の座を継承する、我が一座史上最大の麒麟児がここに存在します』

『改めて御紹介させていただきます。彼女の名は、黒猫^{ヘイマオ}。新たな【雑技王】、黒猫！どうぞ皆様お見知り置かれますよう、お願い申し上げます!!』

座長の熱の籠もった紹介に合わせ、天に身を置いた【雑技王】が仰々しく頭を垂れる。

そしてそれと全く同じ格好をした、濃淡で陰影を表した黒猫の影が、観客一人ひとりの前に現れ握手を求め、皇族の前には恭しく跪礼した。

旧知である迅羽にも同様に挨拶し、呆れたように鉤爪で小突かれると同時に陽炎のように霧消する。

「ハッ、格好つけやがッテ」

「本当にすごい……」

皮肉げに言いながら笑う迅羽と、感嘆に震えるツアン。

厳格な父までもが表情を崩して小さく破顔し、兄妹も拍手を送って讃えている。

まさしく芸の極みを魅せつけられ、観客の心はひとつとなって熱に沸いていた。

万雷の喝采を浴びる黒猫は涼しい顔で平然とし、刃華は何度も頭を下げて観客に応える。

鳴り止まぬ拍手が続く中、刃華は居住まいを正し再び口を開いて続けた。

『そしてこの場を以て告知致します。これより我が一座は総動員して黄河各地を回り、主要都市で興行いたします。黄河を股にかけた大巡業を、これより一ヶ月をかけて執り行う所存です』

その言葉に真っ先に身を乗り出したのは、商いに身を置く商人たちだった。

彼が告知したビッグイベントは、彼らにとってまたとない商機である。

黄河に名高い【雑技王】が執り行う一大巡業ならば、それに動員さ

れる人と金とは莫大なものとなる。

ありとあらゆる利益が見込める絶好の機会に、目敏い商人たちは早くも鼻息を荒くしていた。

『——以上を持ちまして閉幕とさせていただきます。此度は御来賓賜りまして、深く御礼申し上げます!!』

かくして【雑技王】を筆頭とする〈黄龍雑技団〉一大巡業の速報は全国を駆け巡り、黄河に熱狂を招く運びとなった。

——そしてそれは、恐るべき災害を招き寄せる呼び水となるが、この時は誰も知る由がない。

T o b e c o n t i n u e d

プロローグB 【撃神】

□カルディナ

カルディナの東端、黄河帝国の国境に程近い交易要衝地。

波打つ砂海を乗り越えた先、一面に広がる荒野に簡素な建屋が疎らに点在するだけの町並みは、さながら西部劇の開拓地のようである種のロマンある殺風景を描いている。

しかしながらそこに息衝く熱気はそうした寂寥とは無縁の騒々しさを昼夜問わず吐き出し、東西を行き交う人々を幾度となく見送り、または迎え入れていた。

交易によって富を得ようとする東西の商人。

そんな彼らを目的地まで案内することで生計を立てる案内人。

あるいはそれらを獲物にせんとする賊の斥候。

いずれもどこの馬の骨ともしれない中、ただ欲の一点で共通する人間達が数多屯するこの町は、まさしく資本を拝する者達にとってのフロンティアに他ならなかった。

そんな町にいくつかある酒場の一つ。

腕自慢の荒くれ者が盃を酌み交わす一等危険なその店。

いつもなら酔客の喧騒がこだまする店内は、今は張り詰めたように沈黙している。

そしてその沈黙の中、最奥のカウンター席に腰掛ける場違いな影。

「……………注文は？」

「そちらのボトルを。おすすめは？」

「無論、ストレート」

「では、それで」

緊張した面持ちの店主に答え、琥珀色の酒精をグラスに受け取ったのは女。

男所帯の酒場には似つかわしくない、楚々とした気配を纏う淑女の如き佳人だった。

編み上げた黄金の髪。憂いに潤むような碧眼。

全身を彩る衣服は深窓の令嬢のそれでありながらどこか尋常ならざる気配を放つ。

ドレスグローブで包まれた細い指先でグラスを傾ける様は、それだけで一枚の絵画の如く美貌を演出していた。

その喉の動きに合わせて店主も思わず息を呑む麗人である。

しかしその緊張には単なる美しさからのみならず、触れ得ざる危険物への警戒も含まれていた。

物静かに酒を嗜む彼女の一举一動を店主のみならず、彼女の素性を知る客が固唾を呑んで見守る。

まるで人食いの獣を見るような視線を、しかし彼女は一顧だにせずグラスを空け、何をするでもなく静かな時間を過ごしていた。

「いつになく東へ向かう動きが強いようですね」

しばらくそうしていた女がぼつりと尋ねた。

店主は普段酔客に向ける粗野な言動を慎みながら、よく躡けられたバーテンダーのように恭しく答える。

「黄河で大きなイベントがあるようで。なんでも新たな【雑技王】が生まれたとか」

「【雑技王】……?」

「【軽業師】の頂点です。連中の雑技は黄河の伝統芸能ですが、そのトップは長いこと不在だったそうで。なんでも先代は名にし負う有名人だったそうで、一部の芸能好きが供回りを引き連れて見物に向かっているそうです」

店主は大した興味も無さそうに、伝聞をそのまま語った。

対して女は表情を大きく変えようと、視線をグラスから店主に移して問うた。

「その【雑技王】の素性は?」

「え? ええ……なんでも年端もいかない子供だとか。とはいえへマスターらしいですから、見た目通りの歳ってわけでもないでしょうな」

「子供……なるほど」

思わぬ食いつきを見せた女にたじろぎながら答えると、彼女はそこで初めて笑みを見せる。

男なら誰もが見惚れるような微笑みだった。再び息を呑む店主に、女は上機嫌でリルを投げ寄越す。

「それはいいことを聞きました」

「発たれるんで？」

「ええ、当面の路銀は稼げましたから。そろそろ御暇しましょう」

その言葉にほっと安堵したのは店主だけではなかった。

二人を見守っていた客の誰もがため息を吐いて、長い沈黙を破るように日頃の喧騒を取り戻していく。

さながら猛獣の視線からようやくやく逃れたように、冷え切った熱を取り戻そうと乾杯していつて――

「身なりのいい金髪碧眼の女はお前か!!」

――怒号と共に扉を蹴破った闖入者に、またも肝を冷やすことになった。

再び空気を凍てつかせ、肩を怒らせ女の背後に回ったのは、この場の客よりも数段上回る気配を放つ男だった。

荒事を日常とする客達と比べてなお高い力量を示す男の名を、客の幾人かは承知していた。

”人喰い虎”のガガランダ。

カルディナに蔓延る盗賊団の中でも一目置かれる一団の頭目として知られる、一際悪名高い破落戸である。

無論、あくまでティアンとしては、という但し書きはつくが……それでもこの場に居合わすティアンにとってはリスクの高い強敵と言えた。

剣呑な気配を滲ませる周囲には目もくれず、未だ腰掛けたままの女の細首に刃を添えガガランダは殺気を昂ぶらせる。

言葉一つ誤れば即座にその首を刎ね飛ばさんことは誰の目にも明らかで――しかし周囲は、女の危険にではなく、彼の言動が女の導火線に火を付けないかどうかを危惧して身動きが取れないでいた。

最も近い店主などは、既に顔を蒼白にして呼吸を失っている。

「俺の留守によくも好き勝手してくれたなア……おかげで手下は全滅、お宝は根こそぎ、拠点は木っ端微塵だ！ この落とし前、つけてもらうぜ……」

「……………」

血眼になつて殺気立つ男の言葉に対し、女は振り向きもせずグラスに残った酒を飲み干した。

ガガランダがほんの指先一つ動かせば動脈引き裂かれ血が吹き出す間合いにも関わらず、まるで気にも留めず悠々と寛いでいる。

ちらりと店主を見て、これ以上の酌は無いことを悟ると、そこでようやく男に向けて言葉を発した。

「——それはいつ、どこでの話でしょうか？」

「ああん？」

「生憎、この手の諍いは心当たりが多すぎて……なかなか思い当たらず」

「テメエ……!!」

間違ひなく挑発だった。ガガランダは即座に血が昇り、怒髪天を衝く勢いでぎんばらな髪が逆立つかのよう。

女の口ぶりが平靜そのものなこともそれに拍車をかける。

ガガランダは目の前の女を甚振り尽くす算段も忘れ、激昂に駆られるまま添えた刃を引き切ろうとして——

「まあ、だからといって対応に変わりはありませんが。そちらがそのつもりなら、そうしましょう」

——女が席から立ったことで初めて、その動きが叶わないことを思い知る。

振り向き、相對した女は男とくらべて頭一つ分も小さい。背格好通りの令嬢然とした姿かたちである。

しかし彼は、彼女の碧い双眸に認められた瞬間、人喰いの獣の眼に射抜かれたように硬直する。

あるいは蛇に睨まれた蛙のように、全身を金縛りが襲っていた。

「しかし驚きです。徒党を組むならともかく、単身乗り込んで誰何されるとは……久しくなかつた出来事です。過日の未熟を思い出しま

す」

「あつ……が……」

「ここらの賊徒は粗方潰し終えましたから、いい加減身元も知れていると思つていたのですが。伝聞や噂などそんなものでしょうか。自ら喧伝するつもりもありませんが、ままなりませんね。とはいえ取り零しが自ら出向いてくれたのなら、対処するのが筋というものでしょう」

そう締めくくつて、女が右手を伸ばす。

ドレスグローブに包まれた細い人差し指を、幼子を諭すように男の額に添える。

「今はいつになく良い気分ですから、小綺麗に片付けます。店主、後始末はお任せします。お代は迷惑料も含めてそちらに」

「あ、ああ……」

「よしなに」

言い放つたそのときには、既にガガランダは事切れていた。

女の細指を額に添えられたそのときに、頭蓋の中の脳髓をぐちゃぐちゃにかき混ぜられて。

ティアンとしては破格の才を持ち、カンスト上限に近いレベルで猛威を奮つたかつての首領の亡骸が、女が店から立ち去ると同時に倒れ伏す。

残された客達はそそくさと死体を【アイテムボックス】に仕舞うと、怖気を拭い去るように酒を浴びた。

そして、知らずとはいえ猛獣に手を出した愚か者の末路を口々に囁き合う。

「馬鹿なやつだ、”人間台風”に手を出すなんて」

”人喰い虎”も台風の前じゃただの子猫つてこつた。あいつには知り合いが何人もブチ殺されてたんだがなあ……あつけねえあつけねえ」

「とんだ間の悪い男もいたもんだな。留守決めて助かつたんなら、そのまま命を大事にしてりゃよかつたのに、無駄にしゃがって」

男達は次第に笑みを、熱気を取り戻し、酔いも回った舌でガガランダの最期を囁し立てる。

これまで頭を低くして嵐が過ぎ去るのを待っていた彼らだからこそ、その重圧から解放された今その口に戸を立てる者は誰もいなかった。

「あの人が居座ったんじや俺達おまんまの食い上げだからな。出てっ
てくれて清々したぜ」

「見た目は頗る付きで良かったから惜しいけどな。せめて一晩でもつ
てのは……」

「よせよせ、怪物と人間が寢床を共にできつかよ。だがまあ、羽振りが
いいことだけには感謝するがな」

「ああそうだ。おい親父、奴さんの置き土産があるんだろ!? このま
まじゃまるで足りねえぜ、どんどん持つてきてくれ!」

「やかましいんだよクソ野郎共! どうせ全部空けたって釣りが来る
んだ、好きにしやがれ!!」

「恐ろしくも麗しき我が女神様に乾杯!!」

喝采が喝采を呼び、店は普段以上の喧騒に包まれる。

それはさながら店を去った女へ送られる手向けの言葉のように、翌
朝まで続いていった。



上空。カルディナの荒野地帯から東の黄河へ向けて飛翔する影が
あった。

店を出た女はそのまま町から出ると、東に向けて跳躍しその勢いの
まま亜音速で弾丸の如く飛び続けていた。

「ふふ……暫く見ないうちにご立派になられて」

女の顔には笑みが。

こちらの世界において長年来の腐れ縁が続く知己の現況に、否応な
く顔が緩むのを自覚していた。

女が東に向けて飛ぶのは、彼女にとって無二の友たる少女の晴れ舞
台を直接見るため。

あわよくばそのついでにまた喧嘩の一つや二つでもできればいい

など目論見ながら、砂漠を越え山河を越え、一直線に東へ向かっていった。

「これでようやくわたくしと同じ舞台に立たれたのですもの。今一度拳を突き合わせるのが友情というものでしょう。ええ、わたくしとしても非戦闘職に勝ち越されたままではいられませんから……」

思い募らせ、女の顔が獯猛な笑みに歪む。

佳人の皮を被った破壊の獣の後には逆巻く暴風が残され、やわな木石を薙ぎ倒していった。

男達が噂した”人間台風”の異名に違ふことなく、荒れ狂う嵐を足跡に刻んで。

「待っていてくださいね、ハイさん。わたくし、とつても楽しみです——
——！」

女の名は、ステラ。

ジンバクト
【撃神】ステラ・ザ・デストラクト。

——その名の如く激震を齎す、一等危険な人の形をした災害が東へ向けて直進した。

T o b e c o n t i n u e d

プロローグC 【超練体士】

□黄河最西端

黄河・カルデイナ交易の窓口であるその都市は今、またとない景気に沸きに沸いていた。

それというのも先日龍都で執り行われた【雑技王】の初公演。そこで告知された大巡業の西部開催地として選ばれたからに他ならない。

巡業の話が持ち上がったのは初公演よりも二ヶ月ほど前。今代【雑技王】襲名から間もなく内々に通達され、黄河四方の候補地では熾烈な誘致合戦が繰り広げられていた。

ある一定以上の年代の帝国民にとって、【雑技王】の名は非常に大きい意味を持つ。

彼らの多くがその青春時代にかの人物の絶技を目にし、その極芸に熱狂した思い出が強く焼き付いているからだ。

その座を受け継いだ人物による興行ならば果たしてどれほどのものだろうと、名を知る人々は心躍らせていた。

一方でそうした感情的な話を抜きにしても、世に二人としない大名人による興行でどれほどの資本が動くかを考えれば、その絶好の商機を座して見過ごすなど目敏い者には決して許されないことである。

動員される人員、必要とされる物資、大人数の観光客。

あらゆる好条件が揃った一大イベントでどれほどの利益が見込めることか。

もし一座の誘致に成功したならば、その都市の好景気は約束されたも同然とあって、各主要都市では有力者たちによる暗闘がしばし続いた。

そうした紆余曲折を経て開催に到った今日、すでに南・東・北で興行を終えた一座は、最後の開催地となる西部に向けて移動を開始している。

そして西の興行開催地こそが、カルデイナとの交易窓口でもあるこの都市であった。

都市は既にお祭り騒ぎとなつてかつてない賑わいを見せていた。

建ち並ぶ家々はカラフルに彩られ、祭囃子に太鼓の音が昼も夜もなく響き渡る。

黄河の各地からは熱心な芸能ファンが、隣接するカルディナからはイベントを聞き付けた富豪たちが数多く流入し、それを狙ったバザールが軒を連ねて観光客を呼び込んでいた。

その中にはフットワークの軽い〈ハマスター〉も多く紛れている。彼もまたその一人。砂埃にすすかれた旅装を纏い、はしゃぐ少女を伴って露店がどこまでも並ぶ大通りを歩く男の名は、カフカ。

カルディナは賭博都市ヘルマイネから遙々ここまでやってきた一介の【大賭博師】である。

「あつちい……砂漠に近いからかまだ暑いな、ここは。祭りの熱気もあつて余計に暑い……」

「ねえねえダーリン、あそこにお饅頭の屋台があるのだわ！ あそこにはりんご飴、向こうにはいろんな形の綿あめまで！ いっぱいいっぱいあるのだわ！」

「ああ、ああ、わかった。買ってやるから、そうはしゃぐな。おっさんにハイテンションは辛いんだ……」

砂漠地帯の酷暑を引きずったカフカの袖を引いて目を輝かせているのは彼の〈ヘエンブリオ〉。

カフカとは対照的に綺羅びやかな衣装を身に纏う豪華な装いの少女の名はパンドーラ。^{メイデン}

期待に満ちた眼差しをカフカに向けて強請るのは偏に彼女の食癖による。

彼女もまた他のメイデンや人型に近い〈ヘエンブリオ〉のように、他者に買い与えられたものしか食べないという奇妙な食癖を持っていた。

つまるところ彼にとつてはとても世話の焼けるお姫様に他ならず、彼女の望むままに屋台の端から貢いでいった。

「とっても美味しい！……わけじゃなくて普通だけど、醍醐味だわ！ 味は普通でもここの空気で美味しく思えるのね！ これぞお祭りの醍醐味なのだわ！」

「そりやよかった。クソ暑い中遠路遙々訪れた甲斐があつたつてもんだ」

返事が投げやりになったのも無理はない。

そもそも彼が黄河に訪れたのは、どこで噂を聞き付けたのか是が非でも興行を見に行きたいとパンドーラが駄々をこねにこねたのが理由だった。

一度決めたら絶対に譲らない彼女のわがまま放題は今に始まったことではないが、それでも国を越えるほどのわがままは稀である。

さりとてそれを嗜めるでもなく言うことを聞いてしまうカフカもまた、自分の〈エンブリオ〉に甘すぎるのは確かだった。

「だってだって、ダーリンつたらずつとカジノに入り浸りだったもの。わたし退屈で退屈で仕方なかったのかわ！　いい加減キラキラした部屋は飽き飽きなのかわ！」

「だからってわざわざ砂漠を出なくても……あー、ついさつきセーブしちまった。帰りがめんどうくせー……」

「もう！　ダーリンつたら台無しなのかわ！　せつかくのお祭りなんだから、ちゃんとわたしをエスコートして可愛がるべきなのかわ!!」
「わかった、わかったから……とりあえずあれだ、先に宿を取っちまおう。いい加減涼みたい……」

「当然スイートがいいのかわ！　ゴージャスでオリエンタルなお部屋が最高よ！」

「お前さつきキラキラしたのは飽きたって言ったじゃねえか……」

「それとこれとは全然違う話なのかわ！」

そんな騒がしい二人組だが、今のお祭り騒ぎの中では特に珍しい風景でもない。

周囲を見渡せばあちらこちらで同じようにはしやぎまわる人々や、〈エンブリオ〉や人化したタイムモンスターらしき人型を連れて仲睦まじくする組み合わせが見受けられる。

貢物を食べ歩きながらそれらを見渡したパンドーラの思考に過ぎったのは、そうした賑わいへの関心ではなく、見知らぬ人間が数多行き交うにも関わらずカルディナと比べて随分と治安が良いこと

だった。

「向こうと比べてとつてもお行儀がいいのかわ。スリも詐欺師も全然見かけないし、ヘルマイネとはまるで違うのかわ！」

「そりゃあ各国のマフィアが裏で鎬を削る向こうと違って、こっちは〈竜心館〉の睨みが利いてるからな。粗相をすれば門弟が飛んできてあつという間にお縄だ」

「りゅーしんかん？」

「【練体士】のメツカだよ。あらゆる前衛職のお供として大人気な練体士系統の総本山。トップは、人童^{レンロン}の異名で知られる凄腕のティアンで、【超練体士】つつー超級職。そいつが創始したのが〈竜心館〉つつー道場で、その門弟には腕利きの前衛職がずらり。へマスターでもそうは好き勝手できねえ安全地帯だぜ、ここは」

「つまりダーリンじゃ絶対に悪さできないのかわ！」

「うるせえよ。……まあそれも昔の話で、今じゃあるへマスターへの座が移ってるんだがな」

「あるへマスターって？」

「それは……」

続けようとした言葉を遮るように轟音が路地から響いた。

道行く人々が驚いて音の方向を注視する先には、素性の知れないティアンが女性を拘束して首筋に刃物を突きつけている。

凶器を握る腕には嘲笑う悪魔の刺青。

「……ああ、へレブナント・ネストの下の端か。ほんとどこにでも湧きやがるな、あいつら」

「いつまで経つても学習しないおバカさんたちなのかわ！ でもダーリンじゃあのチンピラすら取り押さえられないのだからおあいこなのだわ！」

「お前さつきからすげー辛辣じゃね？　なんか怒らせるようなことした？」

「そんなことないのかわ！　とつてもとつても愛してるのかわ、ダーリン!!」

「お、おう……ならいいんだけどよ……」

チクチクと突き刺すような棘はともかく、パンドーラの言う通りカフカではチンピラ一人にすら太刀打ちできない。

LUCに特化した「大賭博師」のステータスでは、たとえへエンブリオのステータス補正があつたとしても下級の前衛職にすら戦闘能力は劣る。更に言えばカフカのへエンブリオは戦闘にはまったく向かない。

チンピラも最低限の戦闘職には就いているのだろう、人質となつた女性は為す術もなく泣き喚き、周囲も手出ししかねて見守るしかなかった。

少しすれば騒ぎを聞き付けたへ竜心館の門弟が駆けつけるだろうが、果たしてそれまでに女性が無事とも限らない。

そんなことをつらつら無責任に考えながら動向を静観していた。

しかし彼が数回目のまばたきを無意識で行つた瞬間、目にも留まらぬ何かが駆け抜け、チンピラが殴り飛ばされて気絶し、人質の女性は安全地帯へと避難させられていた。

「そこまでだ！——というにはワンテンポ遅かつたかな？」

風のように駆け抜けたのは、一目にはとても俊敏そうには見えない見上げるほどの巨漢だった。

縦にも太く、横にも太い。シルエットだけ見れば肥満体のように見える体は、その実極限まで詰め込まれた筋骨の隆起。

彫りの深い顔立ちに金髪碧眼。帯を締めた道着がはち切れそうなまでの筋肉を覗かせた男の姿を認めると、周囲は堰を切つたようにワツと沸いて歓声を上げた。

「ガルさん！ よかつた、駆けつけてくれて……」

「この子は大丈夫だよ！ ガルさんのおかげで怪我一つないさー！」

「まったくいきなり因縁をつけたかと思つたら刃物を取り出して……どこのチンピラだか知らないがとんでもないヤツだよ」

「H A H A H A H A!! 無事だつたならよかつた！ それじゃあ僕はコイツを引き渡してくるよ。みんな、祭りを楽しんでいってね!!」

そう言い残してチンピラを連れて飛び去っていった巨漢を見送り、周囲は先刻以上の賑わいを取り戻した。

まるでアメリカン・コミックスのような光景にパンドーラは目を丸くし、傍らのカフカに尋ねる。

「嵐のように去っていったのかわ……あのアメコミみたいなメリケン男子は一体何だったのかしら……」

「さっき言いかけた〈マスター〉だよ。先代から【超練体士】を受け継いだ、世にも稀な〈超級〉の一人——」

カフカはいつの間にか取り出していた煙草を啣え、深く息を吸ってから煙を吐いた。

悪党どもが一等恐れる正義漢。その五体で悪を木っ端微塵に打ち砕く正義の使者。

「——」武仙のGA・LEVER。それこそ、ヒーローみたいなやつさ」

カフカは身を縮こまらせるようにしてその名を呟いた。

T o b e c o n t i n u e d

軽い少女の重い想い

□【雑技王】黒猫

黄河の龍都と南方都市をを結ぶ主要街道を行列が進む。

大々的に告知された〈黄龍雑技団〉の大巡業、それに必要な人員と物資を詰めた竜車は大名行列のように街道を占拠しながら、最後の目的地に向けて進行している。

本来は五〇〇名前後しかいない一座の人間だけど、この行列に加わる人数は軽く一〇〇〇を超える大所帯。

その内訳は巡業についてきた熱心なおっかけだったり、それを相手にする商人や娼婦だったり、それらをまとめて護衛するティアンや〈マスター〉の腕利きだったり。

「壮観ぢやろう？　ハイや」

「まーね」

隊列の中央に位置した竜車の屋根で黄昏れていると、のそのそ登ってきたワンジーちゃんが隣に座って言った。

ジーちゃんは今回の巡業にあたって必要な資金を出してくれた一番のスポンサーだった。

あたしが【雑技王】に就いたことを報告した途端一も二もなく企画を立ち上げ、だんちよーに熱心に呼び掛けたのも他ならぬジーちゃんだ。

開催地の選定、移動ルート構築、日取りや人員の確保、全部ジーちゃんとだんちよーが中心になって、その結果がこの光景。

天覧公演の手筈を整えたのもこの二人で、それを大盛況で終えた今、あたしの名は不動の【雑技王】として全国に轟いている。

「我がことのように誇らしいのう。長らく不在だった【雑技王】をおぬしが継いでくれたこと。皇帝陛下の覚え目出度きこと。こうして大移動に数多の観客が着いてきてくれること。全ておぬしの実力あつてのことぢや」

「流石に褒めすぎじゃね。そんなこと言つてるとあたしチョーシ乗りまくりよっ。」

「何を言う。おぬし無くして今の光景はありえぬよ。最早誰も一座の名を嗤う者はおらん。時の帝に賜った龍の一字を疑う者などおりはせぬ。……あやつの忘れ形見は再び輝きを取り戻したのぢやから、誰がなんと言おうと儂はそれを譲らぬよ」

じーちゃんは涙ぐみながら鼻を赤くして遠くを見ていた。

じーちゃんの言うあやつ……先代【雑技王】黄刃鳥のことは、この数年で幾度となく聞いている。

ワンじーちゃんと、だんちよーのじーちゃんと、もう一人別の街にいるじーちゃんの三人で旅した青春時代の話は、一座の各支部を巡る修行時代に同行したワンじーちゃんから思い出話として聞かされた。

先代じーちゃんの凄さはじーちゃんが残していた記録映像で見たことがあるけど、確かに桁違いだった。

具体的に何がどう凄いのかと言えば言葉に詰まるのだけど、惹き込まれるっていうのはまさにこういうことなんだと素直に納得したほど

記録媒体越しに観た演目でさえかぶりつきになるのだから、それを直で観たときの興奮はどれほどのものだろうと柄にもなく熱中した覚えがある。

先代じーちゃんに続く【雑技王】が現れなかったのも領けるほどに、あたしが【雑技王】の就職条件をだんちよーから教えられたのは、

【名軽業師】のレベルをカンストさせたときだった。

その条件とは「自分が主演となる舞台の興行収入が一定額を超える」ことと、「【名軽業師】としての名声値を一定以上得る」こと。前者の条件はある程度軽業師としてのキャリアを維持していれば達成することは難しくないけど、問題は後者。

名声値は具体的なパラメータとしては表示されないマスクデータで、どれくらい稼げば条件が満たされるのかが誰にもわからなかった。

名声と言うからには有名になればいいのだろうけど、一座の支部長のように長い活動で名が知れ渡っていても達成のアナウンスは通知

されなかった。

ひよつとしたら今も先代が生きているから席が空かないのではないかと考える者もあつたらしいが真偽は不明。

そのまま【雑技王】の不在が続ぎ、かつての伝説と名門も過去の栄光と忘れ去られようとしていたところに、あたしのもとへ条件達成のアナウンスが通知された。

多くの超級職と同様に、【雑技王】への転職にも専用のクエストが用意されていた。

その内容はクエスト用の特殊空間で制限時間内を自由に演目を演じ、一定以上の評価を得ること。

転職条件があやふやなら、転職クエストの合格基準もあやふや。

だけど一応の基準とでも言うように舞台上の上では幻影が雑技を披露していて……それは映像で観た先代じーちゃんの動きと瓜二つだった。

つまりそれは「先代に負けない雑技を披露してみろ」という激励に他ならず、それを見てあたしはこれまで誰も【雑技王】になれなかった理由がすとんと理解できた。

結局のところ単純な話で、先代じーちゃんが凄すぎるせいで跳ね上がったハードルを誰も越えられなかっただけのことだった。

転職条件にある名声値も、歴代【雑技王】が獲得してきた名声と比較して算出される相対的な指標に過ぎず、歴代の中に突出した才能の持ち主がいればいるほどにその達成難易度が上がってしまったのだろう。

経験と才能が物を言う芸能の世界、その職能のひとつに求められる条件としては至極納得行くものだった。

単純に金を稼ぐだけでは芸とは言えない。

観客が納得するだけの芸を修めなければ王位には就けない。

〈Infinite Dendrogram〉がゲームである以上なにかしらのシステムがそう定めているのだろう。

だけどそれは逆に、転職クエストが解放されたということは、十分に達成の可能性があるということにほかならない。

結論から言えばあたしは転職クエストに成功した。

時間いっぱいまで演技切った瞬間、あたしは転職クリスタルの前に立っていて、ステータス画面には【雑技王】の名が表示されていて、一座の皆がそれを祝福してくれた。

だけどそれと同時にあたしのヒダルガミもへ超級エンブリオへ進化していて……あたしはなんとも言えない気分になった。

「浮かぬ顔じゃの。ヘイヤ、何をそんなに思い悩む」

「そー見える?」

「わからないでか。こちらら人の顔色伺い続けてもう一〇〇年近いんじゃないぞ」

「年の功ってやつ? さすがじーちゃんじゃんね。……ま、当たってるケド」

じーちゃんが本気で心配していることは、声のイントネーションでわかった。

だけどどう答えたものか考えて、言葉に詰まる。

あたしは雑技が好きだ。

でもそれは軽業師としての誇りとかじゃなくて、演じることで観客があたしに注目するのが堪らなく気持ちいいから。

あたしは自分のへエンブリオへが苦手だ。

別に嫌いというわけでもないけど、振り切ったはずの過去が追いついてくる気がして……進化と同時に覚えた必殺スキルのせいで余計にそう思う。

あたしがへInfinite Dendrogramをプレイしているのは、あつちゃんに誘われたからで、あたし自身には大した動機は無い。

今もデンドロを遊んでるのは、単純に居心地がよかったからだ。あたしが軽業師として働けば働くほど、誰もがあたしに注目してくれる。

じーちゃんが甘やかしてくれるように。

だんちよーが叱ってくれるように。

観客が持て囃してくれるように。

可愛がってもらえる……それだけが、あたしが今を頑張る唯一の理由。

「ふうむ……さてはおぬし、不安になっておるな？」

「不安？ まっさかー」

柄にもなく落ち込みかけていたところに聞こえた声に、あたしは咄嗟にそう答えていた。

【雑技王】 黒猫は世紀の大天才。かつての伝説をも超えた今を生きる伝説。

そんな触れ込みの中臨んだ巡業で、いくら身内でも弱音を吐くところを直接見せるのは憚られる。

……というのは建前で、単純にあたしが恥ずかしいだけだ。

「ま、ほれ。こつちやこいこい」

「ん……」

だけどじーちゃんはそれを見透かしたようにやんわりと微笑み、ぼんぽんと膝の上を叩いた。

あたしはその誘いに乗ってじーちゃんの懐に収まる。

全身でその温もりを感じていると、じーちゃんはとつとつと口を開いた。

「へいや、おぬしが【雑技王】を継承したと聞いたとき、わしや心の底から嬉しかった。目にかけた若者が見込んだ通りに……いやさ期待以上の才気を見せて悲願の座を復活させたのじゃからな」

「……………」

「おぬしは天才じゃ。これほどの幼さでこの力量、先代でさえ持ち得なかつた天稟よ。誰もが生涯をかけて極める道を一足飛びに駆け抜けたのじゃ。これを天才と言わずして何という」

じーちゃんの言う通り、あたしは天才だ。

特に体を動かすことにかけては誰にも負けるつもりはない。

だからあたしが【雑技王】になったことに殊更の努力は必要なかったし、目指すだけの情熱も実を言う和无い。

あたしが軽業師として活躍することで皆がちやほやしてくれから、おだてられるままここまで続けてきただけのことだ。

「しかしおぬしは、それを天賦の才と言われることが不服のようじやな」

「……よく見てんね、じーちゃん」

「言つたらう、年の功じやと」

だからそれを天才と持て囃されることに対して、あたしは大した感慨を見出だせない。

極端なことを言つてしまえば……原始人の前で肉を上手く焼けたからといって何が凄いのか。

そんな傲岸不遜が心のなかに巣食っていることを、あたしは決して否定できない。

つまるところあたしにとって、【雑技王】というジョブ自体に価値は無いも同然だった。

「ほほほ……若い若い。いや、幼いのか。ほんにへマスターとは不思議なものよ、おぬしのような年端も行かぬ子供までもが、超常の存在として君臨する。儂らテイアンの理解の外じや。しかしの、ひとつだけわかることがある」

「それは？」

「おぬしが子供だということじや」

じーちゃんは優しい声で言い切った。

「おぬしは子供じやよへいや。ありもしない不安に怯える、まだまだ物を知らぬただの子供じや。なあへいよ、さてはおぬし、自分には【雑技王】としての価値しかないと勘違いしてはおらんか？」

鋭い指摘に、思わずあたしの全身が跳ねた。

考えないようにしていた不安を言い当てられ、あたしは返事も出来ずに縮こまる。

だけどそんなあたしの頭をじーちゃんは優しく撫でて、諭すようにゆっくりと言った。

「まったくの杞憂だとは言わぬ。芸事もまた人の営みなれば、それによつて得る絆と柵に打算は付きものじや。しかしの、へいや。だからといってそのみに縛られることも無いのじやよ」

「……………」

「おぬしが辿り着いた頂きは、数ある道のひとつでしかない。そして道に果ては無いが、引き返して別の道を選ぶ自由がおぬしにはある。人生とは無数の岐路の連続じゃ。やがて歩く力を失ったとき、その道程を振り返って初めて、人は己の生の真意を知る……」

「ヘイにはちと難しい話じゃったかの?」、と言ってじーちゃんは笑った。

じーちゃんの言う通り、その言葉の意味はあたしにはまだ難しく、じーちゃんが本当に言いたいことを今のあたしはまだ飲み込めそうにない。

だけど肯定するでもなく、否定するでもなく、寄り添うように投げかけられたじーちゃんの言葉に、あたしは例えようのない安心感を覚えていた。

「……薄々察してはおったが。おぬし、殊更愛情に飢えておるの」

「……そー見える?」

「親の愛を知らぬかはたまた……おぬしは時折、傷ついた野良猫のような表情を見せる。それでも歪んでおらぬのは、良き人間関係に恵まれたからかの」

「そこまでセンチメンタルじゃないけど、まー間違っちゃいないよ。血は繋がっていないけどパパとママもいるし、仲の良い友だちもいるしね」

「だけど生みの親なんて知らない。いらない。」

黒沢音子の親はパパとママだけ。あたしの親友はあっちゃんだけ。

こつちの世界で大切なものは、黒猫あたしにとって大事な人達だけ。

あつちリアルとこつちデンドロのあたしは別物のハズなのに、ただあたしの「ヒダ
ルガミ」だけがその繋がりを証明する。

「……………」

ふと屋根下を見やれば、視線があつた同行者の誰かがあたしに向けて手を振った。

それにあたしは「シェイドプリンター」で実体化させたヒダルガミの闇で会釈して応えてやる。

そいつはどうやらあたしのファンだったようで、目の前に現れたあ

たしと同じ形をした影の手を両手で握って舞い上がっていた。

触れれば命を失うあたしの闇に嬉しそうに触れる姿を見て、心の片隅で安心してしまう。

あたしがこの特典武器を愛用するのも、単純に便利だからということもあるが、触れ合えず傷つけ奪うだけのあたしのへエンブリオが、まるでマスコットののように無害を装えるからだということも自覚している。

本当は【軽業師】とはシナジーするはずもない奪うだけのへエンブリオ。

それが誰の命を奪うでもなく、喝采を得る助けとなることに、なぜか無性に嬉しくなる。

「それが答えじゃよ、ハイや」

「答え？」

「おぬしのへマスター」としての力は確かに傷つけることしかできぬかもしれないが、紆余曲折を経てこうして触れ合うこともできた。それは特典武器の力によるものじゃろうが、その力を望んだのはおぬしの心魂そのもの」

「……………」

「おぬしは優しい子じゃ。儂にとつても目に入れても痛くない、可愛い可愛い孫娘じゃて」

撫でられながらあたしは、言葉を返そうにも口を開けず、ただ撫でられるままになっていた。

無理して口を開こうとすれば、声が震えるのを堪えきれないのがわかっていたから。

じーちゃんは優しい。だんちよーも優しい。あたしと親しくしてくれるこの世界の人たちは皆優しい。

一番大事なものはリアルのパパとママ、そしてあつちゃんだけど、じーちゃんたちもそれに負けないくらい、今のあたしには大切になっていた。

三年前にこのゲームを始めたときは高性能なNPCとしか考えていなかったティアン。

ただ今ではもうただのNPCなんかじゃない。血と情の通った
一個の人間で、この世界はもうひとつの世界。

リアルよりずっと濃密な人間関係を経て得た今の自分と、そんなあたしに親身にしてくれるじーちゃんたち。

その信頼に応えたいと考えた瞬間、あたしの中で急速に【雑技王】の名が輝きだした。

「あの子、じーちゃん」

「うむ」

「あたし、公演頑張るじゃんよ。きっちり四箇所大成功させて、大手を振って皆を龍都に凱旋させる。そんでき……」

「うむ、それで？」

「そのあとまた一座でたくさん活躍したら、旅に出るじゃんよ。身一つで大道芸でもしながら小銭稼いで、レジエンダリアまで友達迎えにいつてき。そんでき次にこっち戻ってくるときは、あたしの一番の親友をじーちゃんたちに紹介するよ」

じーちゃんに言われてみて、ふと思いつかんだやりたいことがそれだった。

具体的な中身はまだ追いついてないけれど、なんとなくそうしたいと思っただけだった。

その気持ちをそのままじーちゃんに伝えると、じーちゃんはあたしの髪をくしゃくしゃにして撫で回して、とっても嬉しそうにはにかんで見せた。

「そうかそうか、そうしたいか。なら、それでええ。それがええんじゃない、ハイや。おぬしの心ゆくままに旅しなさい。可愛い子には旅をさせよとも言うしの。それに、なに、おぬしが一時抜けたとて屋台骨は揺るがぬ。むしろおぬしの居ぬ間に見返してやろうと発奮するじやろうて」

「そーかな。……へへっ、そうだといいいじゃんね。そうなってくれたほうが、あたしも張り合いがあるじゃんよ」

「ほほほ……ほんに、老いらくの今になつてますます長生きしたい理由ができたわい。おぬしはまつこと、この老いぼれを飽きさせんいう

…ほっほっほっ！」

それからあたしたちは日が落ちるまで屋根の上、二人で他愛のない話で語り明かした。

次に日が昇る頃には第一の開催地に到着する。それに向けてあたしは、早くも最高潮に達していた。

絶対にこの巡業を成功させて、皆を大満足させてみせる。

そう固く決心しながら、あたしはやがて眠りについた。

T o b e c o n t i n u e d

三雄邂逅（内二名雌）

□【雑技王】黒猫

少し湿っぽくなつた巡業開始初日から三週間が経つて、あたしは既に三箇所での興行を終えていた。

特にこれといったトラブルも無く、道中も事前に雇用を取り決めていた信頼できる腕利きのおかげで平穩無事で、つい先日最後の興行地に到着したばかり。

先に開催した興行の噂が先行していたのか、この都市では到着するなり歓迎の聲が待ち受けていて、ほくほく顔の役人が催す宴に招待された。

あたしはそのへん興味ねーし関わるつもりもないから大人からの又聞きになるけど、やっぱりデカイイベントが起きれば現場はかなり儲かるらしい。

一座のトップのだんちよーと、今回の巡業を企画して根回ししたじーちゃん。そしてイベントの顔であるあたしは都市のお偉いさん直々に歓待された。

しよーじき、こういう形でヨイショされてもあんまり嬉しくない。

あたしが最高に気持ちよくなれるのは演じ切つたあとの拍手喝采で、お金やら利権やらの生臭い話と打算で褒められても、ぶっちゃけ鬱陶しい。

だからそういう面倒事はいつもどおり大人たちに任せてずらりと並んだご馳走を攻略していると、ぬつと大きな影が差してあたしに声をかけてきた。

「黒猫くん！ 【雑技王】襲名おめでとう!!」

「……ガル兄？」

振り向いて見上げた相手は、久々に顔を合わせたガル兄ことG.A. L V E Rだった。

相変わらずメリケン節全開なマッチョスタイルは見間違えようもない。

「H A H H A H A ! 　そう呼ばれるのも久しぶりだね、覚えていてくれ

てよかったよ!」

「ガル兄くらいキャラ濃いとそうそう忘れらんねーじゃんよ。とりまありがとね、こんなところで顔見知りには会えるなんて思ってたじゃんね」

「僕も〈D I N〉の速報で名前を見つけたときは驚いたよ。でも不思議は無いね、キミならいつか【雑技王】になれると信じていたとも! 僕はてんでダメだったからね!!」

ガル兄との付き合いはあたしがまだ【名軽業師】だった頃、じーちゃんと一緒に出かけた武者修行時代に西方支部で知り合ったのがきっかけだった。

その頃からガル兄はいろんなジョブを渡り歩いていたことで有名で、ちようどあたしが支部にいたときに【軽業師】になりきたのが縁で何度か指導したことがあった。

けれどまあガル兄が自分で言ったように、ガル兄の【軽業師】としてのセンスはあんまりよろしくなく、ぶっちゃけて言うとな才能が無かった。

レベルだけはガル兄の〈エンブリオ〉のおかげであつという間に上がったけど、肝心の中身がそれに伴ってなくて、ガル兄は早々に【軽業師】をやめて別のジョブに就くことになったわけ。

まあ【軽業師】ってマイナーな上に戦闘職じゃないし、練習もちよーハードだからね。

おかげで今でもあたし以外に軽業師系統に就いたへマスターってほとんど見ないし、いたとしてもガル兄みたいにすぐやめちゃう。

とはいえガル兄自身は人付き合いも良くてつるんで楽しかったから、その後も何度か一緒に遊んで、パーティ組んでレベリングとかもやったっけな。

そんなこんな一座の西方支部を離れるまではよく顔を合わせていたから、あたしにとっても親しいフレンドの一人というわけじゃんね。

「ところでガル兄はなんでこんなところにいんの? 一応ここ、関係者以外通れなかったと思うんだけど」

「それは勿論、僕も関係者だからさ！」

「マジで？ まさかガル兄、お役所関係？ でもそんな柄じゃなかったじゃんね」

「一から話せば長くなるんだけど……ああ、ちょうどいいところに。師匠——！」

あたしが訝しむと、ガル兄はいつの間にかじーちゃんたちに混ざって話し込んでた知らないじーちゃんに声をかけた。

呼び声にそのじーちゃんが振り向くと、輪を離れてずんずんところらに近づいてくる。

ガル兄ほどじゃないけど大柄な体格。相当に歳食ってそうなのにそこらの腕利きよりはずっと腕が立ちそうな凜猛な気配。

おっかない目付きの三白眼をギロリと向けると、獣の唸るような嗶れ声で言った。

「よう、お嬢ちゃんが噂の【雑技王】か？」

「人に尋ねるときはまず自分から名乗るべきじゃんよ」

見下ろすじーちゃんにそう言い返すと、じーちゃんは泣く子もチビのような表情であたしを睨みつける。

だけどそれで怯むようなあたしじゃない。真っ向から睨み返してやると、しばらくしてからぷつとじーちゃんが吹き出して、虎髭を歪ませて牙を剥くように笑った。

「クツ、ククク……確かに俺が悪かったわな。俺は虎頂道^{フリー・デインタオ}、お前さんのことはパオから聞いたぜ」

「パオってーと、ワンじーちゃん？」

今更だけどじーちゃんの名前は王宝満^{ワン・パオマン}だ。

見るからに縁起のいい名前のおかげでよい商いができたとは、じーちゃん十八番の思い出話だったり。

ともあれじーちゃんの知り合いならあたしも無碍にはできない。警戒を解いて改めて見上げると、フリーじーちゃんはぐしやぐしやとあたしの頭を乱暴に撫でた。

この撫で方……悪いじーちゃんではない。おっかないとは思うけど。

「あ、ひよつとしてじーちゃんが言ってた古い知り合い？ 先代じーちゃんともつるんでたつていう」

「おう、俺がそのジジイよ。お前さんのことはパオからの手紙と……そのデカブツから聞いてるぜ」

「そーいやさつきガル兄、じーちゃんのこと師匠つて言つてたけど……」

「おう、そいつは俺の不肖の弟子よ」

「ガル兄、不肖なん？」

「うーん、素直に頷くには癪だけど、否定するには師弟関係が邪魔をする……板挟みだね!!」

「どうやら二人が親しい間柄なのは間違いないらしい。」

「だけど一体なんの師弟関係だろ？ そう思っているらと今度はワンジーちゃんが合流してきて、フリーちゃんの背中を親しげにドンと叩いた。」

「これ、フリー！ 俺の紹介も無しにヘイと親しくするんじゃないぞい！ おぬしの乱暴さが伝染したらどうする」

「このチミっ子がそんなタマかよ。いい胆力してやがるぜ、こいつは。先に出会つてりゃこいつを俺の弟子にしてただろうよ」

「師匠！ それでは僕の立場が無いのですが、師匠!!」

「じゃれ合う二人は本当に仲良さそうで、じーちゃんもいくらか若返つたような気配で笑い合っていた。」

「ガル兄もそう抗議してはいるものの、顔は楽しそうにニヤけてる。」

「どうやら師弟関係は良好のようで、あたしとじーちゃんがそうなるように、二人も随分親しいようだった。」

「……つと、積もる話するにはここはちと面倒かね。おいパオ、それに嬢ちゃん、よければウチの道場に来るかいい？」

「ほつ、それもそうぢやな。あとの話は刃華がおれば十分ぢやろうて、ここはこやつという言葉に甘えておくとしようかの」

「もちろんあたしにも拒む理由なんてどこにもなく、話し込む他の大人たちを他所にフリーちゃんの道場へ繰り出すのだった。」



「つまりじーちゃんとその人間が警備責任者ってこと？」

「だな。正確にはこいつの名義だが……俺はもう一線を退いてるからな」

案内された先はこの街でも一段広い敷地のどデカイ道場だった。

看板には〈竜心館〉の名前が掲げられ、たくさんの使用人に出迎えられる応接室まで案内された。

そこで女中さんが運んできたお茶を一服しながら尋ねた中に今の話があった。

「まさかガル兄が【超練体士】になってたとは思わなかったじゃんよ。オマケに〈超級〉にまでなってたとか、マジびっくりじゃんね」

「ほんにほんに。こやつにおぬしのような弟子がおったとは初耳ぢやて。見るからに雄々しい、それにフーと違って品位がある。おぬしには勿体無い弟子ぢやの？ フー」

「恐縮です！ しかし今の立場は偏に師のお心遣いあつてのこと。僕も師の顔に泥を塗らないよう努めていくつもりです、何卒よろしくお願いします！」

そう言つて深々と頭を下げたガル兄には、以前までにはなかった貫禄というか風格というか、溢れるほどの覇気に満ちていた。

自信満々な素振りには以前からあつたけれど、その実けっこー繊細で人一倍強がりだったことを知ってるあたしは、ガル兄にもいい出会いがあつたのだとすぐにわかった。

あたしがじーちゃんたちと出会えたように、ガル兄もフーじーちゃん和良好的人間関係を育めたということなんだろうね。

「差し当たって皆さんが滞在なさる間は、当道場の師範代たちを指揮につけ、高弟たちで四人一組の小隊を組んで全体の警備に当たります。師範代は皆カンスト済み、高弟たちも上級職に就いた腕利きたちです。〈マスター〉からも有志が集まって警邏に当たってくれまして、僕は公演中に賓客の警護に当たる予定です」

「ほほう、錚々たる面子ぢやな。それほどの戦力、龍都でもそうは揃え

られぬだろうて。よく育み、よく鍛えておられるようぢやな、がるばあ殿」

「恐縮です。ああ、僕のことにはガルとお呼びください。黄河の方には慣れぬ発音でしょうから、どうぞお気兼ねなく」

「ほほほ、では頼りにさせてもらうぞい、ガル殿」
「はっ！」

ガル兄の佇まいは大したもの、本人の体格もあつて随分と頼りがいがあるように見えた。

言い切る本人の実力はどれほどのものだろうと気になって《看破》で覗いてみるけど……

「ガル兄さあ、いまレベルいくつ？」

「うん？　こないだ二〇〇〇を越えたところだよ」

「うつつわマジかあ……ガル兄のへエンブリオへ、やっぱヤバいことになつてんね」

見えなかつた。

《看破》のスキルレベルを十分に上げてるあたしでも、碌な数字が見えずにガル兄のステータスは不明瞭だった。

そしてガル兄の性格的に偽装系スキルを使うことも考えにくく、レベル差によつてスキルが通用しにくいのだろうなどは考えてたけど、まさかそこまで開きがあつたとは思わなかつた。

「ブービーちゃん、お目が高いねほんと。まだ上級のうちからガル兄に目をかけるなんてさ」

「僕にとつては大恩ある師匠だとも！」

「よせやい、こつ恥ずかしい」

あたしもガル兄のへエンブリオのことは以前から聞いていた。

獲得経験値増幅に特化したガル兄の「ヘラクレス」のことは、当時いろんな意味で有名だったから。

なにせ当時はまだへ超級エンブリオどころか超級職すらほとんど見られなかつた時期だ。

上級職までしかいなかった頃、レベリング効率は良くてもカンストで頭打ちになつたあとは持ち腐れにしかならないガル兄はほとんど

テイアンと変わらない者としてへマスターからは低く見られていた。それも仕方ないけどね。なんせスキルとステータス補正がへエンブリオの華だから、いくら経験値を稼ぎやすくてもキヤップが掛かってるうちは多少のスタートダッシュにしかならないし。

だけどガル兄の「ヘラクレス」が当時の方向性を保ったままへ超級エンブリオになって、レベル上限の存在しない超級職に就けたのなら……メインジョブのレベルだけで二〇〇〇オーバーとかいう暴力も領ける。

レベルを上げて物理で殴ればいいって、昔そんなクソゲーがあつたらしいけれど、ガル兄はまさにそれだ。

そのガル兄が直接警護してくれるのなら、これ以上の安全は無いと言つても過言ではないだろう。

正直あたしでも真つ向勝負で今のガル兄に勝てるかわかんないし。なんせHPとかMPとか、伏せ字でもなんかおかしい桁数見えてたしね。

純粹に地力が強いやつは相性良くないんだよなあ……だからとって負けるつもりもないけど、物事には限度があるってことで、ガル兄は例外指定。

「でもフリーちゃんも強いじゃんね絶対。今まで見てきたテイアンではトップレベルに強そう。さすがに【龍帝】サマには劣るけど」

「あの御方と比べられちゃ誰も敵わねえよ！　しかし、【龍帝】ね……その名に然程燃えなくなったのは、俺も老いたということかね」

どこかしんみりした表情で呟いたフリーちゃんに首を傾げると、ワンジーちゃんが懐かしむように言った。

「フリーのやつは昔、『俺が【龍帝】を越えて最強になってやらあ！』と豪語していた恐れ知らずでの、あちこち旅しては黄河の腕自慢に片っ端から手合わせを申し込んでおつたんだや。決闘にも籍を置いてて……最高記録はたしかいくつちやったかの？」

「決闘ランキング二位。当時はまだ先代【龍帝】だったかね。それに決闘の質も今とは比べ物にならない程低い。もう自慢にもなりやしねえ昔話さ」

「そうぢやったそうぢやった。」人竜^{レンロン}の異名も今となつては懐かしいのう」

「はえー、すっげえ。」

「ティアンで決闘ランキング第二位とかマジモンの凄腕じゃんね。」

「今の第二位つてーと迅羽だし、他のトップランカーは〈輝麗愚民軍〉の五支将が有名だ。」

「……〈輝麗愚民軍〉といえば、むかーしぶつ殺した〈紅巾党〉の連中も今はその配下だっけ。」

「オーナーのアッシマンが輝麗にガチ恋してドルオタになつてたのを見たときは流石に草生えたじゃんよ。」

「ところで”人竜”つて?」

「あー……、まあ、あれだ。若気の至りつてやつだがよ……そういう伝承があるんだよ、【練体士】にはな。かつてこの黄河を支配していた古龍、それに人が近づくための道のひとつが【練体士】を極めた果てにある。練技と武法を極めたなら、人の身から龍へ転じることができ……つてな。それに肖つてたのを知った民衆が付けた異名だ」

「ほへー」

「俺はそれを信じて【練体士】に身を投じて【超練体士】になつて……先代【龍帝】に挑み続けて、最終的にはレベル一〇五四まではいったが、そこで頭打ちだ。流石にもう体にガタが来て無理はできそうにねえ。ま、寿命つてやつだな」

「ふーん……それで、龍になれそうな感じはあつたん?」

「さて……どうだかな。おいガル、どうだ?」

面白がるような笑みのフージーちゃんに尋ねられたガル兄は、神妙な顔をして答えた。

「まったくの出任せではないでしょう」

「……だよ。気になつたら、こいつに聞け。俺に聞くよりかはずつと見えるモンがあるだろうよ」

「ふーん、そっか。ならガル兄、楽しみにしてるじゃんよー!」

「H A H A H A!! ……まあ、その機会があればね!!」

その後お喋りは夜更けまで続き、気づけば戻るには遅い時間になつ

ていた。

そしてその日は道場に一泊することとなり、あたしはそのまま寝床についた。

数日すれば開催される最終公演、それに向けて英気を養うように……。

◇◇◇

……そう思つて、ぐつすりやすやすや眠つた翌日の朝。

たつぷり昼近くまで寝ていい気分が目覚めようとのそのそ起き上がったところに、突然轟音が鳴り響いた。

慌てて飛び起き駆け込めば門前には人ばかり。何事かと集まった使用人たちが見守る中、その視線の先にはまるで場違いな女の姿。

欧州貴族めいた洋装のそいつは、亀裂を刻んだ石畳の上で居並ぶ門下生たちを前に悠然と立っていた。

「失礼。【超練体士】殿はご在宅でしょうか」

「……【超練体士】なら僕だけど、キミは一体どちら様かな？」

進み出たガル兄を見上げると、そいつは興味深そうに観察してから……満足そうに笑みを浮かべる。

見た目は清楚ながら、浮かべた笑みは剣呑そのもの。隠しきれない凜猛さが全身から滲み出て、その好戦性を表していた。

「稀なる強者の噂を聞き付け、是非とも一手立ち会いたく。ご安心を、如何なる結果でも看板は奪いません。ただ尋常なる立ち会いのみを所望します」

その言葉に門下生たちが一気に殺気立つのをどこ吹く風と受け流し、そいつはガル兄だけを視界に認めて構えを取る。

打ち鳴らした両拳からは肉のそれではなく、重い鋼の音が響き渡つた。

「——わたくしの名は【撃神】ステラ・ザ・デストラクト。人呼んで人間台風。さあ、いざ尋常に」

「——初日から早々慌ただしいことだねツツ!!」

周囲が啞然として、じーちゃん二人が心底楽しそうに笑い転げる中、二人は激突した。

……ていうかあれ、やっぱりメスゴリラじゃん。

T o b e c o n t i n u e d

ゴリラ、キヤット、そしてゴリラ

□〈竜心館〉敷地内

両者の激突は周囲の予測を外れて静かに始まった。

しかしそれは互いに様子見に徹したからではない。寧ろその逆、両方とも初手から渾身の一撃を相手へ繰り出し、その拳を互いの急所へ突き立てていた。

「ふむ……成程」

「随分と響くねえッ!!」

しかしてその結果は奇妙不可解。

AGIとSTRが共に二万を超えるGA・LEVERの豪腕はステラと皮一枚の距離でピタリと受け止められ、代わりに彼女の鉄拳を無防備な鳩尾へ受けていた。

だがGA・LEVERに堪えた様子は無く、体内を駆け巡る《発勁》にも似た浸透衝撃が臓器に深刻な傷痕系状態異常を齎そうとするのを、エンハンス・ピートルスキ《エンハンス・クラーク練技・甲虫殻》とエンハンス・スタビリティ《エンハンス・リカバリ練技・軟身功》の即応発動で免れ、損なつたHPをエンハンス・リカバリ《エンハンス・リカバリ練技・内丹活性》によつて回復する。

ダメージにして二万は下らない内部破壊攻撃も、本来数値からして桁違いのENDの割合強化と肉体変質による物理耐性強化、そして『ジヨブレベル×10の即時固定値回復』によつてかすり傷でしかなかった。

そしてその交錯で察する。

両者にとつて眼前の相手こそ、過去類を見ない強敵であると。

「成程、信じ難いほどの手練。生身でわたくしの一撃を耐えた者など、ドライフの【獣王】以外にはいなかったのですが……少々自信を失くしますね」

「とんでもない相手にまで喧嘩を売ってるね！ バトルジャンキーというやつかな、困るね全く!!」

嘯くGA・LEVERだったが、しかしその表情はまたとない強敵を前に破顔していた。

彼もまた規格外に身を置く故に全力を發揮する機会に恵まれぬ者。

こうして真っ向から殴り合える好敵と相対することに否応無く高揚する。

しかし今の一撃で致命的な相性上の不利を悟り、また本来の目的もあつてなんとかこの状況を切り抜けられないかを考え始めていた。

その逡巡を隙と捉えたステラが文字通り弾丸の如く肉薄し、鉄の両拳を再度G A・L V E Rへ見舞う。

既に《看破》でステラのステータスがE N D特化であることを確認していたG A・L V E Rだが、その一連の動きの速さは超音速反応を可能とするG A・L V E Rを確かに捉えていた。

しかしながら狙いは甘く、肉薄した全身と振り抜かれた豪腕が風を裂いて嵐を巻き起こしたことから、それが自前の速度ではないことを見抜く。

砲身内で爆圧を受けて加速を得る銃弾のように、外部からの干渉によつて得た一撃の速さと、先刻の不可解な防御能力を比較して、彼は早々にそのからくりを見破った。

「運動エネルギー操作か！ 成程、物理殺しにも程があるね！ かの「物理最強」にも挑めるわけだ!!」

「流石に地力が違いすぎて敗走しましたが、得難い経験だったと自負しております。しかし【獣王】といい貴方といい、尽く手の内を見破つてくれますね」

「少し考えればわかることだとも！」
(……………)

G A・L V E Rの何気ない一言が観客に紛れていた黒猫を傷つけていたことはさておき。

彼がステラをただならぬ相手と感じていたように、彼女もまたG A・L V E Rをこのままでは到底打倒し得ない相手として考えていた。

(単純な浸透打撃では削りきれない、ですね……どういう理屈かステータスを把握できませんが、H Pの消耗も傷痕系状態異常を負った様子も無い……。となると、全身を砕くべきですが……)

ちらと周囲を見渡し、これでは到底実行できそうにないと判断す

る。

十把一絡げの手合ならともかく、これほどの相手を文字通り粉碎するなら、まずこの一帯も道連れになることは必至だった。

ステラの目的はあくまでG.A. L V E R個人であって、それ以外に累を及ぼすつもりは毛頭なかった。

普段P Kや犯罪者集団へするように広域殲滅手段を取らず、白兵戦に徹しているのもそれが理由である。

「師範と、互角!?! もう七八手も打ち合ってるのに一歩も引いてない……」

「どんな命知らずかと思つたら、とんでもねえな。これが〈マスター〉か……」

そんな二人を目にして周囲から感嘆の声が響く。

超越した戦闘者同士の尋常ならざる応酬。この場に集つた武術の心得ある門下生たちは彼らが信じる最強と互角に渡り合う佳人を見て眩いた。

当初の無礼に覚えた怒りもどこへやら、天女の如き美貌で巨獣もかくやとばかりの暴虐を振るうステラに、ただ武人として敬意を抱くしかない。

敬愛する師範と畏敬すべき挑戦者。期せずして執り行われた超級激突にて拮抗する両者を讃える観客の声に、しかしステラは内心で忸怩たる思いがあつた。

(互角……ですか。純粋な格闘家とわたくしが伍すると。……嬉しくもあり、悔しくもありますね)

そもそも互角と称されることそのものが本来は大いなる間違いなのだ。

運動エネルギーを制するステラのへ超級エンブリオ〈星震撃 テュポーン〉は、物理法則に則る限りおよそ絶対有利を誇る、G.A. L V E Rが言った通りの物理殺し。

防御にあつては敵の攻撃に籠められた運動エネルギーを喰らつて無為とし、攻撃にあつては鋼の四肢を莫大な運動エネルギーで超音速で繰り出し砕く。

無論ただ超越的な加速で殴るだけが能ではない。

接触した四肢から伝播する運動エネルギーが対象の体内を掻き乱す一撃は、即ちその全てが必殺。

まして衝撃スキル特化超級職である【撃神】^{ジ・インパクト}のスキルによって極限まで強化された《発勁》の前には、たとえENDに特化した上位純竜であろうとも一撃で即死に至るほど。

ステラの攻撃を素面で耐えたのは規格外のステータスを誇る【獣王】以外には無かったのを、目の前の男は見事に耐え切ってみせたのだ。

（本当に素晴らしい。わたくしの《星震発勁》^{ダイナミック・インパクト}の微かな予兆に合わせた絶妙なスキル発動タイミング。かつ間を置かぬ回復スキルの使用。それをわたくしの連撃全てに対応させる戦闘センス。性能に胡座をかいた有象無象ではこうはいきません、噂に違わぬ益荒男振りです）

ステラは素直に称賛した。

対個人戦術に限定されてはいるが、その範疇内での全力をこうも見事に捌き切る相手はかつてなかった。

ただ規格外のステータスで圧倒する【獣王】とも違う、高水準のステータスを誇りながらも技巧によって凌ぐG.A. LEVERに、彼女たちへ向けたものとはまた違う心底からの敬意を覚える。

（尋常の打ち合いでは千日手。ならば抗う余地も無く全身を微塵に碎く他にありませんが……対象を彼個人に留めるには少しばかり速すぎます。AGIもENDも同等に桁違い……流石に【獣王】には遙かに劣りますが、それでも次点を行くレベル。……練体士系統はわたくしも下級職をサブで取っています、これほどのステータスの伸びはともではないですが望めないはず。【超練体士】も特化型ではないはずですが……となると、レベル？ 《看破》が通じないのもレベル差のせい……でしょうか。そうなるとうるさくですね、ますます千日手です）

一方でステラもまた己がG.A. LEVERと互角に持ち込まれている理由に感付き始めていた。

そうなるも今しがた自分で思考したように、この膠着状態を打破するには自身の大技を繰り出すしかない。

しかしそれではまず間違はなく周囲も巻き込み、かといって仕切り直すには少しばかり気恥ずかしい。

さてどうしたものかとステラは思案し、その間もG.A. L.V.E.Rと息をつかせぬ超高速格闘戦を繰り広げ――

「ッ!!」

「ぬっ……」

――その足を掬うようにして伸びていた黒い手に脚を取られ転げそうになる。

咄嗟に運動エネルギーを制御して体勢を立て直し最大限の警戒を敷くも、その背中にそつと小さな感触が置かれ……そのMPを根刮ぎにされた。

(いつの間にも!? わたくしの背後を取れる程の身のこなしと気配絶ち……いえ、この感触は……まさか)

致命的な隙をG.A. L.V.E.Rは突かなかつた。ステラの頭蓋を狙っていた拳は寸前で止められ様子見に移る。

スキル発動に要するMPを奪われ愕然とするステラの背後から、嘲るような軽い声が投げかけられた。

「これ以上暴れるなら今度はHPまで喰っちまうぜ? わかつたらおとなしくお縄につきやがれメスゴリラ」

「……よもやここで貴方に会えるとは。思ってもいませんでしたよ、ヘイさん」

その声に観念したようにステラは拳を収め、その場に跪いて振り向かないまま答えた。

それに背後の下手人――黒猫は、呆れたやら驚いたやら、なんとも言えない表情を浮かべて。

「バトルジャンキーもT.P.Oを弁えろって話だよ、ボケ!」
ステラの背中を思いつき蹴飛ばしたのだった。

◇

□【雑技王】黒猫

「まずはご迷惑をおかけしたことをお詫び致します。まことに申し訳
ございませんでした」

「おう、そういうセリフは神妙そうに言えよ。なに晴れ晴れとしてん
だコラ」

「客観的な謝罪要件と主観的な満足は別ですので」

「おもしれーなこの嬢ちゃん」

「師匠……」

ヤムチャ視点でDB戦闘を繰り広げていた二人の内、よく見知つ
たメスゴリラを張つ倒したあと、応接室に場所を移してそいつ……ス
テラがそう謝罪した。

とはいうもののメスゴリラの顔は満面の笑顔で、一人だけ充実しま
くつてるのがすげー癪じゃんね。

フリーちゃんやんは面白そうにゲラゲラ笑ってるけど、こいつあのま
まだとノリで一線越えて大惨事だったのわかってる？

こいつ清楚なフリして闘争本能の塊よ？ つってもそれ知ってる
のあたしだけか、外面いいのも考えものじゃんよ。

「差し当たってはこちらをお納めください。破壊してしまった石畳の
修繕費と迷惑料です、一〇〇〇万リルございます」

「え、なにそれ。いつも持ち歩いてんの？」

「わたくしの都合で一方的に戦いを仕掛ける以上当然の代価です。結
果如何によらずお支払いしています。渡る世間も金次第とはよく
言ったものですね」

ふふん、とドヤ顔っぽい雰囲気のコリラ。……いややっぱゴリラだ
けだとガル兄とこいつとで要素被るな。訂正、メスゴリラ。

つーか微妙にそれ違うし、ていうか露骨に示談に持ち込むって逆に
無礼じゃね？ いいのじーちゃん？

「ていうか【獣王】にも律儀に払ったのかよ」

「当然です。しかし御本人にはともかく、彼女の〈エンブリオ〉には随
分嫌われてしまいました。とても残念です」

「そのままくたばるとけばよかったのに。なんで生きてんの？」

寧ろよくトドメを刺されなかったと感心するところ？ しらねー。

「ま、他に怪我人も出てないし受け取っておくかね。これで沙汰は終いだ、いいなガル」

「僕は構いませんけどね、当事者の目の前で堂々とお金で解決しないでくれるかな!？」

「これでは足りませんでしたか? ……確かに貴方との仕合は一〇〇〇万リル以上の価値があります、わたくしが吝嗇なだけでしたね。では、加えてこちらをお納めください」

「そういうことじゃないんだけどなあ!？」

「うし、じゃあお前さんもウチの客人だ。ま、ゆつくりしていきな」

「ではお言葉に甘えさせていただきますでしょう」

「師匠!？」

「ワロス」

追加でもう一〇〇〇万リル受け取ったフリーちゃん、ほくほく顔である。

ツツコミが冴え渡るガル兄が苦労人属性ってはつきり分かんかね。

「つーかおまえ、なにしに来たんじゃんよ? ガル兄と喧嘩したいだけだったらとつとと帰れよ、ここはゴリラの住む場所じゃねーぞ」

「人間です。そしてG.A. L.V.E.Rさんとの仕合はあくまで余録で本命は別です。というわけでヘイさん、こちらをどうぞ」

そういつてステラが「アイテムボックス」から取り出したのは、開店祝いとかでよく見る花輪だった。

見た感じどれも希少な高級花で、台座には『Congratulations!』のキラキラした文字。

……けれど超デカイ。三メートルくらいある。しかも全部本物の花だから匂いもすごい。つーかすげー邪魔なんだけど。

「一応聞くけど、これなに?」

「ヘイさんが【雑技王】を襲名したと聞きご用意しました。どうぞ」

「どうぞじゃねーよ、邪魔だよバーカー!」

「では【アイテムボックス】に入れておきますので、後程是非」

「……まあ祝辞には感謝しとく、ありがとう」

「……まあ祝辞には感謝しとく、ありがとう」

まあお祝いには違いないから、受け取ってはおく。

でも自室にはいらないから、あとでだんちよーのところに置いておこうと。

「うし、じゃあ貰うもんも貰ったから帰っていいぞ。ゴリラは森へおかえり」

「ファンタズマゴリラさんとも立ち合いを所望したのですが、生憎引き受けていただけませんでした。無理強いするにも立場ある方でしたのでとても残念です」

「えっ、なにその面白ネーム」

「レジエンダリアでお会いしました。紳士的な方でしたよ」

まじかよすげーなレジエンダリア。やっぱあいつら未来に生きてんな。

……あ、そーいやあつちゃんも同類だったわ。

「んんん!! 僕も立場ある身分なだけどなあ!!」

「師匠権限で控訴却下だ」

「ホームなのに圧倒的アウエー感!?!」

「そんなことよりも」

「そんなことって流された……」

「折角の友の晴れ舞台です。是非とも見物させていただきますよ。カルディナでも大変話題になっていましたので、ここでの興行はきつと一番の大盛況ですよハイさん」

「おまえらちよつとおもしろすぎない?」

もう完全にノリがダチじゃん。

てゆーかわかった、フージーちゃんってば昔自分がそんなだったから破天荒なやつが大好きなのね。

むしろそういう意味ではガル兄、よくジーちゃんの弟子が務まってるな。気苦労多そう。

「さらつと友達認定されたのはさておき、そういうことなら無碍にできなないじゃんね。まー精々あたしの美技に酔うじゃんよ」

「しかし困ったことにチケットがありません」

「事前に買つとけや!!」

「ありがとうございます」

とぼけたメスゴリラに招待チケットを叩きつける。

一応あたしの方でも親しい人間を誘えるようにいくらかチケットを渡されていたのだ。

つつてもこれが最後の一枚だったから、ほんとに変なところで運がいやつじやんよ。

「あー……久々に会っても相変わらずだし、つかれた」

「本当はハイさんとも仕合たいのですが……」

「今やろうとしたら本気で殺す。あたしが勝ち越してんの忘れんじやねーぞ」

「ふふふ……そういうと思ったので、巡業が終わった後また日を改めしてお伺いしますね」

「喧嘩吹っかけてくるのをやめろって言ってんだよ」

最後に殺りあつたのはお互いにまだ第六形態の頃だったけど、それでもあたしが勝ち越してるからな。

あたしの【ヒダルガミ】も結局通常スキルは《心魂奪命圏》と《心魂奪命拳》だけで、第三形態からの進化はスキル強化に走ってつたから、今ではほとんどノーリスクでこいつ相手には殺れるし。

ぶつちやけ苦戦度合いで言えば初遭遇のときが一番だったけど、如何せんこいつは懲りないからめんどい。

最近是他所に出てってくれてたおかげで平和だったのに、変なタイミングで帰ってきやがって。しかもしばらく居着く気満々だし。

「つかさ、どーせ暇してんならガル兄と一緒に警護してくれよ。Wゴリラでガード力も二倍じやん？」

「黒猫くん、もしかしなくても僕のことゴリラって思ってる!？」

「まあ、いいでしょう。ハイさんへの詫び料代わりに務めさせていただけます。そしてゴリラ呼ばわりは心外です、彼らはとても繊細な生き物ですよ。ゴリラに失礼です」

つまり自分が暴力的な人間ってこと告白してんじやねーか。

あとガル兄が見た目筋肉ゴリラなのは周知の事実なので今更じやんね。

「ところで今気づいたけど、ワンジーちゃんは？」

「ん？ あいつならとつくに商談とかで出てるぜ。お前さんもそろそろ出たほうがいいんじゃないか？」

「……げ、もうこんな時間じゃん。完全に時間無駄にした、ていうか昼飯もまだだし。まあいいや、行きながら適当に食おつと」

「早速仕事ですね。お供しましょう」

「うーん……釈然としない!!」

そういうわけであたしは二人を引き連れ街に出たのだった。

赤い不審者

□【雑技王】黒猫

道場から一步出れば、そこはもうすっかりお祭り騒ぎ。

無数の屋台と人が混在する風景は大盛況を極めているけど、ここはカルディナにも程近いからかこれまで興行してきた南・東・北の大都市以上に活気が満ち溢れてるように見えんね。

他所じや見なかつた人種もちらほら見かけるし、見るからに身なりがいいのはカルディナの富豪かな？ 黄河では珍しい亜人とかも少数だけ見かけて、まるで人種のバーゲンセールだ。

「こうして見ると祖国アメリカを思い出すね。向こうよりはずっとフアンタジックだけど、これも一つのサラダボウルというやつかな」

「あ、やっぱガル兄のクニってあっちなんだ？ まー見たまんまじやんね」

「わたくしの故郷はやや辺境ですので、こうした人種入り交じる風景は新鮮ですね。とはいえ、カルディナほどではありませんか」

「カルディナかー。向こうはどんなもん？ しよーじき碌でもない噂しか聞かないんだけど」

「實際碌でもないですよ、『金があらずんば人にあらず』は事実ですから。とはいえある程度の腕が金銭があれば過ごしやすい場所ではあるでしょう。お二人なら然程苦労も無いのでは？」

「絶対ヤダ。あたし金に汚い連中とか大嫌いだし」

浅ましい淫売の母も、卑しい紐の父も、どっちも金には碌でもなかった。

ワンジーちゃんのように金の使い方を心得てる大人とは違う、心底金に汚い連中のやることなんて関わるだけ百害あって一利なしってよく思い知ってる。

で、そういう連中の餌食になるのは力のない弱者で……大抵の場合それは、他に身寄りのない子供だったりする。

……まあそんなことを考えていても仕方ないので、話題を変えるか。

せつかくのハレの日に野暮な話もアレだしな。

「んで、そんなところでお前は何してたんだよ？　一年くらい前から顔見てなかったケド」

「西方諸国を巡っていました。最初はカルディナ、次にレジエンダリア、アルター王国と旅をしまして……ドライフ皇国に差し掛かる頃には〈超級〉へ進化していたのもあり興味本位で【獣王】へ挑戦など。所謂武者修行の旅というやつでしょうが、実りある日々でしたよ」

「適当に屋台で買い食いしながら聞いてみると、思った以上に脳筋な答えが返ってきた。」

「つーかなにしてんだコイツ、【獣王】ってリアル側のフォーラムでも超有名なヤベェヤツじゃん。」

「いくら物理相手には無敵だからって”物理最強”相手に戦いを挑むかフツ？」

「相変わらずお嬢様っぽい顔してやること蛮族じゃんね。見た目はガル兄のほうがそれっぽいのに」

「黒猫くん、僕は至って平和主義的な男だぞ！」

ガル兄の抗議の声。

「そうは言うけど人間見た目の第一印象が九割だし、そう思われても仕方ないかなって。」

「そういう意味ではステラが本当に見た目詐欺じゃんね、見た目だけなら本当にお嬢様だし。」

「しかし旅か……僕も興味が無いとは言えないなあ。いつか黄河の外に出てみたいとは思ってるんだけどね」

「是非ともおすすめますよ。他国にしかないジョブも少なからずありますし、それ抜きにしても純粋に楽しめます。各国の実力者との手合わせも大変有意義です」

「うーん、もうしばらくは道場の運営に掛かりきりになるだろうから、出るにしても結構先だろうけどね、前向きに考えておこうかな。せつかくだからステラくんとは逆に東に行ってみるのもいいかもしれないね」

「東というと天地ですか。あそこも黄河以上に武術の盛んな修羅の国

と聞きますね。地球でいう日本に近い国風らしいですが……」

「いやーなんかちらほら聞く話だと大分違うっぽいぜ？　日本は日本でもフィクションに出る方らしいし」

あたしも実際に見たことはないから詳しくはしらねーけど、外国人が想像するようなトンデモ日本観に近いらしいね。

情勢としては戦国時代真っ只中って感じで物騒だけど、その分他国よりも戦闘面での自由はかなり利くそうだし、有力大名の麾下に入つて武将プレイも人気があるって聞いたことある。

でもあたし日本史にそんなキョーミないし、日本人としても好みはどっちかってーとファンタジー寄りだからあんま食指は動かないかなー。

そもそもからして黄河スタートなのも勘違いとすれ違いからのイレギュラーだし、それがこうして長々と居着くことになるのも奇縁つてやつじゃんね。

「あたしもそのうち旅に出てーじゃんね。てかそのつもりだけど、早くても巡業が終わつてからかな」

「おや、そうなのですか？　なら、わたくしで良ければ案内致しますよ」

「ジョーダン。お前と一緒だとぜってートラブル巻き込まれるっつーか巻き込む側じゃんよ、そんなのはゴメンだね」

「心外です。わたくしも勧んでそうしてるわけではありません。ただわたくしの目に余る悪党が多いのと、興味深い強者が多いだけです」
「とか言ってるけど？」

「まあ最低限相手の都合を考えるつもりはあるみたいだし、いいんじゃないかな！　せめて罪のないティアンには迷惑をかけないよう気を付けてくれればいいよ」

「当然です。わたくしとしても〈監獄〉送りは御免ですから」

〈監獄〉ね……あっちゃんとか大丈夫かな？

あっちゃんってば趣味が趣味だから割とグレーゾーンすれすれっぽいけど、今のところは無事みたいだし大丈夫かな。

リアルにいるときはほとんど毎日顔を合わせてるけど、最近はデン

ドロ内での出来事はお互いあんまり話してないし。

なんつーか、サービス開始からデンドロ時間で何年も経ってるから、いろんな人間関係やしがらみが出来たせいでそうホイホイとしやべるのも憚られる感じなんよね、実際。

あつちちゃんの方も色々あつたみたいで最近は忙しいみたいだし、今何をしてるのかも聞いてないや。

第一なんでもかんでも共有するような間柄じゃないしね、あたしら。親愛とプライベートはまた別の話じゃんよ。

「ま、それでもいい加減こつちでも会いに行かないとなー」

「はて？」

「んにや、こつちの話。ちよつと旅に出たときの算段でもね……っつと」
そうあれこれ考えながら歩いてると、目の前に人が立っていたことに気づくの遅れてぶつかった。

幸い手元にはもう食いもんはなかったから相手の服を汚すことはなかったけど、それにしたって注意力散漫だった。

「わりーね、前見てなかったじゃんよ」

「いやいや、こちらこそ道を塞いでてごめんね？ 初めての他国だからつい目移りしちゃってね」

——そいつを一目見ての第一印象は赤だった。

シルクハットに燕尾服、顔にはモノクル、片手にはステッキ。そして傍らには白い美女。

身を包む衣服は全て見るからに最上級で、そして目が痛くなりそうなほどに赤い。赤一色の紳士装束。

見たまんまのジェントルマンだけど、男女の判別が付かない見た目と声音に、コテコテすぎるコーデイネートとカラーリングのせいで胡散臭いを通り越して怪しさ満点。でも左手には紋章（小悪魔っぽい？）もあるから、派手好きなへマスターかならやりそうな格好ではあるかも。

傍のねーちゃんには紋章は無いから、たまにいる綺麗所を引っ掛けたナンパなへマスターかな。女性を連れてるから便宜上にーちゃんとしておこう

「驚いた……」人間台風”に”武仙”、二人もビッグネームにお目にかかれるなんてね。だとするとキミは……”遊天娘々”かな？ うん、聞いてた人相に一致するね。これは思わぬラッキーだよ」

「間違っちゃないけど、にーちゃんは誰じゃんよ？」

そのねーちゃんだかにーちゃんだかよくわかんないエセ紳士は、あたしら三人を見比べると驚いたように表情を変えて、何度か視線を通わせたあと納得したように頷いた。

通り名を語ったにーちゃんを警戒して二人が視線を向けると、にーちゃんはオーバーアクションで疑念を否定する。

「おっと失礼。僕は怪しい者じゃない……とは言えないよねえ、この見た目だもの！」

「あ、自覚はあるんだ？」

「好きでやってるファッションなんだけどね！ つと申し遅れたね。僕はMr. ハートレス、しがないへマスターさ。所属はカルディナ、ここへは妻と一緒に観光に来てね。目当ては当然キミの公演さ、【雑技王】クン。お会いできて光栄だよ」

そう言つて恭しく一礼したにーちゃんことMr. ハートレスは、その見た目に違わぬ堂々とした優雅な所作だった。

その彼と一緒に傍のねーちゃんも綺麗に一礼する。(カーテシーつて言うんだつたかな)

カルディナ所属との発言が事実なら、随分と上流階級に位置しているようだった。

「そー言われて悪い気はしないじゃんね。あたしの芸を観に来たんなら無碍にはできないじゃんよ。ま、よろしくね」

「いやあ嬉しいなあ、有名人にはいつ会つても気分が高揚するよ。ああそうだ、サインをお願いしてもいいかな？ 良ければ後ろの御二方も。お察しの通り僕はミィーハー気質でね、有名人のサインが大好きなんだ！」

「いーよいーよ、そんなくらい。……ほい、これでいい？」

サインを求められるのは今回が初めてじゃないし、拒否する理由も特に無いので了承する。

常備している色紙にさらさらとサインを書いて手渡すと、にーちゃんは喜色満面で「アイテムボックス」に仕舞った。

ちなみに二人はサインは書かなかつたらしい。不審人物相手に警戒を解かないあたり、ちゃんと護衛としての務めは果たしてくれてるっぽいね。ここは好評価じゃんよ。

「いやありがたいがとう、たまには出歩いてみるものだね。こっちでの宝物がまた一つ増えたよ。ほら、妻も喜んでる」

「え、そう？」

見てみるけど、にーちゃんの嫁さんだというねーちゃんはぼんやりとした表情で何を考えてるのかわかんなかった。

なんつーか綺麗だけとお人形みたいというか、深窓の令嬢と言えば聞こえはいいけど妙な怖気を感じて、見てるとなんだかあつちゃんを思い出す変な感覚だ。

……なんか、背中がムズムズする。ティアンだつて言ってたけど、なんか違和感。

はしやぐ旦那とは正反対に、自分は無関係とばかりにあたしにも目をくれないし、でもまあそういうもんなのかな。

本人は特に興味は無いけど旦那が言うから着いてきた、みたいな。それならそれでしーないけど、人気商売の身としては、ちよつとフクザツ。

「あつははは。まあ妻は人付き合いが得意ではないからね、気分を害したならごめんよ。キミの公演を楽しみにしてるのは本当さ。特等席からじっくり見物させてもらうとも」

ほーん？ お高い特等席のチケットまで確保してるとか、これは上客じゃんね。

なら余計に無様は見せらんないね、あたしとしても俄然身が入るつてもんじゃんよ。

だからあたしは自信満々に笑みを浮かべて、見下ろすにーちゃんに宣言した。

「期待していーよ、ばつちり魅せてやつから楽しみにしてるじゃんよ」
「ソツフフ……流石は神童、物怖じしないね！　ますます気に入った

よ、黄河まで来てよかった」

「公演もまだなのに気が早いぜ？」

「それもそうだ！ いやはや、有名人と思わぬお喋りができて舞い上がってみたいだ。明日の公演が楽しみだよ、今夜は眠れるかなあ！」

あたしが言うのもなんだけど、子供のように待ち侘びるにーちゃんはどこからどう見ても金持ちのボンボンにしか見えなかった。

嫁さんがおとなしいのも、そんな旦那の手綱を握るためにそうしてののだとしたら、案外苦労人なのかもしれないね。

やっぱりあたしの目では何を考えているのかわかんねーけど、おかしすぎて逆にお似合いなカップルにも思えてきた。

「へいさん、そろそろ……」

「ん？ あ、そっか。先を急がないとじゃんね」

思わず話が弾んで話し込んでると、横からステラが口を挟んできた。

言われてみれば結構な時間が立ってるし、あまりのんびりしてると打ち合わせに間に合わなくなるじゃんね。

そうなるとまただんちよーに痛いゲンコツもらっちゃうし、それは勘弁。

「わりーねにーちゃん、あたしもう行かなくちゃ」

「ん？ ああそっか、キミは今からが大変なものね。それは悪いことをしたね」

「いいって別に、気晴らしにはなったしね。それよりも公演楽しみにしてよ、怪我して観に来れなくなったとか勘弁だぜ？」

「おや、なにか物騒ごとも？」

「なんか小悪党克蘭が紛れてるらしいよ？ えっと、なんつったっけ、へレブ……」

「へレブナント・ネスト」だね」

ああ、それだそれだ。

昨日道場に寝泊まりしたときに一応の注意事項として伝えられたんだった。

「どうもカルディナから一部が流れてきたようで、小競り合いを起こしてるみたいです。Mr. ハートレス、奥方共々十分に注意してください。何かありましたらすぐ最寄りの詰め所までご連絡ください、すぐに対応させていただきます」

リアルと比べて暴力沙汰の頻度が比較にならないこつちの世界だと、いくら安全を期していてもそういう輩はどうしても沸いて出てくるらしいかね。

ガル兄とその門下一同もそいつら含めた与太者の対応に追われるらしいし、こうした注意喚起も務めの内ってわけ。

「へえ……あの連中、こんなとこまでやってきたのか。ああヤダヤダ、せっかくのバカンスなのに台無しだ。食事中に害虫を見かけたよ
うな気分だよ！」

「にーちゃんは連中のこと知ってるの？」

ガル兄の忠告を聞いたにーちゃんは、さっきまでの上機嫌が嘘のように害虫を嘔み潰したような表情をして吐き捨てた。

連中のことをあまり知らないあたしが気になつて尋ねると、にーちゃんは大袈裟に肩をすくめると長々と溜息を吐いて答える。

「カルディナじゃ有名な悪党集団だよ。といっても小悪党の集まりでチンピラ紛いのことしか出来てないんだけど……とにかく数が多くて、どこにでもいて始末が付かない。まるでゴキブリみたいな連中
さ」

「チンピラ程度ならどーとでもなりそうなものだけど？」

黄河にも似たような山賊や盗賊集団はいる。

そいつらも大抵は徒党を組んでいて、悪事のキャリアが長い親分に率いられているのが基本だ。

逆に単独でそういう真似をする奴つてのは余程のバカか、もしくは規格外の大悪党のどちらかじゃんね。

龍都や大都市近辺は官憲の目もあるから比較的安全だけど、辺境への旅路なんかではほぼ確実にそいつらの斥候が潜んでると言ってもいい。

まあ黄河に限らずこの世界で都市を離れて旅するなんて、そういう

脅威が付きものなんだけどね。

リアルみたいで女子供が単独で旅するなんてありえない、ちゃんと相応の備えが無いとあつという間に命を落とすのがこちらの世界の旅事情じゃんよ。

「さてねえ……一掃したと思えばまったく別のところから名乗りを上げる連中が現れて、それを潰してもまた然り。窃盗強盗、恐喝に強姦、人攫い……これが大悪党にでも率いられているのならそいつを潰せばいいんだろうけど、そんなヤツは影も形も見えてない。おかげで規模の小さい商人ほど戦々恐々としてるのが実情さ」

聞けば聞くほどろくでもねー連中じゃんね、そいつら。

もしあたしの公演中にそいつら見かけたらソツコーで駆除しねーと。

あたしの晴れ舞台、んなつまんねー連中に邪魔されて堪るかってーの！

「とりあえず、忠告には素直に従っておくよ。僕はともかく妻が危険だからね。ああ、詰め所の地図を貰ってもいいかな？ 念の為確認しておかないとね」

「ええ、これです。どうぞ」

「ありがとうございます。L V E R クン。……ああそうだ、これにサインはいただけないかな？」

「申し訳ありません、仕事中ですので……」

「そっかあ……そりゃ残念。まあ仕方ないね、お仕事の邪魔は良くないもの」

ほんとにミーハーなにーちゃんだ。

心なしか嫁さんも若干呆れたような目に……いや気の所為かな？

やっぱわかんねーや。

「つとつままない話で長々とごめんね。いい加減お暇しないとマズイね……それじゃあ【雑技王】クン、楽しみにしてるよ」

「ん、まー気をつけるじゃんよ。あとあたしの名前は黒猫ってんだ、覚えとくじゃんよ」

「OK、ハイマオ。……それじゃあね、バイバイ♪」

そう別れを告げると、にーちゃんは嫁さんと腕を組んで去っていった。

その背中を見送って二人を振り返ると……二人は剣呑な顔をしてにーちゃんが消えるまでその背中を追っていた。

「……………どう思う？」

《真偽判定》に反応はありませんでした。一言一句、嘘はありません……それがまた匂いますが」

どうやら二人は、にーちゃんを本気で怪しんでるようだった。

けどステラが言った通り、あたしの《真偽判定》も欠片も反応していない。

《真偽判定》に反応が無ければそれは真実というこの世界の常識から考えれば、何も怪しむところのなかったはずだけど……。

「やっぱりキミも臭いと思ったかい？」

「わたくしの勘だけならよかったですけど、G.A. L.V.E.R.さんまで同意見となると捨て置けませんね。とはいえ証拠も無しには動けませんから、注意しておくに留まりますが」

「杞憂だといいたけどね、もしものときは頼むよ」

……まあいつか。なにかあればそんなときはそんなときだ。

ここは二人の警備を信じておくことにするじゃんよ。

そしてあたし達は思いがけず長引いてしまった道中を急ぎ、時間ギリギリで天幕に到着した。



■某所・路地裏

「二人には勘付かれたかな？ まあだからといって証拠は無いから僕にリスクは無いけどね」

「……………」

思いがけず遭遇した有名人三人組と別れ、伴侶を連れ添いながら歩いてきた赤い男が呟く。

否、厳密には男ではなく——さりとして女でもない。その実どちらで

もある男女定かならぬそのへマスターは、声に愉悦を滲ませてクツクツと笑った。

白い夫人は、何を語るでもなく黙して待るばかり。

夫の不審な言動も、彼を警戒していた実力者二人の視線も、楽しげに話し込んでいた少女のことも何一つ無かったように表情一つ変えず茫洋としていた。

「バカンスというのは本当だもの。ただまあ、あの連中がこんなところまで来てたのは予想外だったけどね。長いこと放置してたから現況は把握してなかったんだけど、まさかカルディナを離れるなんて。嬉しい誤算……いや、面白い誤算というやつかな。成程、只人の悪意というものは一所に収まらないものらしい」

「……………」

「まだ眠ってるのかい？ フラウ・ノーバディ。そのドレスを気に入ってくれたのは嬉しいけれど、たまには直接語りたいものだね」
そんな伴侶の腕を愛しげに絡ませて寄り添う二人は、一見すれば仲睦まじい若夫婦そのもの。

しかし赤と白一色の豪華な装いで人気の無い路地裏を歩けば、それは一転して異様な光景となる。

「しかし……七大国中格段に治安が良い黄河でも、一つ裏を覗けば腐臭が立ち昇るものだね。ご覧よフラウ、揃いも揃って掃き溜めの中のゴミだ。とても惨めな……人間の本质の一面さ。といってもキミは、見ちゃいないんだろうけど……」

路地裏は静寂に満ちて、しかしその気配は濃密そのもの。

道行く二人を静かに観察し、如何にその身包みを剥ごうか、あるいは身柄を直接攫ってやろうかと考える悪意の視線があちこちから突き刺さる。

それはこの世界では決して珍しくはなく、そして彼の所属国ではごくありふれた風景にすぎない。

寧ろ彼はそれらを楽しげに見遣りながら、論うように傍らの伴侶へ語り聞かせていた。

その言葉が気に障ったのか、静観していた浮浪者の一人が立ち上が

る。

他のものは彼が不死身の〈ハマスター〉であることを察して関わろうとしなかったが、その若者は己の境遇を土足で踏みにじられた怒りで顔を歪め、ボロ布から腕を伸ばして掴みかかろうとして……

「おっと、汚い手で触れないでくれるかな？　この服は僕のお気に入りなんだ」

赤い男——Mr. ハートレスが手にしたステッキに打たれて止まる。

腕を伸ばした姿勢のまま、金縛りにあつたかのようにそのまま硬直して表情一つすら変えられない。

そうして露わになった男の腕を見て、ハートレスは面白そうに目を丸くする。

嘲笑う悪魔の刺青——〈ヘレブナント・ネスト〉の一員であることを示す証を目にして、心底愉しげに目を細めた。

「ワオ、本当にいたんだ。驚いたなあ、どういう経路でここまで感染したんだろう？　僕が直接唆したのは十人もいなかったはずだけど……」

「……ッ！　……!?」

「ああごめんよ、キミには訳のわからない話だよね。……うーん、そうだなあ。あの二人の目もあるし、ここはおとなしくしておこうか」

ハートレスは一方的に考えてそう判断を下すと、その腕に手を添えて。

「——〈烙印〉、解除」

そうスキルを宣言して、刺青を消し去った。

同時に男は意識を失い倒れ込む。

一部始終を目撃していた浮浪者達に動揺が奔り、俄に空気がざわつくのをハートレスは感じ取ると、ふむと暫し思案して。

「態々通報するとも思えないけど、念には念を入れておこうか。周囲に〈ハマスター〉は……うん、いないね。ティアンだけだ」

ステッキを一回転させて突き立てた。

突き立てた地面から黒い霧が立ち昇ると、それは瞬く間に無数の小

さな……まさに小悪魔のようなモンスター^のの形を取り、四方八方に飛んでいく。

その目標が路地裏に潜む自分達ティアンであること彼らは察して逃げようとしたが、それよりも素早く小悪魔達が接触すると……そのまま身体に潜り込む。

小悪魔に寄生されたティアンがその場で硬直すれば、やがて路地裏には人気のない静寂が満ちた。

それを確認してハートレスは言葉を続ける。

「キミ達は僕達を見なかった。目を覚ましたところで僕達のことを覚えてもいない。キミ達は今まで通り、この路地裏で息を潜めているといい……、こんなところかな。「ベリアル」、もういいよ」

口頭でそう指示すると、彼らは一度ビクリと身体を跳ねさせたのちそのまま沈黙した。

役目を終えた小悪魔達が浮浪者の身体に傷一つ残さず抜け出すと、それはハートレスの下に集まって消えた。

「……やれやれ、一度整理しておくべきかな。最近は見るべきものもない小物ばかりが続いていたし、河岸を変えるべきか……ああでもカルディナ程の好条件もなかなか無いんだよねえ、……ん？」

一仕事を終えたハートレスが独り言を呟いていると、それまで沈黙を保っていた伴侶が不意に視線を動かした。

キョロキョロと辺りを見回し、やがてハートレスの姿を認めると、結んだままだった唇を開いて尋ねる。

「どういう状況かしら？」

その声は美貌に相応しい可憐なものだったが、まるで感情が乗っていない冷たいものだった。

そんな彼女に対しハートレスは、綻ぶような慈愛の笑みを見せて答える。

「おはよう、フラウ。ここは黄河、目当ては【雑技王】の公演だよ。いつものような悪巧みじゃなくて純粋なバカンスさ。……って、カルディナが出る前にも言ったのだけどね」

「……そうだったかしら。覚えてないわ。随分と長く観ていたものだ

から」

「お気に召したようで何よりだよ。どうだい、そのドレスは見た目も去ることながら、来歴も素晴らしかっただろう？」

「ええ、そうね。悪くなかったわ。カルティナ上流令嬢の没落ストーリー……筋書きはありきたりだけど個性があつて、ボリウムもあつたから——」

言つて、フラウと呼ばれた女性の身体から力が抜けようとするのを遮つてハートレスが抱き止める。

「おつと着替えるのはまた後にしておくれよ。今はそのドレスが僕の妻ということになつてゐるからね」

「……そういうこと。わかつたわ、ならこの街に居る間はそのままですわい」

「助かるよ、フラウ。キミにとってはもう価値の無いものでも、僕にとってはまだ飽きが来ていない可愛い奥さんだから……」

そう二人で言葉を交わして、今度は女性——フラウの方からハートレスへ身を寄せる。

仲睦まじく腕を絡めて歩みを同じくする二人の姿は、まさに幸福な若夫婦そのものだったが——その背後に伸びる影は、まるで悪魔が囓つてゐるようささえ錯覚できた。



かくして夕闇に消えた二人だが、これは全くの偶然だ。

有象無象が行き交う雑踏に、物見遊山の悪意が紛れていた——それだけの話。

——この後に空から襲来する脅威には、何ら関係のない余録である。

T o b e c o n t i n u e d

怪物の名を冠する淑女

□【雑技王】黒猫

ハートレスのにーちゃんと別れてからしばらく歩いて、夕暮れに差し掛かる頃にあたし達は一座の設営拠点に到着した。

急ピッチで組み立てられていく天幕のひとつに入って歩く。

事務員が書類を抱えて行き交う中を奥へ進み、いくつかある部屋の内のひとつに入ると、そこではだんちよーとしぶちよーたちが顔を合わせてあれこれ指示を飛ばしていた。

「遅いぞ黒猫」

「わりーわりー、ちよつとトラブルがあったのと、道端で話し込んじゃってさ」

だんちよーのお小言が飛んでくるけどいつものことだ。

しぶちよーたちも呆れたように苦笑いするけど、生憎あたしは芸はできても一座の運営はできないから、会議に参加したところでやることなーんも無いじゃんよ。

そもそもログアウトする必要もあるから情報共有の面で不都合が多いし、そこはへマスターの弱みじゃんね。

「で、どう？ 順調？」

「予定通りだ。明日の午前には設営が完了する。団員達は既にリハールに入っているが……、ん？」

段取りは上々、他の団員たちも稽古に励んでると。

そこまで言っただんちよーがあたしの背後に視線を向けて、そういや紹介もまだだったことを思い出す。

「こっちのガタイのいいほうがG A. LEVER。ワンジーちゃんから聞いてない？ ジーちゃんのダチのフージーちゃんのお弟子さん」

「紹介に与りましたG A. LEVERです。どうぞよろしく」

「おお……成程、貴方が虎氏の直弟子の。今代の「超練体士」殿か。私は黄刃華、一座の長を務めさせてもらっております。お会いできて光栄です、がるばあ氏」

「恐縮です。師の名に恥じぬよう、全霊を以て警護に務めさせていた

できます。それと僕のごことはガルとお呼びください。黄河の方には慣れぬ名でしようから」

「ではガル氏、何卒よろしく願います」

互いに畏まって握手を交わすだんちよーにガル兄。

こういうところ見るとお互いデキる男って感じでちよつとかつこいいじゃんね。

「そして……そちらの御婦人は？」

「遅刻の原因そのいち。そこのガル兄に喧嘩売ってきたメスゴリラ、バナナを報酬に警護に参加してもらったじゃんよ」

「ステラ・ザ・デストラクトと申します。黄氏並びに一座の方々におかれましては皇帝陛下の天覧賜り、祝着至極に存じます。黒猫氏とは個人的な友誼があり、義によつて助力する次第です。どうぞよろしくお願い致します」

めつちや優雅なカーテシー決めながら一礼したステラに、周囲から思わず息を呑む音が聞こえた。

……ちきしよー、こうしてまた見た目に騙されるやつが増えるんだ。これだから外面がいいやつはタチが悪いじゃんよ！

「お、おお……これは御丁寧に。……ウチの黒猫が大変な無礼を働いていたようで、まことに申し訳ありません」

「いえいえ、幼い子のやることです。可愛げがあつてわたくしは好きですよ」

「そう言っていただければ幸いです。何分才気はあるのですが、仰るとおりまだ若く……これからも仲良くしてやっていただけるとありがたい」

「願つてもないことです」

ああつ、だんちよーが見てくれに騙された！

しかもなんか友達面通り越して保護者面すらしてる!!

ちがうじゃん！ 主に絡んできてるのお前じゃん！

なにその「甘えて粹がるのもいいが程々にしておけよ」みたいな目！ めつちや誤解なんですケド!?

「彼女の力量については僕が保証しましょう。人品にも問題ありません」

ん、心強い味方かと」

「成程、ガル氏がそう仰るのでしたらお言葉に甘えましょう。謝礼の方ですが……」

「謝礼は結構です。個人的な誼によるものですので。……代わりと言ってはなんですが、興行を終えた後にしばらくへいさんをお借りできないかと」

「それで良いのでしたら、是非お好きなように」

「あたしを売るのかだんちよー!?!」

「何を大袈裟な。別に取って食われるわけでもなからうに」

まさに取って食われそうなんですけど!?!

ほら見ろコイツ、嬉しそうにニヤニヤしてんじゃん！ ていうかあたし人身御供じゃん、身売りじゃん！

「そうですよへいさん、少しの間一緒に遊んでもらうだけですとも」

「子猫とゴリラがじゃれ合うのを遊ぶとは言わねーんだよ!!」

「ううむ、本当に仲が良いようだな……。黒猫、友達は大事にするんだぞ」

「だんちよーの節穴！ 人でなし！ 円形脱毛症！」

「ハゲとらんわ！」

クソツ、誰一人としてコイツの本性を見抜けてねえ……!!

ていうかガル兄知ってんじゃん！ コイツのゴリラ本性知ってんじゃん、弁護しろよ!!

……あつクソ、なんかもうお開きモードに入ってる！ 和やかに解散しようとしてんじゃねーよたーすーけーろー!!

「ほらほらへいさん、皆さんもお忙しいようですから退散しましょう」

「うむ。そいつの行動については本人に一任しているので、目を離さないでいてくれればそれで構わない。ウチのエースをよろしく頼む」

「承りました。ではへいさん、行きましようか」

「それでは失礼します」

背後から持ち上げられて胸に抱えられる。

背中には柔らかい感触……コイツけっこうデカいな。いやそうじゃなくて。

あと頭撫でるのやめれ。お前の手鋼鉄だからいてーんだよ。

「ふふふ……本当にヘイさんは可愛らしいですね」

「ちきしょー、恨むぜガル兄……」

「H A H A H A!! 仲良きことは美しきかな、だねー!」

いつになくスキンシップの激しいステラに抱きかかえられながら、あたしは天幕を後にするのだった。

◇◇◇

□【撃神】ステラ・ザ・デストラクト

警備体制の指揮のため別れたG A・L V E Rさんを他所に、胸にヘイさんを抱きかかえながら敷地内を歩く。

最初は抜け出そうと身動きしていたヘイさんも、わたくしに離す気が無いことを悟ると観念しておとなしくなりました。

メスゴリラだの馬鹿力だの悪態について抗議はしますが、そうした強がりもまた可愛らしい。

こちらの時間で一年振りに再会したわたくしの初めてのお友達。

初めて会ったときから変わらない愛らしさと、それに反する獰猛な〈エンブリオ〉。

ましてわたくしに初めて黒星を付けた因縁の相手ともなれば、再会の喜びも一入というもの。

「さてヘイさん、どちらに向かわれますか？ もう夜も更けますから、敷地の外に出るのは避けるべきかと思いますが」

「うえーい……んじゃあそこの天幕に向かうじゃんよ。あそこ、あたしのトレーニングスペースだから」

ヘイさんに尋ねれば、彼女は項垂れながら天幕の一つを指し示しました。

彼女の言うトレーニングスペース……雑技のためのものではないか。

しかし雑技とは通常団体で取り組むのが主流だったと記憶しています。個人演目も無いではありませんが、メインはそちらのはず。

「他の団員達には混ざらないのですか？」

「あー……アレだ、レベル違いすぎて足並み揃わねーから、あたしは個

別に稽古してんじゃんよ」

言外に足手まといにしかならないと答えて、彼女はむすりとしました。

彼女の軽業師としての力量が隔絶しているのは承知していましたが、それほどのものだったでしょうか。

……いえ、長らく不在だった【雑技王】を継承したヘイさんのことです、その言葉は事実なのでしょう。

しかしだからといって他の団員との摺り合わせもしないのでは、個人演目はともかく団体演目は成り立たないはず。

その疑問を尋ねてみるとヘイさんは一言、「見てればわかる」と答えました。

目的の天幕に足を踏み入れれば、そこは大広間が一つあるだけの殺風景な部屋でした。

丁度公演舞台と同じくらいの広さで、観客席が省かれている以外はほとんど同じ舞台条件に思えます。

わたくしの腕からすると抜け出たヘイさんが舞台の真ん中に立つと、わたくしを観客に見立てたように一礼し——次の瞬間にはその傍らに幾人もの黒子が控えていました。

それはヘイさんと同じ姿形をした、色彩だけが影のように暗い人ならざる人型。

しかし思い当たる節のあったわたくしは、その正体を口にする。【ヒダルガミ】ですか？」

「まーね、今はちよつと変わってるケド」

ヘイさんの〈ヘエンブリオ〉——【奪命神咒 ヒダルガミ】。

HP・MP・SPの三種をドレインする閻属性攻撃を得意とする、対生物には極めて強力な〈ヘエンブリオ〉です。

物理法則にあらざるが故に対物理をして絶対有利を誇るわたくしの【星震撃 テュポーン】に勝り、その相性差故にこれまでの立ち合いで幾度となく敗北を喫してきた、わたくしにとって最大の壁と言えるそれ。

しかしそれはあくまで攻撃スキルであって、間違っても雑技に用い

られるものではないはずです。

戦闘でならともかく、雑技に用いる上では視覚的な演出以外に効果は望めないはずですが……そう訝しむわたくしに答えるように、肩へ乗せられた手がありました。

「!? ……いえ、ダメーヅが、無い?」

「【立体影像 シェイドプリンター】つての。昔倒した逸話級〈UBM〉の特典武器。効果はお察しの通りじゃんよ」

成程、攻撃性能を失わせる代わりに物理干渉可能な実像に変換すると。

本来の性能からは対極に位置する特典武器のようですが、成程へいさんの「ヒダルガミ」には無い安全性を補う意味では有用でしょう。

だとするとへいさんがこれを出現させた理由にも察しがつく。大方これを不足する演者の代用にするのでしようが……

「本当に可能なのですか?」

「だから見てればわかるって——いくぜ?」

訝るわたくしにへいさんはそう答えて天を舞いました。

まるで重力を感じさせない軽やかな動き。しなやかな四肢のうねりは一分の乱れも無く精緻を極め、五体全てを用いて表現する。

照明も音楽も無い薄暗い無音の天幕。舞い踊るへいさんの立てる音だけがこだまする舞台に見惚れていました……ふとそれだけではないことに気付きました。

舞台中央で華麗に舞うへいさんを完璧にフォローする黒子の動きに気付き……その精度に愕然とする。

踊る本人と何ら遜色ない精緻な動きで、黒い人体を複数組み上げてへいさんの動きを補佐し、それに参加しない黒子も棒立ちになるのではなく流麗に舞って演出の華と徹する。

どれ一つとして無駄な人員も動きも無い、群体をして一個の生物のような究極の連携に、わたくしは堪らず呆けて釘付けになってしまいました。

そしてその動きを可能とする理由を考え、推測が思わず口をついて出る。

「自動操作……」

「んなワケないじゃん、全部自力だっつの」

声は舞台上の彼女から、気配はわたくしの隣から発せられました。わたくしの推測を否定する声に合わせて隣の黒子が肩を竦めるジエスチャー。

いえ、そもそもこの黒子はいつの間にそこにいた？ 先刻わたくしの肩を叩いた黒子も……、まさか起点指定での発生……!?

元よりヘイさんの領域操作能力の腕は承知していました。

〈Infinite Dendrogram〉のサービス開始間もない頃、わたくしとヘイさんが初めて戦った折に彼女が土壇場で編み出したそれ。

わたくしには終ぞ実現できなかった、テリトリー系列固有の特殊空間を狭めての出力上昇。

西方三国を巡り数々の強者と立ち合ってきたものの、ヘイさん以外には使い手のいなかった超高等技術。

いえ、世界は広いのですから探せばどこかにいるのでしようが、しかしこれほどの技をこともなげに披露してみせるその技量に、越えがたい程の隔絶した差を思い知ります。

同時に戦慄する。

もし今しがたの動きが本来の性能だったなら、わたくしの命はどうになかったことに。

ただの魅せ技に徹していたからこそその命拾いに、わたくしの肌が粟立つと共に——堪えきれない程の興奮が奥底から沸き上がる。

嗚呼……叶うことなら今すぐ舞台の上に躍り出たい。

天真爛漫に跳ね舞うその小柄にわたくしの五体をぶつけ、彼我の力量を比べ合いたい。

相性の良し悪しなど関係なく、ただヘイさんという好敵と切磋琢磨し合いたい……リアルでは叶わない五体を用いた触れ合いに、どうしようもなく全身が疼く。

幼少の折に失われた本来の手足。

義肢で補えど満足には動けず、それまでの活発だった自分を否応無

く殺されてしまった過去。

取り繕うように淑女としての振る舞いを覚えれど、しかしどこかで鬱憤を覚えていた日常への閉塞感。

そんな中突如として登場した〈Infinite Dendrogram〉——自由を謳う世界の中で発現したわたくしの可能性。

ギリシヤ神話において全知全能の主神と争い、全世界を揺るがした怪物王の名を冠したわたくしの〈エンブリオ〉を、全身全霊を以て突き立ててやりたい。

堪らず四肢が軋む。ギシギシと舌舐めずりをして開こうとする顎を必死で抑え込む。

これ以上無い格別の獲物を前に我慢を重ねなければならぬ痛苦にわたくしは全身を抱いた。

気づけばヘイさんの演目が終わり、舞台の上には沈黙が戻っていた。

途中からは自分を抑えるのに必死で碌に観れていなかったわたくしを、いつの間にか隣に立っていたヘイさんが見上げて嗤った。

「ひつでー顔、もう我慢できないって感じじゃんね」

「生まれ持った性はそう変えられないものでしょう。——興行の終わる日が楽しみです、……本当に」

今のわたくしは相当に酷い顔をしているのだろう、嘲弄するヘイさんを否定などできない。

自分でもどうにもならない性分、リアルでは発覚するはずのなかった戦闘への飽くなき欲求。

一度強敵と見れば力を比べられずにはいられない浅ましい性癖。堪えるためにはどうしても戦わない理由を必要としてしまう。

今も……そう。彼女の護衛という名分で己を縛り付けていなければ、今すぐにも彼女に戦いを挑んでいたことでしょう。

無論わたくしとて無為に命を散らすつもりもなく、〈監獄〉送りになって活動範囲を大幅に制限されるのも御免ですから、それなりに考慮はしますが……しかしそれも結局頼りない鎖に過ぎない。

そんなわたくしだからこそ……畢竟大暴れしかできない【テュポ―

ン」が生まれたのかもしれませんが。

「ヘイさん」

「んー?」

「ヘイさんはなぜ、『軽業師』になったのですか? あなたの力量があれば、戦闘職でもいずれ超級職に就いて……今以上に実力を高めることもできたでしょうに」

わたくし達へマスターの大半にとって、戦闘にも生産にも寄与しないジョブは所詮趣味上のものでしかない論外の職種。

普通であれば発現したへエンブリオにジョブを合わせ、己の力量を突き詰めていくのが基本。

しかし彼女はそうではない。剣呑なへエンブリオとは裏腹に、特典武具が無ければそれを活かせるはずのない趣味職へ就き、その超級職に至っている。

わたくしでなくとも勿体無いと思ってしまうのは必然でしょう。極論を言えば才能の無駄遣いとも言える暴挙に、わたくしは思わず疑問を口にしていました。

「いやー……別に、なんとなく?」

しかし彼女は、そんなわたくしの思いに反してまるで軽く、何気ないようにそう答えました。

あつけらかんとした返答に、思わず閉口する。

「ぶっちゃけたただの偶然だし、へエンブリオが孵化したのも【軽業師】に就いたあとだしね。ていうか別に戦うだけじゃなくてもいーじゃんね、和製オフゲーじゃないんだから」

「それも……そうですが」

「まー言いたいことはわかるよ? あたしってば天才だから、何やらしてもサイコーだかね。でもま先着順ってことで、【軽業師】――

【雑技王】辞めるつもりは欠片もないじゃんね」

「そう、ですか……」

本当に……勿体無い。いつそ口惜しいとすら言えるでしょう。

ですが、そんな彼女にすら負け越しているわたくしがそれを言ったところで負け犬の遠吠えにしかならないことは明白。

だからこそ……惜しい。今の彼女を軽んずるつもりはありませんが、より強くあれるビジョンが見えるだけに、本当に惜しく思える。「相変わらず脳筋思考じゃんね。淑やか脳筋つてやつ？ 少しは落ち着けばいいのにね」

「性分ですから。しかしお見逸れましたよ、本当に。以前よりも格段に精度が上がって、ヘイさん程の領域使いもそうはいないでしょうね」

「おだててもなんも出ねーぞ？ 喧嘩したいならおとなしく待ってけつての。別にやらないとは言つてねーんだからさ」

肩に軽い重み。一〇〇人力を誇るこの世界のわたくしにはあまりに軽いヘイさんの体重。

一頻り舞い終えて汗ばむ彼女の体温を首筋に感じながらの肩車、ようやく戦闘の意欲が鎮静する。

「ま、これでもこっちじゃ腐れ縁だし？ たまのお誘いくらいは乗つてやるじゃんね」

「……うふふ、ありがたいことですね。ええ、是非わたくしの全力を堪能くださいませ」

「じょーとーじゃん、また黒星ひとつ増やしてやんぜ。」人間台風”がナンボのもんだよ、嵐の中でさえあたしは舞つてみせんじゃんよ！」

肩越しに見下ろして笑む彼女に、わたくしも応える。

まずはこの興行を無事に終わらせる。わたくしの本懐はその後だと。

幸いにして彼女も乗り気です。わたくしが忠実に今の職務を果たしたなら、彼女は必ずやわたくしの望みに応えてくれる。……そう断言できるだけの友誼を結んだ自負がある。

わたくしとしたことが、きつとりリアルとも然程変わらないだろう年端も行かない子供に、随分執着したものです。

ですがこの軽い小柄こそ、わたくしが最初に勝利を渴望した最大の強敵。

最早彼女なくしてこの世界に彩りはありえない——そう断言でき

るほどの、わたくしの好敵^{とも}。

彼女はきつとそれを口にはしないでしようが……それでも構いません。

ええ、無事終わらせてみせますとも、貴方の晴れ舞台を。

それを邪魔立てするものは何者であろうと許しません。

そうして後顧の憂いなく約定を果たした暁には。

——貴方の全身、余すことなく粉微塵にして差し上げましょう。

「楽しみですね、ヘイさん」

「……なんか、ゾクツときたんだけど」

……うふふ。

T o b e c o n t i n u e d

災い、来たれり

□■公演日前日 某所・大衆食堂

「これぞ大衆の味なのだわ！ 特別美味でもなく、殊更不味いわけでもない日常の味！」

「あの、お嬢さん？ そういうことは大声で言わないでくれますかね……ほら、食堂のおばちゃんめっちゃ睨んできてる」

とある大衆食堂で食事を取る二人組があつた。

うだつの上がらない風体の中年男と大いに健啖を振りまく美少女、カフカとパンドーラである。

褒めてるのか貶しているのかわからないパンドーラのグルメリポートに冷や汗を流すカフカ。

そう言うのであれば少食で済ませばいいのと思いつつも、卓の上にはいくつも積み重なった皿。

他者から奢られたものしか食べない奇癖に辟易としながら、彼はパンドーラの発言のせいで肩身の狭い思いでいた。

「あの……そのへんにしていただけるとおじさん助かるんですけどね？ 最近スツてばかりだったから懐が寂しくて……」

「だらしないダーリンなのだわ！ でもいいわ、そういうのなら腹八分目にしといてあげる。わたしは弁えのあるレディですもの！」

「……うん、聞き分けのいいお嬢様でおじさん助かるよ」

「懐が寂しい理由のもう半分はお前の贅沢三昧なだけけどな……」とは口に出さず、下手に出て事なきを得るカフカ。

この街に到着してから高級宿のスイートルームに寝泊まりしていた彼らが何故こんな大衆食堂で朝食をとっているのかと言えば、案の定パンドーラの思いつきによる。

公演が翌日に迫った今日までの数日、お祭り騒ぎを心ゆくまで堪能したパンドーラのせいで、今やすっかり彼の懐はお寒いものになっていた。

適当な賭場で一発稼ごうにも、ホームタウンであるヘルマイネの高額レートに慣れきったカフカでは、場末の寂れ賭場では思うような稼

ぎが得られなかった。

賭博と長く付き合うには勝ちすぎず負けすぎないことが肝要と考える彼は、無理を通して場を荒らしたくなかったのもある。

おかげで彼の〈ヘエンブリオ〉とは対照的に、彼のここ数日の暮らしぶりは慎ましいものだった。

……お寒い懷事情で迎える高級宿での一夜ほど、心休まらない時は無い。

「なあパンドーラ、そろそろスキルを使わせちゃくんねえか？ このままじゃ俺達、帰りの路銀すらありやしねえよ。それかお前さんが節制を覚えでもしてくれりやマシなんだがね」

「いやよー。たとえダーリンがひもじい思いをしても、わたしの贅沢は何にも替えられないのだから！」

——こいつ、真つ直ぐな目でなんてことを……！

己の〈ヘエンブリオ〉の鬼畜発言に戦慄するカフカ。

漏れ聞こえる会話を聞いていた客の何人かが憐れむような目で見遣る。

とかく彼の〈ヘエンブリオ〉であるパンドーラはワガママ放題で、碌に主の言うことも聞きやしないお姫様であった。

そんなこんな言い合っているうちにパンドーラも料理を平らげ、先程の発言はどこへやら楽しげにカフカの腕に絡みつく。

ワガママ放題の贅沢三昧なパンドーラだが、〈ヘエンブリオ〉、そしてメイデンとして己の〈ヘマスター〉へ向ける愛情は高い。……それがわかってからカフカも強くは言えないのだが。

一転して周囲の男客が妬心を向けるのを他所に勘定を済ませ、ここ数日で一番の賑わいを見せる大通りに出た。

「いよいよ明日なのだから！ 午前からパレードを開始して、午後になつたら公演開始よダーリン！」

「ああ、それで……えっ、ひよつとして早出する？」

「当然なのだから！ 最前列でパレードを見送って、特等席で公演を見物するの！ 当然食べ物も飲み物も盛りだくさん！ 明日は休む暇なんてないのだから、ダーリン！」

「えええ……」

生来出不精の気質であるカフカは、それを聞いて早々にげんなりしていた。

そもそも彼にとって最高のホームタウンから離れるだけでも相当の労苦であるのに、出先で一日出ずっぱりでイベントを見送るなど正気の沙汰ではない。

叶うことなら今すぐにもヘルマイネに戻って、目眩くギャンブルの日々に陶酔していきたい。

つまるところ彼は根っからのギャンブル中毒であり、ダメ人間の典型であった。

TYPE：メイデンを発現していることから世界派には違いないが、それはそれとしてギャンブルが第一という有り体に言つて人間の屑である。

そんな彼から生まれたからこそ、反動でパンドーラは活動的なのかもしれないが、それはさておき。

「んもう！ ダーリンったらいつもそうやって不平不満ばかり！ わたしが一緒なのにそんな態度は許されなのだわ！ 可愛い可愛いパンドーラとのデートの何が不満なのかしらー！」

「おじさんにはそのハイテンションが辛いよ……ほら、小遣いあげるから好きにして……」

「ダメよ！ そんなのわたし絶対許さないのだわ!!」

目に見えて困憊するカフカと、とかく姦しいパンドーラ。

まったく乗り気でない己がマスターに、彼女はぷくうと頬を膨らませて抗議する。

傍から見ればカップルの痴話喧嘩にしか見えない光景で、道行く人々から好奇の視線を集めるのにもすっかり慣れてしまっていた。

やがてこれは重症だと悟ったパンドーラ。

ローテンションを極めるカフカの気を引くために、「仕方がないのだわ」と長々と溜息を吐いてから口を開いた。

なお、常日頃から「仕方がねえな……」と諦め顔で言っているのもカフカである。

実際のところとても似た者同士のお似合いな二人であった。

「グズるダーリンにとつておきの朗報よ！ 今朝、必殺スキルのチャージが完了したのかわ!!」

「え……、マジ？」

「わたしはダーリンに嘘は吐かないのかわ、大マジなのよ！」

必殺スキルのチャージ完了——その一言にカフカの目の色が変わる。

その言葉は彼にとって一月に一度の大チャンスを示すもの。

最早そのためこの〈Infinite Dendrogram〉をプレイしていると言っても過言では無い程、彼にとってその言葉は重い。

同時に彼が己の〈エンブリオ〉に頭が上がらない最大の理由でもあった。

「明日ちゃんとなわたしをエスコートするなら、必殺スキルを使用させるのも吝かではないのかわ！ ふふん、少しはやる気が出たかしら？」

「お、おお……出た出た、めっちゃ出た！ 朝のシヨンベン並みに出たよマジで！」

「はしたない言葉はNGよ！ まったくフケツでデリカシーが無いんだから!!」

「すまんすまん、悪かったよお姫様。……ほら、あつちにタピオカミルクティーがあるぜ。一番大きいサイズを買ってやろう……、な？ だから、ほら……そうむくれるなって」

「ほんとはその程度でごまかされてあげるほど安い女じゃないのだけど、仕方がないから勘弁してあげるのかわ！」

必死に女の機嫌を取る男の姿はみつともなかったが、彼にとってはそんなもの知ったことではない。

今重要なのは必殺スキルの発動許可。その決定権を握るパンドーラに平身低頭しながら、ご所望のタピオカミルクティー（LLサイズ）を買い与える。

揉み手して付き従う男と貢がれる少女。奇妙な男女二人組は揶揄

するような周囲の視線を突っ切って、街の外に向けて歩いていったのだった。



「——おや、彼は……」

「どうかした？」

「……ソッフ、いいやなんでもないさ。少し知った顔がね……これはひよつとすると、面白いことになりそうかなあ？」

——その背中を、赤い男は見送り嗤っていた。



□公演日前夜 〈黄龍雑技団〉・天幕

会場の設営を終え公演を翌日に控えた〈黄龍雑技団〉の天幕。

本番に向けて過熱していた稽古も一段落がつき、その日の活動を各々が終えようとしている中、座長・黄刃華も瓶と盃を乗せた盆を手自室へ戻っていた。

「いよいよ本番ぢゃの、刃華や」

「いらしていたのですか、王大人。それに……」

「おう、邪魔してるぜ」

「虎老師まで」

戻った彼を迎えたのは、卓を挟んでソファに沈んでいた王宝満に虎頂道。

卓の上にはいくつかの肴と空になった盃が並び、二人とも既にいくらか出来上がっているようだった。

「ま、こつちや座りんさい。まだツマミもあるでな」

「酒の追加もあるたあ嬉しいねえ」

「まったく……先に断っておきますが、私は一杯だけですよ」

宝満が頬赤く染めた顔を刃華に向け手招きする。

刃華の持ち寄った酒瓶を目敏く認め上機嫌に笑う頂道にそう牽制し、刃華も観念して同席した。

二人とも刃華にとって偉大なる祖父に親しい旧知である。ともすれば実の孫子のようにも互いに想い、故に頭の上がらない相手でもあった。

「どうぢや、仕上がりは。上々かの？」

「問題ありません。先の三箇所で自信を付けたのか意気軒昂そのものですよ。当初は萎縮するかと思いましたが……嬉しい誤算です。私の知らぬ間にも、皆成長しております」

「善き哉、善き哉。やはり試練こそが人を磨くもの、ここにいたり一皮剥けたのならそれは素晴らしいことぢやて」

盃を片手に問うた宝満が刃華の答えを聞いて満足そうに頷く。

波打つ古酒の水面を見つめ、穏やかに微笑んだ。

「改めて王大人には感謝しております。これほどの規模の興行、大人の助力無くしては成り立ちませんでした」

「よいよい。そう水臭いことを申すものではないぞい、刃華や。長らく見守ってきた一座の新たな飛躍の時……それを助けんではあやうに顔向けできんでな」

遠い懐旧に想いを馳せて目を細める宝満に、刃華はただ深く頭を下げた。

彼の言うあやつ——先代【雑技王】黄刃鳥と宝満、そして頂道は、若かりし頃徒党を組んで黄河の全土を行脚し冒険を繰り広げた過去がある。

宝満は立身出世を夢見る商人として。

頂道は最強に至らんとした練体士として。

刃鳥は技芸で名を馳せんとした軽業師として。

男三匹、波乱万丈な黄河旅情。

時に怒り、時に笑い。富むこともあれば貧することもあり。

嬉しい出会いもあれば、悲しい別れもある——それを幾度となく共に味わってきた昵懇の仲だ。

やがて三者三様に身を立てて道を別つとも、その縁は決して耐えざるものとして今日にまで続いている。

中でも宝満は、私人としては特に隙の多かつた刃鳥を支え、一座を

創始・存続させる上での最大の出資者でもあったのだから、刃華にとってはある意味祖父以上に尊敬すべき大恩人である。

「しかしの、あやつへの義理が無くとも儂のやることは変わらなんだよ。今や古い先短い儂にとつて一座は我が子も同然。金しか取り柄のない儂がそれで助けるのに何を惜しむことがあるうか。のう？」
「身に余るお言葉です。まさしく氏無くして今の我々はありませんでした」

たとえ刃華の友の形見であろうとも、数十年に渡り莫大な額を数十年に渡り出資するなど尋常のことではない。

先代亡きあとその栄光に翳りを見せ、名門としての名も傾きつつあったのを一度として見放さず支え続けたのは、偏に宝満の慈愛と誠心あつてのことだ。

故に刃華は下心の一切無く謝辞を述べ只々敬服した。

「金狸がよく言ったもんだぜ。一リルすら負からず金に執心してたお前が、……変われば変わるもんだなあ、おい」

「ほほほ、あの世にリルは持つていけないでな」

そんな大器を見せた宝満を頂道が茶化す。

若かりし頃は今とは正反対の守銭奴振りを見せていた旧友の角がない姿をからかい……そうも変わる程の年月の重さを思い知る。

自らもまた最強の二文字に熱意を燃やし、しかし老いゆく中で次代に託すことを選択したために心から共感せざるを得なかった。

「しかし……なあ？ 俺達の中で一番悪運が強かったアイツが、まさか一番にくたばっちゃまうとはねえ……。最終公演で行方を晦ましたまではアイツが死んだなんてこれっぽっちも思っちゃいなかったが、こうして次代が生まれたからにはアイツあ本当にくたばっちゃまったんだよなあ」

「あやつらしいとも言えるが、の。間違つても床の上で往生するようなおとなしいタマではなかったゆえ。とはいえ身内への配慮くらいはもうちとなんとかならんかったのか……おぬしの父には結局苦勞を掛けっぱなしぢやったな」

「ふっ……」

刃華の父は【軽業師】としての才は無く、文筆に秀でた内気な男だった。

故に専ら事務仕事に掛かりきりで現場の運営は得意ではなく、当時最高の【名軽業師】として名を馳せていた母の辣腕が無ければ、一座はそのまま解体していたに違いない。

その二人の間に生まれた刃華は、文筆家としても軽業師としても両者に迫るほどの才は持ち合わせなかったが……両者によく通じていたからこそ、橋渡し役として小器用に立ち回れ、結果として一座を維持する上ではこれ以上無い人材として長の責務を果たせたとと言える。

「苦労はありましたが……今となつては思い出話にできるのですから不思議なものです。そして臥薪嘗胆ばかりではなく、黒猫という天与の才を迎えることもできた。報われるには余りある吉事でしょう」

「……古の伝説に伝わる〈マスター〉の一人が、【軽業師】として頭角を現そうなどと、果たして誰が予想し得たかの？ ほっほっ、まさにこの世は神妙不可思議ぢやて」

過去の苦労話に華を咲かせていると、やがて当然のように少女の話題に行き当たった。

ある日を境に急増した伝説の〈マスター〉。

まるで〈UBM〉のように特異なスキルを有しながら不老不死をも宿す彼らの多くは戦いを好む。

黄河でもまたそうした手合が増え空前の武術ブームが巻き起こる中、その少女はそうした流行とはまったく無関係に刃華の前に現れた。

見た目は年端も行かない幼子。

たまに街の子供達がそうするように稽古を覗き見にきたのかと思つて声をかけ、興味本位で遊ばせてみれば披露したのは才気煥発。

ジョブにも就いていない子供が長年の演者も顔負けな雑技を魅せて、刃華は思わず一座に引き込んだものだった。

「思えばあれこそが転機だったのでしよう。あの日あの時、私とあの子を引き合わせてくれた天運に感謝しなかつたことはありません。……それを口にすれば天狗になるのが目に見えていますから、面と向

かつては言えませんが」

「ありやあい〜い跳ねっ返りだア。わけえ頃の刃鳥を思い出すぜ。あいつも終始自信満々で、謙るといふことを知らないやつだった。血を継いでないのが信じられん、それくらい似てらあ」

「あやつと違ってあの子は女子、可愛げでは比べるべくもないがのう。……ほほほっ、儂も男孫ばかりぢやて、娘っ子だとかにかく愛しゆうてならんの」

「大人は些かあれを甘やかしすぎかと。……とはいえ、ああも懐いているのでは」

「ほほ、わかっけていても甘やかしてしまうものぢや。女孫とはそういうものぢやて」

この三年余り、最もと長く時間を共にした宝満が顔を緩めて呟く。

最早彼にとつて少女——黒猫は実の孫娘も同じ。商いの実権を息子に譲って久しい楽隠居の今、彼女の存在こそが最大の楽しみだった。

「移ろいやすいへマスター〜で無ければ養子に迎えたいとこぢやて。のう、それはおぬしも同じではないかの？」

「……考えたことが無いと言え、嘘になります。家内に先立たれ子もおらぬ身の上で、あの子を子として愛せたならどれほどよかつただろうと。……しかし……」

それは叶わぬ夢である。

正体の知れぬへマスター〜という存在。彼らをティアンが推し量ることはできない。

彼らは知るよしもないが、前提があまりに次元を異にするが故に、決して彼らを自分達と同等に接することはできない。

現実と遊戯——途方もなく埋め難い断絶が横たわる。

「おぬしがそう思えておるなら、何も心配はいらぬよ。あの子に必要なものを、おぬしはちやあんと具えておる」

そんな刃華の懊悩を宝満は優しく見守り、やがてそう述べた。

「あの子が【雑技王】に至るまで一座と共にあり続けたのも、間違いないおぬしの存在あつてのことぢや。儂はついついあの子を甘やかし

てしまうが、おぬしはきちんとあの子を叱ってやれていた。ただ軽業が達者だからではなく、あの子が真実子供であることを踏まえた上で接してゐる。ならば、何も心配はいらぬよ」

「そう、でしょうか……」

「まるで親子じやて。無論あの子には本当の親が本来の世界におけるじやろうが……この世界での親は紛うことなくおぬしじや。たとえ血の繋がりがなくとも、親と子の絆は繋がるもの……そうは思わんかえ？」

「いつになく舌が回るじやねえか、パオ。もう酔いが回つちまつたかア？」

頂道の揶揄に、「かもしれんの」と微笑みのまま答える宝満。

随分と子煩悩を晒す旧友に、頂道もまた遠い過去から続く今に想いを馳せていた。

「つたく、久々に会って一杯やってみりや湿っぽい話なんだからよオ。こんなもんは畢竟、なるようになってんだ。それよりもホレ、明日の成功を祈願でもしてみりやどうだい。こんな話、わけえモンには退屈だし、俺らみたいなジジイにはむず痒いばかりだよ」

「はは……まさしく、その通りでしょうな。なに、私があればこれ思い悩まずとも、それとは無関係に強かに生きるのがあの子でしょう。ならば、精々明日の舞台で躓かぬよう見張っておくだけです」

「それでいい、それでいい。ホレ、お前も一杯いっとけ。本当なら潰れるまで離さねえが、今夜だけは勘弁してやらア」

「一献、頂戴します。老師」

「おう、飲め飲め。んで俺の弟子の話も聞いてくれよ。なあに心配すんな、くだらねえ笑い話ばっかだ！」

「ほほほ、あの益荒男の話も気になるのう！ 似合わぬ弟子なんて取りおつて、洗いざらい白状せい！」

——斯くして男達の夜は更けていく。



□公演日午前 大通り

街は熱気と興奮に包まれていた。

ついに迎えたイベント当日。公演の前座となる大パレードが通過する大通り沿いには無数の人々が詰め掛け並び、一座の到来を今か今かと待ち侘びていた。

この数日、日夜ともなくお祭り騒ぎに沸いていたこの街だが、その本命がようやく衆目の前に披露されるとあつてはその活気たるや前日までとは比べ物にならない。

年に数度訪れるカルディナからの大キャラバンでさえこれほどの熱気には至らず、公演に向ける彼らの期待が如何程のものが察せられるというものだろう。

イベントとあれば場の雰囲気とその気になるのが若者というものだが、此度に限っては若者以上に年嵩の人々こそが最も熱中していると言つても過言ではない。

特に数十年の昔に世を席卷した先代「雑技王」・黄刃鳥の演目を目に焼き付けた思い出のある者ほど、パレードもまだ見えていないというのに熱狂し、あるいは興奮の余り卒倒しかける始末だった。

「凄まじいものですね。祭事の類は大小様々見物してきましたが、これほどの熱気は過去に無い……」

「黄河の人々は愛国心がとても強いからね。その歴史に根ざす伝統芸能、その頂点のお披露目となれば感慨深いのだろうね！」

人混みに紛れてそう呟いたステラの背中にG A・L V E Rの声がかかった。

「おはようございます、G A・L V E Rさん。首尾は順調ですか？」

「もちろん！ 門弟達も所定の場所について目を光らせているところだよ。今の所不審人物は無し、懸念していたヘレブナント・ネストの連中もつい先日から姿を見せなくなつてね」

「それは重畳。まあ所詮はチンピラ紛いの連中ですから何をしでかせるとも思いませんが……さりとて無視するには目に余る輩です。姿を見せなくなつたのは僥倖と言えるでしょう」

「無論油断は大敵だけどね！ 裏通りの方にも人は向けてあるとも……しかし辛辣だねえ、それほどかい？」

「幾度となく粉碎してきましたが、ああも無尽蔵に沸いてはいい加減辟易するというものです」

事実彼らが巢食うカルディナでは事あるごとに討伐依頼が貼り出され、最早モンスターを狩るのと同様に殲滅されるのが日常茶飯事である。

ステラも拠点と目される場所を地形諸共何度も殲滅してきたが、それでも大勢に変化は無いのだから呆れ返る始末だった。

閑話休題。

ともあれ、姿を見せなくなった木っ端のことなど今のステラにはどうでもよかった。

彼女が人混みに紛れて注視していたのは、対岸の人波に紛れて尚真っ赤な洋装で姿の目立つ「マスター」、Mr. ハートレスだった。

傍らに妻だという白いティアンを伴い、パレードのやってくる方向を興味津々で見守っている彼は、格好はともかくただの見物客にしか見えない。

(……………)

にも関わらずステラは警戒し続けていた。それもあの道端で偶然出会ったときから、ずっと。

本番に向けて準備を整える一座を警護する傍ら、彼の動向も常に気にしていた。

本格的に見張りだしたのは遭遇から一夜明けてのことだが、今の所不審な動きは見えていない。

だがそうした状況証拠とは無関係に、ステラの直感には彼への警戒を打ち鳴らしていた。

「……………それほどかい？」

「根拠はありませんが。しかしわたくしの勘働きは悪くないとも自負しておりますので」

ハートレスを注視するステラに気づいてGA・LVERが神妙に問うも、彼女は視線を外さない。

カルディナを始めとした西方諸国で数え切れないほどの悪党を仕留めてきた彼女の勘が、「ヤツは間違いなく黒だ」と告げている。

何かか、はわからないが……粘りつくような悪寒を一目見たときから覚えていた。

「……僕も怪しいとは思う。けれど犯行現場を見たでもなく、あらゆる証拠も無い現状、キミの直感だけを素直に信じるわけにもいかない。それよりも全体を警戒してほしい。……言うまでもないだろうけどね」

「ええ……わたくしとしても自覚しているのですが……、いえ、現状では何を言っても妄言ですね。お騒がせしました」

「構わないとも。得てしてそういう直感は何よりも頼りになるものだしね。……それじゃあ僕は行くよ。キミも気をつけてね」

「ええ、そちらこそ」

そう言って屋根の上にひとつ飛びで乗ったG.A. LEVERを見送ってステラは視線を動かした。

その間際、こちらの視線に気づいたように手を振るハートレスに不快感を覚えながらも……やがてパレードは始まる。

「来たぞっ、あつちに見えてる!」

「へ黄龍雑技団のパレードだ!」

「雑技王」ってまだ小さな子どもなんでしょう? ちゃんと演じられるのかしら……」

「まさかもう一度【雑技王】の舞台が見れるなんてなあ……、グスツ」
沸き上がる若者。

年端も行かない今代【雑技王】を心配する声。

あるいは往年の思い出を振り返り涙ぐむ老人。

様々な想いを歓声に乗せて観衆が声を張り上げる。

その大歓声をかき分けるように——その一団は現れた。

先鋒を彩るは二列に別れて並び舞う男女の一団。

引き締まった肉体からすらりと伸びる四肢をくねらせ、常人には到底及ばない柔軟さでうねるように踊り笑顔を振りまいている。

引き連れた音楽はその後に続く巨大な山車に雛壇で並んだ【音楽家】達の大合奏で、その音に合わせて【幻術師】達の操作する幻影が色とりどりを放って大いに目と耳を楽しませていく。

その周囲にも大勢の【軽業師】達が軽妙にして精緻な雑技でアピールし、一時足りとも集客の目を飽きさせない。

まるで幻想が迷い込んできたような、あるいはそれに招かれたような非日常の光景。

長きに渡り観客の関心を惹き付けることだけを追求してきた黄河の伝統芸能。

復活せし王座を擁する名門の徒達が魅せる一挙一動が周囲の目を捉えて離さず、そのまま心まで鷲掴みに練り歩いていった。

「すつげー……、俺こういうの初めて見たよ。動画撮ってあとで上げなきゃー！」

「サーカスっていうの？ ふつーはなかなか見る機会無いもんな」

「ばっかこれは雑技だったの。サーカスとは別物なんだって！」

「違うって……何が？」

「それは……、わかんないけど」

「そんなことよりさ、噂の【雑技王】ってどこよ？ 趣味ジョブの超級職なんてすつげーレアじゃん！ 早く見たいんだけど!!」

この場が集ったへマスターもまた思い思いの感想を口に本命を待ち侘びていた。

そう……これらの演出はあくまで前座に過ぎない。本命は広告で何度も通知された【雑技王】である。

わざわざ軽業師系統に就いてそれを極めた一等物好きな彼らの同類を一目見ようと撮影用マジックアイテムを手に待ち構え……やがてそれを目撃する。

「なんだあれ、黒子？」

「あれだけ動きのレベルちげーぞ。ベテラン集団かな」

「いやでも黒ずくめって舞台衣装としては地味じゃ……ってあれ、あそこー！」

「一人だけカラフルなちっせーのがいる！ ……もしかしてあれが？」

「今《看破》した……間違いない、あの子供が【雑技王】だ!!」

大行列の中央に位置した一際巨大で飾り付けられた山車。

その天辺には平皿のような広い舞台が設けられ、その上で無数の黒子と戯れる、極彩色の衣装を纏った小さな影。

両端に大きな鈴を一つずつ垂れ下げた道士帽に、舞って切る風を孕んで波打つ袂を具えた道士服。

爪先の大きく湾曲した鈴付き靴でステップを踏み、その動きの最中にチラつく生身には厚い舞台化粧。

さながら中華風ピエロとも例えられるような装いに猫面を被ったその影は、素人目にも次元違いと分かる極まった動きで雑技を披露し、代わる代わる相手となる黒子を代えて、舞台の上で華麗に舞い続けていた。

《看破》でステータスを覗き見た幾人かが、それが真正銘【雑技王】であることを確信し、そしてそれが噂通りの幼子であることに驚く。

愕然とする彼らの前で舞い続ける【雑技王】——黒猫は、その動きのまま衆人環視の中ふわりと浮き上がり——

「うわ、浮いた！ えっ、あれどうなってるの!？」

「なんかのスキルか……？ でもそれっぽい魔法も使っていないように見えるぞ」

「おお……ガキの頃に見たのと同じだ……！ 先代と同じ、宙を舞ってるぞ！ 長生きはしてみるもんだなあ……!!」

見上げる彼らの頭上で天を遊び、回遊魚の如く黒子を引き連れ泳いだ。

そしてその最中に猫面を投げ捨て素顔を露わにし、猫のように笑って愛想を振り撒く。

投げ捨てられた猫面に殺到する観客の上に舞い降りてそれを見守り、立ち並ぶ観客達のほんの少し頭上をアイススケートのように踊り滑る。

さながらピーターパンかティンカーベルのように、「遊天娘々」の異名の如く天を自在に舞い遊ぶ黒猫に、観客はより一層熱狂しその背中を追っていた。

「すつつつげえ……、すごすぎてわけがわからん。なんだあれ、いくらゲームでも動きヤバいっしょ！」

「リアルなサーカスでもこんなものねーよ。ファンタジーここに極まれり、だな」

「つーかめっちゃ可愛い……え、ガチでロリっ子？　そういうアバターとかじゃなくて？」

「リアル側のフォーラムに情報載ってたっけな……趣味ジョブの情報なんて普段見てないからなあ」

「SS撮っとけ撮っとけ、動画もな！　これSNS載せたら爆釣れだぜマジで！」

(……本当に、すごいですね。ヘイさんは……)

ティアンも「マスター」も区別なく熱狂し喝采を上げる中、ステラは目を伏せて感慨に耽っていた。

公演の前座に過ぎないパレードで尚こうも熱狂せしめるその御業。

戦いに明け暮れる自分に(相性差とはいえ)力量で凌駕しながら、決して届かぬ技芸の領分で頂点を極める好敵手の姿に、ステラは只々感嘆の吐息を漏らす。

決して悔しくはない。ただ純粹な敬意の念が湧き上がってくるのを抑えられず、彼女は熱っぽく呼吸した。

場の警備に意識を割かねばならない中の、僅かな気の緩み。

一呼吸の後には意識を切り替え視線を鋭くさせるまでの、ほんのひと息。

しかし、だからこそだろうか。

得てしてそうした間の悪さを突くように凶事というものはどこからともなく訪うもので――

(この熱気に浸りたいところですが、そうもしてられないのが――、……!?)

「ッ――、《危険察知》に反応!?!」

――徐に反応を示した《危険察知》に空を仰いだその彼方から。

「えっ、……う、うわああああああ!?!」

「な、なんだア……!?!」

――無数の隕石が祭事に沸く街目掛けて降り注がんとしていた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

〈イレギュラー〉

□市街地・大通り

歓声に沸く大通りの空から飛来したそれは、明らかに街に目掛けて落下しようとしていた。

肉眼でも容易に全容を把握できるほどの大きさのそれが亜音速で迫る。

一〇〇は下らない隕石群が大気との摩擦熱で燃え盛りながら、その物量と質量の暴力を大地に叩きつけんと殺到する光景に、場は一転して恐慌に陥り叫喚を呼んだ。

「迎撃します。G A・L V E Rさん！」

「避難誘導の指示は出した！ 僕も出るぞ!!」

行列を乱して混雑に喘ぐ観衆の中からステラが飛び出す。

跳躍の勢いを上乘せした運動エネルギーで増幅して隕石の迫る上空に躍り出ると、虚空に鉄拳を突き出し、鉄脚で薙ぐ。

それによつて生まれた大気の流動は【星震撃 テュポーン】による莫大な運動エネルギーの後押しを受けて暴風の弾丸となり、飛来する隕石の幾つかを打ち砕いた。

G A・L V E Rも同様に純粋な脚力で上空に飛び出すと、その勢いのまま拳を直接隕石に繰り出し粉碎。

散りゆく欠片を一瞬の足場にして踏み込むと次の隕石に接敵し粉碎、それを繰り返しての肉弾戦で迎撃していく。

(ん？……これは)

G A・L V E Rはその最中、目に映った光景にある推測を立てるもひとまずは排除を優先する。

やがて足場となる破片も足りなくなると《練技・大鵬翼》で翼を得て翔び、並外れたA G IとE N Dに物を言わせて常人には不可能な加速度と軌道で殲滅を図っていった。

両者ともに尋常ならざる動きでの迅速な対応。

しかしたった二人では物量に差がありすぎ、如何な〈超級〉の二人とはいえ処理するにも限度があった。

純粋な個人戦闘型であるG.A. L.V.E.Rは言わずもがなだが、ステラもまた場所が市街地故に全力を封ぜざるを得ないのが重く響く。

やろうと思えば隕石群を一掃する程度は序の口だが……それをしとしまえば逆にステラの手によって市街地は壊滅してしまうだろう。ともすれば隕石群以上の被害を齎して。それでは本末転倒も甚だしい。

だが二人が真っ先に行動したことで他の人間にも状況を考慮する余地を一時与え、その結果遅れて遠距離攻撃の可能なへマスター達が迎撃戦に加わった。

数々の攻性魔法にミサイルや熱線、光線。空戦に長けたガードナーやタイムモンスター。

二〇名余りの戦闘型へマスターによる攻撃が隕石群に向けて殺到するも……足りない。

純粋に物質としての強度が高い隕石は攻撃を集中させてようやく破壊可能といった具合で、飛来する隕石の量に対し殲滅力が著しく欠けていた。

「おいおいおいアルマゲドンかよ……いくらなんでも限度があるだろう!?!」

「ヤバい、処理が追いつかない! 単純に人手が足りないのもそうだけど、避難しきれない市街地だつてのがマズすぎる!」

「破壊しようにもここだと巻き添えにしちまうよお!」

ステラの懸念は何も彼女だけのものではなかった。

迎撃に加わったへマスターの何人かも同様の理由で全力を出せないでいる。

とかく圧倒的な物量を相手に有利を取れる手段というのは周囲への影響も大きくなる傾向にあり、街と住民を顧みる彼らだからこそ、打てぬ一手に臍を噛む思いだった。

「すまない! ひよつとしたらなのだけど——」

「……あれ? ちよつとまって、ええと……」

「なんだ! なんか策があるのか!」

「そうじゃないんだけど、これ……」

一度地上に戻ったG.A. L V E Rがある推測を報告しようとしたところを、観測能力に長けた水晶球型〈エンブリオ〉を監視していた〈マスター〉が声を上げて遮った。

もはや一刻の猶予も無い状況の中間こえた声に、周囲の〈マスター〉が一斉に視線を向ける。

無数の視線に一瞬竦むも進み出たその〈マスター〉は、おっかなびつくり言葉を続けた。

「あたしの〈エンブリオ〉……〔ヘリオス〕って言うんですけど。それを見てたら、ほら。攻撃のエフェクトで見えなかったけど、よく見たら破壊された隕石は砕けるんじゃないよ……」

「……、これは……！」

その〈マスター〉が〔ヘリオス〕と呼んだ水晶球に直前の映像を投影してみせると、彼らの攻勢によって迎撃された隕石は砕けるだけに留まらず——そのまま光の塵と化しているのが確認できた。

その現象が指し示すのは、ある一つの事実。即ち飛来してくる隕石は自然現象や地属性に属する魔法で生み出された物オブジェクト体ではなく……。

「やっぱり！ 見間違いじゃなかった、これは……！」

「モンスターか！ 遠すぎる上に早かったから気づかなかった!!」

「よく見たら名前も出てる！ ……ええと、〔セル・バアン〕？」

この中で唯一生身で直接殴りかかったG.A. L V E Rだけが先んじて確認できていた事実。

頭上に浮かぶ名前表示は、人間範疇外生物——即ちモンスターの特徴に他ならなかった。

〔セル・バアン〕という名の隕石型モンスター。前代未聞ではあるが、ありえないとは言えない。

「エレメンタルか……？ いやでもモンスターだってわかったところでどうすんだよ!! もうすぐそこまで来てるんだぞー！」

「そ、そんなこと言われてもお……」

期待に沸いて一転、それが何の意味も無い情報だったことに周囲が紛糾する。

報告を上げたへマスターもすっかり萎縮して縮こまり、打開策の見えない現状に誰もが諦めかけた中……ステラは、「ヘリオス」のへマスターの前に進み出た。

「素晴らしい報告ですよ。貴方のお名前を聞かせていただいても？」
「えっ？ ええと、へDIN所属特派員のおてんどです。……うわっ、ひよっとして”人間台風”！」

「おてんどさん、ですね。よろしい、では貴方は引き続き周囲の観測をお願いします。何か気づいた点があれば、どんなに些細なことでも報告してください。いいですね？」

「はっ、はいいっ〜！」

ステラの脳裏には一筋の光明が見えていた。

ふと視線を寄越せば、G.A. L.V.E.Rも同様の結論に達しているらしい。

二人は合わせて頷くと、そのまま大口を開き。

「へいさんッ、聞こえてますか!!？」

「アレは全部モンスターだ!! つまりキミの——」

虚空に向けて声を張り上げ、先刻までパレードを舞い遊んでいた【雑技王】の名を呼び。

「——おう、聞こえてるじゃんよ」

その呼び声に応え、彼らの頭上に少女が現れ。

「相手がモンスターなら——生きてるなら！ あたしの敵じゃないじゃんね!!」

舞台衣装を振り乱して大仰に腕を広げ、天を仰ぎながら——

「《心魂奪命圏——天之闇戸》!!」

——スキルの宣言と同時に、都市全域の上空を闇で覆った。

天地を別つ闇の帳で、地表は一瞬で夕闇のように暗がり沈む。闇を境に空模様は灰色に染まり、接近する隕石群が放つ燃烧光も遮られる。

しかし物理的な防護が期待できないことが明らかになそれに、誰もが訝り不安そうに空を見上げる中で、ついに隕石は地表間近に迫って——黒猫の張った闇に触れた瞬間、光の塵となって霧散した。

薄く張られた黒猫の闇。

超々広域展開型の《心魂奪命圏》によってHP・MP・SPを貪り尽くされ、復活の余地なく次々と消滅していく。

対象がオブジェクトだったなら決して成し得なかった防衛戦略。対生命にて無類の強さを誇る〈超級エンブリオ〉、「奪命神咒 ヒダルガミ」だからこそ可能な荒業だった。

「うっし、ぶっちゃけここまで広げたの初めてだから不安だったけど、出力足りてたみたいで一安心じゃんね！」

「……頼りはしましたがよく射程が足りましたね。というよりはよくぞ処理し切れたと申しますか」

「空間認識能力を上げるアクセとかつけてっからね。それに生き物とか避ける必要無かったしよーよー。射程もまあこんくらいならへーキじゃんね」

人や建物が無い上空とはいえ、都市全域を知覚するまで拡張された空間認識能力。

そして認識した空間の隅々まで余すことなく領域を引き伸ばすだけの制御能力。

同じテリトリー系列にも属する〈エンブリオ〉を持つステラだからこそ、それを易々と行使してしまえるその才覚に戦慄する。

あるいは異常性とすら呼ぶべきか。

たとえ同条件であろうとも果たして他にどれほどの者が同じ真似をできるだろうか。ステラには到底想像がつかなかった。

「あーでも全部が全部弾けるってわけにもいかないか。引き延ばした分結界の層が薄いからやっぱいくつか抜けて……あれ、でも見た目より着地の被害あんま無いじゃんね?」

「あれがモンスターである理由でしょうか。単なる隕石落下による破壊攻撃でなかったのは幸いです」

「だけのんびりともしてられないぞ! ……あれは、ゴーレム!」

黒猫の篡奪結界を抜けた幾つかの隕石は、地表への着弾寸前にその勢いを減じて……着弾地点の範囲数メートルを陥没させる程度で落着する。

しかしそれだけで終わるはずもなく、地面に半ば埋没した直径約二〇メートルの隕石はそこから砕け——周囲の瓦礫を取り込んで五メートル程の歪な人型を取った。

一つの隕石から実に数十もの瓦礫の人形。さながら卵から孵化したカマキリの幼虫のように、しかしそれとは比べ物にならない脅威を以て進軍する。

G A・L V E Rの言った通りそれはまさにゴーレム。

頭上に「セル・バアン」の名前表示を浮かべたそれらは、避難できていない人間を明確に認識し……その命を摘み取ろうと腕を振りかぶった。

『G O・G O・G O』

「させるものかよー」

G A・L V E Rは超音速で接敵し、「セル・バアン」が拳を振り下ろすよりも先に殴りかかった。

超常のステータスで繰り出された拳は生身であるにも関わらず瓦礫の集積体であるボディを貫き、再生の余地なく木っ端微塵に打ち砕く。

「よっし地上なら——ってかってえ!? なんだこいつ、硬すぎんぞ!」

「見た目通り耐久特化かよ……っーかこれどういうモンスターだよマジで」

「たぶん……《眷属生成》だと思う。でも普通のモンスターよりレベルが桁違いすぎる……耐久だけなら純竜クラスはあるよ!」

一撃で仕留めたG A・L V E Rの姿を見て続いたへマスター達だが、思わぬ強度にたたらを踏む。

彼らのほとんどは未カンストの所謂エンジョイプレイヤーだが、それでも最低限上級職のひとつを育て切る程度の実力はある。一般的なテイアンと比較すれば雲泥の戦闘力と言えるだろう。

しかしその彼らをして歯が立たず、ダメージを通せたのは攻撃力に秀でた一部のへマスターだけという事実と思わぬ苦戦を強いられていた。

「ていうかそれをワンパンで仕留めたあのメリケンマツチヨなにもん

だよ……、オー○マイト？」

「確かに似てるけど。……つーかアンタえらく古い漫画知ってんな」

「……えっ、なにこの合計レベル。えっ、バグ？」

「うーん、余裕が出てきたようで何よりだけどね！ おしやべりよりは討伐に専念してほしいな!!」

ステータスの看破に特化した〈エンブリオ〉を持つ〈マスター〉がGA・LVERを見て目を疑う。

合計レベル二〇〇〇オーバーという前代未聞の領域に加え、DEXとLUC以外の全ステータスが特化型超級職を軽く超える数値に愕然とし、レベルの暴力を以て一撃のもと敵を粉碎していくGA・LVERに理解を手放す。

そんな周囲を他所に困り顔を浮かべながらも撃退を続けるGA・LVER。

「数が多いですね。あの隕石がもし全て落ちていたかと思うと……流石に脅威を覚えます。現状だけ見れば典型的な広域制圧型のそれですが、……しかし脆い」

一方別の戦場でそう感想を述べながら鉄拳を繰り出しているのはステラ。

接触と同時に浸透衝撃を繰り出され粉塵と化す「セル・バアン」には目もくれず鎧袖一触。

同じ戦場にて他の「セル・バアン」と対峙する〈マスター〉達は、そんなステラを畏怖の目で見遣り、同じ相手に悪戦苦闘する自分との力量差に慄いた。

「脆いってウツソだろお前」

「完全に二重の○みだコレ。あれガチで実現できるのか……」

「いやゲームだからこれ。まあそれでもちよつとワケわかんないけど！」

「流石は”人間台風”……よく似た別人かと思ったけど、まさかの御本人」

「でも台風要素無くね？」

「俺カルディナで見たことあるけど、マジでシャレにならんから」

「口よりも手を動かさない」

「イエス、ママ！」

隔絶した力量差など、ある程度この世界に触れている〈マスター〉なら味わっていた。

割り切つて身近な〈マスター〉と臨時パーティーを組むと、力を合わせて眼前の「セル・バアン」に立ち向かう。

それをステラは見送り、続けて敵を蹂躪していった。

◇

「jeeちゃん！ だんちよー！ それにみんなは!？」

空に篡奪結界を張つた後、黒猫は親しい人間を探して飛んでいた。

通りすがり際に人々を襲う「セル・バアン」を《心魂奪命拳》の一撫でで殺し回りながら、探し人を求めて駆け抜ける。

逃げ惑う人々が右往左往して混雑する頭上を飛び回り、避難誘導に声を張り上げる〈竜心館〉の面々の中に一座の人間が混じっているのを見つけるとそこに降り立つ。

「黒猫！ お前のおかげで助かったぞー！」

「それよりも他のみんなは!？ それにjeeちゃんたちも！」

「一座の人間は無事だ、パレードで固まっていたのが功を奏したな……、団長は誘導の指揮を執ってる！ ただ、王大人は……」

「おう、来たかネコ娘」

視線を彷徨させた団員の背後から、砂埃に塗れた虎頂道が姿を現す。

傷だらけの握り拳から彼も「セル・バアン」の討伐に出ていたのだと察せた。

彼は億劫そうに何かを背負いながら近づき、黒猫の前にそれを差し出す。

それは、身体中から血を流して気を失った……王宝満に他ならなかった。

「jeeちゃん……!？」

「安心しろい、無事だぜ。……今はまだ、な。早いところ回復させにやあぶねえが……」

「~~~~~ッ！ ……クソッ！」

《看破》で見た宝満の現在HPは三割を切っていた。

全身を裂傷と打撲で傷つき、【出血】や【骨折】の傷痕系状態異常で今も少しづつHPを減らしている。

応急手当によりかろうじて命を繋いでいるが……頂道の言う通り一刻も早く治療しなければその命は無いだろう。

そうでなくともこの状態が長引けば……如何なる後遺症が残るとも限らない。

「アイツらから逃げそびれたガキを庇ってな。らしくもねえ真似しやがって、俺あもう歳だつてのに冷や汗かかせやがる。……何匹か屠ってみたが、なんとかギリギリつてとこだ。そう大して役には立てねえぞ」

「……結局これ、なんだと思う？ ンなのぜつてーおかしいじゃんよ」
「決まってるだろ。《厳冬山脈》でもあるまいに空からモンスターがわんさか降ってくるわけがねえ。《マスター》の仕業にしたつてももう少しやりようがあるだろ。……となりやあ残る可能性はひとつ」

「それって、ひよつとしなくても……」
「み、み、み、みつけたああああ!!？」

溜息と共に隕石の飛来してきた空を見仰ぐ頂道を遮るように大声が響いた。

他の者が地上に降り立った瓦礫の尖兵を駆逐していく中、周囲の観測に注力していたおてんとが拡声アイテム越しに悲鳴のような声を上げる。

同時に発動された彼女の必殺スキルによって虚空にヘリオスが観測した記録映像が投影され、他の《マスター》達は戦いながらもそれを見上げた。

「こ、これ！ たぶんこれのはず！ でも、これって……!？」
果たしてそこに映し出されていたものとは――



□■ 黄河・カルデyna国境地帯

時は少し遡る。

公演日の前日午後。

必殺スキルの使用のために街を離れたカフカ達は、場所を西の国境地帯付近の山岳へ移していた。

街とは山一つを挟んだ、どの主要街道からも外れた人気の無い荒野である。

西を見渡せば視線の先に砂漠との境界線が見える不毛の地に何故場所を移したかと言えば、一言で言えば保険だった。

今から発動する必殺スキルの影響を鑑みての保険。

カフカとパンドーラにとってもある意味で制御の利かないその特性故に、人里への被害を避けてわざわざここまでやってきた次第である。

より正確に言えば人目につきたくない、というのも本音だったが。

ともあれ十分に離れたと判断したカフカはそこで足を止め、紋章に戻っていたパンドーラを呼び出した。(パンドーラは自力で長距離を歩くのを厭っていた)

「よし。やってくれお姫様」

「承ったのだわ！ それじゃあどうぞお楽しみあそばせ？ めくるめく希望と絶望の祭典を——!!」

呼び出されたパンドーラは意気揚々とそう謳い、光と共に姿を変えていく。

少女の身体が歪に大きく膨れ上がり、そのシルエットは明らかに人体からかけ離れていった。

やがて光の収まった先に鎮座していたのは——箱。

一〇立方メートル程の豪華絢爛な装飾が施された、それ自体が宝物のような宝箱だった。

蓋にあたる部分の前面には横並びに一〇の小窓が開き、そこには様々な絵柄がランダムに表示されている。

思わせぶりに箱の側面に備え付けられた巨大なレバーと合わせれば、それが何であるかは最早一目瞭然だろう。

それは超巨大な宝箱の形をした——スロットマシーンだった。

「ビュウ♪ 相変わらずイカしたボディだぜパンドーラ！ いつ見ても惚れ惚れするってもんだ!!」

『さあさあお楽しみはこれからよ！ リソースは十分に貯まっているのだから！ 単発？ 一〇連？ それとも……思い切って一〇〇連チャレンジでもしてみるかしら!? わたしはいつでもオツケーなのだわ!!』

「決まってるだろ？ 当然——初手必殺スキルだア!!」

『了解よダーリン！ 月に一度の出血大サービス、一回こっきりの運否天賦！ とくと堪能するのいいのだわ!!』

共に気分は絶好調に達した二人は、勢いも高らかに声を合わせ。

『さあさダーリンも一緒に!!』

「おうよ！ セーの——」

『——《この世^パ全てからの贈^ドり物^ラ》!!』

必殺スキルの宣言と同時にレバーが倒れ、小窓の絵柄が一斉に縦回転を始めた。

豪華絢爛な演出とBGMが流れ出し、二人の熱気を最高潮まで盛り上げる。

左の小窓から順に回転が止まって絵柄が確定するたびカフカが囁し立て、パンドーラの嬌声が響き渡る。

これこそが彼——【大賭博師】カフカ・アザナエルのへエンブリオにして、彼だけに許された世界最高のギャンブルマシーン。

名を【罪宝乙女 パンドーラ】。

TYPE：キャツスル・アームズ。

到達形態はVI。

その能力特性は——ランダム召喚。

並んだ一〇の小窓の絵柄が確定したなら、宝箱^{パンドーラ}からなにかが喚び出される。

何が召喚されるかはカフカはおろかパンドーラにすらわからない。

それは目も眩むような金銀財宝かもしれないし、この世^{特典}に二つと無い秘宝^{武具}かもしれない。

あるいは極めて希少な激レアモンスターかもしれないし、単独で生

態系を脅かす危険生物かもしれない。

ギリシヤ神話におけるパンドラの箱の故事、あるいはそれから連想される数々の説話のように、ありとあらゆる希望と絶望が可能性として存在する不確定要素の極み……それがパンドーラだ。

スキル効果としてカフカのLUCが抽選結果に影響することを知ってはいるが、それが具体的にどう作用しているのかは全く不明。

しかし進化を重ねるごとに排出される景品のクオリティは確かに上がっていて——第六形態に到達し、自らもレベルをカンストした現在では（臆病な性質だったのかすぐに逃げられはしたが）〈UBM〉を引き当てた事例もあった。

一定以上のレアアイテムやリルを消費して行使される通常スキルの場合、BETに見合わぬリターン^{ハズレ}を掴まされる可能性もある。

しかしたった一回の抽選で、ゲーム内時間で一ヶ月ものクールタイムを要する必殺スキルの場合は、その限りではない。

排出結果に上限は無く——決して爆死^{ハズレ}はない。

さながらリアルでは規制されて久しい往年のソーシャルゲームのガチャのような、月に一度の大盤振る舞い。

ギャンブル中毒のカフカに相応しい〈エンブリオ〉に固有スキルと
言えるだろう。

そのカフカは残すところあと二枠となった絵柄を注視し、まるで呼吸を忘れたのではないかと見紛うほど興奮に顔を赤くしてその回転を見守っていた。

「きた、きた、きた……きたきたきたきたあああああ!!! ここまで全部絵柄が一致！これは間違いなくきてる！いいぞ、いいぞ、いいぞ……!!」

『ああん♪ そんなに見つめられちゃ照れるのかわ！』

カフカが興奮するのも無理はなく、現在の抽選結果は過去類を見ない程最高に近い結果を弾き出していた。

たとえ絵柄に多少のばらつきがあろうとも必殺スキルによる抽選ならば本物のスロットでいうジャックポットに等しい結果を弾き出す【パンドーラ】。

だけでもしその絵柄が全て同じに揃ったならば——その結果など最早想像もつかない。いつその瞬間に死んでしまいたいほどの興奮だろう。

過去最大の熱気を立ち昇らせるカフカの目の前でついに最後の小窓の回転が止まろうとする。

しかしてその結果は——彼の願いが天に通じたかのように、これまでに止まった絵柄と同じものを指し示していた。

そしてより一層派手に鳴らされる極上のファンファーレ。

カフカは最早形容のつかない表情をしながら両拳を突き上げ、膝から崩れ落ちて声なき絶叫を高々と上げた。

「やっつっつっつっつっつ、……。」

『ダーリン？　だーりいひいひいひいん?!?　気を失っちゃダメなのかわ!』

興奮のあまりその姿勢のまま意識を手放したカフカをパンドーラが必死に呼び覚ます。

懸命な声にしばらくの間を置いてようやく再起動を果たすと、カフカはさながら悟りを開いたかのような無色透明の表情を浮かべながら、パンドーラの前に恭しく跪いた。

「——ありがとう。その言葉しか見つからない。……俺の人生はこの瞬間のためにあつたんだ」

『ダメよダーリン！　わたしを置いて逝っちゃうなんて許さないのでわ！　ダーリンの人生はわたしを養うためにもあるのだわ!!』

「ああ……そうだな、我が麗しのレディ。喜んで、明日のパレードをエスコートさせてもらうさ」

感動が何十周もして異様なテンションのカフカ。

ともあれ必殺スキルは確定し、これより待望の排出の瞬間である。

カフカは跪いた姿勢のまま真摯に両手を合わせて祈り、禁断パンドーラの箱の蓋が開くのを待つて——

『……あれ？　あれれれ?!?』

「どうしたんだい、パンドーラ。そんなに焦らさず早く見せておくれ。もう辛抱堪らんでぶつちやけほとんどイキそ」

『下ネタはNGなのだわ！——じゃなくて！　なんだかとおつきな……だ、ダメエ!?　わたしの身体が裂けちゃうくくくくくく!?』

「……………へ?」

ゆっくりと開こうとする蓋を押し破って、それは現れた。

一〇立方メートルの「パンドーラ」に対してあまりに巨大な……直径二キロメートル程の球体。

箱の直上でその巨体が聳える様は、あまりに巨大過ぎて全容を掴みきれないが、その表面を覆う不規則に揺れる斑模様を見てカフカは、「まるで木星の模型みたいだな」と事態を呑み込めないままぼやっとした感想を浮かべた。

『——KYU?』

謎の物体もまた状況が呑み込めていないようで、訝るように声——は分からないが便宜上それとして扱——を上げた。

見た目に反して小動物のように可愛らしい、されど既存のどの生物とも違う奇妙な声を何度か発して、表情を変えるように表面の斑模様が目まぐるしく動き。

『KYU!・KYU!・KYU~~~~♪』

自らが自由の身であることによく気づくと、堰を切ったように歓喜の鳴き声を上げた。

一見して可愛らしいとも思えるその仕草。

しかしその声を聞いてようやくカフカは、今が絶体絶命の危機であることを思い知り……血の気を失って全身を総毛立たせる。

(しくった……!!　これはクリティカルじゃねえ——致命的な、ファンブルだ……!!)

内心でそう叫ぶと同時、カフカはパンドーラを左手の紋章に帰還させて。

『KYUUUUUUUU……、——KYUAAAAAAAAA
AAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!』

同じタイミングでソレが鳴き声を長く長く響き渡らせて——浮上した。

浮上と同時に周囲一帯の地形を削りながら——その跡に巨大クレーターのようなすり鉢状の捕食痕を残して。

そこにいたカフカがその大破壊に抗えるはずもなく、地形諸共すり潰されてデスペナルティになる。

あまりに近く、あまりに大きすぎ、あまりに急転した事態のせいで……ソレの頭上に示された名を認識する間も無いまま。

——ただ、最悪の置き土産を遺して。



時は戻る。

誰もが映像を見、その向こうに広がる遙かな空を仰いでいた。

「信じ……られない!? これって……こんなのって……」

おてんとが投影した映像越しにソレを視認したあるへマスターが
眩く。

視認対象のステータスを看破することに特化したへエンブリオの
持ち主であるが故、誰よりも先にその絶望を目撃して、堪らず腰から
落ちる。

しかしそれは彼だけに限ったことでもなかった。

彼ほどに情報を見抜けていなくとも、映像越しで尚圧倒的な脅威を
纏って彼らの目に映るソレに誰もが絶望する。

——ソレはまるで星のようだった。

——ソレは木星の如き外観をして、土星のように無数の小惑星が取
り巻いていた。

——ソレはおおよそ誰も見たことがない風景に鎮座し、遙か下の地上
を見下ろし渦巻いている。

「も、目標座標……報告します……! や、約——」

おてんとへのリオスが算出した座標——地上一〇万メートル。

地球の一般的な認識という宇宙との境目に位置する不可侵領域。

そこに鎮座するは直径二キロメートルの——命持つ星。

「名前は——【■■■■■■■■■■】。た、対象の脅威度は……」

ソレを看破してしまったへマスターが報告を受け継ぎ、言い淀む。誰もが固唾を呑んでその報告を待つ中、彼はほとんど泣きながら言葉が続け。

「脅威度は、神話級以上。レベルは——一〇〇オーバー……ああつ、畜生!?! なんだつてこんなバケモンがこんなところにいるんだ!?!」

絶叫しながら彼は不運を呪った。

あまりに唐突な常軌を逸した怪物の登場に、今この場に居合わせてしまった不幸を呪う。

そしてその声を皮切りに——皆、阿鼻叫喚に陥った。

◆
ソレの名は、バアン。

古の昔に封印され、千年の時を越えて今蘇りし災厄。

不可侵領域を回遊し、かつて大陸全土を荒らし回った星喰らう星。地属性を極めすぎてしまったエレメンタルの成れの果て。

神話級へUBMにして——その領域に留まらなかったへイレギュラー。

——【大怪遊星 グランドバアン】

『——KYU?』

ソレは纏う絶望に不釣り合いな声を上げ、遙か地上を見下ろした。

T o b e c o n t i n u e d

星喰らうモノ

□ ■ ???

「ん？ ……ほう、これは」

定められた作業を黙々と進めていたソレは、脇に表示されたウィンドウを認めて興味深そうに声を漏らした。

画面が放つ光で管理AI四号——通称ジャバウオツクの顔が照らし出される。

あらゆる生物の特徴を具えながらいかなる生物にも似つかない彼の顔は、常の無表情とは違い薄い微笑を浮かべていた。

「大怪遊星 グランドバアン」 …… 「封神^{ザシエル}」 によって封印されたヘイレギュラー^{レギユラー}か」

古い記憶を思い返し、それまでの作業を一旦休止してその画面に向き直る。

千年以上もの昔、大陸全土が未曾有の動乱に陥った三強時代よりも前に生まれ、破滅的な災厄を振り撒いていたその〈UBM〉は、かつてジャバウオツクも回収しようとしたことがあった。

しかし実際に回収へ赴くよりも先にとあるティアン——「封神」に先手を打たれ、その命を賭した異空間隔離封印魔法によって放逐されたという経緯がある。

「我々ならその封印を破って強引に回収することもできたが …… ティアンの手によって始末がついたのならば、我々の介入は不要。そう結論し放置していたものが、何故今になって ……」

今では記録も遺されていない「封神」は、生まれくる時代が違えば後世に名を馳せた三強が四強に変わっていたかもしれないほどの規格外。

対する「グランドバアン」もまた、ジャバウオツクの ■ ■ ■ ■ ■ による干渉を得るまでもなく自ら成長し、その限界を突破してみせた地属性エレメンタルの究極系。

共に人間とモンスターのハイエンドだった両者の激突は、長きに渡りこの世界を観測し続けてきた彼ら管理AI達にとっても類稀な事

象であったこともあり、ジャバウオックの中でも忘れがたい記憶として認識されている。

【封神】による対処が無ければまず間違いなく「SUBM」として管理されていたであろう「ヘイレギュラー」の再来に、彼が興味を示さなはずもなかった。

その彼が事の前後を把握しようとして観測記録を精査し……【グランドバアン】解放のきっかけとなったとある「マスター」とその「エンブリオ」の情報に目を留めた。

ログを読み込み、その経緯に驚いたように口元へ手を当てると、ついで浮かべていた笑みをやや深くする。

「……面白い。一点特化の出力、長期間のクールタイム、そして一度に一回限りという制限とはいえ、第六形態のリソースでは天文学的確率だろうに……よくぞ引き当てたものだ。このような「エンブリオ」もあるのだな」

不確定要素の極みといえる「エンブリオ」に新鮮な驚きを味わいながらジャバウオックはウィンドウを操作する。

リアルタイムで【グランドバアン】のデータを映し出す画面は、ソレが周辺環境を食い荒らしながら上昇し続ける様をモニターしていた。

やがて高度一〇万メートルの位置に留まった【グランドバアン】が本格的な捕食行動に移ったのを見送って、ふと思案する。

「この一件は奇貨となるだろう。我々の予定にないイベントではあるが、意図せずして「SUBM」投下と同等の超級進化誘発干渉を期待できる。しかし懸念は……」

再びウィンドウを操作し、【グランドバアン】の詳細なデータを表示したジャバウオックは、ある可能性を憂慮した。

「……これを討伐できる者がいるかどうか。そして、これが討伐されたときに大陸が無事か。——万が一に備え、秘密裏に回収する手筈は整えておくでしょう」

ジャバウオックは本格的にモニタリングに注力し、ソレと対峙する「マスター」達の健闘を祈った。



□市街地

「レベル一〇〇オーバー……モンスターでか!？」

「ひよつとしてこないだグランバロアに出たっていう【モビーディック・ツイン】の同類か!」

「てことは〈SUBM〉か! そりゃトンデモねえわけだ……」

「【グランドバアン】のスペックを看破したへマスター」の報告を受けて、その場にいた者達は俄にざわめきたった。

人間とは異なるレベルシステムを有するモンスターにおいて、レベル一〇〇の壁を超えることの意味はあまりにも大きい。

本来であれば如何な〈UBM〉とはいえレベル一〇〇の限界に留まる中、その枠組みを超越したハイエンド中のハイエンドのことをへイレギュラー……あるいは〈SUBM〉と呼ぶ。(厳密に言えば両者は別物だが、少なくとも現在の彼らにとって大差は無い)

元より数の少ない〈UBM〉にあつてより希少なそれらは長らく伝説上の存在として語り継がれるだけであつたが、先のグランバロアを襲った【双胴白鯨 モビーディック・ツイン】という〈SUBM〉の名はまだ人々の記憶に新しく、それ故に【グランドバアン】という規格外の出現を疑う者はなかつた。

事前の予兆や目撃情報も無く突如現れたことに疑念は残るも、前例となる【モビーディック・ツイン】も似たような経緯で急襲を仕掛けてきたことからそれを今議論する必要は無い。

肝心なのは今。

上空一〇万メートルという前人未踏の不可侵領域に留まりながら一方的な攻撃を仕掛けてくる敵に対し、如何に対応すべきか……あまりに分が悪すぎる戦況に、誰もが頭を抱えた。

「二〇万メートルって……実際何キロだよ? 桁が違いすぎてパツとわかんねえんだけど!」

「二〇〇キロメートルだよ馬鹿! いやでもどうすんだよこれ……んな射程余程特化してないと無理だろ」

「光属性魔法ができるやつは？ あれなら距離減衰も……」

「まだログアウトしてない連中に聞いてみたが、生憎それに特化した〈マスター〉はいなさそうだ。それにいくら射程距離に優れた光属性でも、これだけの距離だと流石に分が悪いかもしれん。……奴さん、見たところ耐久力にも相当自信がありそうだしな。なんせあの見た目、ほとんど惑星だぜ」

続く絶望的な報告に誰もが進退窮まっていた。

彼らがそうしてる間にも空からは先に隕石群が断続的に飛来し、抜け漏れた隕石が地表に到達して「セル・バアン」を生み出している。

本来の隕石衝突からは大幅に規模が小さいとはいえ都市への被害は既に無視できるレベルではなく、積極的に命あるものを狙う星の尖兵によってティアンの死傷者も少なからず出始めていた。

残った〈マスター〉やティアンの実力者達の懸命な避難指示のおかげでまだ致命的な損害には至っていないが……それも打つ手が無い以上は時間の問題であることは明白だった。

「……チッ、あたしの結界を抜けてくる奴が増えてきやがった。あのヤロー、徐々に投下する「セル・バアン」のスペックを上げてきてやるじゃんよ」

いつの間にか合流していた黒猫が舌打ちして呟く。

その言葉の通り、彼女の《心魂奪命圏・天之閻戸》では奪い切れぬ程のHPを持った「セル・バアン」が増え始めていた。

そしてそれは、地表到達後の討伐難易度の上昇も意味している。

G・A・L・V・E・Rとステラにとっては結果に変化の無い微々たる差ではあるが、一体につき複数人で対処していた上級までの〈マスター〉にとつては討伐にも時間が掛かり、被害を抑えきれないパーティーも出始めていた。

「なあアンタ……黒猫、だったか？ アンタの結界をもうちよつと強くすることはできねえのか？」

「無茶言うねにーちゃん。これでも割と精一杯なんだけど？ これ以上広げると制御に粗が出て悪いことにしかなんねーじゃんよ」

「確かに……寧ろ今のこの状況が最善に近いのか。アンタがいなけ

りやどうしようもなかったもんな、悪い」

「いーよ、あやまんなくて。あたしが不甲斐ないのも事実だしね。……っーか」

黒猫は肉眼では見えない距離にいる「グランドバアン」を見据え、その表情を憎々しげに歪め。

「あたしのさ、一世一代の大巡業をさ。その最後の最後の舞台をこうもメチャクチャにされて、一番ムカついてんのはあたしじゃんよ。……じーちゃんまでケガさせやがって」

握りしめた拳からは血が流れ、睨みつけた双眸からは雫が一つ流れ落ちた。

未だ嘗て、この世界でこれほどまでに黒猫が激昂したことはない。あまつさえ悔しさの余り涙を流すなど、リアルでも一度しかない経験だった。

「これはこれは、とても珍しいものを見ましたね。今まで見た中で一番子供らしい表情かと」

「……うっせーよメスゴリラ。それよかちゃんと駆除してんだろっかな？」

合流したステラの擲楯に仏頂面で返す黒猫。

彼女の問いかけにステラは首を横に振り、状況の不利を伝える。

「……既におわかりかとは思いますが、千日手です。敵方の攻勢に対し、こちらの処理能力が明らかに足りていません」

「おまえならどーとでもなりそうなんだけど？」

「どうとでもしてよいのなら、してみせましょう。その場合この街の放棄を認めていただくことになります」

「……ま、そうなるじゃんね」

黒猫は溜息をついて肩をすくめ、どうしたものかと思いついた。

今も《心魂奪命圏・天之闇戸》を展開しながら、その制御でやや処理の遅れている思考を巡らせながら考え抜いて……ふと益体もない考えに辿り着く。

「メスゴリラならよー……元凶を直接ぶっ飛ばすってワケにはいかねーの？」

「貴方はゴリラを何だと思っているのですか」

降りかかる隕石群を凌ぐのではなく、それを齎す【グラントバアン】を対処する。

誰もが真つ先に考え、前提条件の困難さから断念した手段。

あまりにも身も蓋もない黒猫の問いに、ステラは初めて澄ました顔を呆れたように変えた。

そして人差し指を頬に添えて思案しながら、暫しの間を置いて黒猫に向き直り、

「……不可能ではありませんね」

「マジかよすげーなゴリラ」

そう、信じ難い答えを返した。

問うた黒猫ですら期待していなかった中の思わぬ返答に、先刻の涙も忘れて目を丸くする。

そんな黒猫に対し、ステラは「ただし」と前置きして言葉を続ける。

「あくまでも理論上の話です。現状では幾つかの条件を満たす必要があります」

「ほーん。条件って？」

「ひとつ。【グラントバアン】の座標まで辿り着くための推力を得ること。如何にわたくしのテュポーンが〈超級エンブリオ〉とはいえ、一〇万メートルもの距離を翔ぶだけのエネルギーを独力で捻出することとは難しいでしょう」

「必殺スキル使えば……多分だけどおまえの必殺スキル、出力上昇や許容限界の拡大とかそんなだろ？」

「御明察ですね、その通りです。しかしこの星の重力を振り切ってはぼ宇宙空間まで到達するだけのエネルギーを増幅だけで得るのはそれだけでリソースが枯れます。となるとどこかから引っ張ってくる必要がありますが……」

「置き去りになった大気が荒れ狂うのは御免でしょう？」とステラが告げる。

事実彼女の広域殲滅戦術の一つとして「周辺大気から運動エネルギーを奪って自らの糧とすると共に、置き去りにされた大気が公転・

自転運動で流動する大気と衝突することで暴風を巻き起こす」というものがある。

得られる運動エネルギーは莫大だが、言うまでもなくそれによる被害は尋常のものではなく、超々音速など生温い加速度で衝突し荒れ狂う大気の制御などあるはずもない。

ステラにしてもEND特化型で無ければ自滅必至の、人類領域外でしか用いられない戦術。

それをこの状況で使つては「グラントバアン」が齎すもの以上に致命的な被害を叩き出すのは確実だった。……ステラが”人間台風”の異名で呼ばれる所以である。

「ふたつ。目標までの飛翔中、わたくしはその制御に専念する必要があります。過去にない垂直距離と重力の軛を振り切るには他に処理を割いている余裕がありません。当然敵方の迎撃には対応できず、撃ち落とされれば無為に終わります。二度目を実行する余力もおそらく残らないでしょう」

「おまえそのへんの細かいこととか下手くそっぽいもんな」

「ヘイさんが器用すぎるだけです。そして最後ですが……」

ステラは頭上に浮かぶ「ヘリオス」のモニターを指しながら、「単純に相手が巨大すぎ、おそらくは耐久にも相当優れているだろうことから単身では破壊できそうにないこと。アレが地上にあつて目標到達にリソースを割く必要が無かったのなら話は別ですが、前者の条件があるために非常に困難なものとなっております」

そう締め括った。

その返答を聞いて黒猫は、心底微妙そうな表情をしながら呟く。

「……それって結局、なんの解決にもなっていないじゃんよ」

「だから言ったでしょう？ あくまで殴るだけならの理論上の話だと。……せめてアレがもうひと回り小さく、かつ五万メートルまでの距離だったなら対処は容易だったのですが」

その言葉を聞いた黒猫は思った。「やっぱりこいつゴリラじゃん……」と。

傍で聞いていた他の「ハマスター」もあまりに突飛すぎる話に苦笑い

で冷や汗を垂らし、言葉を紡がないでいた。

結局は避難を進めるしかないのかと誰もが行き詰まりを感じていたところ、思考を続けていたステラが再び口を開く。

「……とはいえ絶対に不可能、とも言えません。裏返せば十分な推力を得る宛てがあり、飛翔中の迎撃手段を得、かつ複数人で殴りかかれたなら……勝機はあるはずです」

「……………おいおいおい、まさかおまえ……マジか?」

黒猫の脳裏に過ぎったあまりに強引すぎる想像に、ステラは答ええず笑みを深くするだけ。

そこへおてんとを引き連れたG.A. L.V.E.Rが合流し、顔を突き合わせていた二人に割り込む。

「黒猫くん、ステラくん! 彼女から報告があるそうだ!!」

「拝聴しましょう」

「え、えと戦況をモニターしてて気づいたんですけど……。この「セル・バアン」……、つぐ……てい、ティアンの方達をこ、殺した個体は、その……」

戦闘慣れしていないおてんとは、犠牲となったティアンの死に様に嗚咽する。

そんな彼女を労るようにG.A. L.V.E.Rが背を撫で、急かさず彼女が勇気を振り絞るのを待つと……やがておてんとも意を決したように言葉を絞り出した。

「——浮き上がろうとするんです! 逆再生みみたいに、周辺の地形を巻き込んで、隕石に戻って……! でも行きに黒猫さんの結界で削れたあとだから、帰りは結界を越えられずに消滅してるんですけど……。この動きが、どうにも気になって……!」

奇妙な報告だった。

単に被害を拡大させるだけならそのまま野放しにしておけばいいものを、何故手元に戻すように引き上げようとするのだろうか、報告を受けた誰もが訝しんだ。

皆が考え込む中、そのうちの一人、戦闘能力を持たない【釣師】の「マスター」が、ふと呟く。

それを聞いたステラがハッと表情を変えてその「ハマスター」に問い直す。

「今、なんと?」

「いや……まるで釣りみたいだなんて思ってた……。その、どうでもいい連想なんだけどよ……」

地上に到達した隕石と展開された「セル・バアン」が針か餌だとすれば、それに対応して討伐に群がる人間はさながら魚。

その魚と一頻り交戦した後リールを巻かれたように引き上げようとする様を、根っからの釣りバカであるその「釣師」はそう見立てた。

「釣り……、本来生態的に生物を害する必要性の薄いエレメンタルにしては不可解な挙動……まさか」

「成程、そういうことか……!!」

その言葉を受けて表情を変えたステラに、遅れてG.A. L.V.E.R.、そして他の「ハマスター」達も気づく。

「野郎……俺達が旨味の多い獲物だつてことを知ってたやがったのか!」

「見たところエレメンタルがどうして好き好んで人間なんざ付け狙うのかと思つてたら……畜生!」

「眷属に獲物を殺させてその分け前を得ようつてことか! 自分を構成する物質を回収させるついでに……!!」

一連の行動はまさにその通り——魚を目的とした釣りだったのだと。



■地上一〇万メートル上空 不可侵領域

『KYUUUUUUUU……』

果たして彼らの推測は……見事に正鵠を射ていた。

遙か上空の不可侵領域にて眷属を投下した「グランドバアン」は、いつまで経つても戻つてこない餌に空腹にも似た感覚を覚えていた。

彼らが知るよしもない「セル・バアン」の特性。

それは殺傷した生物から得られるリソースを僅かに増幅しながらも自身には還元せず、内部にリソースを蓄えたまま周辺地形を用いて再び外殻（隕石）を形成し、「セル・バアン」のみを対象とした限定的な重力操作によって再浮上、手元に呼び戻して蓄えたりリソースを回収すると同時に確保した地形を自らに同化させ構造体の拡充を図る……「グランドバアン」にとっての基本的な捕食行動。

些か迂遠な捕食方法ではあるが、「グランドバアン」が直接殺傷するよりも得られるリソースの割合が多く、かつ容易に自らを構成する固体を補給できる。

それに加え……何よりも安全圏にいながらにして自給できるのが素晴らしい。

人間らしい思考を持たない「グランドバアン」だったが、敢えて人語に訳するならばそうした感想を述べていただろう。

そう。ソレにとって自らの安全確保が何よりも優先されるべきことであり、地上一〇万メートルという不可侵の安全圏から離れるつもりなど毛頭ない。

圧倒的な能力と巨体を誇る「グランドバアン」は、その実——誰よりも臆病な性質の持ち主だった。

『KYU? KYU……、KYUKYU? KYUUUUUU……』

その「グランドバアン」は悩んでいた。

先程から捕食のため幾度となく取り巻きの衛星——「セル・バアン」の核——を投下してはいるが、一向に訪れない給餌にどう動くべきかと。

高度を下げても自ら捕食する選択肢はあり得ない。

元は脆弱な地属性エレメンタルに過ぎなかった彼は、敢えて危険を冒す愚を重々承知していた。

自らの最大の長所がこの不可侵領域に棲まうことであることを「グランドバアン」はよく心得ており、例え餌場である大陸が無くなるろうと決して地上に降り立つつもりはなかった。

生息域をこの不可侵領域に移した後の「グランドバアン」にとって

唯一の例外は、千年（といってもソレに明確な時間感覚は存在しないが）の昔に己を封じた人間のみ。

ハイエンドとして規格外の才能を持つ時の【封神】が全生命を魔力に替えて発動した封印魔法は、地上にいながらにして不可侵領域の【グランドバアン】を異空間へ放逐せしめている。

故に【グランドバアン】は己が信ずる安全圏が必ずしも絶対ではないことをあの一件から学習しており、それもあって一メートル足りとも降下しようとはしていない。

地上の人間達にとって不幸中の幸いは、ソレが過去の一件から学習すれども現状の限界から滞在領域を変えられていないことだろう。

並外れた性能を誇る【グランドバアン】でさえ地上一〇万メートルが限界であり、長く異空間に封じられていたためにそれを改良するだけの環境が無かったのも影響している。

しかしそれも封印から解放された今となっては遠からず解決される弱点である。

否、そもそも一〇万メートルという距離の暴力そのものが過剰ではあるのだが、一度致命的な敗北を味わっている【グランドバアン】には、現状に甘んじるつもりなど全く無かった。

臆病にして勤勉。

それこそが【大怪遊星 グランドバアン】最大の強みとも言える。決して野放しにはならない脅威。

〈Infinite Dendrogram〉というゲームとしての体裁が無ければ、今すぐにも管理AI達による対処が行われていただろう。

【グランドバアン】は奇跡的に取り戻した自由を今度こそ絶対のものとするために、一刻も早く己を満たす必要があった。

大地を削って構造体を拡張せしめ、リソースを蓄え続けてより高みへ昇り続ける。

それだけを求め続けて捕食に注力する。

かつて大陸を轢き潰した石臼の化身の脅威を片時も忘れてはいない。

「【グランドバアン】の動向に変化あり！　こ、これは……!?」
状況をモニターしていたおてんこが再び声を上げる。

彼女のヘリオスが映し出す画面では、【グランドバアン】周辺の衛星群が渦を巻いて一箇所に集まる光景が見えていた。

それはぶつかり合い、砕け合いながらも重力に引かれるようにして集結し続け……やがて【グランドバアン】よりも何回りか小さい、直径六〇〇メートル程の固体を形成する。

それは【グランドバアン】の下方、地上と不可侵領域の間に留まり……その構えの意味を誰もが直感し、血の気を失って息も絶え絶えに呟いた。

「……………おい。おいおいおいおい、まさか……………ウソだろお!」

「待て……、待て！　それはあまりにも——シャレにならなすぎる!!!」

そんな地上の人間達の悲鳴などソレは知る由もなく、彼らの最悪の想像のままに【グランドバアン】は斑模様の動きを止めて、

『uuuuuuuu——』
《ヒュージ・メテオ大彗星》

——躊躇うことなく、地上に向けてそれを投下した。

T o b e c o n t i n u e d

反撃の狼煙

■地上一〇万メートル上空 不可侵領域

結果の芳しくない地上の様子を見て、「グランドバアン」は妥協することにした。

経験則から人間は獲得リソース量が多いことを知っており、それが一所に大勢集まっている地上は滅多に無い絶好の餌場ではあったが、存外の粘り強さを見せるそれらに拘泥することの愚を「グランドバアン」は理解していた。

眷属の投下に消費したのは衛星の一割未満ではあるが、たかが食事にこれ以上手間をかけるのは割に合わないとしてソレは考えて妥協して……次善策の実行を図る。

そのために「グランドバアン」は残った衛星の四割を集結させ、起点指定で発生させた超重力によってそれらを圧縮結合させる。

総量で言えば惑星を上回る数の衛星へ圧縮に圧縮を重ね……直径六〇〇メートル程の固体を形成した。

しかしそれは見た目通りの代物ではない。元はキロメートルを超える物量をその直径にまで圧縮せしめた極小規模の中性子星とも言うべき超々高密度物体である。

その質量たるや筆舌に尽くし難く、地属性魔法によって強度までもが強化されたそれは、およそ尋常の手段では破壊不可能とすら言える物理の暴力そのものだった。

『KYU、KYU！ KYU~~~~♪』

楽しげに聞こえる声を伝達物質の無い不可侵領域で発しながら準備を整える「グランドバアン」。

ほんの数メートル上空からでも落とせば大破壊は免れないそれを、あろうことか地上に向けて配置し……それと着弾指定地点までの間にガイドを結ぶ。

捕食端末である「セル・バアン」の目標地点までの正確な投下と、ここからの回収に用いる重力のルールを設定。

己の構造体に限定して可能な超長距離重力操作をソレは終え、いよ

いよもつて超強度超質量物体の投下を開始する。

『KYU、KYU、KYU!』

そう、「グラントバアン」は割に見合うリソースの回収を諦めた。代わりに地上に張られた薄闇では防げないであろう只々純粋な巨大質量を投下して、地形破壊からの構成物質の回収に専念することにした。

妥協したりリソースの方も「セル・バアン」経由で得るよりは実入りが減るが……それでも多少なりとも確保できる。

——これで地上を一掃してから改めて眷属を投下し、存分に回収に専念すればいい。

——そうして己をより拡大したなら、餌場を移して今度こそ生物のリソースを入手しよう。

人間の言葉にすればそんな思いで、ソレは地上に向けて真つ直ぐに落下する超巨大隕石を見送った。

「グラントバアン」の主観では妥協の産物でしかない次善策。

しかし地上の生物にとってはまさにこの世の終わりとしか思えない光景がそこにあった。



□地上

その一部始終を「ヘリオス」のモニターで見ていた人間達は、今度こそ終わったと蒼白を通り越した破滅的な顔色で絶句していた。

あまりに荒唐無稽な光景すぎて、逆に現実を疑って呆ける者すらいる。

しかしそれを直接観測するおてんこにはそれが紛うことなき現実であることが突きつけられていて、最早ほとんど気絶寸前の有様だった。

「あうあうあう……あばばばば、ど、どどどど、どうすればくくく!!?」

「これは流石に……クレイジーすぎるね!!」

常に自信に満ちた笑顔を絶やさないG.A. L.V.E.Rですらも引き

攣って冷や汗を流す。

その彼ですらそうなのだから、戦う術を持たない一般市民などは言うまでもない。

「セル・バアン」の襲来まではヘマスターを始めたとする実力者達の尽力もあつてかろうじて統制が取れていたものの、間もなくこの地上を襲う絶望を前に決壊する。

「あ、おい、ま……ヤバい、完全に暴動した！」

「無理もねえよ、こんな状況じゃ……。……俺も流石にそろそろトンズラすつかな……」

先刻までの避難誘導の甲斐などまるで無く、誰もがパニックに陥って最低限の目的すら見失って右往左往する。

今はまだかろうじて人同士の争いは防げているが、それも時間の問題だろう。

（先に心が折れましたか。……いえ、寧ろよくここまで保ったと言うべきでしょうか。他に行くあてのないティアンはともかく、ヘマスターの方は驚くほど協力的でした。概ね善良な方々で、助かっていたのは確かなのですが……）

最早統制など望むべくもなく、ここまで尽力していたヘマスター達も諦めてログアウトしつつあるのをステラは惜しみながら見送り、（……だからこそ、惜しい。ようやく勝機が見えてきたというのに……）

内心で他者には信じ難い言葉を紡ぎながらも、この状況では伝えても無為と悟って已む無く諦めかけた、そのとき。

「——やあやあ皆さん、少しは落ち着いてはどうかかな？」

そんな、この状況にはあまりに似つかわしくない飄々とした声が響いた。

「今更慌てたところで、常人の脚じゃあどこに逃げたところで結果は同じさ。ならばせめて、心静かに時を待つべきではないかい？ 『今日が世界最後の日だとしたら、キミはどう過ごす？』なんて……きつと一度は考えたことがあるだろう？ 今がその時さ」

その声は朗々と周囲一帯に響き渡り、人々の裡に染み渡っていつ

た。

聞くものに心地よい1/fゆらぎの声音で、状況を皮肉りながらもそれが何気ない日常かのように放った言葉は、逆に人々に冷静を取り戻させる。

誰もがパニックに陥った今の状況だからこそ、たった一人の冷静な声はよく響いた。

まさしく鶴の一声で場に冷静を取り戻したその声の主は——赤い。全身赤一色の紳士服姿をした赤い男は、冷静というよりは無気力にすら見える白い婦人を連れて人々の間を割って進み出た。

「……Mr. ハートレス」

「やあ、先日振りだね。今まで状況を静観してたんだけど、いよいよもって大惨事のようなからね。ついつい出しゃばってしまったよ」

「お邪魔だったかな？」などと悪戯っぽくウインクしたハートレスに、ステラは嫌悪を隠せない。

しかしそんな反応すらも愉しむようにニタニタと笑うハートレスは、大仰に手を広げると周囲をぐるりと見渡した。

「……とまあ、まさしく絶体絶命の危機だけどね。どうやらこちらの淑女には腹案があるようだ。どうだろう、どうせ不可避の絶望なら、最期に耳を傾けるくらいはしてもいいんじゃないか？　なあに、自棄になるだけならいつでもできるんだから！」

そう舞台で演じるように謳ってみせたハートレスに、人々はぼかんと呆気にとられたようだった。

〈マスター〉の中には口上虚しく見切りをつけてログアウトする者もいたが、テイアンの方には効果観面なようで、先程までの恐慌は鳴りを潜め、短い間ではあるが言葉を伝える余地が生まれていた。

（……彼らから精神系の状態異常が取り除かれている。……彼の仕業でしょうか？　いえ、今は……）

「さあさあ、レディ。是非ともお考えを聞かせていただきたい。皆、キミの言葉を待っているよ！」

訝るステラの内心を知ってか知らずか、ハートレスは貼り付けた笑みをそのままに仰々しく頭を垂れた。

見目麗しい容貌と奇抜ながらも品の良い装い、そして心地良く通る声でその振る舞いは非常に絵になっている。

さながら舞台演劇の一幕のような光景でお膳立てされ、ステラは内心の不信感ともかくとしてこの好機を利用することにした。

「では、―――」

◇

「……そんなことができるのか？」

ステラの腹案を聞いた「マスター」の一人が、信じられないといった表情で問うた。

他の人間もほとんどが彼と同様の表情をして、その問いに思いを同じくしている。

例外はステラと親しい黒猫と、彼女と直接手合わせしたG A・L V E R くらいのもの。

流浪の「超級」として有名なステラの噂を知る者でさえ、俄には信じ難い様子で固唾を呑んでいた。

「出来ませ。先に【獣王】との交戦経験が無ければ断言はしかねたでしょうが、おてんとさんの観測データが確かならわたくしの許容範囲内です」

そんな周囲の視線にステラは断言し、涼し気な表情を保っていた。

見た目には戦いとは縁遠そうな深窓の令嬢然とした佇まいのステラだが、放つ気迫は歴戦の勇士をして怯む程の覇気。

その異様なギャップが却って信憑性を増しているようにも見えた。

「差し当たっては……G A・L V E R さん」

「ああ」

「そしてハイさん」

「おう」

「御二人の協力が必要です。よろしいですね？」

尋ねてはいたものの、それは最早決定事項だった。

指名された二人もそれを承知して首肯する。

次いでステラは他の「マスター」に向き直って宣告する。

「他の方々には申し訳ありませんが、力不足です。この場で待機をお

願います」

「まあ、それは……そうだな。アンタの言う策にやあ、とてもじゃないがついていけそうにない」

冷酷すぎるほどに端的な戦力外通告だったが、誰もそれを否定しない。

寧ろ同行を求められた方が困るとでも言いたげに、ステラと視線が合うたび皆が顔を背けた。

テイアンに至っては今もステラの告げた作戦が呑み込めないでいて、己が耳を疑って何度も目を瞬かせている。

それほどまでに荒唐無稽。暴論の極みとすら言える強攻策に、最早理解を手放して静観に徹さざるを得ない状況だった。

「よろしい。……おてんとさん、目標の着弾まではあと如何程でしょう?」

「二分……いえ、一分三〇秒を切りました!　　ちや、着弾まで間もなくですううう!!?」

「残り三〇秒からカウントダウンをお願いします」

悲鳴を上げるおてんとに涼やかにそう告げてステラは空を仰ぐ。

既に巨大隕石は目視可能なまでに接近している。

対象が巨大なために距離感が掴めず、その落下速度もゆっくりに見えるが……それは自身の巨大質量と自由落下によって恐るべき運動エネルギーを蓄えている。

大気圏内での空気抵抗による減速、あるいは空気圧縮によって生じたプラズマにも欠片も損なう様子を見せず、形成直後の形そのままに大地を破壊せんと迫っていた。

もしこれの激突を許せばこの街どころか超広範囲に渡って周辺地形は修復不可能なまでに破壊され尽くすだろう。

それによる悪影響は単なる都市の壊滅に留まらず、カルディナとの国境近いこともあって数々の重大事を引き起こすことは必至。

直下に位置する生物に至っては、今更どう足掻こうとも着弾と同時に蒸発は免れず、本来であればどうあっても詰み……為す術もないこの世の終わりも同義だった。

「……………」

「おい、メスゴリラ」

唇を引き結んで隕石を見仰ぐステラの横に黒猫が立って脇腹をつつく。

振り向くステラに黒猫は、「グランドバアン」の襲撃から初めていつもの悪戯っぽい笑みを浮かべて、

「期待してんぜ。あたしの晴れ舞台から今だけ主役を奪うんだからよ、へまこいたらヨーシやしねーじゃんよ」

「……………」

素直じゃない激励に、ステラは慈しむような微笑を湛えて頭を撫でて力強く答える。

「ならば篤と御覧下さいませ。わたくしの全力を」

「気張れよ、ステラ」

「目標補足！ か、カウントダウン開始します……………!!」

おてんとのカウントダウン開始と同時に、二人は動いた。

「《心魂奪命圏・神楽殿》!!」

黒猫が「シェイドプリンター」によって実体化させた影を組み上げ、高さ一〇〇メートルにもなる大舞台を構築する。

幾重にも土台と柱を組み合わせ、本来脆弱な強度を最大限補いながら、その天頂に人一人が着地可能な分の足場を置いた。

「参ります」

そこへステラが跳び乗ると、視界を埋め尽くすまでに迫った巨大隕石の前に、まるで臆しもせず両手を掲げて――、

「――《震世界》テュポーン」



■ 不可侵領域

ソレは過たず策を実行した。

極限まで圧縮した質量は恐るべき強度を誇り、大気圏での空気抵抗にも砕けず、燃え尽きず、全く損なうことなく一直線に地上へ着弾し

た。

その知覚の次の瞬間にも大破壊と呼ぶのすら生温い超破壊が炸裂し、生じた爆熱と爆風は遍く地表を舐めて全てを破壊し尽くすだろう。

『グランドバアン』にとつても数える程しかない《大彗星》の行使。あまりに規模が巨大すぎるが故に如何なる未知の脅威を呼び起すともしれないことから、臆病な「グランドバアン」は滅多に切ることのなかった一手。

長きに渡る封印からの解放直後で、極限まで飢えでもしていなければあり得ない一手だからこそ、使ったからには必ずや根絶やしにする^と決意して放った覚悟の一撃。

およそこれまでの行使において、これを耐えた目標はいない。

ありとあらゆる状況を味方につけた上での過剰に過ぎる一撃だからこそ、ソレは満を持して次なる捕食へ臨もうとしていた。

だが……、

『……………KYU?』

静かだった。

元より音を伝達するはずもないほぼ真空の無重力空間に近い領域だが、ソレの視覚に映るはずの超破壊の光景が見えない。

あるいは久方振りの行使で着弾までの予測時間を見誤っていて、間もなく着弾するのかと思つて推移を見守るが……一向に変化は訪れない。

まるでそこで《大彗星》の時間が止まってしまったかのように、沈黙。

それは「グランドバアン」をして全く未知の、理解し難い現象だった。

『KYU? KYU? KYU? ————!!!』

あまりに異様な光景に「グランドバアン」は俄に状況が呑み込めず疑問の声を数度上げたが……次に見えた光景に絶句する。

ソレが見た光景は——、



□地上

「おいおいおい……マジか。これ、マジ?」

その光景を見ていた誰かが呟いた。

己の目に映った光景がまるで理解できず、何度も目をこすっては見上げ、幾度となく現実を疑いながら確認して……それが紛うことなき現実であることを思い知る。

「――星を……、受け止めやがった……!!」

地表を破壊し尽くさんとしていた巨大隕石は、地上一〇〇メートルで静止していた。

その直下には両腕を広げて踏ん張るステラの姿があり……地上一〇〇の舞台の上で、彼女は星を受け止めていた。

ソレが本来炸裂させるはずだった測定不能なまでの超暴虐的運動エネルギーの全てを、余すことなく呑み込みきって。

直径六〇〇メートル対身長一六八センチメートルの、比較すら烏滸がましい大小激突。

それを制したのは、象と蟻の比較ですら足りない絶望的不利を強いられていたはずの――ステラ^小。

【星震撃 テュポーン】の必殺スキル、《震世界》^{テュポーン}で出力を大幅に上昇させることよって通常ならキャパシティオーバーの運動エネルギーを蓄積せしめたステラ。

過去に無い短時間での超巨大エネルギーの蓄積に悲鳴を上げる四肢に力を籠め、制御を離れようとするエネルギーを全力で統制するステラが叫ぶ。

「GA. LEVERさん!」

『ああ!!』

応えたGA. LEVERの全身は、平時の姿からは掛け離れた異形へと変じていた。

それを形容するならば、さながら直立二足歩行する竜。

西洋竜が特徴をそのままに人体を模したならばこうなるだろうという、燃えるように赤く輝く鱗の人竜だった。

その姿を認めた人間——特に黄河の民であるティアンは、即座に己も良く知るある存在を連想した。

洋の東西の違いこそはあるが、共に竜種を模した異形なる人型——黄河の守護神、【龍帝】その人を。

「おおお……あれは、あの御姿は……!」

「——伝承は、本当だったのか……? ガル……!!」

人々の驚愕を他所に、格段に力を増した”人竜”GA・LEVERが翔ぶ。

ステラが受け止めた巨大隕石に接近すると、竜のそれへと変じた四肢で殴り……隕石の一部を叩き割った。

半円錐形をして数人が乗れる程度の平面をした、しかし恐るべき重量と高密度をした頑強極まるそれをGA・LEVERが担ぐ。

「うっし、一番乗り! それじゃーおまえら、サポート頼むぜ!」

「あ、ああ……そうだった、な! よっし、嬢ちゃんにありったけのバフをくれてやれ!!」

「惜しむなよ! ここでMPが枯れてもいい、全力で支援だ!!」

GA・LEVERの担いだ石舞台に飛び乗った黒猫が眼下のヘマスタ―達にそう呼びかけると、我に返った彼らがありったけの支援を黒猫にかけていく。

特に耐久力や耐性面を重視した各種防護バフをこれでもかと重ねがけて、その持続時間も彼らの限界まで引き延ばしてかけてやると、黒猫は無邪気に笑顔を振り撒いて礼をした。

「サンキューー! ステラ、こっちは準備万端じゃんよ!」

「結構。ならばわたくしも」

黒猫の合図に支えていた隕石を適当な跡地へ、運動エネルギーを制御して可能な限り優しく——それでも小規模のクレーターが出来たが——投げ捨てると、ステラも黒猫の立つ石舞台へと相乗りする。

そして傍らに立つ黒猫、足場を支えるGA・LEVERに向けてステラが口を開いて言った。

「ここからは時間の勝負です。次弾用意の余裕を与えぬうちに接敵します。お覚悟はよろしいですね?」

■ 不可侵領域

【グランドバアン】は目を疑う光景に絶叫した。

地上を破壊し尽くすはずの一撃が受け止められ、砕かれ——剩え遡ってくる異常極まりない現象に。

超音速で上昇しながら真っ直ぐに、己の位置する不可侵領域へ踏み込まんとする星の欠片——そこに立つ三つの影に。

一寸足りとて萎えていない滾るほどの敵意と殺意を宿した六つの視線に射抜かれ——ソレは狂乱する。

『KYUAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA——!?!?!?!』

こんな光景は知らない——想像できるはずがない!!

!!!!!?!?!?!

歴戦をしてあり得べからざる光景に、【グランドバアン】は絶叫する。

かつて地上にいた頃は幾度となく味わい、この領域に居を移してからは時折光属性攻撃が迫ってくる程度でしか感じることもなかった脅威の気配。

驚愕の度合いで言えばかつて己を封じた【封神】の奥義にも勝る、あまりにも暴力的な光景に【グランドバアン】はひたすら恐怖した。



超巨大隕石を受け止め。

その欠片を乗り物とし。

蓄えた運動エネルギーを推進力に変えて直接目標へ接近する……

暴論に暴論を重ねた力押し。

果たしてその大役に臨むはこの場に集った三つの〈超級〉。

彼らは絶対なる反撃の意志を胸に、遙か彼方の破壊遊星を睨め付ける。

「——!!!」

誰が呼んだか【オペレーション・アルマゲドン】。

往年の名作に肖った一大反撃作戦が実行される。

——反撃の狼煙は遡る流星の如く上げられた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

【ヒダルガミ】

□上空

【ビューッ！ ジェットコースターなんてメじやねーじゃんよ！】
超音速で飛翔する台座の上で黒猫が快哉した。

自前のAGIによる超音速機動とは異なり、乗り込んだオブジェクタの高速移動によって視界に入り込んだ光景は、体感時間の遅延によるスローモーションではなく実像も定かならないまま過ぎ去っていく景色の濁流だった。

【これでは肉声は届かなかっただろうね！ 都合良く【テレパシーカフス】があつて助かったよ】

【ウチの一座の設営に使つてたかんね。予備はじゅーぶんあつたつてわけよ】

既に周辺の気流は暴風域に達しており、鼓膜を鳴らす風の音は至近距離であつても肉声を遮る轟音と化している。

ステラの提示した作戦を実行するにあたつて意思疎通を可能にするために用意されたのが、黒猫も言った通り〈黄龍雑技団〉が天幕設営の現場指揮に用意されていた【テレパシーカフス】だった。

これならば例え物理的に会話は不可能であろうとも念話で滞りなく意思疎通が可能である。

【これもそうですが、この窮地に好条件が揃っていたのは奇跡的としか言いようがありませんね。作戦を実行するにあたつて最大の懸念事項だったのがヘイさんの耐久力でしたから】

【そのへんもありつたけの耐久バフ貰つたからな！ 少なくともあのクソ隕石をぶん殴るまでは保つはずだぜ】

共に万を超える高ENDを有するステラとGA・LVERはともかく、MPとAGIに特化した黒猫では騎乗物の超音速機動による負荷には本来耐えられない。

また高度を増すにつれて周囲の気成分は人体に有害なオゾンと化し、【グランドバアン】の待ち受ける地上一〇万メートルの熱圏に至っては気そのものが存在しない宇宙から降り注ぐ放射線の嵐で

ある。

それを解決するための手段が地上の「マスター」達が総出でかけてくれた各種バフの豪華セットであったり、全身に貼り付けられた道士系統謹製の護符であったり、ステラから貸与された酸素供給マスクだった。（ちなみに黒猫はマスクがステラのお古であることを知つてとても微妙そうにしていた）

「わたくしとしてもアレの存在する領域まで翔んだことはありませんから、少しばかり不安もありますが……、そこは伝説級特典武器の性能を信じるほかありませんね」

【ああ、やっぱおまえのソレ、特典武器だったんだ？】

【ええ、半年ほど前にカルディナで遭遇した「UBM」を討伐した折に。わたくしにとつては大変便利ですので愛用しています】

黒猫が見遣つたのはステラが着用している淑女然とした意匠の、上半身と下半身の枠を埋める装備だった。

銘を「三界天衣 スーピースー」といい、元は「三界遊魚 スーピースー」という名の陸・海・空の三界を高速で回遊する怪魚だった。

元となった「スーピースー」の性質を受け継いだその特典武器は装備スキルに特化し、異常環境への耐性と適応に秀でている。

既に成層圏に差し掛かりつつある中で生身のステラが無事でいられるのも、持ち前のENDもさることながらその効果によるところが大きかった。

酸素供給マスクを必要としないのも、環境適応の副次効果として一時的に呼吸を必要としなくなっているからだ。

必要とする諸成分の供給をスキル発動によるMP消費で代替することで、例えば大気が存在しない超高空であろうが深海であろうが瑕疵無く活動できる。

「エンブリオ」の特性によつて陸上以外でも活動可能なステラにとつては頗る相性の良い、本人が言う通りの愛用品だった。

そのステラは念話で雑談を交えながら、今も継続的にMPを消費して三人の乗り込んだ足場の移動制御に専念している。

超音速での上昇で三人が足場から振り落とされないように制御し。

音の壁となつて行く手を阻む空気抵抗を避けるべく周辺気流を制御し。

目標への最短距離を取るために都度足場の移動方向を修正するため制御し。

目標へ到達した後も戦闘を継続できるよう、攻防に用いるための蓄積エネルギーを制御している。

術者以外には理解できない目まぐるしいエネルギーの応酬。

それを傍目には涼し気な様子で行うステラの制御・演算能力もさることながら、それ以上にその行動を支えるMPの量が膨大であった。

(こいつ……、こんだけできるほどMPあつたっけ?)

魔法系超級職にも匹敵するMPの消費量。

戦闘スタイルはどう見ても白兵戦術の延長線上にある広域殲滅のステラには似つかわしくない動き。

たとえへエンブリオのステータス補正がENDの他にMPにも優れていたとしても、黒猫が知る限り拳士系統を主軸としていたステラには望むべくもないMPの最大量……彼女の疑念も尤もだった。

だが、黒猫は少し思い違いをしていた。

彼女の知る限りにおいてステラは「鋼拳士」をメインとする殴り合いの白兵戦を得意としていたからこそ、彼女が就いた「撃神」という超級職もその延長線上にあるものと勘違いしていた。

否、その推測はあながち的外れではない。

ただ少しだけ足りない。

ステラの就いた「撃^{ジンバクト}神」というジョブ——衝撃スキル特化超級職への理解がいま一步足りていなかった。

◇

□【撃神】について

ずばり衝撃スキルとはなにか。

それは天属性に位置するエネルギーの派生形態の一種、わかりやすい例で言えば風属性魔法による強力な風圧打撃。

あるいは黄河のある武術体系に存在する《発勁》、拳打によって魔力を対象へ打ち込み内部を破壊する浸透攻撃。

または大槌など一部武器系統のスキルによる一撃、その強度と重量を渾身で振り抜くことによって生じる大打撃。

インパクト
即ち衝撃。

エネルギーの発露による強大な一撃こそが骨子。

そのため【撃神】へ至るためのアプローチは幾つか存在する。

魔法スキル、武術スキル、武器スキル……まるで系統の違う三種の職能の、ある選択の果てにその座は待つ。

それ故に【撃神】のステータス傾向はMPとSPに特化している。それこそ他の魔法系超級職と遜色ない程に。（無論超級職故に他のステータスも上級職よりは伸びも良い）

ステラのスタイルがスタイルなために誰もが見紛うが、黒猫の心配は杞憂だった。

前衛職一辺倒のステータス傾向であればMP消費の激しさ故に連続使用の難しい必殺スキルも行使に容易く、効果を継続させることに何ら障害はない。

転職条件の定かならぬ【神】シリーズだが、ステラは己のへ超級エンブリオ〈【星震撃 テュポーン】の特性故に、『世界で最大級のインパクトを放つ存在』としてシステムに認められこの座を開示された。

転職の前後でMP・SPの最大量には雲泥の差があり、【撃神】そのものも運動エネルギーの扱いに長けたジョブということもあって、【撃神】となつてからステラの戦闘能力は飛躍的に増大している。

超級職とへ超級エンブリオ〈、どちらかひとつだけでは決して成し得なかつただろう作戦が今だ。

格別にシナジーした両者の特性を利用することで、ステラ達は不可侵領域へ足を踏み入れる資格を得ている。

◇

しかし、あくまで資格を得ただけだ。

実時間にして数分程度しかない領域到達までの片道、それを阻まんとする障害は当然ながらある。

「！ おい、上見ろ。奴さんの歓迎だぜ!!」

【やはりそうきましたか。こちらの想定通りですね】

超音速で上昇する三人の頭上から、亜音速で落下しようとする隕石群の数々が見えた。

それらの頭上に名前表示のウィンドウは見えず、それが単なるオブジェクトであることがわかる。

眷属である「セル・バアン」の種に変質させるでもなく、《大彗星》のように圧縮して放つでもなく、ただ取り巻く衛星をそのままに眼下へ向けた「グランドバアン」の迎撃。

眷属に変質させなかったのは、そうしてしまえばモンスターとしての命を宿してしまうためにあの正体不明の薄闇による消滅があり得ると判断したからだ。

故に受け止められこそしたものの薄闇での消滅はされなかったオブジェクトとしての衛星を差し向け、迫りくる脅威を撃ち落とさんとする「グランドバアン」の目論見である。

事実、その判断は正しい。

もし眷属化した衛星が飛来していたなら黒猫のヒダルガミによって瞬く間に殲滅させられていた。

だが対象が命を持たないオブジェクトならば……ヒダルガミは何ら意味を持たない。

命持つ者の防護を無為とする闇属性攻撃は、命持たぬ物からの防衛には無力である。

そして制御するエネルギー量と、動かしている質量が質量なだけに、ステラにそれを回避するだけの制動は望めない。

己の身一つならば如何様にでも避けてみせようが、最短距離を翔ぶことで到達を可能にしようとしている現状では、回避どころか迎撃もステラには望めない。

だからこそ二人がいるのだ。

【ガル兄、いっちょ頼むじゃんよー！】

【ああ、任せてくれ!!】

迎撃の手がオブジェクトによる純粹物理攻撃だった場合に備えていたG.A. LEVERが応える。

人竜と化した総身を震わせ力強く両の拳を握り締めると、亜音速落

下と超音速上昇の相対速度が生む目にも留まらぬ高速飛翔物を前に竜眼を細め――、

【《波動拳》！ 《波動拳》！！ 《波動拳》――!!!】

拳士系統でメジャーな、数少ない遠距離攻撃スキルの《波動拳》を連続で繰り出した。

STRに依存した攻撃力のSP消費武術スキルにMP消費の《発勁》を組み合わせ、常人の放つそれとは比較にならない威力の《波動拳》の一撃で迫る隕石群を破砕する。

一個一〇メートルは下らない隕石を、直接打撃からは大幅に威力の減る遠隔打撃で粉碎し、質量を減じた欠片はステラが足場の周囲に展開した運動エネルギー結界に逸らされ地上へ落ちていく。

特別に防護されていた「セル・バアン」の核となる隕石や、巨大圧縮質量だった《大彗星》とは異なり単なる物体に過ぎないそれらは大気圏での空気摩擦により燃焼し、地上へ到達することなく蒸発した。げに恐るべきはGA・LVERの拳打。

しかしながらそれは尋常の仕業ではない。GA・LVERが見せた全力あつてのことだ。

即ちGA・LVERが変じてみせた竜体こそがその証左。

人を模した竜の姿にこそ秘密があつた。

◇

□【超練体士】について

練体士系統は実に小器用なジョブ系統であると言える。

低コスト・ピンポイントの短時間自己バフスキルは他のジョブ系統をメインに据えても使用可能な汎用スキルであり、およそどんな前衛職でも腐ることなく機能する利便性の高さは誰もが認めるところだろう。

取ることのメリットはあつてもデメリットは無く、枠に空きがあるならばとりあえず取得していても決して不利にはならない前衛職のお供と言えよう。

だが一転してその上級職となると、途端に取得者は少なくなる。

二つしかない上級職枠の余裕の無さもそうだが、それ以上に下級職

の時にはなかつたある種の雑味が混じってくるのが最たる理由と言えよう。

下級職の【練体士】で覚える自己バフスキル―《練技》―は、いずれも低コストかつどのジョブをメインにしても使える汎用スキル。

しかし上級職の【高位練体士】になると他の系統をメインジョブにしている使用できない汎用ならざるスキルを覚え始め、かつ【練体士】で覚えた汎用スキルも然程強化されないこともあって、わざわざ限られた枠を消費するだけの費用対効果を見込めなくなってしまう。

単純にステータスを伸ばすだけなら他に有利な上級職は幾らでも存在し、手っ取り早く強くなるにしても有用なスキルも五万とある。

ステータス傾向としても器用貧乏な【高位練体士】でわざわざ限られた枠を消費する必要性は限りなく薄い。

そして【高位練体士】になつて覚えることのできる汎用ならざる練技には、〈マスター〉には理解し難いある欠陥が存在した。

練体士系統で覚えることができる汎用スキルは、いずれも直截的にステータス値や耐性を強化するわかりやすいシンプルなバフだ。

翻つて汎用ならざる練技は、そうした数値上の強化ではなく肉体―練体士の名の如く肉体を練り上げて変質させるスキルとなる。

それは腕を巨人種の如き怪力なるものとしたり。

それは足を人馬種の如き俊敏なるものとしたり。

それは指を悪魔種の如き巧緻なるものとしたり。

あるいは翼を生やして飛翔を可能としたり。

あるいは牙を生やして咬撃を可能としたり。

あるいは尾を生やして一掃を可能としたり。

果ては血を、表皮を、目を、感覚を。

肉体のありとあらゆる部位を異形に変質させることへの適正に優れなければ決して熟達できない狭き門。

その適正こそが最初にして最後、最大の壁として立ちはだかる。

万能の才を持ち如何なるジョブにでも就ける〈マスター〉とは違い、資質や才能によって取得可能なジョブが大きく制限されるティアンを、その要求適正の厳しさがふるいにかける。

そうでなくとも死霊術師系統の【大死霊】や武者系統の【鬼武者】のようにジョブ特性として異種族に変じるのとは異なる、人間のままその都度異形なるものへ変えることへの異常に耐えられなければならぬ。

この世界へ大なり小なりゲームと認識して上で参加してきたへマスタ―はともかく、この世界を生きる一個の命として常識を培ってきたティアンであればあるほどに、それへの忌避感強い。

利便性の高さ故に門を潜るものは絶えずとも、その道を極めようとする者はほとんど現れない理由がそれだ。

そうした常識の中で【超練体士】に就き、剩え道場を構え一大流派を立ち上げた”人竜”虎頂道の偉業たるや凄まじい。

彼の活躍と尽力が無ければいずれ頂きの座はロストジョブと化していただろうことは想像に難くないほどに、簡易な入り口に比べその深淵は複雑極まる。

そしてその頂道や、その門下の【高位練体士】を極めた高弟達、あるいはそれ以前に【超練体士】を目指した者達は、練技を極めようとする中である種の気付きを得た。

練体士系統の奥義と言っても過言ではない肉体変質スキル。

それを数多収め同時に行使したときの姿は——どこか竜に似ていないだろうか？

あるいは彼ら黄河の民が信仰する帝国の守護神【龍帝】にも通じるものがあるその姿に、彼らは希望を見出した。

もしくは信仰と言ってもよい。

黄河の民の魂に連綿と受け継がれてきた竜——古龍への信仰。

それへの階ともなり得るかもしれない可能性を前に、いつしかこう信じるようになった。

練体士を極めた先にこそ、我らが父祖たる古龍への道は開かれる——と。

歴代ティアンの中で尤も資質に恵まれ、【超練体士】のレベルを伸ばして”人竜”の異名まで持つに至った古豪・虎頂道。

その彼が生涯を掛けても片鱗しか見えなかつた古龍への道。

しかし彼は、己に無い無差別の才能、そして己の生涯を容易く越えていけるだろう異能（エンブリオ）を持つ伝説の「マスター」——G・A・L・V・E・Rを見出し、彼へ託すことにした。

果たしてその目論見は半ば叶ったと見て良いだろう。

彼らが変わじた純竜のそれとは比べるべくもない亜竜紛いの竜もどきとは違う……美しいまでの人の形をした竜そのものに、誰も疑いを挟む余地などない。

そう、それこそは「超練体士」の奥義、（エンハンス・シエイブドラゴン）《練技・竜体転身》。

あらゆる練技を収め、それを極め、メインジョブレベル一〇〇〇の壁を越えてようやく開示されるそのスキルは、修得練技の性能を格段に跳ね上げた上で一斉行使し、全身を竜へと変える変身スキルである。

その強化率たるやそれまでの練技とは比較にならない。

変身を持続させるにあたって膨大なMPを持続的に消費するものの、その費用対効果は釣りが生じて余りある。

まして「超級エンブリオ」（無双玉体）「ヘラクレス」により恐るべきレベリング効率を誇り、レベルの暴力で器用貧乏から器用万能と化したG・A・L・V・E・Rがそれを利用すれば、余程の長期戦で無い限りは難なく持続し続けられる脅威の必殺技へ変貌する。

如何にステータスの伸びが器用貧乏な傾向にある「超練体士」でも、それを補って余りあるレベルがあるならば話は別。

およそメインジョブレベル一〇〇〇につきHP・MP・SPは五〇万、その他DEXとLUC以外のステータスは一万強上昇するとなれば、その成長性と将来性には限度が無い。

そして素でそれだけのスペックを誇るG・A・L・V・E・Rが、強力な自己バフである練技を使用すれば更に戦力は跳ね上がる。

レベリング効率の有利以外に一切の強みを持たないG・A・L・V・E・Rが、並み居る強豪に引けを取らない理由がこれだった。

超大器晩成型とも言える超級職を、その異能故に最高速で駆け抜け極めた男。

”人竜”と呼ばれた師・虎頂道を越え、地上の人々に”人竜王”（ドラグマン）と

やあ、こんな偶然ってあるんだなあ、ええ!？」

《ギガ・グラビティ・ワールド過重圧殺領域》にまるで堪える様子の無い黒猫の現状の理由。

「【雑技王】は自在に天を舞う」と謳われる理由そのものであり、事実先刻までのパレードで自由自在に天を泳いだ仕掛けの正体。

《ゼロ・グラビティ天地無用》。……どーよ、驚いたろ？」

己を重力の軛から解き放つ、【雑技王】の奥義である。

無重力状態と化した全身は通常の物理法則から外れ、通常通りの動きは本来できない。

この状態での正確な動きには、精緻極まる重心移動や体重移動、四肢の制御が必要になる。

地上にあつて宇宙空間と同様の環境は、慣れぬ人間にとっては満足に動くことすらできないデメリットでしかない。

だが【雑技王】へ就くまでに五体制御を極めた【軽業師】なら別だ。それまでに培った身体制御と空間把握能力のノウハウにより、なんら瑕疵無く行動できる。

というよりは、それができるこそその奥義修得ではあるのだが……そのような背景を「グラントバアン」は知る由もない。

ともあれ恐るべき超重力の嵐は、重力そのものを無為とする【雑技王】の奥義の前には無力に終わった。

スキルそのものが無効化されたわけではないので、他の二人は今も超重力を耐え凌いではいるが……黒猫には蚊ほどの痛痒も与えられない。

そしてそれは、最後の切り札をして仕留められなかった未知数の脅威を野放しにしたも同義で……【グラントバアン】は今度こそ絶叫した。

【黒猫くん！ 勝ち誇るのはいいいけどそろそろなんとかしてくれないかな!？ 流石にこれは僕でも辛いよ!？」

【いやまさか、このようなことまでしてくるとは……流石に想定外でしたね。打つ手が無ければ詰みですが……へいさん?】

【まーそう焦んなって。ここまであたしを連れてきた慧眼に伝えてやるじゃんよ!】

焦燥する二人に黒猫は余裕綽々にそう言い放って、「グランドバアン」に改めて対峙した。

（つっても流石にバフもそろそろ切れるし……あってもいい加減限界じゃんね。……しゃーない、使うか）

そして内心で覚悟を決め、両手を大きく広げて「グランドバアン」に差し向けると……黒猫も最後の切り札を切った。

――《鬼哭^シ餓鬼^ダ道地^ル獄^ガ絵^ミ函》

T o b e c o n t i n u e d

星の臨終

□ある少女の半生

齡十にも満たない少女の前半生は、常に飢えが付き纏っていた。それは食欲的にも愛情的にも満たされることのない空虚な日々。空っぽの器が満たされない理由は単純で……つまるところ生みの親がろくでなしだったからだ。

母は若く美貌こそあれど淫蕩で、金で簡単に身体を売り渡す淫売だった。

父はそんな母を口八丁手八丁でまるめこんだ極め付きの紐で、定職にも就かず方々から借りた金で遊び呆ける屑だった。

そして明日をも知れぬその日暮らしを続ける男女に真つ当な責任感などあろうはずもなく、不慮の事故のように生まれた少女……音子はその存在を厭われ専ら押入れの中に押し込められていた。

暗く狭い押入れの中で、碌に食事も与えられず父母の放蕩を見せつけられる毎日。

行きずりの男を連れ込んで快樂に上げる母の嬌声や、猫なで声で金を無心する父の卑しい声。

一方で快樂に溺れていないときの母は酷く鬱に陥って塞ぎ込み、酒に呑まれた父は屑の本性を露わにして暴れ回る。時としてその暴力は母のみならず音子にまで及んでいた。

音子が物心つく四歳まで無事に生き延びられたのは奇跡としか言いようがない。

そして物心がついてからの音子は、そんな父母を極めて冷静に観察し、繋いだ命を失わないよう慎重に生きるようになった。

利発にしても早熟に過ぎる思考は、生存本能が導き出した最低限の防衛手段か。

泣いても笑っても勘気を買う日々の中で音子は助けを求める声すら上げられず、生まれて一度も家の外へ出ることを許されなのまま、じつとその暮らしに耐え続けていた。

当時の音子に”地獄”という概念は無かったが、もしあるとしたら

その暮らしこそが音子にとっての地獄だっただろう。

絵に描いたような崩壊家庭に児童虐待。きつと探せばどこにでもあるありふれたことなのかもしれないが、自分以外のことなど知る由もない音子にとって、生家こそが満たされることのない渴きと飢えばかりの地獄だった。

◇

そんな地獄にも、一握りの救いはあった。

どこぞへ出歩いていた父がふらりと帰宅したときに持ち込んだ、一匹の金魚。

覚えのない色香を纏わせていたことから、母も知らないどこぞの女と縁日にでも繰り出していたのだろうが、そこで手に入れた一匹一〇〇円にも満たない小さな命。

いつになく上機嫌だった父は目を丸くする音子に構わず適当な空き瓶に水を汲み、一緒に買ってきたのだろう金魚の餌も与えると、「大事にしろよー」と無責任に言い放った後にそのまま寝た。

——何かを与えられたのはそれが初めてだった。

必要最低限の食事すらも両親の目を盗んでこそそとつまみ食いするしかなかった音子が、初めて真正面から直々に与えられた唯一のモノ。

骨と皮ばかりの痩せた両腕には重い水瓶の中を泳ぐソレを覗き込み、音子は生まれて初めて笑みを浮かべた。

それからの音子の生活には金魚の世話が加わった。

案の定次の日には金魚を買い与えたことなどほとんど忘れていた父から金魚を隠し、許された唯一の領域である押し入れに匿ってこっそりと餌を与え続けた。

最初に渡された金魚の餌が尽きれば、自分の命を繋ぐための盗み食いに加えて父母が気づかぬ程度のパン屑をくすねそれを与えた。

水が濁れば両親の寝静まった頃に音を立てないようにしながら慎重に替え、また押し入れに隠す。

恐らく音子が両親にそうされる以上に、音子によって甲斐甲斐しく世話された金魚は、半年もするうちには当初の可愛げなど嘘のように

大きくなっていた。

これには音子も驚き目を丸くするも、自分と違って丸々と肥え太った金魚に……素直な喜びを覚えた。

音子は性根の優しい子供だった、ということだろう。両親の前では顔を覗かせるはずもない本質が、自分以上に無力な金魚を世話することで萌芽の兆しを見せていた。

最早音子にとって金魚の世話は生き甲斐にまでなっていた。

そうすることですべて終わるともしれない地獄の日々を耐え抜く気力を保っていた。

何よりも自分の庇護によってすくすくと育つ金魚の姿は、自分には無い幸せに満ちているようで……それが誇らしく、救いになっていた。

安い幸福と救済だが、音子にはそれで充分だった。

空っぽの器に初めて水が注がれ、消えることのない飢えを一時忘れられればそれでよかった。

◇

だが、僅かな幸福で一時の地獄を忘れられれど、棲まうのが地獄であることには変わらない。

音子が五歳に（といっても彼女の誕生日など音子本人は知らないし、両親も覚えていなかったが）なった頃、生活は急速に悪化していった。

元々最低限だった音子の暮らし振りに変化はなかったが、両親から明らかに余裕が失われていた。

淫蕩に耽つていても母の顔には不安が拭えず、放蕩三昧の父は焦燥していた。そして事あるごとに鳴らされるインターホン。

それらを冷静に観察していた音子は、とうとう彼らにも因果が応報してきたのだと悟った。

後に知ったことだが、どうやら父はタチの悪い金融に莫大な借金を抱え込んでしまっていたらしい。

その理由は定かではないが、どうせ碌でもないことだろう。定職にも就かず稼ぎも無いくせに欲望だけは人一倍肥大させた父だから、目

先の金目当てに無謀な借金をしてしまつたに違ひなかつた。

だがそれまでと違つたのは、膨れ上がった借金にいいよ返済の手段が無く、口先で丸め込み頼つていた友人知人からも、尽きることはない金の無心にいいよ愛想を尽かされ縁切りされていたのが致命的だつた。

放蕩三昧に浮かれきつていた父の顔は青ざめ、事あるごとに借金取りの恫喝が響く中では母も男を連れ込めない。

目を重ねるごとに憔悴していく両親を目にして、音子は昏い愉悦を覚えていた。

自分にとつての地獄を作り出した元凶が、自業自得で作り返した地獄に追い詰められ行き場を失つていく様子が心底滑稽で、音子はそれが堪らなく痛快だつた。

両親への愛情などあるはずもなく、音子にとつて大事だつたのは己と、己が庇護する丸々と太つた名もなき金魚だけ。

来たるべき両親の破滅をしかと目に焼き付けんと、音子は暗い押入れの中から幽鬼のような瞳を覗かせていた。

◇

ある日音子が目を覚ますと、部屋はしんと静まり返つていた。

築二〇年の安アパートの三階部屋。親子三人がギリギリ収まる程度の1DKは、まるで人氣が無く閑散としていた。

父がいないのは今に始まつたことではないが、借金取りの目がある最近では縮こまつて引き籠もつていただけに不穩ではある。

母に至つては家を出る姿など片手で数えるほどしか見たことがない。連れ込む男はSNSで知り合った相手ばかりで本人は頑として外に出ようとせず、まるで外を恐怖しているかのようなだから。

その両親が揃つて姿を消したことに、音子は遂に彼らがお縄に掛かつたのかもしれないと喜んだ。

自分が放置されていたのは、両親の勘気に障らないよう努めて気配を殺し、必要最低限以外は押入れから出ないようにしていたから気づかなかつたのかもしれない。

学のない子供の浅い思慮だが、そうと考えたときの喜びは一入だつ

た。

ようやく地獄から解放されるのかと喜び勇み、金魚の入った水瓶を担いで初めて外に出ようとして……、

◇

それから二週間、音子は未だアパートの一室にいた。

否、閉じ込められていた。

何のことはない、両親は全てに蓋をして逃げ出したのだ。

一向に返済できそうにない借金。それを理由に身柄を抑えようとする借金取り。

いよいよ首が回らなくなった両親は、黒猫を置いて夜逃げを図っていた。

閉じた鍵穴を接着剤で塞ぎ。

窓も同様にした上でカーテンを縫い付け中を覗けないようにして。

しかしそれは外部からの発覚を遅らせるためというよりは……音子を外に出させないためのものだった。

両親にとって音子の存在は邪魔者以外の何者でもなかった。

生まれてしまったものは仕方がないから置いてはいたが、存在を知覚することすら億劫な負債でしかなかった。

放逐すれば周囲の目に留まって面倒事を呼び込むし、かといって殺してしまえば始末に困る。

だから見ない振りをした。

気まぐれに存在を認知して構うことはあれど、日を跨げばそれも忘れた。

そしていよいよ住処にいられなくなったとき……臭いものは丸ごと蓋をして逃げ出した。

娘を連れて行くという選択肢は彼らにはなかった。

連れて行ったところで邪魔にしかならないし、そもそもそれを厭うて見て見ぬ振りを続けてきたのだ。

一欠片の愛着も愛情も持たないまま、彼らは至極あっさりと音子を捨てた。

……この父母なる男女は心底まで腐り果てていたらしい。

音子とて愛情など知り得るはずもない身の上だが、それでも金魚の存在で愛着は心得ていた。

別に一緒に逃げるつもりなど毛頭ないが、だからといって何の躊躇もなく捨てられるとも思っておらず、音子は父母なる者の浅ましさを見誤っていた。

剩え最後の最期まで一切の自由を許さず閉じ込めるなど……音子の理解の外だった。

十分な食事や運動も与えられなかった音子は非力で、脱出の手段などあるはずもなかった。

潰された鍵穴はどう足掻いても解除できず、窓ガラスを割るだけの体力すらない。

幸いにして電気と水は動いていたが食糧は無い。元々備蓄の少ない冷蔵庫の中身だが、最後の買い出しも無いまま両親は蒸発していた。

残されたのはとつくに賞味期限の切れた食パンのみ。

飲水には困らないから致命には陥らなかったが、音子は僅かな食パンを切り詰めながら金魚と二人、身動きもなかった命を繋ぐだけの時間を紡いでいった。

◇

更に二週間。

僅かな食パンもとうに切れ、水で飢えを誤魔化すだけの日々が続いていた。

電気も水もまだ保っているから命を繋げていたが、最早身動きひとつする体力すらないまま、金魚の泳ぐ水瓶を抱えて蹲っていた。

かける言葉も無く金魚を見守りながら、失せた時間感覚で昼夜を送る日々。

しかし分け与えるだけの僅かなパン屑さえ尽きて久しい今、金魚もどこか無気力に漂うことが多くなっている。

動くだけの体力も無いから水も替えられず濁るままになり、僅かな異臭が鼻を衝き始めてもいた。

だけどそんな金魚の様子が可哀想になって、音子は無理を押し立て立ち

上がり、よろよるとキッチンに近づいて水を替えようとした。
だが……、

「あつ……」

極限まで衰弱した体力が祟って、水瓶を落としてしまった。

割れたガラスの破片と、飛び散る中身。

水浸しになった床の上で弱々しく跳ねる金魚……以前ほど福々しくはないが、それでも太った唯一の友達を見下ろして――

◇

更に一週間。

最早物音ひとつすら立たない密室を、けたたましく鳴らされたインターホンが打ち破った。

鍵穴を潰されチェーンまで掛けられたドアを何度も開こうとする物音が響き、外からは大勢の大人の声が聞こえてくる。

「おい、裏に回れ！ ベランダから中に――」

「もう一ヶ月以上も――」

大人達の声には焦燥が混じり、そんな会話のしばらく後に今度はベランダ側から音がした。

掛けられた梯子から乗り込んできた大人達が窓ガラスを打ち破って部屋を搜索する。

そんな騒々しさにも何の反応を示さず、音子はキッチンの前で力無く横たわるまま、やがて彼らに発見される。

発見されたのは音子ひとりだった。

割れたガラスの上、傷つき薄汚れたまま横たわる彼女の傍に金魚友達はいない。

ただその口元、激しく嘔吐したのだろう痕跡のすぐそばに……腐り果てた肉片があった。

◇

乗り込んできた大人達は地元の警察官と救命士だった。

両親は結局夜逃げした先で敢えなく借金取りの御用となり、彼らが取り調べる中で娘が独り取り残されていることが発覚したのをきっかけに通報があり、事態を重く見た警察が救助に乗り出したことで音

子は命拾いした。

しかし経緯が経緯なだけに親戚筋は音子を持って余し、両親は児童虐待の悪質さから重い罪で投獄されたために音子は身寄りを失った。

遠からず孤児として児童養護施設に送られるはずだった音子だったが、その直前になって彼女を引き受ける声が上がった。

名乗りを上げたのは父の妹だという女性だった。

軽薄な父とは違って如何にも気の強そうな面構えをしたその女は、周囲の反対を押し切って音子を引き取ると自分と同じ黒沢の姓を与えて養子とした。

女の夫だという福々とした体型の男は当初こそ寝耳に水と驚いていたようだが、音子の事情を知ると一も二もなく賛成して迎え入れてくれた。人情深く涙脆い性格だったのかもしれない。

音子にとって最大の奇跡は、引取先の夫婦が実の両親とは似ても似つかない人格者であったことだろう。

母は厳しくも優しく、残酷な背景を持つ音子をさりとて憐れむでもなく、我が子のように褒め、叱りながら正面から接していた。

父は母とは正反対に終始甘く、それこそ目に入れても痛くないほどに可愛がった。趣味だという漫画のコレクションを収めた部屋に音子を招いては一緒にあって読み耽り、夜更しするなど母と一緒に叱られた。

早熟だった音子は新しい両親の献身が本物であり、過去の不幸と現在の幸福が別物であることを理解しており、父母の確かな愛に支えられて少しずつ更生していった。

そうでなければ今も大人を信じられず自分のみを頼りとして……歪んだまま暗い未来を送っていたに違いなかった。

毎日腹一杯に食事をして、息を潜めることなく大いに眠り、オタク趣味だが学力も本物だった父のもとで読み書きを習い、六歳になれば満を持して小学校にも入学させてもらえた。

そんな当たり前の生活を当たり前のものと教えられたことこそが、音子にとって何よりの救いだったことを果たしてどれほどの人間が知り得るだろう。

最早生氣のない人形のようにだった少女の姿はどこにもなく、元氣澆刺というには過剰すぎるほどに見違えて奔放になった黒沢音子の姿がそこにあつた。

◇

その黒沢少女がとある事件で知り合い、紆余曲折を経て無二の親友となつた少女の勧めで始めた「Infinite Dendrogram」というゲーム。

ひよんなことからすれ違い、武仙の国黄河帝国でプレイを始めて行きずりで【軽業師】に就き、間もなく孵化した「エンブリオ」——【奪命神咒 ヒダルガミ】。

黒沢音子——黒猫のパーソナルから生まれたその「エンブリオ」は、かつての地獄を思わせる飢え……ひいてはそれに起因する命の篡奪に特化していたが、それを茶化せる程度にはかつての地獄を過去のものとして割り切れていた。

もし今の両親のもとで更生していなければ。

あるいは先に【軽業師】に就いて一座の団長である黄刃華に目をかけられていなければ。

忘れていた地獄を突きつけられ悪しき衝動に身を浸していたかもしれない出来ない出来事だったが、早熟にして聡明な黒猫はそれを笑い話にできた。

この「Infinite Dendrogram」での黒猫は、雑技の名門で将来を期待された【軽業師】の卵。

それこそが自分の選んだ自由と認め、「エンブリオ」はその添え物に過ぎないと考えていた黒猫は、ヒダルガミが生まれたパーソナルとは別に芸人としての道を極めていく。

無論それに思うところが無いわけでもなく、時として物思いに耽り、周囲の励ましを貰うこともあつたが……それらも乗り越え遂に【雑技王】の座へと辿り着いた。

そうして就いた【雑技王】の座。

それを記念して執り行われた天覧公演、続く四方での大巡業。

その裏でヒダルガミも「超級エンブリオ」へと進化を果たし……同

この世の地獄に阿鼻叫喚を騒ぎ立てる。

——喰われる

——喰われてしまう!!

——何もかも……いや、この恐ろしいまでの飢えはなんだ!?

——知らない……こんな感情、こんな恐怖、こんな喪失は知るはずもない!!

敢えて人語に訳すならばそうした絶叫だろうか。

己の存在を構成する全ての大元が、^{リソース}焼け石に垂らされた雫よりもあつけなく枯れていく未曾有の感覚に「グランドバアン」は絶叫する。(なるほどな……こういう必殺スキルかよ。……ハッ、あたしにはお似合いじゃんね)

鬼哭とは、浮かばれない亡魂の泣声の意。

餓鬼道とは仏教世界における六つの地獄の一つ、常に飢えと渇きに苦しむ亡者の世界。

そして地獄絵図とは文字通り……それら飢餓に喘ぐ亡者がのたうち苦しむ様そのものを指す。

即ちその名を冠する必殺スキルの効果とは、対象領域内の全リソースの枯渇に他ならない。

餓鬼道の如くあらゆる慈悲は燃え尽き枯れ果て己の糧にできず、蓄えたそれらも瞬く間に飢えていく。

そうして苦しみへのたうち回る獲物の絶叫は鬼哭啾々たる爪痕を刻み、その全光景を以て地獄絵図とする。

対象が巨大極まる「グランドバアン」だからこそただ一匹が苦しむに留まっているが、これをもし群れにでも行使したならば、その群れは飢餓と喪失のあまり本来の統率を離れ、決して救われないことを知ることもなく共食いまで起こして生き延びようと足掻いた挙げ句、報われず屍を残すことすらなく塵と化すだろう。

この必殺スキルの恐るべきところは、対象は生物に限らないところだ。

〈Infinite Dendrogram〉の世界が根本的にはリソースという概念に支えられている以上、命持たないオブジェクト

すらも保有リソースを枯らされ無為に帰す。

発動したが最期、領域内は一切廃滅の無と化し、再びリソースが得られるまでは草木ひとつすら芽生えぬ荒涼の地となる。

またそうして枯れ果てる一方である以上、他の固有スキルのように黒猫へ還元されることも一切無い。

まさしく飢餓で苛み殺すだけの地獄。

黒猫——音子にあり得た最悪の可能性の一端の顕現。

(ああでもそっか……デカブツ一個相手にはあんま相性良くないじゃんね。もうちよつと常識的なサイズならこれでトドメだったんだけど……残念、時間切れか)

しかし、救いは存在する。

その効果があまりに致命的であるが故か、それとも黒猫がリアルでは地獄に命を落とさず救助されたことを反映してかはわからないが、この必殺スキルにはセーフティが存在した。

必殺スキルの発動後しばらくした後、「奪命神咒 ヒダルガミ」は自壊する。

ヒダルガミの自壊を以て地獄は終わり、復活を果たすまでは再び地獄が訪れることはない。

それをリソースの都合と見るか参考元となった黒猫の精神的な枷と見るかは勝手だが、とにかくも「グランドバアン」はギリギリで命を繋いだ。

無形の魔力炉は霧散し。

半径二キロメートルの球体は虫食いのように歪に欠け。

最早反抗の余地も無いほどに虫の息という絶体絶命ではあったが……生き延びてしまっている。

「ステラ、ガル兄」

路傍の石よりもみすばらしい形となった「グランドバアン」を前に、黒猫は二人の名を呼び。

「——あとは頼むぜ」

既に時間切れ間もないバフを前にこれ以上の交戦を断念し、後を託して大気圏へと落下していった。

そして空気摩擦で全身を燃え上がらせ……そのままデスペナルティとなる。

【……ああ、勿論】

【きつちりと仕留めてみせましょう——!!】

そんな黒猫の死に様を見送って、二人は応えた。

共に超重力の防護を失って【グランドバアン】の表層へ取り付き、獯猛な顔をして屈強極まる四肢に力を込める。

【征くぞ、【グランドバアン】!!】

【これを末期の光景と知りなさい】

そう殺意を宣言した後、二人は蹂躪を開始した。

これまで耐えに耐え抜いてきた【グランドバアン】の猛攻。

反撃のカタルシスを解放するように全能力を發揮して、その四肢で星を殴る。

GA・LEVERは【超練体士】の奥義により跳ね上がったステータスの暴力で一撃ごとに【グランドバアン】へクレーターを穿ち、ステラは全運動エネルギーを攻撃に回して一撃ごとに地割れを刻む。

さながらキツツキのように【グランドバアン】を挟んだ対角線上からその五体で【グランドバアン】を砕き進み、この巨体のどこかにある【グランドバアン】のコアを目指して星の内海を泳ぐ。

『KYUAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA?!? K
YUAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA——
!!?』

【グランドバアン】はただ絶叫するしかなかった。

およそこれまでであり得たはずのない窮地。この不可侵領域に居を移してからここまで辿り着いた敵などいるはずもなく、まして己を直接砕こうとする輩などあり得るはずもない。

想定するのも難しい天文学的確率の窮地に、【グランドバアン】は己の身体を砕いて食い荒らし回る恐るべき寄生虫二匹に恐怖した。

【無駄に図体が大きいのが鬱陶しいですね。自前の重力で余程に圧縮していたのか、わたくしの全力を以てしても砕く程度が精々とは】

【こんなに硬い相手は初めてだよ！ 黒猫くんの一撃が無ければ、と

てもじやないけど打つ手が無かった!」

【あの超重力に耐えながらでは、そうですね。……まったく、柄にもない真似をされては、応えないわけにはいかないではないですか】

【「グランドバアン」の声が二人に届かないように、二人の声も「グランドバアン」に届くはずもない。

しかし直感として己を砕きまわる敵ふたつが何かを考えていることなどソレには容易に察せて、それが己を滅ぼす算段であると推測してますます恐怖に慄いた。

しかし、それでも。

臆病さと勤勉さ、そして諦めの悪さでここまで己を高めてきた【グランドバアン】は、座して滅びを待つつもりなど毛頭なかった。

最早再び同じ力量を得られるかどうかすらも未知数で、それはきつと遙か遠い小数点以下の確率かもしれないが、可能性があるのならばそれを選ばない選択肢は無い。

【「グランドバアン」は一縷の望みに賭けて、今の身体の放棄を決断し――そうくると思っていましたよ】

敵が砕こうとしている抜け殻を脱し、秘密裏に本体だけで地表に落下しようとして――それを鋼の手に阻まれた。

本体――半径二キロメートルの外殻とは比べるべくもない、ステラの拳に収まる程度の小さな小さな結晶体。

それが砕け飛ぶ瓦礫に紛れて大気圏に突入しようとしていたのを、予測していたステラが掴み取っていた。

【これまでの様子を見るに、随分と慎重で臆病な貴方のことです。たとえば分が悪くとも緊急脱出できるだけの備えはあると思っていましたよ。無論、飛躍的に過ぎる推測だとは自覚していますが――】

「何分、勘は良い方ですので」と、ステラは嘯く。

その思念の声は【「グランドバアン」には伝わらない。

【「グランドバアン」の主観ではあまりに理不尽な詰みの一手。

文字通り星砕く怪物の掌の上という状況に、最早言葉も無かった。

「実のところ、わたくしはとても怒っています。大事な友人の折角の晴れ舞台を台無しにし、剩え彼女が大事に思う人々を傷つけたその罪、万死に値します」

ぐぐ、と己を捕らえる指先に込められた力が強くなる。

「へいさんに涙を流させるなど、許せるものではありません。これでもわたくしは、相応に彼女を買っていますので。決闘の勝敗に悔し涙を流させるのでもなく、ただ悲しませるなど……わたくしの容赦の外です」

ステラはその見た目や振る舞いで勘違いされやすいが、その実親しい人間には非常に親身だ。

ガキ大将気質と言ってもいい。黒猫というかけがえのない喧嘩友達が流した悲しみの涙に、誰よりも怒りを覚えていたのは他ならぬステラである。

令嬢の外面を取り繕った上辺のステラではなく、その暴力性を目の当たりにしながらも、口では悪ぶれど態度の変わらない黒猫は、ステラにとって無二の友だった。

「念には念を入れて、全力で貴方を磨り潰します。お覚悟は問いません。ただ——」

故にステラは、この石ころを欠片も残さず滅ぼすことを決めていた。

「グランドバアン」を捕らえた右拳を握り締め、鋼の腕が軋んで亀裂を生む程に万力を込めると、それを大気圏に向けて伸ばし……、

「——砕け散れ屑石。……《震世界》、右腕自切——射出」

ほぼ全ての運動エネルギーを右腕に集中させて自ら切り離し、握り締めたままの拳を大気圏へ射出した。

まさしくロケットパンチを「グランドバアン」を握り締めたまま地上に向けて放ち、それは超々音速で大気圏を突き抜け——

『AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA——!!』

KYUAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA

AAA——『?!?!?!』

「グランドバアン」の絶叫など文字通り聞く耳も持たず、地上三キロ

メートルで自爆した。

込められた全運動エネルギーを手中の「グランドバアン」ただ一点に向けて炸裂させた、恐るべき爆発。

切り離れた右腕の自壊も厭わず炸裂したエネルギーは周辺大気を吹き飛ばし、一〇〇の雷鳴よりも恐ろしい咆哮を轟かせ、超広範囲に渡って衝撃波を伝播させた。

『
』
そうして「大怪遊星 グランドバアン」は恐るべき巨体など見る影もなく、雑多な隕石の如く大気圏で消滅した。

T o b e c o n t i n u e d

エピソード

□ ■ ???

【虚心騎影 ベレロープ】

最終到達レベル：65

討伐MVP：【ザ・リスト獣神】マグロ Lv101（合計レベル：601）

〈エンブリオ〉：【狂神獣姫 テスカトリポカ】

MVP特典：古代伝説級【神心騎英 ベレロープ】

【大怪遊星 グランドバアン】

最終到達レベル：127

討伐MVP：【撃神】ステラ・ザ・デストラクト Lv508（合計

レベル：1008）

〈エンブリオ〉：【星震撃 テュポーン】

MVP特典：神話級【破界星甲 グランドバアン】

「ふむ……」

事の一部始終を見終わった後、ジャバウオックは流れるログを視界に移しながら唸った。

「この場で討伐してしまうとは、な。勝算は低いと思っていたのだが、思わぬ結果になった」

期せずして表舞台に復活した太古の〈ヘイレギュラー〉。

その力量そのものとはかくとして、ソレの生息域の悪辣さから総合力では〈SUBM〉に勝るとも劣らなかつたはずの【グランドバアン】。

〈超級エンブリオ〉の所有者も現れ始めた昨今ではいずれどこかで討伐されたりするにしても、まさか初戦で討ち果たされようとはジャバウオックの想定外だった。

「大都市の一つや二つ壊滅してからでも遅くはないと考えていたのだがな。我々の想像以上に〈マスター〉の質が高かったのか、はたまた単なる偶然か……」

寧ろ可能性としては自分が秘密裏に出向く確率の方が高いと踏んでいただけに、この結果は彼としても些か思うところがある。

最善は襲撃で幾人かに超級進化シークエンスを促した後、「グランドバアン」を回収し（SUBM）とするべく調整することだったが……特典武器と化してしまった今では最早終わった話だ。

「……元より完全なる偶然によつて発生した事態だ。それが偶々その場に居合わせた（超級）三名によつて討伐されたとして、何の不思議も無い……か。此処は彼らの健闘を祝うとしよう」

ジャバウオックはモニターを取り消し居直った。

ウインドウの光だけが彼の顔を照らす一室で、休止していた作業を再開させながらジャバウオックは呟く。

「——その調子でよく戦い、よく（エンブリオ）を育むといい。君達が信じる自由の先にこそ、我々の目的はあるのだから」

意味深な言葉で締め括って、ジャバウオックは己の職務に没頭した。



□中央部外縁・廃墟

未だ復旧作業の最中にある区画では、道着姿をした人間達が額に汗を浮かべて作業に従事していた。

平均Lv三〇〇を超える腕利き集団——（竜心館）の門下生達は、一般人とは比較にならないステータスを以て見る間に瓦礫を片付けていく。

「師範！ 第一班、第一区画の瓦礫撤去完了しました！」

「同じく第二班、第二区画の撤去作業間もなく完了します」

「第三区画は被害甚大のため、第二班の作業完了後に合同で取り掛かります」

「うむ、お疲れ様！ きちんと休憩を挟んでから作業を再開するようね」

その彼らの報告を受けながら、自らも同様に労働へ従事しているのは金髪碧眼の偉丈夫、GA・LVERだった。

対「グランドバアン」戦で唯一最後まで五体満足で戦い抜いた彼は、

地上への帰還後すぐに復旧作業に乗り出し、ログインしている間はほとんど休まずに働き続けていた。

……そんな彼に休めと言われて素直に休めるかは微妙だったが、G・A・L・V・E・Rのタフネスは余人の知るところでもあるので、彼らは微妙そうな顔をして、

「こら、ガルさん！ アンタが休まずに誰が休めるってんだい！
しつかり休んでしつかり食べて、それからしつかり働かないと身体に毒だよ」

「H A H A H A！ いやあ申し訳ない、まだまだ終わりが見えないものだからつい夢中になってしまったよ！」

「ほら、アンタの分だよ。山盛りにしといたからね！」

ぱしんとG・A・L・V・E・Rの背中を叩いてそう咎めた炊き出しの女手にほっと安堵した。

激闘の後、年寄りや子供は中央部に集め、その他の男手は撤去作業に駆り出し、女達は総出で被災者や労働者の炊き出しに従事していた。

G・A・L・V・E・Rを咎めたのもその一人で、かつて彼が数々のジョブを渡り歩いてきたときに付き合いを深くしていた、大衆食堂店主の奥方である。

さしものG・A・L・V・E・Rもかつて大いに世話になったおばちゃん
の言うことには逆らえず、他の労働者達と一緒に大腕を掻き込んだ。
「おばちゃんのメシ、美味いですよね。作業疲れの空きつ腹に染み渡
るっていうか」

「まだまだ先は長いけど、これがあるから頑張れるって感じですよ
ね」

「だからこそ僕達が頑張らないとね！ 大丈夫、皆が協力してくれて
いるから、いつか必ず終わるとも！」

集めた瓦礫に並んで腰掛け、飯を食らいながら眺める景色は果のな
い瓦礫の荒野。

あの一戦で斯様に破壊されながらも、生き残った人々の表情は明るい。

……例え心の奥底で喪ったものへの悲しみに涙していたとしても、生き残ったからこそ努めて笑みを浮かべ、あるべき日常を取り戻すために励んでいた。

（……僕もまだまだだな。もっと強くならないと。そのためには――）

その光景を、その光景を織り成す人々を知るからこそ、G A・L V E Rも諦めない。

たとえ爪痕は深くとも、彼らが挫けないからこそG A・L V E Rもまた決して諦めず陣頭に立てている。

そしてそんな彼の背中と、遙か天上の破壊遊星をすら殴りかかってみせたその”超拳”に、人々もまた信頼を寄せ腐らずに希望を持っていた。



□【雑技王】黒猫

丸一日のログイン制限を経て、あたしは再びデンドロにログインしていた。

長いこと味わってなかったデスペナ上がりの感覚はなんとも言い難く、自壊によってまだ復活していない〈エンブリオ〉がそれに拍車をかける。

ヒダルガミが使えないんじやあ雑技のお供の黒子も使えないせいで、とてもじゃないけどベストコンディションとは言えないお寒い状況だった。

つつても、街がこんな状況じゃそもそも興行どころじゃないけれど。

まるで空襲でも受けたのようになってくらい荒れに荒らされた大都市だったもの。

お祭り騒ぎであちこち飾る付けられていた街並みは見る影も無く、崩れた建物の瓦礫はそのまま放置されゴーストタウンのよう。

それでも空からは隕石どころか雨粒ひとつすら落っこちてこない

ことから、あのクソ隕石……「グランドバアン」は無事に討伐されたのだろう。

もう空に怯えることもないのは嬉しい報せだったけど、それでも刻まれた爪痕があまりに大きい街を前にしては、無邪気に勝利を喜ぶことなんて出来やしなかった。

「浮かない顔ですね、ヘイさん」

そう物思いに耽っていると、空からステラが降ってきた。

……と思っただけど、普段と比べるとどうにも動きがぎこちない。

見れば右腕が失くなっている、へエンブリオの一部が欠損しているように調整が上手く利かないようだった。

「わざわざお出迎えかよ、暇だねーおまえも」

「見ての通りの状態でして、加減も上手くいかず復興作業からは外されています。まあわたくし達三人は今や英雄扱いですので、その手の労働は免除されている節もあります……GA・LVERさんは率先して陣頭に立っていますね」

「ガル兄らしいっちゃらしいじゃんね。それよりも、そっか……復興すんのか。……できんのかな、これ」

見渡す限りの瓦礫の山。

復興作業に取り掛かっているとという割にここは寂れているけど、それはここが外縁部だからかね。

被害規模が規模なだけにどれだけ時間が掛かるのかわかったもんじやないけど、そっか。

「できるかどうかは別として、案外逞しいじゃんね。てつきり放棄もあるかなと思ってたケド」

「これほどの都市は早々放棄などできませんよ。それに黄河は魔法技術が発達していますから、中央部は住むに不足しない程度にはもう復旧しています。そうでなくとも住民もタフですから、皆復興作業に勤んでおりますよ」

リアルではたった一日、こっちでも三日しか経ってないのにめげないもんだ。

……この様子だと一座もそっちに専念してそーだね。

生臭い話で言えば売名にもちようどいいし、そーでなくともだんちよーの性格なら見過ごしてもいないだろうしね。

「ま、いいや。出迎えにきたんならあたしに用があるんだろ？ 連れてけよ」

「ええ、皆さんお待ちかねです。ご案内しましょう」

◇

「戻ったか、黒猫ー」

ステラの案内に従って中央部に向かえば、一座の天幕を仮設住居に大勢の住民が集まって復興作業に従事していた。

その中心には率先して作業に取り組む〈竜心館〉の人間と一緒に、陣頭指揮を取る見慣れた人間が集まっているのが見える。

案の定その一人となっていただんちよーがあたしに気づいて声をかけたのを皮切りに、周囲の視線が一齐にこちらを向いた。

「おお、”妖拳”のお戻りだ」

””黄河三奇拳”の揃い踏みだな、英雄の帰還だー」

「なんかはずかしー名前と呼ばれてるけど、ナニコレ？」

「ははは、そう言ってるな。絶体絶命の窮地だったからな、それを解決したお前達は英雄なんだ」

まあ、わからないでもない。

デンドロはちよつと称号主義みたいなどころがあるから、名が売れたらそれっぽい二つ名が周囲から付けられることはよくあるしな。

あたしの”遊天娘々”も軽業師としての看板だし、あれだけ派手に〈UBM〉を討伐したなら、新しく名付けられてもおかしくはない。

……あつちにいた間は結局、デスペナしたあとのことを調べるだけの気力も無くてそのままぼけつとしてただけど、またあとで詳細確認しとくか。

「それよりも……ほら。大人もお前に会いたがっていたぞ」
「……うん」

あれこれ言いたいことも聞きたいことも尽きないけれど、それよりもまず真つ先にだんちよーが示したのは奥……仮設された個人用天幕のベッドの上に横たわるワンジーちゃんだった。

恐る恐る近づいて顔色を伺ってみれば……じーちゃんは閉じていた目を開いて視線を動かすと、あたしを認めて緩やかに微笑んだ。

「おお……よくぞ戻ったの、ハイや。また会えて嬉しいぞい」

「じーちゃん……！ よかった、無事で……」

いつもより血の気も失せて顔色が悪かったからヒヤつとしたけれど、身を起こして頭を撫でてくれる温かさは間違いなくじーちゃんのものだった。

見たところ大怪我はもう大分塞がっていて、万全にはまだ遠いけれど多少動く程度には問題も無いようである。

「僕は無事そのものぢやて。怪我は多少派手だったようぢやがの、皆のおかげで見ての通りピンピンしてるわい。それよりも僕は、お主が一度死んだと聞いたときのほうがずっと生きた心地がせんかったぞい！」

「あたしはへマスターだから全然平気じゃんよ。それよりもじーちゃんの方が……」

「孫が死に戻ったと聞いて平静でおられる爺はおらん！」

ぴしゃりと言ったじーちゃんに目を丸くしてると、じーちゃんはそっとあたしを抱き締めた。

全身を包む温もりに、思わず安心を覚える。

「……悪かったじゃんよ。でも、あたしなりにベストを尽くした結果だぜ」

「うむ……うむ……！ よく頑張ったのう……ほんに、ようやってくれた。皆、お主らのおかげじゃ」

何度も頭を撫でる手の優しさが心地良い。

全身を抱き締める力強さと温かさが、全てが終わったことをこれ以上無く伝えてくれる。

……この世界での、あたしにとって大事なものがこうして無事なことが、確かな感触として実感できた。

「……でもいい加減ちよつと恥ずかしいから、ここまです」

「ほほほ、珍しくしおらしい様子ぢやったのにの」

そうは言うけどあたしだってもう十歳だぜ？

それに皆氣い利かして離れてるけど、天幕の向こうで聞き耳立ててるの丸わかりだし。

ついさつきまでは柄にもなくセンチメンタルな気分だったからいいけど、じーちゃんが無事とわかったならこれ以上衆人環視の中で情けない様を見せるつもりはないじゃんよ。

「ま、元気が出たならそれでええ。ほれ、他の者もお主を待ち侘びておろうて。元気な顔を見せておやり。儂はもう少しここで寝るでな」

「あいよ。じーちゃんも養生しなよ、歳取ってから動けなくなると急激に老け込むって言うしね」

「何を言う、儂ああと五〇年は生きるつもりぢゃい！」

「そういやじーちゃんの年齢って聞いたことないなと思いつながら、あたしは仮設部屋を後にした。」

◇

天幕を出れば、そこには大勢の人間が勢揃いしてあたしを待ち構えていた。

「何かと思つて見渡していると、彼らが一齐に頭を下げて……だんちよーが口を開いた。」

「王大人も仰つていたが、本当によくやつてくれた。お前と……お前の友のおかげで、随分と多くの人間が助かった。黄河の民の一員として礼を言う。……本当に、ありがとう」

「……なに、それ。今更なんか、水臭いじゃんね。いーよ別に、やれることやつただけなんだから」

改めて真正面から礼を言われると……その、やつぱ照れる。

それにこつちの世界での身内にそう言われたんじや、誇らしいより先に困惑する。

あたしは自分で言った通り、あたしにやれることをやつただけだ。

そしてその動機も、じーちゃんを始めとしたあたしの身内が巻き込まれていたからで、世のため人のためってわけじゃない。

大体戦ってる間は興行を邪魔された腹いせやあたしの客に手エ出した苛立ちで殺意MAXだったから、そんな風に言われてもね、反応に困るじゃんよ。

「やれることをやっただけ、か……。ふっ、あの窮地でそれが出来る人間がどれほどいたか。あの時お前達と……。その他大勢の〈マスター〉がいなければ、今頃俺達は此処にいなかったんだ。返しきれぬ程の大恩だ、礼も言えないんじゃないやあ始末に困る」

「なら、その礼はしっかり受け取ったことでよろしく頼むじゃないよ」

それで礼だの恩だのはおしまい。

どうせ降って湧いたような災いだから、偶々その場に居合わせた幸運を喜ぶことはあつても、幸運そのものに感謝することはないじゃないね。

陳腐な物言いだけど、終わりよければ全てよしってことで。

「それよりもさ、あたしが来れなかった間のこと教えてよ。なんせあたしだけ三日間も置いてけぼりだったからね！」

「……そうだな。なら、どこから話そうか……。長い話になるぞ？」

「いいよ、聞かせて。なんせ時間はたっぷりあるかんね」

◇◇◇

それから一週間、あたしは街をぶらつきながら過ごした。

生憎こちらはガル兄と違ってMPとAGI（とおまけでDEX）以外のステは貧弱で、ガル兄みたいに気軽にジョブを入れ替え育て直すことなんてできないから、復旧作業には加わらなかった。

代わりに住む家を失って路上生活を強いられた住民の慰安として大道芸を披露したり、ちよつとしたクエストなんかをこなしたりした。

幸いにしてこの街が最後の興行開催地だったから、一座の予定にも余裕があり、街がある程度立ち直るまでは滞在して復興を手伝うことになっていた。

そしてその間あたしも街に滞在し続けたのは、単に一座が残留を決めたからだけではなくて……。ある約束のためだ。

「お互いに〈エンブリオ〉も復活しましたね」

「まーね。自壊なんて初めてだからどんくらい掛かるのかは知らなかったけど……。ま、そこそこ待ったかな」

その約束とは、事が片付いたあとにステラに付き合うという約束だ。

あたしの目の前には元通りの右腕を取り戻したステラが佇み、あなたの方にも復活したヒダルガミの気配が確かにある。

そして場所は街から数十キロは離れた人気がない荒野で……つまるところステラの望みとは、あたしとの決闘だった。

「この一週間は一日千秋の思いでいましたよ。一刻も早くヘイさんと仕合たくて死合たくて……、——ようやく念願が叶います」

「成程ね。そうじゃないかとは思ってたけど……特典武器、やっぱおまえが持ってたんだ？」

ステラの両腕には今までの無手とは違い……二の腕までを覆う巨大な拳甲が装備されていた。

ステータスに依らない運動エネルギーを攻撃に用いるステラの戦闘スタイルでは通常の武器は強度が不足し、その超加速に耐え得る強度を持つ武装が他ならぬ自分のヘンブリオン^足だけだったことから徒手格闘を選ばざるを得なかったステラには珍しい、明らかな格闘武器。

《鑑定》によって「破界星甲 グランドバアン」という銘だけが明らかになったそれは、見るからに尋常ならざる気配を漂わせていた。

「つかまるでロボアニメみたいな名前じゃねえ。」

「かつてグランバロアに現れたというへSUBMからは複数の特典武器が授与されたと聞きますが、どうやら「グランドバアン」はそうした手合ではなかったようです。他の御二人には申し訳ありませんが、わたくしがMVPに選ばれました」

「いや、別に。ガル兄は住民が無事ならそのへん気にしないだろうし、あの活躍ならおまえがMVPだろうってあたしも思ってたしな。つかあたしはそもそも戦闘メインじゃねーし、「シエイドプリンター」だけでジューブんだっつもの」

「言っとくけど負け惜しみじゃねーかんね。」

そのへんわかってんのかどうか知らないけど、ステラは珍しく自慢気に特典武器を見せびらかして……ちよつとだけイラツときたけど、

断じて負け惜しみじゃない。

「ま、世にも珍しい神話級特典武器ってのは新鮮で楽しみだけど。……で？ それでもう勝ったつもりかよ？」

「ええ、まあ……二度目はともかくとして、初戦ならわたくしの敗北はありえないかと。不戦勝でもよろしいですよ？」

「ジョーダン。今まで拒否したことはあるけど、いざ戦うとなって逃げたことが一度でもあったかよ？」

「……ふふ、それでこそヘイさんです。それでこそ、わたくしの最大の好敵手。ならば問うべきは最早、一つだけですな」

——再びデスペナルティになる覚悟は済ませましたか？

その挑発にあたしは、笑みを浮かべて親指を下に向けた。

それと同時にバフを全起動した最大速度で、《心魂奪命拳》と《心魂奪命拳・鬼ノ手》——対個人最大出力のドレイン戦術で肉薄する。

【撃神】に就いたことで魔法系超級職の《マスター》にも劣らないMP量を誇るステラ。

……だけどその程度のMP量なら、あたしの手は秒と掛からず根刮ぎ奪える。

これまで幾度となく重ねたステラとの決闘で、勝率八割超をキープし続けたあたしの勝ち筋。

MP枯渇によって固有スキルに起因する戦術はほぼ封じられ、SPを用いた格闘系スキルはあたしのAGIと体捌きなら掠りもしない。

よしんば新しい特典武器にそれを覆す一手が秘められていたとしても、あたしなら致命傷を避けることはできるはず。

「殺ア——!!」

そう考えてあたしはステラに必殺スキル宣言の余裕すら与えず、狙い通りに接触して間違いなくMPを根刮ぎ奪って、

「——《グラントリアン天地崩壊》」

その直後、ステラが唱えた装備スキルの宣言で——ステラ諸共木っ端微塵に吹き飛んだ。

（——いや、それは流石に予想外じゃんよ）

……まさかの相打ち狙いは読めんわ。

E
p
i
s
o
d
e

E
n
d